

NHK放送予定(平成24年1月~2月)

- 1月29日 狂言「節分」(和泉流) 野村万藏
1月29日 狂言「節分」(和泉流) 野村祐丞
2月5日 素謡「藤戸」(観世流) 五木田三郎
2月12日 素謡「藤戸」(観世流) 東川光夫
2月19日 素謡「松山天狗」(金剛流)
2月26日 「藤」(善多流) 香川靖嗣

Eテレ「古典への招待」

- 1月28日(出) 15:00~17:00
能「自然居士」(金剛流)
シテ宇高通成 ワキ江崎金治郎

演能カレンダ-

名古屋能楽堂

- [1月] 28日(出) 青陽会 定式能(番組①面)(有料)
[2月] 12日(印) 25世宗家観世左近を偲ぶ
名古屋観世会 定例公演能(記事①面)(有料)
18日(出) 第16回関西観世花の会(番組①面)(有料)
[3月] 3日(出) 名古屋能楽堂3月定例公演
10日(出) 第5回名古屋山片能
17日(出) 茂山狂言会 春

能楽の友

発行能楽の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送料 1年 1800円



25世宗家観世左近を偲ぶ
名古屋観世会公演
12月2日 能「巻絹」「鉢木」上演
本年は観世流先代宗家・観世左近元正師の二十三回忌に当たり、観世会別会および各地観世会で追善能が催されるが、名古屋観世会では、二月十二日(印)平成二十四年第一回定例公演で「二十五世宗家観世左近を偲ぶ」演能として、観世清和宗家が「鉢木」を上演する。能組は次のとおり。

演能案内
青陽会 定式能(第156期)
一月二十八日(出)十二時半始
名古屋能楽堂
仕舞 高砂 久田三津子
東 北々々 星野路子
村井 邦子
清沢 一政
能 西王母 高相元正 河村総一郎 加藤洋輝
後見 今沢美和 地謡 吉沢旭 梅田嘉一
古橋正邦 八神孝充 松山幸親
仕舞 俊成忠度 松山幸親
後見 今沢美和 地謡 吉沢旭 梅田嘉一
古橋正邦 八神孝充 松山幸親
狂言 詐 董 鹿島俊裕 佐藤融
能 鶴 久田勤 船戸昭弘 竹市学
後見 梅田邦久 地謡 加賀敏彦 梅田嘉一
附祝言
「チケット」前売二五〇〇円 主催 青陽会
当日券三〇〇〇円
チケットぴあ(T-ELI)0570・02・9999、Pコード786、355)、「サークルK、セブンイレブン、名古屋能楽堂」

第16回 関西観世花の会
二月十八日(出)一時開演
名古屋能楽堂
舞踊子 経正 加藤春枝 船戸昭弘 竹市学
近藤幸江 河村総一郎 池内頼子
高安勝久 船戸昭弘 前田利子
橋本幸 加藤洋輝
彩色之伝 村井邦子 大亀英
後見 森文蔵 地謡 加藤春枝 山崎彩子
大亀文蔵 小川小川 藤谷美穂
狂言 泉山伏 野村又三郎 野村信朗
仕舞 水之室 村井邦子
阿之漕 小川晴子
道三 樽谷 恵
明寺 上田貴弘
治 大槻文蔵
前野郁子 飯島雅介 山本孝
後見 前田和子 地謡 池内藤子 佐伯久子
上田貴弘 大亀文蔵 藤谷美穂 藤谷美穂
附祝言
「入場料」五〇〇〇円、学生二五〇〇円 主催 関西観世花の会
阪/チケットぴあ、サークルKサンクス、セブンイレブン
お問い合わせ 近藤幸江(0546・21・8829)
前野郁子(0546・32・8805)

新年賀謹

名古屋観世九皇会
観世喜正之
高橋 瞭 一
鳳鳴会
武田志房
大槻清韻会
大槻文蔵
十世片山九郎右衛門
片山幽雪
京都府京都市東山区新門前通大和太路東入西之町24
〒605-0088 電話(075)561-1291
観世清和
藤井徳三
大西智久
邦謡会
梅田邦久
梅田清一
梅田部沢
嘉美
宏和
勲甫政

名古屋観世会
山本勝一
山本博通
藤井徳三
浦田保浩
京都府京都市左京区下鴨芝本町58
〒606-0814 電話(075)731-6850
大西智久
邦謡会
梅田邦久
梅田清一
梅田部沢
嘉美
宏和
勲甫政
名古屋市昭林区山手通3-8-2-306
電話(052)831-1125
西宮市甲陽園目神山町三三二五
電話(079)81-2458

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ③⑧

竹尾 邦太郎

八、「中日五流能」⑤

— 承前 —

昭和四三年三月二四日、第十三回「中日五流能」。番組は午前十時開演。第一部は能「蟬通」金春栄治郎・高安滋郎・西村欽也、高安勝久・藤田六郎兵衛、高木敏郎・山本敬一郎・小寺金七・金春信高(地頭)金春昇実(後見)、仕舞「熊坂」観世元昭、狂言「千鳥」野村万蔵・野村又三郎(主)野村万作、能「隅田川」近藤乾三

・辰巳満次郎(子方)宝生弥一・宝生彰彦・野口伝之輔・辰巳孝(地頭)渡辺容之助(後見)、仕舞三番「加茂」金春欣三(宣士)太鼓「坂井喜次郎」鼓輪「辰巳孝、能「熊天狗」白頭・素穂「観世喜之・吉田隆(生志)早瀬隆夫・西田孝子・熊沢隆・深見画理・福井恵・岡田光司・中村和彦・古山美哉(以上権見) 榎王茂十郎・井上松次郎(能力)佐藤卯三郎(木ノ葉天狗)坂井喜次郎(地頭)榎若彌義(後見)。

平成24年度 名古屋観世会定式能

会場：名古屋能楽堂
◇第一回 二月十二日(日)12時半

開演
別項①面
◇第二回 四月八日(日)12時半
能「班女」笹之伝 榎若玄祥
能「熊坂」清沢一政
◇第三回 六月十日(日)12時半

岡崎 朋の会(金剛流シテ方羽多野良子師主宰)の「五色の会・能を観る」集いは、長年花朋会舞台(岡崎中大道町長4-1



「安達原」左から羽多野良子・高安勝久・榎元正樹(撮影・杉浦賢次)

7)で演能を行っているが、旧う12月23日(金)第13回公演として、能「黒塚」を上演(写真)。会場いっぱい二百五十人を越える観客で熱心な観能がつづけられた。演能は、仕舞「歌占」(シテ字高通成)狂言「鐘の音」(太郎冠者佐藤友彦、主人佐藤)能「黒塚」(シテ羽多野良子、ワキ高安勝久、ワキツレ榎元正樹、能力今枝郁進)、笛・鹿取希世、小鼓後藤嘉建幸、大鼓・河村真之介、太鼓・加藤洋樹、後見・広田幸稔、小嶋梨辺華、伊藤雅子、地頭字高通成

金剛流能「黒塚」上演 五色の会能を見る「朋の会」

平成24年度 名古屋宝生会定式能

会場：名古屋能楽堂
◇第一回 一月二十二日(日)既報
◇第二回 三月十八日(日)1時始
能「玉葱」竹内澄子
能「国栖」辰巳満次郎
他 仕舞・狂言
◇第三回 六月十七日(日)1時始
能「社若」宝生和英
能「長栄」和久莊太郎
他 仕舞・狂言
◇第四回 十一月十八日(日)1時始
能「橋弁慶」衣斐正直
能「紅葉狩」衣斐 愛

能「頼政」久田勘鶴
能「船弁慶」前後之替
片山九郎右衛門
◇第四回 九月十七日(日)12時半
能「小登」恐之舞 梅田邦久
能「海士」海中之舞 観世鏡之丞
◇第五回 十一月十一日(日)12時半
能「井筒」観世喜之
能「天鼓」弄鼓 武田邦弘

他 仕舞・狂言
入場料(全自由席)
正会員一八、〇〇〇円(年間通用四枚綴り)
観賞券五、〇〇〇円(各一回限り)
学生券二、〇〇〇円(各一回限り)
取り扱い/出演能楽師、または左記へ
名古屋市昭和区御器所3-23-19
1-802 衣斐正直方
電話・FAX 052-882-5600 観賞券はプレイガイド、柴ブレイク、ナディアパーク等で取扱い

年間指定席(五回分)三五〇〇円
年間自由席(5回分共通券)二〇、〇〇〇円
当日券(自由席)六、〇〇〇円
学生券(自由席)二、〇〇〇円
名古屋観世会事務所
(名古屋市中区一社3-1-62(久田勘鶴方))
TEL/FAX052-705-1585

午後三時開演。第二部は能「八鳥」戸流、後藤徳三・長田聡・宝生弥一・殿田保輔・茂山千五郎(那須ノ語)藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎・山本敬一郎・福岡周斉(地頭)和谷亀二郎(後見)仕舞三番「放下僧」柴田初太郎「東北」山田仁三郎「殺生石」浅見重弘、独吟「花月」福岡周斉、能「社若」恐之舞「榎若彌義」榎王茂十郎・藤田大五郎・北村一郎・安福春雄・榎本豊次・観世喜之(地頭)坂井喜次郎(後見)、狂言「宗論」茂山千五郎(法華)茂山千作(浄土)茂山真吾(写真)、能「那那」麩屋十二段之楽「金剛殿」藤田幸稔(子方)高安滋郎・西村欽也、高安勝久・高安守彦、佐藤秀雄、今井幾三郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)「写真」。

面解説「中村保雄」、「作り物解説」浅井泰太郎、「能のふるさと」栗林真一、上演曲目についての識者の小文「金春栄治郎の鎌通」かうのよし、「狂言・千鳥」古川久、「ワキのカタリ」香西精、「八鳥判官の弓手」今井欣三郎、「作能としての社若」松村博司、「法華と念仏」北川忠彦、「十二段の課題」北原佑吉、「前回の舞台を想う」舞台写真、賛助広告。
昭和四四年三月三〇日、第十四回「中日五流能」。午前十時開演の第一部は能「頼政」友枝喜久夫・江崎金治郎・野村又三郎・藤田六郎兵衛、大倉長十郎・瀬尾乃武(後見)、一調「笠之段」田鍋惣太郎・豊嶋弥左衛門・三手春(狂言「未広」高井則安・山本則直(スッパ)山本則春(太郎冠者)、能「砦」梓之出端「梅若六郎」豊英、松本謙三・鏑木孝男、西田三好、カット松野秀世、一能

③面へつづく



梅若万三郎
観 芳 会
観 世 芳 伸

幽 花 会
片 山 伸 吾

怡 楽 会
山 階 彌 右 衛 門
山 階 弥 次

久田観正会
久田勘鶴
郁 野 郁 子
松 山 幸 親
星 野 路 子
〒460 名古屋市中区一社3-1
電話〇五二七〇五二五八五

武田謳楽会
武 武 田 欣 司
武 田 大 邦 志 弘

初 陽 会
武 田 宗 和
宗 典
〒162 東京都新宿区富久町40-4
電話〇三三三五九一七六三

上田観正会能楽堂
上田観正会 TEL〇七八一
六九一五四四九

上 田 貴 弘
大 公 拓 介 威 司 弘

橋岡会
橋岡久太郎
* * * * *
坪 内 茂 路 之
荒 木 亮
宮 下 年 彦
小 塚 田 重 章
吉 田 重 雄
松 原 美 樹
小 倉 美 富
橋 岡 佐 喜 男
橋 岡 信 明
野 池 尚 美
山 岸 登

春 鶯 会
梅 若 善 高
〒500 0084 豊中市新千里南町三丁目18-12
電話〇六八三二一七八五四
〒166 0003 東京都杉並区宮前4-27-7・808
電話〇三三三三二一〇五七〇

名古屋淡交会
三 交 会 慈 観
久田三津子
〒460 名古屋市中区一社3-1
電話〇五二七〇五二五八五

公益財団法人
鎌倉能舞台
中 森 貫 太
鎌倉市長谷3-5-13

笙 月 会
中 川 雅 章
〒506 0066 長浜市地福寺町八ノ二九
電話〇五九〇〇六三〇番

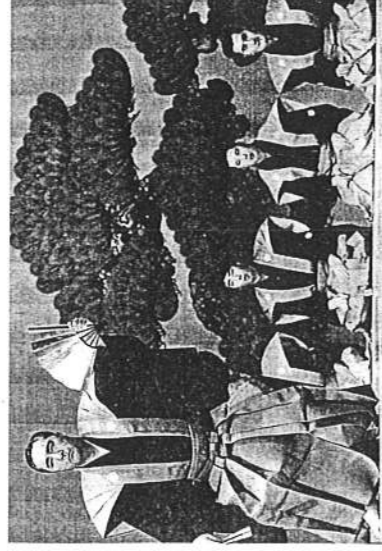
賀 水 会
桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
加 賀 敏 彦
〒463 0066 名古屋市中区山崎三丁目七〇九
電話〇五二七七七一八四九五番

松 盛 会
小 松 勝 憲
松舞台
〒510 0066 三重県桑名市西別所一〇六一の五
TEL・FAX〇五九四〇三三四五八二

洗心会 奥村富久子
観修会 祖父江修一
〒507 0066 多治見市日ノ出町2の2
電話〇五七三三二二二五六六

幸 誂 会 近 藤 幸 江
〒441 2022 岡崎市鳴田本町一番地ノ三
電話(〇五七四) 〇五五二九
千早会 八 神 孝 充
〒464 0066 名古屋市中区種池町2-1-9
電話・FAX(〇五二) 七五三二四二二九
桜月会 加 藤 春 枝
〒500 0066 可児市鼻ヶ丘3-1-113
電話(〇五七四) 六四一三〇六

頭 金養欣三(後見)。
 代三・前川善雄・金春栄治郎(地頭)
 郎・森田光春・豊和博朗・谷口喜代三・前川善雄・金春栄治郎(地頭)
 郎・森田光春・豊和博朗・谷口喜代三・前川善雄・金春栄治郎(地頭)
 郎・森田光春・豊和博朗・谷口喜代三・前川善雄・金春栄治郎(地頭)



第14回中日五流能「野守」梅若素之仕舞

長十郎・山本敬一郎・梅若六郎(地頭) 片山博太郎(後見)・一調二番「放下傳」幸祥光・林喜右衛門「春日龍神」柿本豊次・片山博太郎・仕舞二番「櫻之段」辰巳孝「野守」梅若素之(写真)・狂言「來蓮」善竹忠二郎・茂山忠三郎・善竹孝夫・能「熊野・漆蔭」宝生英雄・本間英孝・松本謙三・鏡木孝男・藤田六郎兵衛・住駒陽介・瀬尾乃武・大坪十喜雄(地頭) 佐野正治(後見)・仕舞三番「玉之段」金春栄治郎「班女」舞跡 柴田初太郎「塞盛」初「大坪十喜雄・能「山城・波濤之舞」金春信高・本田光洋・岡治郎右衛門・西村欽也・高安守彦・井上松次郎・森田光春・豊和博朗・谷口喜代三・前川善雄・金春栄治郎(地頭)

◎面よりつづき



第13回中五日流能「宗論」(左より) 茂山真吾・茂山千作・茂山千五郎(撮影 高辻幸一)

百年を迎えて、として「玄憲法印の狂言」池田廣司、「玄憲法印作の狂言」古川久、の論考を収める。参考までに二氏の全文を転載する。
 南北朝時代の学僧 天台宗権大

パンフレット(冊子)の内容は

「作り物解説」「能のふるさと」は解説者先号と同じ。上演曲目に関する識者の小文は「頼政の反骨ぶり」北岸佑吉、「扇ならば扇と初めから」杉森美代子、「無味の味」香西精、「仲光について」沼川剛、「一芸を楽しむ狂言」坂本欣司、「熊野御前の奥の手」金井欣三郎、「山城はなぜこんなに面白い」高木市之助。
 また、此の年は玄憲法印生誕七

僧都玄憲法印が狂言の作者であり、大藏流の初代だということ

は、近世初期の大藏流の伝書をはじめ語文獻に伝承されているが、確認があるわけではない。ただ、なぜ玄憲法印がそのように祭りあげられているかは興味のある問題といえよう。

まさしく喜劇を狂言と呼ぶようになったのは玄憲時代であつて、滑稽なセリフのやりとりなどは狂言、その演者は、狂言・狂僧・ラカシホウシとも称された。また、それらとよく似た者に民間にもてはやされた唱導僧がある。唱導は説経ともいい、神仏の本地や寺社の縁起あるいは仏教の教義、経文の内容などを民衆にわかりやすく説くことであるが、聴衆の興味をひくため、おもしろい伝説・

話の類をすべてとり入れ、身ぶり・手まねもおかしく話をすすめる、いわば奇磨のようなものでもあつた。

樂楽法師が依存していた寺社は、中世における説話の管理機関でもあつて、諸々の説話は唱導僧の口がたりによつて広く流布したあとが見られるから、狂僧と唱導僧とはよく似ているばかりでなく、実際両者は一致するところも多かつたようである。

ところで、唱導は元來天台教団から起つたもので、山門出身の唱導僧が特に話術にすぐれており、天台僧の多くは山を下り、京都の周辺でいわゆるヒジリとなつて、市民の教化にあたり、唱導を事とするようになった。

このような唱導僧のアトラクションを立体的に演技すれば、ただちに狂言劇になることは明らかであつて、かれらが狂言の詞作を作らないはずはない。例えば、狂言「磁石」の典拠は仏教説話集「沙石集」であり、ギシヤク(ギシヤクの古称)は香蘭峯山(ギシヤクツセン・靈鷲山の別名)からの発想であり、「くわつくわつの法」という咒術的な蘇生法は当時の文獻上に見えることなどから、この狂言の作者としては、旧仏教団の側へ属し、教化説教によつて民衆としたしく接触していた僧侶の姿が想定されるのである。

比叡山の玄憲法印が狂言の作者であるという伝承がのちに生まれ

て、

「野守」梅若素之仕舞

第14回中日五流能「遊女之序・波間之伝」(左より) 前川善雄・谷口喜代三・廣田幸稔(左方)・大倉長十郎・森田光春(右方) (撮影 高辻幸一)

第14回中日五流能「遊女之序・波間之伝」

左より 前川善雄・谷口喜代三・廣田幸稔(左方)・大倉長十郎・森田光春(右方) (撮影 高辻幸一)

第13回中日五流能「郡邸・裏屋十二段之楽」(撮影 高辻幸一)

第13回中日五流能「郡邸・裏屋十二段之楽」

第13回中日五流能「郡邸・裏屋十二段之楽」

第13回中日五流能「郡邸・裏屋十二段之楽」



名古屋宝生会
 名古屋市昭和区御器所3-28-19
 衣斐正宜方

宝生和英
 金剛永謹
 龍謹

惠美寿会
 衣斐正宜
 衣斐正宜後援会
 460 名古屋市昭和区御器所3-23-19
 御器所パークマンション8002号
 電話(052)881-2560(番)

近藤乾之助
 470 東京都豊島区東郷5-1-31
 電話03-(3)9255-2376(番)

名古屋巽会
 豊橋巽会
 辰巳満次郎

佐野由於
 今井克紀
 今井通隆
 金剛流
 松野恭憲

倉本雅
 〒680 岡崎市東灘区田中町1-13-22
 電話(078)441-5465(番)

宝生流
 嘉宝会
 〒466 名古屋市昭和区川名本町一ノ五二
 鬼頭嘉男

司宝会
 佐藤耕司
 〒481 名古屋市天白区島田二丁目30-1
 島田橋住宅二一三〇電話052(5)7372

廣田鑑賞会
 廣田陞一
 廣田幸稔

菊扇之会
 廣田泰三
 廣田泰能

松野恭憲能の会
 松野恭憲

福王茂十郎
 知和幸登

今井通隆
 金剛流
 松野恭憲

豊嶋能の会
 豊嶋三千春

宇高通成
 徳成成

シテ方金春流宗家
 金春安明
 〒157 東京都杉並区南荻窪3丁目7-16
 電話03(3)332-2572(番)

本田光洋
 〒164 東京都中野区上高田二ノ五ノ二
 電話03(3)386-2344(番)

伊勢金春会
 宇仁田吉邦
 〒516 伊勢市八日市場町5-1-16
 電話0596(5)5298(番)

長田驍後援会
 〒514 津市高野町三三五一四六
 電話059(2)697(番)

福王茂十郎
 知和幸登

知和幸登
 福王茂十郎

第15回記念 重要無形文化財
中日五流能
 平成24年3月29日(日)
 午後7時 名古屋・東区中 新 化 場
 主催 中日能楽連 協賛 中 日 能 楽 友 会



- 入場券
- 前 座 4,000円
 - 中 座 3,000円
 - 後 座 2,000円

末広がり・宗論・宝の楳・腹不立・楳の神・おつ師・あびすしゆもん・布施ない経・まつやに・名取がわ・なべ八はち・はな折・せんじもの・坊・引敷・悪・すあふ格・し・岡太夫・ぬけがら・せつぶん・八幡の前・朝比な・二人はかま・くじさゐけん・もち

狂言に関心をもち始めると間もなく、作者のことが苦になつて来た。三十年も昔のことであるから、亡き石田元季先生に頼つて「わらんぐ草」や「狂言不審紙」の写本を借覧した。しかし前者には「あいざん、玄恵法師と云ふ狂言将語のたはぶれも、諷刺乗の因縁なりと云ふ、かれこれ、まさしき狂言をつくりだせる也」とあつても、具体的な曲名は記されておらず、後者には曲ごとに作者が挙げておられる代わりに、玄恵の素性などは一言も解れてない。なんだか書をつかむような気持ちで、「古事類苑」楽舞部を開いてみたら、「続観音草」「四集三」散策人由緒書を引いて、玄恵法印作之狂言としてつぎの一覧が出ていた。

③面よりつづき
 たのも、玄恵法印をこうした唱導僧の代名詞と考え、即興的な当座の狂言を説話にもつづく普遍的な笑いを内容とする狂言劇にまで導いたという程度には認めることができるであらう。(池田廣司)

三ツ折リーフレット表紙

中日五流能はことし第15回を迎える。本格的五流能として全国で

昭和四五年三月二九日、第十五回記念「中日五流能」。記念の催しとあつて三ツ折の案内リーフレット(写真)でプロデューサー石田三好は次のように述べる。

「昭和四五年三月二九日、第十五回記念「中日五流能」。記念の催しとあつて三ツ折の案内リーフレット(写真)でプロデューサー石田三好は次のように述べる。

天正狂言本の素朴な記載ぶりを示すまでもなく、これらの曲がそのまゝ現行の諸曲と同じ形で、創り出されたとは到底信じ難い。しかし玄恵作者説は否定できないばかりでなく、その時代といふその地位といい、可能性がだんだん強まってくる思いがする。どこかに実証の手がかりは、獲られないものであろうか。なお希望を捨てず、探索を続けてみたいものである。(古川久)

天正狂言本の素朴な記載ぶりを示すまでもなく、これらの曲がそのまゝ現行の諸曲と同じ形で、創り出されたとは到底信じ難い。しかし玄恵作者説は否定できないばかりでなく、その時代といふその地位といい、可能性がだんだん強まってくる思いがする。どこかに実証の手がかりは、獲られないものであろうか。なお希望を捨てず、探索を続けてみたいものである。(古川久)

酒・連歌盗人・筑紫員・茶つば・三人かたは・昆布がき・しんはい・唐すまふ・開あみ・入間がわ・ぬし・今参・法師がは・秀句からがさ・秋物狂・鷹盗人・犬山伏・鷹塗・ふくろう・萩大名・梢山伏・うつはざる・二十石・ふし松・はくよう・しとう方角・いくゑ・ふんそう・八句連歌・よねいち・連歌昆沙もん・つりきつね・びくさだ・ひげやぐら・花子
 右五十九番、玄恵法印作之由、誤謄や誤植もありそうで、不明な曲も見当るが、大智とも言われ同番とも称せられる「釣狐」「花子」を始め、各人物類型にわたり名作がほとんど網羅されている。その後狂言の歴史を書かなければならなくなり、否応なく玄恵始相説を確認はないしらく事実無根とはしがたいとした。また「日本古典全書」で三冊に自巻を収めるに際し、玄恵作を中心に選定してみたい。

午後三時半開演の第二部は能「安宅・勲連帳・駒掛之伝」梅若万三郎・梅若猶彦(子方)藤井徳三・佐藤太後・梅田邦久・殿島修二・久田秀雄・加藤丈太郎・柴田収武・大西智久・大槻文蔵(以上同山)宝生弥一・三宅藤九郎(頭力)野村又三郎(附付)梅若猶彦(地頭)杉浦友宣(後見)、別智一調「船弁慶」榎本豊次・梅若六郎、仕舞四番「鶴之段」岡久雄

午前十時開演の第一部は能「雨月・彩色」金春栄治郎・金春虎実・高安滋郎・井上祐一・森田光春・曾和博朗・谷口喜代三・前川善雄・金春信高(地頭)野村保(後見)、狂言「栗焼」茂山千作・茂山千之丞、仕舞二番「富士太鼓」喜多長世「熊坂」金春信高、能「大原御幸・唯齋」観世元正・梅若六郎(法皇)杉浦元三郎(内侍)野村四郎(画)宝生弥一・殿田保輔・工藤和哉・泉喜八、佐藤卯三郎・藤田大五郎・幸直佳・山本敬一郎・山階信弘(地頭)片山博太郎(後見)、一調「笠之段」田鍋牧太郎・大坪十喜雄、仕舞四番「田村キリ」柴田初太郎(西行次)クセ・杉浦友宣(玉之段)梅若猶彦「野守」梅若乃紀夫、能「小鍛冶・白頭」後藤得三・江崎金治郎・江崎康雄・大野弘之・藤田六郎兵衛・鶴沢寿・飯島六之佐・小寺金七・喜多長世(地頭)和谷龜二郎(後見)。

午前十時開演の第一部は能「雨月・彩色」金春栄治郎・金春虎実・高安滋郎・井上祐一・森田光春・曾和博朗・谷口喜代三・前川善雄・金春信高(地頭)野村保(後見)、狂言「栗焼」茂山千作・茂山千之丞、仕舞二番「富士太鼓」喜多長世「熊坂」金春信高、能「大原御幸・唯齋」観世元正・梅若六郎(法皇)杉浦元三郎(内侍)野村四郎(画)宝生弥一・殿田保輔・工藤和哉・泉喜八、佐藤卯三郎・藤田大五郎・幸直佳・山本敬一郎・山階信弘(地頭)片山博太郎(後見)、一調「笠之段」田鍋牧太郎・大坪十喜雄、仕舞四番「田村キリ」柴田初太郎(西行次)クセ・杉浦友宣(玉之段)梅若猶彦「野守」梅若乃紀夫、能「小鍛冶・白頭」後藤得三・江崎金治郎・江崎康雄・大野弘之・藤田六郎兵衛・鶴沢寿・飯島六之佐・小寺金七・喜多長世(地頭)和谷龜二郎(後見)。

最も長く続いているものといえる。この間、舞台上に不滅の至宝を残した名人の面影を追求すれば、既に第一線を退いている人や、または奥緒にはいたった人のうち、喜多六平太・金春八景・桜間弓川・先代茂山千作・山本真次郎、近くは善竹弥五郎・片山博通、大倉長右衛門、吉見嘉綱など幾多の名手が教えられる。これら各人の名技は申すにおよばず、現に活躍しつつ、ある名手の偉大なる芸術的功績は、能界に大きな反響を呼び、さらにこの能が劇場能として公演されたことによつて、能の大衆的発展にも大きく寄与していると思われる。今回はこの輝かしき第15回を記念して、全国の名手を一堂に集め特別豪華番組をもつてご鑑賞を願うことになっている。

パンフレットの内容は番組、「演目解説」「能面解説」「作り物解説」「能のふるさと」は先号と同じ。新しく「装束解説」山辺知行、上演曲目に関する小文は「風流三昧」香西精、「食べる芸」長尾二雄、「薫の落葉」沼神雨、「孤足への期待」長田千狂、「花の安宅に」今井欣三郎、「無心にあやす」杉藤美代子、「天に降りなまきものを」杉本苑子、「第五の楽器」北岸佑吉。また、此の「大原御幸・唯齋」観世元正・梅若六郎(法皇)杉浦元三郎(内侍)野村四郎(画)宝生弥一・殿田保輔・工藤和哉・泉喜八、佐藤卯三郎・藤田大五郎・幸直佳・山本敬一郎・山階信弘(地頭)片山博太郎(後見)、一調「笠之段」田鍋牧太郎・大坪十喜雄、仕舞四番「田村キリ」柴田初太郎(西行次)クセ・杉浦友宣(玉之段)梅若猶彦「野守」梅若乃紀夫、能「小鍛冶・白頭」後藤得三・江崎金治郎・江崎康雄・大野弘之・藤田六郎兵衛・鶴沢寿・飯島六之佐・小寺金七・喜多長世(地頭)和谷龜二郎(後見)。

「極上」は金剛弥五郎作として金剛流では家の能として特に重く敬う。弥五郎の詳細はよく解らないが、この曲の上演のことが天文年間(室町末期)にみられるから恐らく金剛初代の子供の一人であり、びしい精神作品とは異り、一応能作の整備した後であるから別の方に余裕をもつて書いた作である。また能にも音楽の調子をやかにし、物語にそれを巧に結びつけてできたのがこの曲であらう。だから御承知の如く大塗料をこらした遊びの面白さがある。師長が琵琶を弾いていると折から雨が降り来り板屋に当たる音に障つ

「極上」は金剛弥五郎作として金剛流では家の能として特に重く敬う。弥五郎の詳細はよく解らないが、この曲の上演のことが天文年間(室町末期)にみられるから恐らく金剛初代の子供の一人であり、びしい精神作品とは異り、一応能作の整備の後であるから別の方に余裕をもつて書いた作である。また能にも音楽の調子をやかにし、物語にそれを巧に結びつけてできたのがこの曲であらう。だから御承知の如く大塗料をこらした遊びの面白さがある。師長が琵琶を弾いていると折から雨が降り来り板屋に当たる音に障つ

「極上」は金剛弥五郎作として金剛流では家の能として特に重く敬う。弥五郎の詳細はよく解らないが、この曲の上演のことが天文年間(室町末期)にみられるから恐らく金剛初代の子供の一人であり、びしい精神作品とは異り、一応能作の整備の後であるから別の方に余裕をもつて書いた作である。また能にも音楽の調子をやかにし、物語にそれを巧に結びつけてできたのがこの曲であらう。だから御承知の如く大塗料をこらした遊びの面白さがある。師長が琵琶を弾いていると折から雨が降り来り板屋に当たる音に障つ

「極上」は金剛弥五郎作として金剛流では家の能として特に重く敬う。弥五郎の詳細はよく解らないが、この曲の上演のことが天文年間(室町末期)にみられるから恐らく金剛初代の子供の一人であり、びしい精神作品とは異り、一応能作の整備の後であるから別の方に余裕をもつて書いた作である。また能にも音楽の調子をやかにし、物語にそれを巧に結びつけてできたのがこの曲であらう。だから御承知の如く大塗料をこらした遊びの面白さがある。師長が琵琶を弾いていると折から雨が降り来り板屋に当たる音に障つ

て障けなくなる。シテはさつと苦を屋根にぶき魯敏の邪魔にならぬようにした。シテのいわく「琵琶の音の調子は黄鐘、然るに板屋をたたく雨の音は二調子高い盤渉だから板屋を苦で被つて同じ調子の黄鐘にしてあげたのだ」と。このようにして今度は翁娘が面白く琵琶と琴を合奏するという小憎い着想である。即ち日本の音楽の調子の基調たる宍越、平調、双調、黄鐘、盤渉の原理をうまく応用したのである。それに輪をかけたのが今回の「三調之会釈」で、森田流で徳川中期にできた「蟬丸」の琵琶之会釈、「豊清」の松門之会釈等と同題のものだがこの方はもつと凝っている。先づ「玉の緒琴を弾きならし」の謡の後へ平調のアシライを、「それは浦波の音通うらし琴の音の」の打切に黄鐘のアシライを吹いて「これは弾く琵琶のへかける。更に「古屋の軒の板ひざし」の後へ盤渉のアシライの三調子をそれぞれ吹く、即ち琴の基調は平調、琵琶は黄鐘、板屋の雨は盤渉という理をうまくあしらった遊びである。

次にもつと凝り出したのが「楽入」で、記録的には徳川末期にできたものであろうが、師長の弾き方にじれつたい孝翁が奏でる「ひいたりひいたり面白や」でシテが本物の琵琶を大小前で弾じる。笛は極く短い楽(序とかかり)を吹き小鼓があしらう一調一管である。その時大鼓は休み、代りにシテが大鼓の間に本来に糸を弾いて音を出し、越天楽の曲になぞらえる。またこれを盤渉で吹く場合もあるが、これは鳥手の曲(経正にあり)になぞらえるのでこの曲だけは琵琶でも盤渉調となる。つまり師長は雨の音の盤渉に邪魔されて琵琶本来の黄鐘調が弾けなかったが、自分はそれに合った盤渉調の琵琶曲も弾けるんだという老翁の気骨の現われとしてみるのも大変面白く思う。後場の早舞は二段ラロシあと構振り行き、三拍子が流す「ツロッギ」の音になる習わしてこれも遊狂の精神である。ともかくここまで高貴な遊びの心が横溢した楽しい金剛流独特の切能である。

次にもつと凝り出したのが「楽入」で、記録的には徳川末期にできたものであろうが、師長の弾き方にじれつたい孝翁が奏でる「ひいたりひいたり面白や」でシテが本物の琵琶を大小前で弾じる。笛は極く短い楽(序とかかり)を吹き小鼓があしらう一調一管である。その時大鼓は休み、代りにシテが大鼓の間に本来に糸を弾いて音を出し、越天楽の曲になぞらえる。またこれを盤渉で吹く場合もあるが、これは鳥手の曲(経正にあり)になぞらえるのでこの曲だけは琵琶でも盤渉調となる。つまり師長は雨の音の盤渉に邪魔されて琵琶本来の黄鐘調が弾けなかったが、自分はそれに合った盤渉調の琵琶曲も弾けるんだという老翁の気骨の現われとしてみるのも大変面白く思う。後場の早舞は二段ラロシあと構振り行き、三拍子が流す「ツロッギ」の音になる習わしてこれも遊狂の精神である。ともかくここまで高貴な遊びの心が横溢した楽しい金剛流独特の切能である。

「蘭田川」山階信弘「天鼓」片山博太郎「歌古キリ」金剛巖 狂言「子盗人」三宅藤九郎・和泉保之(乳母)井上松次郎(何某)、能「羽衣・盤渉」宝生九郎・江崎金治郎・江崎康雄 藤田大五郎・幸直佳・飯島六之佐・榎本豊次・大坪十喜雄(地頭)山田大佐久(後見)、仕舞二番「加茂」辰巳孝「藤戸」野口緑久、能「絃上・衆入り・ツロッギ・三調之会釈」豊嶋弥左衛門・奥野運也(師長)種田道雄(地頭)豊嶋三千春(龍神)高安滋郎・西村欣也・高安勝久・佐藤彦彦・森田光春・曾和博朗・谷口喜代三・小寺金七・今井巖三郎(地頭)金剛巖(後見)。

—以下次号—

謹

賀

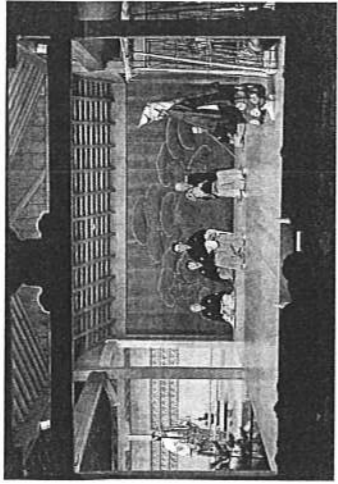
新

年

(株)大阪能楽会館 〒530 005 大阪府北区中崎町2-3-17 電話 〇七六二二一四三三〇	大倉源次郎 〒451 0041 名古屋市中区幡下2-10-9 TEL 〇五二五七一五七六三	藤田六郎兵衛 〒599 0817 高槻市樫ヶ丘北町11-25 電話 〇七二六九九四五〇一七	清水利宣 〒603 0033 京都市北区紫野下柏野町五九十一 電話 〇七五 四六二四二一五	河村大 〒466 0021 名古屋市昭和区前山町二丁目三 電話 〇五三二 七六二一四八八二	河村真之介 〒466 0021 名古屋市昭和区前山町二丁目三 電話 〇五三二 七六二一四八八二	吐会 河村総一郎 〒500 0000 各務原市各務原町4-67 電話 〇七九八〇 七三二六五八六	大倉流小鼓 松月会 高久田舜一郎 高久田陽春子 橋奈王 王子 桂 後藤孝一郎 嘉津幸	福井聡介 福井良治 福井四郎兵衛 幸友会
---	---	---	---	---	---	--	---	-------------------------------



金剛定期能「鎌倉」
②より 金剛永謙・金剛龍謙
(撮影・原田七寛)



金剛定期能「鎌倉」
④より 金剛永謙・廣田泰三・宇高徳成 (後見)
河村大・曾和博明・竹市学 (囃子方)・金剛永謙 (ツレ)
(撮影・原田七寛)

◆秋の舞台から(その三)◆

「金剛定期能」 「名古屋能楽堂十月定例公演」 と霜月の催能

竹尾邦太郎

「蟬丸」 謡言に因って放逐される盲目の皇子・蟬丸(ツレ龍護)、帝の考えを訝り乍らも勅諭ゆえに蟬丸を遺棄に行く漕賃(ワキ和幸)、物着に僧体と成る蟬丸に心を配るツレ・ワキ掛合の哀感... (以下省略)

れ、ば、事の原逆の極めに「何れを順と見、逆なり」と言はん」と踏む一ツ拍子、へ我は皇子なれども、と踏む三ツ拍子には童共の嘲笑を一蹴せん、の昂り。カケリ... (以下省略)

情々々と感じる。姉弟互いに運命を叩つクリ・サシ・クセ、居クセでなくへ我等いかなれば、と立つと舞い出す逆髪は、へ竹の柱に、と音座から薫屋を指すとその粗末を詠嘆し、へこれを古の錦の袴なるべし、の自虐にシラル。へ音せぬ薫屋の軒の隙々に、と薫屋に寄つて左手を柱に掛け、正に直シつ、目を眺める心は、弟にはそれも叶わぬ願れ。へ月にも深く雨をさへ、としつと弟を見詰める姉、薫屋では雨音も聞えぬ起臥へ思ひ遣られて傷はしや、と正中に戻り下居にシラル姉の、胸中の切なさは好調の地と相俟つて臨場感が素晴らしい。シテ、ツレ掛合に別離の心情吐露するロンギ、へ(げに傷はしや)我ながら、とすすと立つシテ逆髪、シラリのまま橋へ向かうを、へ人声遠くなるま、に、と姉逆髪の遺さるる気配に立つと薫屋を出る弟、蟬丸、キリ地になりへ声のする程、と二ノ松で弟に振り返る姉(写真)、へ泣くく別れおはします、と姉弟ともにシラリ、返シ句にシラリ返してシラリ留めに、三役含め気力充実の好舞台だった。(1時間38分)



名古屋能楽堂十月定例公演「囃子」
②より 佐藤謙・井上靖浩
(撮影・杉浦賢次)



金剛定期能「鎌倉」
宇高徳成(前)



金剛定期能「鎌倉」
宇高徳成(後)
(撮影・杉浦賢次)

用を申しつけられた」と逆々面白くない。茶の湯の度に主の恣意で水汲みさせられては堪らんと一計を案じ、手桶が身にとられたと逃げて帰る。事の一部始終を聞くも合点の行かぬ主は手桶に執着、取り戻しに行くところであつては当然徒ながらぬシテ、先回りして鬼に扮し、やつて来た主を威嚇し、主が怖じ気ふるうのを見て因に乗り、有ろうことか太郎冠者の待遇改善を要求する仕来。主の機子を見極め、戻る主を知らぬにふるふりでシテ、主は鬼と出喰わした顔末を語るうち「そらの事をいこう願屋をして居つた」と怪しみ、初め鬼がシテを嚇した時の言葉を復唱させ、声が同じと気付き、検証に再度野中へ。悟られたと薄々察したシテも行きがかり上進退極まり、また鬼になるも正体あつさり暴露され「面目も御座らん」と追込まれる。息のよく合った親子共演の美。(24分)

て内裏を騒がすが魔力も師の法力に屈服させられる「雷電」の、今風に言へば金剛流パッション、宝生流「瑛蔵」と同工。シテ達成。前は「雷電」に同じ菅公の怨霊、師の助力不可と知る形相俄に変わり、お供えの和箱をへおつ取つて噛み砕き、と扇開き立つところ(写真)内に滾る憤怒。後は雷神に非ず天満大自在天神の謔号を贈られ、初冠(垂縁・白梅/小葉)面中將、指貫、直衣の殿上人姿で現れる菅公。喜びに舞う早舞三段、悠然と舞う姿(写真)に前シテの険しさは皆無年巧の余裕をみせる。(56分。⑥回へつづく)

謹

賀

新

年

茂山千作
千五郎
七五三
千三郎

長生会
鬼頭義命

青耀会
上田悟

谷口正壽
谷口正喜

呉竹会
東海能楽伝承会
こども能楽教室
下田文庫

亀井俊一
保忠雄一
美雄

一色町能楽保存会
会長 吉川貞夫

野口隆行
奥津健太郎

松田高義

野村又三郎

狂言やるまい会

電 052・834・8607
FAX 052・834・8607

見島政行
鶴見俊裕

今井大佐
今井大佐
今井大佐
今井大佐

大蔵彌太郎
大蔵誠

大蔵狂言会
大蔵会

四五〇年余の伝統を護る
一色能

野村事務所 氣付
電話 052(350)7971
FAX 052(350)7972

名古屋市中区平和一二〇一四

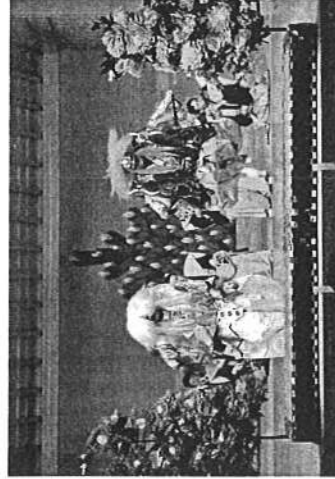
名古屋市中区栄五六一四
名古屋市中区栄五六一四

京都府上京区中立売通室町西八
室町スカイハイット610号

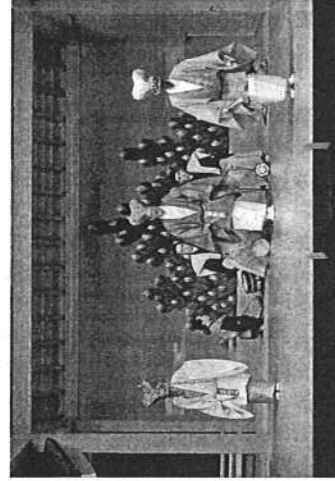
名古屋市中村区下米野町3129
電話(〇五二)四五一一九七九七

神奈川県川崎市麻生区岡上431
TEL 〇四四一九八七一八七

伊勢市一色町1306番地の2
電話(〇五九六)五十五二六



名古屋能楽堂定例公演「石橋・大獅子」
⑤より 古橋正邦、梅田嘉宏
(撮影・杉浦賢次)



名古屋能楽堂10月定例公演「石橋・大獅子」
阿七仙人 ④より佐藤友彦、今枝朝雄
(撮影・杉浦賢次)

へ春の御田には苗代水引くへ秋の御田には鳴子引く、などと鳴子を引き乍らの相舞の上機嫌(写真)。日暮れて戻らぬ兩人を乗せ、やつて来た主に寝入り端を起され、驚いて逃げ出す兩人へ、主は怒るところか「苦しうない、番をして呉れい、く」と驚ろ懸願の態。小舞小歌、両冠者の上達旨さもさりながら、役を得て温かな主の持味を充分に發揮した弘之の捨て難い芸劫。(43分)

「石橋・大獅子」 シテ正邦、前は童子、寂昭法師(ワキ勝久)が佛教の靈地清涼山に至り文殊の浄土を目前に石橋を渡らんとするを戒め、諫めるまでの、はきくくと渡り合うシテ、ワキの問答、掛け合いが入る。更に詳しく橋の謂れを問われてシテ、大小前に下居するとクワリ、サシ、クセに橋の徳はその業義に及び、へ向ひは(父殊の浄土)、と立つと目前の奇待あらたか、暫し待てとワキに言い置く地(邦久・邦弘・修一)のうちに橋懸へ。笛が一ノ松で吹き止め、シテは何事もなく中入すると、代つて仙人一行(オモ友彦アト俊裕・邦雄)が賑やかに謡いながら出ると(写真)、寂昭が渡橋を思いとまつたことなど話題に、我等にまで獅子団乱旋の舞楽を「見物申せ」との御沙汰を喜び、まだ間があるからとオモが率先に括りつけた瓢を開ければ、ざと酒盛に。雲も進み肴にへあはれ一枝を、とアト二人が「花の袖」を連吟すれば舞うオモ、「やあ、く何といふぞ、はや獅子が出るか」と目敏く橋懸を見るが、酔うては獅子の勢いに怪我をしかねず「今日は和歌を上げて帰るまいか」と、へ獅子団乱旋の時終り鼻香薫し、と一行が謡いながら入ると、代つて牡丹立一豊台三基正先へ。此の

②面よりつづき
10月23日・金剛定式能・金剛能楽堂)

「鳴子」 明治四四年(一九一)「尋常小学唱歌」「茶山子」にへ山田の中一本足の茶山子とある。鳥威しと言えは茶山子と鳴子、当時の農村風景も思われ

山田へ下りる群鳥を追い払うのに太郎冠者(シテ勲)次郎冠者(オアト増造)を遣る主(アト弘之、現在も田や畑には農具や収穫物を一時的な園藝装まに置く小屋があるが、それへ兩人に折々は入って休め、と慶しい。兩人それへく鳴子を目付柱、脇柱に括りつけると綱を引き「ホイイ、ホイイ」と群鳥を追い散らし、一廻きすれば小屋に入つて慰みに小歌を

楽しむ長閑か。主はまた、陣中見舞に酒を届けるなど温かい。飲めば陽気にざと酒盛の兩人、酔えば骨にべと引く物を誦はん、と



観世会定例公演「藤戸・陸陀之伝」
観世喜之
(撮影・杉浦賢次)

「石橋」の間(アト)「望月」「道成寺」と共に奥伝一番曹とい、余り出ないが近くは平成一七年「第40回風の盆」の上演がある。さて後場、乱序(誠・藤津幸・眞之介・洋輝)で白(シテ正邦)赤(ツレ嘉宏)と出る。養快、壮快に浄土は牡丹の園に舞い戯れて(写真)いわゆる組落しに安産するもの鮮烈だった。(1時間17分・10月28日・名古屋能楽堂十月定例公演)

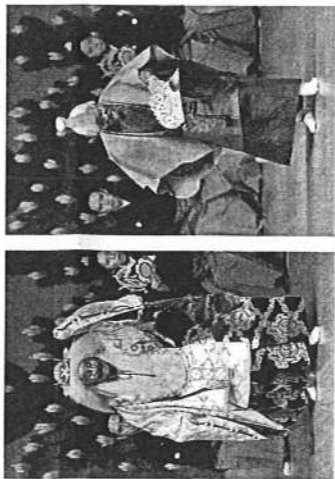
芸術の秋と呼称される機に一月に入るといわゆる能楽期も甜で催芸多々、印象的な舞台を列記するに留めざるを得ない。

一月五日・第32回名古屋金春会。光洋「葛城・大和舞」面墙・黒垂・萬ノ天冠(要路)横白二・白地桜花文摺籠着付・貝文淡貴大口・淡青舞衣葎拵姿の後シテ、へ降る雪の、と鎮まり、神楽を扇で舞う。キリ、一ノ松でへ明けぬ先にと、の返シ句に小廻り、へ葛城の、と袖被くとそのまま、地のうちに入る。余情一入だった。(1時間26分)

一月二日・豊田市能楽堂特別公演。三千春・觀護「朝長」



豊田市能楽堂特別公演「朝長」
金剛精謹
(撮影・杉浦賢次)



観世会定例公演「国栖・白頭」梅田邦久
(撮影・杉浦賢次)

一月一八日・平成廿三年度忠三郎狂言会。良暢「舟船」陽気な古歌立ての中にみせる意気地。(13分) 良暢「釣狐」語の口跡は師父に酷似。驚き、恐れ、跳びはねる身体の柔らかさは、後シテの翼を外して舞台から勾欄越しに逃げるキリの鮮やか。(1時間4分)

一月一九日・梅若吉之丞後援会第一回公演。熊沢恵美子を偲ぶ会。猶義「鷗鷗小町」師父吉之丞死去による代物は秘曲の初演。心理的にも辛く重かつたであろうが、懸命に動めたという印象。(1時間37分) 猶義「求塚」独演二番はそれも大曲、力演は几帳面に師父の衣鉢を継

人格の異なる宿ノ長と朝長を同一人が演じるのを演出上避け、すつきりと締つた舞台になった。(1時間23分)

一月二三日・名古屋親世会定例公演。喜之「藤戸・陸陀之伝」領主に「我子返させ給へ」と迫る老母の凄さ(写真)。(1時間16分) 邦久「国栖・白頭」供御の残りの角を水に放つ手際と後シテ「天を指す手、の力感(写真)。(1時間10分)

一月二〇日・名古屋宝生会定式能。清次郎「善知鳥」カケリのお切れよさ、芸の大きさに胸がすく。(1時間10分)

一月二三日・第十回公演狂言「三の会」。田「翁」披きの清新、謹直に勤める。又三郎「三番叟」はこなれたもの、烏帽子之祝儀の問答が面白かった。(1時間15分) 高義「金圃」披きというが十二分に舞台経歴を積んでをり安定感。(24分)

一月廿六日・青陽会。路子「野宮」女流優しき、しとやかさ随所に曲趣に趣う辭か。1時間54分、大曲をそつなく纏める。勘助「車傳」いかに大天狗も車傳には敵わぬか、シテ、ワキ禪問答の可笑しさはシテのコミカルな味に。(53分)



豊田市能楽堂特別公演「朝長」
⑤より 福玉茂十郎・豊嶋三千春・野村又三郎
(撮影・杉浦賢次)

久田勸鷗

橋岡久太郎

梅若猶義

裏中につき
年賀欠礼いたします

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

ウシマド写真工房
牛窓正勝
雅之

久田三津子

茂山良暢

梅春会
井戸和男
良祐

名古屋修諷会
梅若修一

彰諷閣
連絡先 安城市三河安城真町一十七三
グレイシアスビル安城内
電話(〇五六六)七七八二四一

楽諷庵舞台

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五十六四
電話(二六二)二一八三番

NHK放送予定(平成24年2月~3月)

●NHK-FMラジオ音楽鑑賞(日曜日7時20分~8時15分)
2月26日 素話「藤」(喜多流) 香川靖嗣
3月4日 「朝長」(観世流) 野村四郎
3月11日 「清経」(金春流) 高橋 忍
3月18日 「山姥」(金剛流) 金剛永謹
3月25日 「松垣」(宝生流) 近藤乾之助

●Eテレ「第26回NHK音楽鑑賞会」
3月3日(土) 15:00~17:00
(横浜能楽堂で1月24日上演)
一團「三井寺」小鼓 大倉源次郎
シテ 本田光洋
狂言「文山立」~大藏流~
シテ 山本則俊
アト 山本則秀
能「船弁慶」重き前後之替~観世流~
シテ 梅若玄祥
シテ 梅若秀成
子方 殿田謙吉
ワキ

能 楽 の 友

友 楽 能 楽 社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送料 1年 1800円
郵送の場合一

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
郵送料 1年 1800円
郵送の場合一

三演能力レンダー

◆名古屋能楽堂◆

第16回関西観世花の会 (有料)
18日(出) (有料)
[3月]
3日(出) (有料)
4日(日) (有料)

名古屋能楽堂3月定例公演(番組①面) (有料)
榎山女子学園大学能楽部 (無料)
創立50周年記念能楽の会 (番組①面) (有料)
第5回名古屋山吹春(番組②面) (有料)
茂名古生宝生会定式 (番組②面) (有料)

名古屋市芸術賞

奨励賞・笛方 鹿取希世さん

名古屋市は、芸術文化の振興、創造活動に大きな功績のあった個人・団体に芸術賞を授与しているが、昭和23年度名古屋市芸術賞として、芸術特賞一人、芸術奨励賞二人と一団体を決定。

芸術奨励賞には、能楽・笛方の鹿取希世(かとり きよ)さんが受賞、二月三日授賞式が行われた。

受賞は、芸術特賞・井藤田静弘氏(演出・制作)、芸術奨励賞・宗次徳二氏(音楽普及)、三代眞史ジャズ舞踊団(舞踊・ジャズダンス)と鹿取希世さん。

●芸術奨励賞受賞の概要
鹿取希世さん(♂) 伝統芸能(能楽・笛方)

昭和二十九年能楽笛方・藤田流に入門。昭和五十六年より現宗家十一世藤田六郎兵衛に師事し、「石橋」「道成寺」「望月」

第5回萬歳楽座 能「安宅」上演 4月5日(木)国立能楽堂

能楽をより多くの方に身近に楽しんでもらうため、藤田六郎兵衛氏(笛方藤田流十一世宗家)が主宰する観能の会「萬歳楽座」はきたる四月五日(木)第五回公演として、東京・国立能楽堂で能「安宅」一團「杜若」是界を上演する。

当日は午後五時三十分開場、午後六時三十分開演。

番組は太鼓二流徹義演一調「杜若」太鼓・観世元伯(観世流謡・大槻文蔵)一調「是界」太鼓・金春國和(金春流謡・観世義之丞)

能「安宅」勳進帳。(小書・貝立目付・延年之舞)

武蔵坊弁慶・観世清和、義経・藤波重光、義経の郎克・浅見重好、津田和彦・山階彌右衛門、関根知孝・藤波重彦、上田公威・藤波重孝、観世芳伸、岡久広、富樫至生剛、強力、山本真次郎、富樫輝の従者・山本泰太郎

笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・亀井忠雄、後見・片山幽雪、武田宗和、坂口貴信

地謡・観世義之丞、大槻文蔵、

和泉流狂言づくし

無住国師700年忌

4月21日 名古屋能楽堂

能「附子」の原語を収録した「砂石集」の編纂者・無住国師の没後七百年を記念して、今春四月二十一日(出)名古屋能楽堂で「和泉流狂言づくし」が開催される。

この企画は、朝日新聞名古屋伝統文化活性化プログラム2012の一環として催されるもので、主催・名古屋市文化事業団(東文化小劇場、名古屋能楽堂)、共催・

第4回公演「道成寺」の成果

平成二十三年度(第6回)文化庁芸術祭賞・演劇部門の芸術祭大賞(関東参加公演の部)に「万歳楽座」が選定された。

受賞は第四回萬歳楽座公演(昭和二十三年十月十九日)能道成寺(脚・眞理田)当代最高「道成寺」である。要となったシテ・観世清和は、巧緻な技術、玲瓏たる品位、真摯な情熱、すべて兼ね備えた華盛りだけあって、小書に従い切り詰められた段拍子は密度高く、懇切丁寧な演技は、能全体に互って一分の隙もない。会主・藤田六郎兵衛の笛は、あくまでも強い中にも澄みきった叙情性をたたえる名演。大槻文蔵以下浄々たる個性を従えた梅若玄祥の率いる地謡は屈曲に富んだ表現がすばらしく他に望めない顔合わせでもある。

全体 極めて緻密なアンサンブルのもとに、この会ならではの「道成寺」が成就した。特筆すべき一番と評価されよう。

片山九郎右衛門、観世眞正、野村昌同、武田友志、角幸二郎、清水義也。

チケット料金(全席指定) S席二〇〇〇円/A席一〇〇〇円/B席八〇〇円/学生席三〇〇円

申込み先/チケットぴあ(TEL0570・02・99999、Pコード417・047) ロソンチケット(TEL0570・084・003、Lコード36743)

国立能楽堂「窓口販売のみ(午前10時~午後6時) 藤田六郎兵衛事務所(TEL052・571・5763・FAXとも)、アポロ音楽事務所(TEL03・5379・8717)

なお次回(第6回)萬歳楽座は、今秋十月十六日(日)国立能楽堂で開催される。

能「田村」シテ長田麟、ワキ飯高雅介、ワキツレ橋本幸、岡亮、アイ・島田洋海。

豊田市能楽堂主催の三月能は、三月十日(豊田市能楽堂豊田参合会館八階)で、能(喜多流)「田村」狂言「鈍太郎」が上演される。午後一時三十分開場、午後二時開演

能組は次のとおり
解説・柳沢新治
狂言「鈍太郎」シテ茂山七五三、アト・下京の女・茂山宗彦・上京の女・茂山逸平、後見・島田洋海。

能「田村」シテ長田麟、ワキ飯高雅介、ワキツレ橋本幸、岡亮、アイ・島田洋海。

街・大野誠、小鼓・後藤孝一郎、大

第五回 名古屋片山能

三月十日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

〔照明能〕
能 羽衣
片山九郎右衛門
宝生 欣哉 山本哲也 上田 悟
後見 小梅田 嘉宏 地謡 武田 大 江 佑 河村 博重
小林 慶三 分林 大 志 橋本 重
片山 山 山 志 武田 大 志 河村 博重
後見 小梅田 嘉宏 地謡 武田 大 江 佑 河村 博重
小林 慶三 分林 大 志 橋本 重
片山 山 山 志 武田 大 志 河村 博重

◆平成23年度文化庁芸術祭賞◆

萬歳楽座が大賞受賞

平成二十三年度(第6回)文化庁芸術祭賞・演劇部門の芸術祭大賞(関東参加公演の部)に「万歳楽座」が選定された。

受賞は第四回萬歳楽座公演(昭和二十三年十月十九日)能道成寺(脚・眞理田)当代最高「道成寺」である。要となったシテ・観世清和は、巧緻な技術、玲瓏たる品位、真摯な情熱、すべて兼ね備えた華盛りだけあって、小書に従い切り詰められた段拍子は密度高

能「田村」狂言「鈍太郎」

3月10日 豊田市能楽堂

豊田市能楽堂主催の三月能は、三月十日(豊田市能楽堂豊田参合会館八階)で、能(喜多流)「田村」狂言「鈍太郎」が上演される。午後一時三十分開場、午後二時開演

能組は次のとおり
解説・柳沢新治
狂言「鈍太郎」シテ茂山七五三、アト・下京の女・茂山宗彦・上京の女・茂山逸平、後見・島田洋海。

能「田村」シテ長田麟、ワキ飯高雅介、ワキツレ橋本幸、岡亮、アイ・島田洋海。

街・大野誠、小鼓・後藤孝一郎、大

第五回 名古屋片山能

三月十日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

〔照明能〕
能 羽衣
片山九郎右衛門
宝生 欣哉 山本哲也 上田 悟
後見 小梅田 嘉宏 地謡 武田 大 江 佑 河村 博重
小林 慶三 分林 大 志 橋本 重
片山 山 山 志 武田 大 志 河村 博重

◆平成23年度文化庁芸術祭賞◆

萬歳楽座が大賞受賞

平成二十三年度(第6回)文化庁芸術祭賞・演劇部門の芸術祭大賞(関東参加公演の部)に「万歳楽座」が選定された。

受賞は第四回萬歳楽座公演(昭和二十三年十月十九日)能道成寺(脚・眞理田)当代最高「道成寺」である。要となったシテ・観世清和は、巧緻な技術、玲瓏たる品位、真摯な情熱、すべて兼ね備えた華盛りだけあって、小書に従い切り詰められた段拍子は密度高

能「望月」

豊田市能楽堂主催の三月能は、三月十日(豊田市能楽堂豊田参合会館八階)で、能(喜多流)「望月」が上演される。午後一時三十分開場、午後二時開演

能組は次のとおり
解説・柳沢新治
能「望月」シテ長田麟、ワキ飯高雅介、ワキツレ橋本幸、岡亮、アイ・島田洋海。

街・大野誠、小鼓・後藤孝一郎、大

第五回 名古屋片山能

三月十日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

〔照明能〕
能 羽衣
片山九郎右衛門
宝生 欣哉 山本哲也 上田 悟
後見 小梅田 嘉宏 地謡 武田 大 江 佑 河村 博重
小林 慶三 分林 大 志 橋本 重
片山 山 山 志 武田 大 志 河村 博重

名古屋能楽堂三月定例公演

三月三日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

狂言 禰宜山伏 シテ 井上 清浩 アト 佐藤 大 融
(和泉流) 後見 今枝 郁雄

能 隅田川 飯富 雅介 飯 一 大野 誠
(喜多流) 橋本 幸 後藤孝一郎

子方 須藤 有哉
長田 麟

後見 高林白牛二 伊藤 泰敏 高林 伸二
草田 郷 大島 善 佐松 大 輔 片 山 山 志 河 村 博 重
森田 克彦 栗谷 浩之

(午後四時十分頃終了予定)

主催 名古屋市文化振興事業団 (名古屋能楽堂)
能楽協会名古屋支部

〔入場料〕 前着指定席四〇〇〇円
前着自由席三〇〇〇円
(自由席のみ当日五〇〇円増)

取扱い 名古屋能楽堂(TEL052・2719・0430)
プレイガイド(栄アレナケ・松坂屋他)
チケットぴあ(0570・02・99999、Pコード417・788)

八 「中日五流能」 ⑥

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ⑳

竹尾 邦太郎

―― 承前 ――

昭和四十六年三月二八日、第十六回「中日五流能」。番組は午前十一時開演。第一部は能「景清・松門之会籠」近藤乾三・近藤乾之助(丸)内藤泰二(徒者)松本謙三・杉市太郎・幸祥光・安福春雄・高橋進(地頭)辰巳孝(後見)・仕舞三番「三輪」柴田初太郎「遊行柳キリ」大西信久(玉之)

段「高橋進」狂言「文荷」三宅藤九郎・井上松次郎(主)和最俊之(次郎(徒者))・能「三井寺」舞俳左伝「梅若万三郎・梅若文孝(子

方)高安滋郎・西村欽也・高安勝久・三宅藤九郎・藤田六郎兵衛・北村一郎・吉田太郎・藤井久雄(地頭)大西信久(後見)・仕舞二番「鶏之段」金春栄治郎「郡」辰巳孝、一調「桜川」田鍋惣太郎・野口禄久・能「天鼓」盤歩」金春信高・久保田十三郎・佐藤卯三郎・森田光春・大倉豊十郎・谷口喜代三・金春惣右衛門・金春栄治郎(地頭)金春欣三(後見)。

第二部、午後四時開演は能「弱法師・舞人」友枝喜久夫・松本謙三・和最俊之・森田光春・北村一郎・安福春雄・栗谷新太郎(地

頭)和谷亀二郎(後見)、一調「善知鳥」幸祥光・梅若万三郎(写真)・仕舞三番「笠之段」豊嶋弥左衛門「忠度」梅若万紀夫「野守」栗谷新太郎・能「二人静」梅若彌義・梅若盛義・久保田千三郎・杉市太郎・大倉豊十郎・吉田太郎・藤井久雄(地頭)片山博太郎(後見)・狂言「土庫」善竹忠郎・善竹孝夫・仕舞二番「鉄輪」藤井久雄「熊坂」片山博太郎(写真)・半能「春日禰神」。



第16回中日五流能 一調「善知鳥」梅若万三郎(撮影 高辻幸一) 左より幸祥光



第16回中日五流能 仕舞「熊坂」片山博太郎・藤井久雄(高辻幸一撮影) (シテの後ろに)

龍神揃)金剛殿・今井清隆、北川文雄(籠女)金剛水護・広田隆一(写真)・仕舞三番「笠之段」豊嶋弥左衛門「忠度」梅若万紀夫「野守」栗谷新太郎・能「二人静」梅若彌義・梅若盛義・久保田千三郎・杉市太郎・大倉豊十郎・吉田太郎・藤井久雄(地頭)片山博太郎(後見)・狂言「土庫」善竹忠郎・善竹孝夫・仕舞二番「鉄輪」藤井久雄「熊坂」片山博太郎(写真)・半能「春日禰神」。

り物解説「浅井素太郎、一能のふるさと」栗林貞一。上演曲目についての識者の小文は、「松門の出」沼川雨、「文荷と文裂き」星田良光、「月と釣鐘」香西精、「名器名手を得て」木村利行、「夕映えの樂」杉本苑子、「二人静の贅沢」増田正造、「言葉のしやれ」池田広司、「天龍神の位」北岸佑吉。他に「前回の舞台を想う」舞台写真、おもな出演者紹介、賛助企業広告、など。

なお此の年の来演はなかったが、第三回より始んと毎回のように来演の一噌流儀方・藤田大五郎が重要無形文化財保持者の第二七次指定で館方としては初の各個人指定(いわゆる人間国宝)に四月二三日、認定さ

23平成 関西元氣文化圏賞特別賞 山本能楽堂が受賞

平成23年関西元氣文化圏賞の受賞者がこのほど決定され、特別賞に「公益財団法人山本能楽堂」が受賞した。

関西元氣文化圏賞は、2003年に「関西元氣文化圏推進協議会」が発足、その年に文化を通じて関西から日本を明るく元気にすることに貢献した人物・団体に対して、感謝と一層の活躍への期待をこめて贈られるもので、平成15年から毎年贈呈しており、今回で9回目となる。

平成23年の受賞は、大賞「INAC神戸レオネッサ」、特別賞「公益財団法人山本能楽堂」。

特別賞を受賞した山本能楽堂の贈賞理由は次のとおり。

上方伝統芸能が一度に楽しめる「初心者のための上方伝統芸能ナイト」は平成23年10月に100回記念公演を迎えた。また水と環境

をテーマに2009年大阪で初演した新作能「水の輪」は、再演を重ね、11月に文化庁の国際芸術文化支援事業としてブルガリア公演を行い好評を博した。

なお、大賞のINAC神戸レオネッサは、FIFA日本代表チーム「なでしこジャパン」。

第6回 能の旅人

3月20日 千種文化会館

第6回能の旅人「のうの能」は名古屋は3月20日、名古屋市千種文化会館で開催される。

「A公演」午後一時開演
舞獅子「梯の段」井上靖造、仕舞「鶏」(中所宣夫)、能「安達原」(シテ観世喜正)

「B公演」午後四時開演
舞獅子「節の段」(野村又三郎)、仕舞「老松」(柳瀬直也)、巻物「小島英明」、能「雷電」

さわつて みよう!! 能の世界 3月10日(土) 半田市で開催

楽器、謡、所作などの体験と能の鑑賞により、日本の伝統文化「能楽」と仲良しになろうとよびかける「さわつてみよう!! 能の世界」の催しが三月十日(土)半田市福祉文化会館(雁宿ホール)半田市雁宿町1-22-1で行われる。

体験の部/午後二時始、鑑賞の部、能「船弁慶」入場料無料。体験の部は組組、鑑賞の部は五百名(申し込みは二月二十日(月))となつているが、余裕があれば受けられるので問い合わせが望ま

問合せ先/申し込みは往復はがき。郵便番号445-0017、西尾市上水長町西半ノ宮12・加藤方「さわつてみよう!! 能の世界」係。電話080-3634-0383(加藤方)、Eメール:hibo@hibo.com

主催・文化庁、共催公益社団法人能楽協会名古屋支部
※文化庁平成二十三年度次代の文化を創設する新進芸術家育成事業。

(シテ観世喜正)
チケット全席指定五〇〇〇円、申し込み/のうの事務所(T E L 03-3266-1020)

例 一色神社 奉納能

保存会結成45周年
四五〇年余の伝統を誇る一色能

は、ことし平成二十四年度、保存会結成四十五周年を記念して、きたる三月十一日、一色神社例祭に奉納能を開催する。

能組は「翁」、狂言「文相撲」、能「羽衣」、能「狸々」、ほか舞獅子「小袖當我」連鈴四番、一管、独吟、仕舞など二十番。

子ども狂言教室

3月24・25日 西・緑文化小劇場

子ども狂言教室として、昭和五十五年度から行われている「なごや子どものための巡回劇場『狂言でござる』」がきたる三月二十四日(土)名古屋市西文化小劇場、二十五日(日)緑文化小劇場で開催される。

開催は、西会場とも午前の部(午前十一時〜十二時三十分)午後の部(午後二時〜三時三十分)「狂言教室」午前の部、狂言「柿山伏」「井杭」午後の部、狂言「附子」「養山伏」入場料/子ども(3歳以上小学生以下)五百円、大人八百円(公演は名古屋市主催事業として特別料金)

チケットの取扱いは狂言共同社(佐藤事務所電話052-911-8778)チケットぴあ(電話0570-02-9999、Pコード417-104)名古屋市文化振興事業団電話052-249-9387)名古屋能楽堂(電

話052-231-0088)ナディアパークレイガイド(電話052-265-2015)

主催/狂言共同社、なごや子どものための芸術劇場実行委員会(名古屋市文化振興事業団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、愛知県童・青少年舞台芸術協会)

「訂正」前号⑥頁、金剛定期能「鱧丸」の写真説明で金剛水護(ツレ)とあるのは、金剛龍種に訂正。また「養戸」の写真撮影は、原田七實氏でした。お詫びして訂正します。

宝生流職分 鬼頭嘉男氏 逝去

宝生流職分・鬼頭嘉男氏(嘉宝会主宰)は、さる一月二十七日、自宅で急逝された。葬儀は一月二十九日十一時半より千種区のいなぎ中央斎場で執り行われた。喪主・猪島豊氏。

(故鬼頭氏の略歴は、本紙④面に掲載)

茂山狂言会 春

三月十七日(土) 午後二時始
名古屋 能楽堂

狂言小舞	茂山 虎真	老傳 茂山七五三	立兼 茂山十三郎	松本 洋海
花折	茂山 茂	丸石 やすし	井口 竜也	鈴木 実美
附子	茂山 準平	茂山 あきら	茂山 重司	
朝猿	茂山 五郎	茂山 正邦	茂山 重正	

主催 茂山狂言会
事務局 〇七五-二二一-八三七二

S席 六〇〇〇円 A席 四〇〇〇円
学生 二〇〇〇円 小学生一〇〇〇円

名古屋宝生会定式能

三月十八日(日) 午後一時始
名古屋 能楽堂

能組

竹内 登子	飯富 雅介	河村 真之介	鹿取 香世
能 玉 葛	鹿島 俊裕	坂口 泰子	衣斐 愛
後見	辰巳 正直	地頭 大塚 光子	倉本 雅博
		芳賀 カズ子	土屋 周子
狂言 井 杭	井上 靖浩	井上 蒼大	
	佐藤 颯		
仕舞 花 水	室 月	内藤 飛龍	地頭 衣斐 正宣
	衣斐 愛		和久 莊太郎
天女 辰巳 和譜	高安 勝久	河村 総一郎	加藤 洋輝
織 辰巳 大二郎	橋本 正樹	船戸 昭弘	大野 誠
子方 片桐 真	佐藤 友彦	今枝 郁雄	
辰巳 進次郎			
能 国 栖	和久 莊太郎	津田 節武	稲川 壽一
	内藤 飛龍	地頭 石黒 幸	衣斐 正宣
		玉井 道夫	佐藤 耕司

「入場料」(全自由席) (終了予定 午後四時半頃)
正会員一八〇〇〇円(年間通用4枚紙)
鑑賞券五〇〇〇円(一回限り) 主催 名古屋宝生会
取扱い/レイガイド、名古屋市昭区和師器所3-23-19
芸文(地下2階) 主権 名古屋宝生会
柴アレーナ、ナディアパーク、 電話 052-882-5600
中日サービス(中日ビル)、松坂屋
本館7階



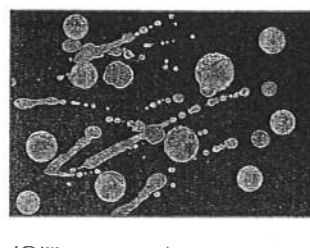
第18回中日五流能「采女・美奈保之伝」(シテ)・織沢壽左より安福春雄・観世元昭(振)・藤田大五郎(攝)

午後三時半開演、第二部は能「安宅・問答之習・滝流シ・延年之舞・目立負付」豊嶋弥左衛門・酒井文嗣(子方) 豊嶋三千春、今

午後五時半開演、第二部は能「采女・問答之習・滝流シ・延年之舞・目立負付」豊嶋弥左衛門・酒井文嗣(子方) 豊嶋三千春、今

昭和四七年三月二六日、第十七回「中日五流能」。番組は午前十

た。藤田氏が毎度認定されたこと、能はすべての役に人間国宝がそろろう。」と。



中日五流能 昭和四七年三月二六日(日) 東京新劇文化会 主催 新 劇 会 協 賛

三ツ折リリーフ レット表紙 井津隆・宇高遠成・合口宗義・重本昌三・松野恭憲(以上同山)宝生弥一・山本則寿(長)

刀持)山本則直(強力)・森田光春・大倉長十郎・谷口喜代三・今井幾三郎(地頭)金剛殿(後見)・仕舞二入静・梅若泰之・梅若泰英・独吟「花籃」狂「辰巳

志「難波」岡久雄、狂言「かくし理」野村万蔵、野村万之丞、能「井筒・物着」梅若六郎、江崎金治郎、藤田六郎兵衛、大倉長十郎、安福春雄、梅若泰之(地頭)梅若盛義(後見)・仕舞三番「夷盛

パンフレットの内容は、「番組」「演目解説」「西田三好・カット松野季世、「能の作者考」おも

後藤「能面解説」山辺知行、「作り物解説」浅井泰三郎、「能のふるさと」栗林貞一。上演曲目に

「一機」理と虎、北川忠彦、「ツマミ」山崎有一郎、「寛前寛後」香西精。他に「前回の舞台を想う」杉本藤次郎撮影、「中日五流能の歩み(第一回より第一六回・曲目とシテ)」、おもな出演者紹介、賛助企業

昭和四八年三月二五日、第十八回一申

日五流能」。午前十時開演の第一回は能「観政」金春采治郎(前)金春信高(後)高安滋郎・井上松次郎・森田光春、曾和博朗、渡部晴義・金春欣三(地頭)金春晃実(後見)・狂言「二人大名」山本東次郎・山本則俊・山本則直(通行人)、能「松風・戯之舞」観世元正・岡根祥六・森茂好・山本東

次郎・藤田大五郎・鶴沢寿・安福春雄・観世元昭(地頭)片山博太郎(後見)・仕舞三番「笠之段」金春欣三・「花月」野村四郎「籠虎」藤波重和・重満、一調「勸進帳」鶴沢寿・福岡周斉、仕舞二番

「遊行柳七」観世元昭「鴉」片山博太郎、能「殺生石・白頭」友枝喜久夫、江崎金治郎、野村又三郎・藤田六郎兵衛・吉阪修一・飯島六之丞・三島太郎、福岡周斉

(地頭)和谷亀二郎(後見)。午後四時開演の第二部は能「羅生門・替之型」金剛殿、高安滋郎(綱)西村欽也(頑光)和泉太郎(床具)森晴藏(貞光)津水利宣(季武)和泉昭太郎(公時)高安勝久(從者)茂山千五郎(綱の從者)広田陸一(地頭)豊嶋弥左衛

門(後見)・仕舞四番「兼平」渡辺三郎「船弁慶」辰巳孝「弱法師」柴田初太郎「鴉之段」豊嶋弥左衛門、能「采女・美奈保之伝」観世元正・江崎金治郎、茂山千之丞・藤田大五郎・鶴沢寿・安福春雄・藤井久雄(地頭)大槻秀夫(後見) (写真、左より安福春雄・シテ観世元正・鶴沢寿・藤田大五郎)・狂言「磁石」茂山千之丞(田金忠)茂山千五郎(悪人)茂山正義(亭主)・仕舞三番「番知鳥」藤井久雄「宣土太鼓」大槻秀夫「山姥」観世武雄、能

「葵上・梓之出」野口操久・森茂好・森常好、佐藤卯三郎・藤田六郎兵衛・吉阪修一・飯島六之丞・三島太郎・辰巳孝(地頭)渡辺三郎(後見)。

毎回、観客に配られる表紙やザイン森原佐吉による冊子(パンフレット)の内容は、番組、「演目解説」「能の作者考」「能面解説」「装束解説」「作り物解説」「能のふるさと」は筆者も先号と同じ。上演曲目についての識者の小文は「花吹かぬ埋れ木」杉本亮子、「風刺を巻む和楽の心」八

子、「風刺を巻む和楽の心」八

正治「松風余情」沼川雨、「ア口に着る」殺生石のこと」福田良之助、「羅生門」林屋三郎、「采女のためわかれ」今井吹三郎、「くわつくわつ法」池田弘司、「護摩の香」坂本欣司。他に「前回の舞台を想う」杉本藤次郎撮影、おもな出演者紹介、賛助企業

昭和四九年三月二二日、第十九回「中日五流能」。午前十時開演の第一部は能「清経・披露之出端」金剛殿。今井清隆、高安滋郎、森田光春、曾和博朗、大倉七左衛門、今井幾三郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)・狂言「井杭」野村万之丞・野村良介(井杭)野村又三郎(主人)・仕舞三番「夜成

観世元昭、観世清頭(義経)藤井徳三・柴田取武、大江将重、佐藤大俊、久田秀雄、藤井完治、沖奈久、竹前治房、山中義滋(以上同山)・江崎金治郎、善竹忠重(天刀持)善竹忠一郎(強力)藤田大五郎、曾和博朗、安福春雄、武



第19回中日五流能「鞍馬天狗・白頭」友枝喜久夫(撮影 高止幸一)

「半部」立花供養をする僧(ワキ幸迫)の許へ白

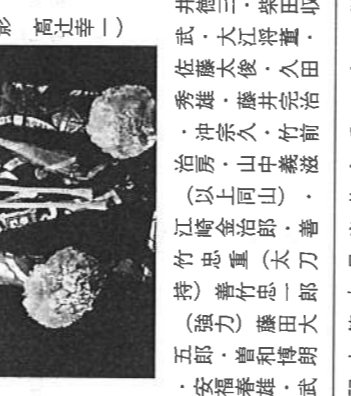
語氣に苛立つ気持も。夕顔ノ上の事を語る所ノ者(アヒ)は少々声

後場。菅壁に半葎風、夕顔ノ精(後シテ猶義)が中に居て、地(善高・見一・善久ら)と掛合に

忠度」今井幾三郎「芭蕉クセ」豊嶋弥左衛門「鴉」広田陸一、能「楊貴妃・玉環・白望」観世元正・江崎金治郎・野村万之丞・藤田大五郎・鶴沢寿・安福春雄・岡久雄(地頭)片山博太郎(後見)・仕舞五番「花月」柴田初太郎「野守」木原康夫「谷行・著袍」栗谷新太郎「鴉之段」武田大加志「遊行柳七」木原康夫、能「鞍馬天狗・白頭」友枝喜久夫・高林伸二(牛志)長田金忠、神戸儀久、賀川洋、稲垣祐史・茨木孝・三宅浩之(以上花見) 福王茂十郎・井上松次郎(能力)佐藤秀雄 木ノ葉天狗 栗谷新太郎(地頭)和谷亀二郎(後見) (写真)。

午後四時開演の第二部は「安宅・勸進帳・延年之舞・目立負付」

観世元昭、観世清頭(義経)藤井徳三・柴田取武、大江将重、佐藤大俊、久田秀雄、藤井完治、沖奈久、竹前治房、山中義滋(以上同山)・江崎金治郎、善竹忠重(天刀持)善竹忠一郎(強力)藤田大五郎、曾和博朗、安福春雄、武



第19回中日五流能「鞍馬天狗・白頭」友枝喜久夫(撮影 高止幸一)

「半部」立花供養をする僧(ワキ幸迫)の許へ白

語氣に苛立つ気持も。夕顔ノ上の事を語る所ノ者(アヒ)は少々声

後場。菅壁に半葎風、夕顔ノ精(後シテ猶義)が中に居て、地(善高・見一・善久ら)と掛合に

田大加志(地頭)木原康夫(後見)・仕舞二番「高野物狂」道行「佐野正治」阿漕「辰巳孝」狂言「金藤左衛門」善竹忠一郎・安東伸元、仕舞四番「二人静」金春晃実・高橋汎「歌占キリ」金春欣三「笠之段」岡久雄「夷盛キリ」片山博太郎、能「井筒・物着」宝生英雄・久保田千三郎・森田光春・鶴沢寿・飯島六之丞・野口操久(地頭)辰巳孝(後見)・仕舞二

番「籠太鼓」野口操久「山姥キリ」本間英孝、能「藤戸・後之出」金春信高、高安滋郎、西村欽也、高安勝久・野村又三郎、森田光春、吉阪修一、大倉七左衛門、金春欣三(地頭)金春晃実(後見)。

パンフレットの内容は、番組、「演目解説」「能の作者考」「能面解説」「装束解説」「作り物解説」先号と筆者同じ。今回「能のふるさと」は執筆者、栗林貞一の病のため休載。上演曲目について

香西精、「叩かれる井杭は子ども」草深清、「静かに語れ憂き世」馬場あき子、「鞍馬天狗の演目」福田良之助、「マッチの火で見た安宅」杉本亮子、「笑い留め」金藤左衛門上北川忠彦、「井筒の夢」丸岡大二、参考までに坂本欣司「藤戸の杖」の全文を左に記す。

・白幕網の清らな姿の後シテに気品。光源氏と邂逅の思い出を述べ

白い。序之舞はスミで袖被ぎ、静かに退つて半部の下へ入るところ、右ウケル姿が美しい。キリは

「船弁慶」西国へ落ちて行く判官(子方・憲

細い竹の杖である。能の老女、盲人、亡者は、その細い杖に、はかない身をたくす。老女は杖を力に重い足を運ぶ。盲人の杖は触角

杖である。用意も遣えば心持もかわる。真に繊細である。「藤戸」はこの杖が効果をあげる。亡者のつく杖であるが、時にはわが身を切る刃とも変る。振り

杖を捨てるのは各流同じであるが、その捨て方が違っている。観世では合掌した両手の指先

に杖をはさみ、その手をとくと同時に杖は前へ落ちる。巧緻である。金剛は手先の上

向いた判官が互生では義向きに右手の杖を捨て、正面むきなおつて合掌する。もつとも正面向いて捨る人もある。

以上、杖を捨る事と合掌する事

大郎)に同行を願つ静(シテ香寿子)・上意を伝え、それを断念させる舟慶(ワキ和志、シテ、ワキ問答に互いの心情がよく出る。自ら判官に会つて真意を知り、ワキの一存で無いを知り羞恥をみせるシテの風情もまた女流ならこそ繊細。が、込み上げる判官との別れの辛さはへ君に二度逢はんとみ思ふ行末、のシテ。愁嘆場を避けるかに判官は、ロキを介しシテに酒を勧め、ワキは連る頼なさ

④面へつづく

の有機な結びは方々は各流によって違っている。複雑である。しかし各流ともに、細い杖をバタリと舞台へ落とす時の、そのわずかな物音は、私達により「成佛得脱」を感じさせる。真に簡明である。

因に坂本欣司は大正二年(一九一三)三月廿二日生。昭和四四年(一九三九)「謡曲世界」に初投稿、以後、流儀誌、紙(金春、金剛、能楽タイムズなど)に能評、演能番組に解説も多岐にわたり執筆。昭和四八年(一九七三)には大匠芸術祭審査委員、同年「能楽評論」同人、「うたかた会」を創

り古資料・伝承などを残すため古老に話を聞くことに尽力する、と略歴にある。能楽界の広報に寄与すること大、ぬくもりのある健筆の遺稿を収録した能楽書林「昭和五六年八月刊」この「拙」がある。

昭和五四年一月、心筋梗塞で死去、享年六五歳。

「先号の訂正」三頁の二・三段目の写真は重複のため抹消。三・四段目の写真は第14回を第13回に、「船弁慶・遊女之序・波聞之伝」を「耶麻屋十二段之楽」に訂正。

「先号の訂正」三頁の二・三段目の写真は重複のため抹消。三・四段目の写真は第14回を第13回に、「船弁慶・遊女之序・波聞之伝」を「耶麻屋十二段之楽」に訂正。

のいわゆる月ノ窟はへはや籠をとくたくと、の解くに掛け、月が出ぬうち夜陰に乘じ船出を疾く(急ぐ)の表徴が。へ輪は、シラトルと、鳥帽子の紐を左手で引き、脱ぎ落すとシラトルのまゝ、立ち、中入。後場はシテに側隠の情をみせつ、船の用意確認する船頭(アヒ)とワキの問答、ワキと異議を挟む従者(ワキツレ雅人・正彦)の問答、あつて船出の決行。ロキがへ(立止願きつこ)舟子どもとアヒと座のアヒを見込むと、アヒは兼へ走り込み、船を持ち一気に臨崖前へ船を、胸がすく。初め風

が光る。舞上げ、地(猶義・光



「Hot Mind 魂の冒険」 岩野義典

名古屋の宝生流能楽師 鬼頭嘉男が受け継いだもの 東海能楽伝承会が出版

昭和から平成にかけて名古屋の宝生流のために力を尽くした宝生流能楽師・鬼頭嘉男氏の事績、諸活動の概括を纏じた著作「ホットマインド」がこのほど刊行された。

編者は、東海能楽伝承会の会員、長田君子氏、出版は東海能楽伝承会(代表 寛敏一氏)。

表題は「ホットマインド」名古屋の宝生流能楽師 鬼頭嘉男氏が受け継いだもの。

内容はA4判、267ページ。東海能楽伝承会代表・寛敏一氏

は次のように内容を紹介している。

一、本書は第一部と第二部から構成される。全篇にわたり、鬼頭嘉男氏が調査し、記録した自筆資料、編集者が嘉男氏の話聞き書きし作成した記録に基づいている。

第一部は「鬼頭家」と嘉男の祖父父母につながる「織田家」「毛利家」「竹村家」の各家について、略系図と解説を付し、資料を載せた。

第二部は嘉男本人のことを中心にまとめた。わんや書店「宝生」誌上に連載された「幕藩時代と維新後百年の名古屋能楽界(特に宝生流)」、一「宝生」および「寶生流囃子託會會報」誌上で嘉男が参加した社談会等を転載した。嘉男がシテをつとめた能については、昭和六十三年までの番組は東海能楽研

究会発行「近代名古屋の能楽を支えた人々」より転載した。

「鬼頭嘉男略歴」

大正七年七月二十九日生まれ。昭和十一年愛知一中卒業。名古屋商工会議所に入所、昭和十六年幹部候補生として、中国、スマトラに留まり、帰国後は再び商工会議所で、六十三歳で定年するまで勤める、名古屋商工名鑑の編纂に当たる。

昭和二十三年(一九四八)名古屋宝生流研究会に入会。昭和三十三年(一九五八)宝生流囃子会に入会。昭和四十一年(一九六六)能楽協会名古屋支部入会。昭和四十二年(一九六七)能「小曲當我」で初シテ。

平成三年(一九九二)日本能楽会高齢功労者表彰を受ける。平成十三年(二〇〇二)雑誌宝生に「幕藩時代と維新後百年の名古屋能楽界(特に宝生流)(一)」「(八)」を連載。

平成二十年(二〇〇八)「安城宝生会八十年史」刊行。

※鬼頭氏は本年一月二十七日自宅で急逝された。

也)で知盤ノ怨霊(後シテ香舜子)が出る。軍刀を掛け三ノ松から判官を見込み、一旦舞へ退くや今度は長刀を右手に引つ掴み一気に舞台へ走り込むと、意気込み充分にしなやかな動き。舞キもきびしく判官との対決は型的美しさ。ワキとの闘争は二ノ松へ追われ、八舟座舟子に、で軍刀投げ出し、太刀を抜き舞台へ戻るも、

また引く汐に、へゆられ流れ、と合腰、三ノ松で留る拍子。気合の入った、引き締って爽やかな舞台だった。(1時間20分/12月4日、大阪梅仙会・大観能楽堂)

金剛定期能「雪」
左より松野恭憲・高安勝久
(原田七寛氏撮影)

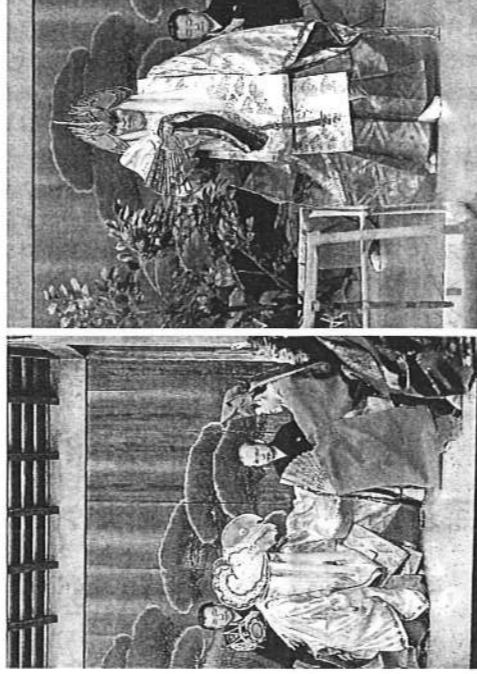


や「雪・雪隠の拍子」へあら

やな、と雪山(作物)で隠い出す雪ノ精(シテ恭憲)、たまく雪のやむのを待つ旅僧(ワキ勝久)に姓氏を問われ、ば、自身何若か分らず、たゞ自然に存在する、と

の心え。その純粋無垢な様子を雪ノ精かと問い返すワキに、シテは、自信の姿も分らない此の迷いを晴らして、と。さては雪ノ精と話せるのは佛法の功力、と自身を得たようなワキ、この功力を信じて成佛を、と。初回(清隆、通成、道一ら)、へ佛の縁を結べかし、でワキへ合掌する(写真)と、雪山を出、短い舞グセのトメにへ滑りかめ給へや御僧と、懇願の心は報謝の序之舞に。小書で雪を踏み心は足拍子に音を立てず、ゆったりと大きく舞上げ、キリは雪

金剛定期能「雪」
松野恭憲
(原田七寛氏撮影)



山へ入り、肩左手に抱えへまた消えくとぞ、と静かに沈んで右膝つき(写真)直ぐ立つと右側から出、残り留めに。白地金色雪輪文様長絹に淺黄大口の姿が神々しい雪ノ精、金剛流の専有曲で小曲ながら詩情豊かな舞台だった。(52分)

金剛定期能「道明寺」
左より金剛永謙・福王和幸
金剛定期能「道明寺」
金剛永謙 (原田七寛氏撮影)

「道明寺」 僧 尊性(ワキ和幸) 善光寺に参籠して靈夢を得ると、供男(ワキツレ正彦、和夫)と河内・土師寺に留まり、帰国後は再び商工会議所で、六十三歳で定年するまで勤める、名古屋商工名鑑の編纂に当たる。

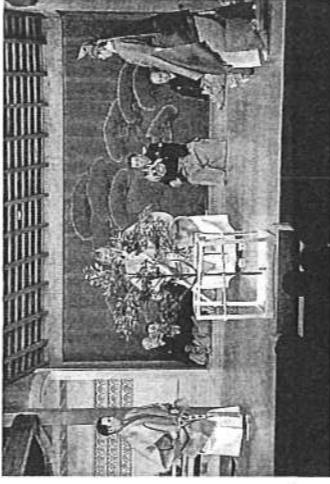
昭和二十三年(一九四八)名古屋宝生流研究会に入会。昭和三十三年(一九五八)宝生流囃子会に入会。昭和四十一年(一九六六)能楽協会名古屋支部入会。昭和四十二年(一九六七)能「小曲當我」で初シテ。

平成三年(一九九二)日本能楽会高齢功労者表彰を受ける。平成十三年(二〇〇二)雑誌宝生に「幕藩時代と維新後百年の名古屋能楽界(特に宝生流)(一)」「(八)」を連載。

平成二十年(二〇〇八)「安城宝生会八十年史」刊行。

※鬼頭氏は本年一月二十七日自宅で急逝された。

金剛定期能「道明寺」
左より豊嶋晃嗣・福王和幸

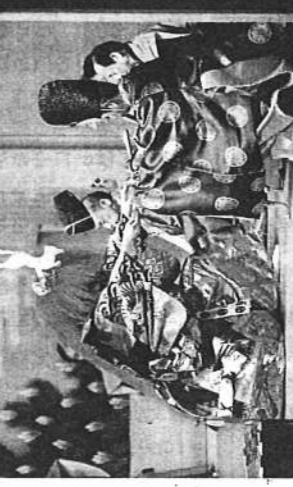


金剛定期能「道明寺」
左より金剛永謙・福王和幸、広谷和夫
(原田七寛氏撮影)

など立シキベリ、めでたやなと三段之舞を面白く舞って退くと後場。

出端(市和、舞一郎・大、光長)で天女(後ツレ幸彦)が出、白木夫ノ神(後シテ永謙)が出、掛合に、笏拍子役を知らずか、と咎めるツレに、老いゆえ免れないシテも衣を空けられす一ノ松に。床几に掛かりへ小忌の袖より、と笏を取ると、ツレはへ笏拍子は面白や、と違拝掛の楽(ガク)を舞い出し、シテが笏を扇に替へ、床几を立ち舞台へ入れ、ツレは舞止めて座置撤へ下居、代つてシテが舞う(写真)。貫禄充分に大様な舞は辺りを押し、舞上げるとキリはへ膝を屈して、立木へ合掌、立つて舞い続け、へ枕は袂、と左袖巻上右膝つき、立つと立木へ寄つて、へ降るや一味の雨風を、と扇を左手にへ枝々より木の実を振り落し、と扇に実を受ける理にキの耐みに一曲仕れと言われたこ

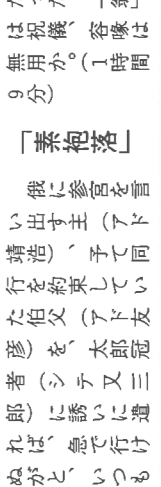
名古屋能楽堂正月特別公演「翁」
(左より)久田勘鶴・久田勘吉郎・奥津健太郎



キへ行き木の実を渡すと(写真)、へ数は百八、と両袖巻上ゲルと地のうちに常座へ、小廻り指込開キ、シテ柱みて強々と留メ拍子踏んだ。(1時間44分、12月18日、金剛定期能、金剛能楽堂)

恒例となつた正月の「翁」、注連を張つた清々しい舞台に練氣が湧き、礼装に威儀を正し能役者一回、齊々と入場して来る姿には、いつも敬かな気分になる。千歳(勘吉郎)、きびしく舞う姿は若さの清新だが、動いていない時は少々不安定。ワキ方、笛方をみても分るが、全ての役者は坐ることを徹底した稽古があつて然るべき。翁(勘逸)は押し出しの立派堂々と、悠揚迫らざるところ、如何にも待福を齎らすかである。三番叟(高義)は神妙になり過ぎた印象。いつもの技のキレの良さが鳥飛に躍動感かんじられず、鈴之伎では手首の返しに少し弱いように

正月特別公演「小鍛冶」
(左より)武田太志・高安勝久
(杉浦賢次氏撮影)

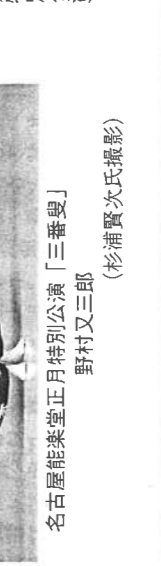


御剣を打つよう(宗近(ワキ勝久)に勅諭を齎す勅使(ワキツレ正樹)、ワキは相槌不在を理由に断わられるも、それもならず、苦しい時の神頼みとはかり氏神稲荷明神に祈願すれば神佑天助、明神の化身・靈狐(シテ太志)が相槌を務める奇蹟、剣は真鍮に打ち上がりワキツレの手に渡る(写真)。若さの気合の入った、足腰の動い、颯爽として小気味のよい舞台だった。(57分、平成24年1月3日、名古屋能楽堂正月特別公演)

のようにと酒を勧め、小袖を饒に、代參に着て戻れ、と伯父(友彦)。吾い主を対照に、よばれた酒の酔もあつて齒の痒くような追従の饒舌、又三郎、白重をみせる。黒地に注連繩を白で抜いた肩衣の妙、如何にも曲趣と正月に相応しい。(25分)

「素袍落」 俄に参宮を言出す主(アド請治)、予て同行を約束していた伯父(アド友彦)を、太郎冠者(シテ又三郎)に誘いに連れられ、急で行けぬかと、いつも

名古屋能楽堂正月特別公演「三番叟」
野村又三郎
(杉浦賢次氏撮影)



NHK放送予定(平成24年3月~4月)

⑧NHK-FMラジオ才能鑑賞(日曜日7時20分~8時15分)
 3月25日 素謡「捨垣」(宝生流) 近藤乾之助ほか
 4月1日 「歌占」(観世流) 木月 宇行ほか
 (4月8日より放送時間午前6時~6時50分に変更)
 4月8日 素謡「安宅」(宝生流) 今井 泰男ほか
 4月15日 「海人」(喜多流) 出雲 康雄ほか
 4月22日 「求塚」(観世流) 梅若万三郎
 (23年7月3日放送)
 4月29日 狂言「木六駄」(大藏流) 大藏源太郎ほか

演能カレンダー

名古屋能楽堂

[3月]	名古屋宝生会 式能 (有料)
[4月]	名古屋観世会 定例公演能(番組①面) (有料)
8日(日)	梅瀬会 名古屋能楽公演(番組②面) (有料)
15日(日)	和泉流 狂言づくし(番組②面) (有料)
21日(土)	幸 謡 会(番組③面) (無料)
22日(日)	幸 謡 会(番組③面) (無料)

能楽の友

発行能楽の友社
 名古屋千種区千種2丁目18-18
 (郵便番号 464-0858)
 電話 (052) 731-7984
 FAX (052) 733-2837
 振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円
 郵送の場合 1年 1800円
 一

能「藤戸」狂言「昆布売」

豊田市能楽堂4月能(30日)

豊田市能楽堂主催の四月能は、「平家物語」を原典とした源平合戦の後の悲劇をえがく執念物「藤戸」を金剛流能(シテ今井清隆)で上演、狂言は和泉流・野村万藏師の「昆布売」で四月三十日(月・祝)開催。午後二時開演。番組は次のとおり。

解説 羽田 祝(武蔵野大学客員教授)
 狂言「昆布売」シテ大名・野村

万藏、アト昆布売・野村辰丞、後見・野村太郎。

能「藤戸」シテ今井清隆、ワキ高安勝久、ワキツル相元正樹、アト・小笠原屋。

笛・竹市学、小鼓・曹和尚清、大鼓・河村大、太鼓・前川光長、後見・廣田幸稔、今井克紀、宇高竜成 地謡・松野恭憲、宇高道成、金剛龍護、種田道一、上田英和、若田一彦、徳田昌幸、豊田正勝。

テーマ能・狂言と文学 名古屋能楽堂 8月に15周年記念能

名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)、能楽協会名古屋支部主催の平成24年度「名古屋能楽堂定例公演」は、恒例のように、初回六月二日公演から明春三月公演まで七回開催される。

とくに本年九月には〈名古屋能楽堂15周年記念特別公演〉として二部制で、能四番、狂言二番が上演される。

本年度のテーマは「能・狂言と文学」―時代を越える「ことば」と「こころ」を探げる。

室町時代前期に大成した能・狂言は、それ以前に成立した古典文学から題材を得て作られた。そして能・狂言の作品もまた、後代の文学に影響を及ぼしている。平成24年の定例公演では、近現代の小説や戯曲の題材となった能・狂言を主に取り上げ、時代を越えて受け

狂言やるまい会 “生物多様性・狂言之巻” 5月26日 名古屋能楽堂

狂言・やるまい会(十四世野村又三郎師主宰)は、第五十二回名古屋公演を来たる五月二十六日(土)名古屋能楽堂で開催する。午後一時三十分開演。

公演は「生物多様性・狂言之巻」の副題で「牛馬」「蛸」「隠狸」「木山伏」をはじめ、舞囃子「胡蝶」狂言語では「蛸之語」「亀之語」「龍之語」「虎之語」など、野村万作、善竹忠一郎師らが来演する。

入場料前売 花 六五〇〇円、鳥 五〇〇〇円、風 四〇〇〇円、月 二五〇〇円(当日千円増)

申込先/野村事務所 電話090-83233-3210 (月)金/10:00~18:00 ホームページ <http://kyogen.net/>

入場料/(全席指定)正面席・六〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円。

チケット取扱い/豊田市コンサートホール・能楽堂事務室(電話05655-356200)/インターネット予約 <http://www.city.nagoya.jp/>、チケットぴあ(0570-029999、Pコード417901)

主催 公益財団法人豊田市文化振興財団、豊田市、豊田市教育委員会。

京都 金剛流、廣田鑑賞会で、四月一日(日)「第18回廣田鑑賞会能」を金剛能楽堂で開催する。午後一時三十分始。能組は、狂言「仏師」茂山千三郎、細谷正美、ごあんない 関西大学文学部教授・関屋俊彦

能「船弁慶」シテ廣田幸稔、子方・西村鑿、ワキ高安勝久、ワキツル小林繁、團充、間・茂山千五郎、笛・森田保美、小鼓・林吉兵衛、大鼓・谷口正義、太鼓・前川光長 後見・金剛龍護、廣田泰三、廣田泰能

地謡・松野恭憲、今井清隆、種

第18回 廣田鑑賞会能
四月一日 金剛能楽堂

田邊一、金剛龍護、豊嶋昂嗣、豊嶋幸洋、今井克紀、宇高竜成

チケット/一般八〇〇〇円、(正面・脇正面席)一般五〇〇〇円(中正面席)

チケット申込み/廣田鑑賞会(電話075-722-9123、FAXにても可)、ロイヤルチケット(エコー54217)、金剛能楽堂075-441-7222、京都新聞社文化センター、絵書店など。

“櫻と鐘の時”

四月七日 名古屋能楽堂

伝統の春を彩る「桜と鐘のひととき」をテーマに、能楽・藤田六郎兵衛、狂言・佐藤融、井上靖造、歌舞伎・市川櫻春、荻江節、荻江露社中のコラボレーションによる日本の形と声、音色を鑑賞する催しが四月七日(土)名古屋能楽堂で行われる。午後二時半開演。

演目は、邦楽・「荻江節八鳥」、狂言「鐘の音」、道成寺の調音による「鐘の音」、能楽・笛方の藤田六郎兵衛師が演奏する。

入場券四五〇〇円。申込みは電話090-56639-3900、中日サービスセンター(電話052-2663-7282) 栄ブレイカ(電話052-953-0777)、愛知芸術文化センタープレイガイド(電話052-972-0430) など。

田邊一、金剛龍護、豊嶋昂嗣、豊嶋幸洋、今井克紀、宇高竜成

チケット/一般八〇〇〇円、(正面・脇正面席)一般五〇〇〇円(中正面席)

チケット申込み/廣田鑑賞会(電話075-722-9123、FAXにても可)、ロイヤルチケット(エコー54217)、金剛能楽堂075-441-7222、京都新聞社文化センター、絵書店など。

●1月3日(土)正月特別公演
午後1時始
「翁」(観世流)シテ清沢一政
三番叟・佐藤友彦
能「葛城」(観世流)久田三津子、狂言「酢薑」(和泉流)松田高義

●3月2日(土)午後二時始
能「熊野」藤行三段の舞(宝生流)衣裳正真、狂言「茸」(和泉流)今枝郁雄

●7月1日(日)市民能楽セミナー 午後2時始
能「俊寛」(観世流)梅田邦久、狂言「薩摩守」(和泉流)鹿島俊裕、解説「俊寛」の見どころ・聞きどころ

●9月2日(日)名古屋能楽堂15周年記念特別公演
「第一部」午前10時始
能「嵐山・白頭猿」(観世流)久田勘鷹、能「狸々」(金剛流)竹内幸司
「第二部」午後2時始
能「草子洗小町」(観世流)祖父江修一、祝言能「岩船」(宝生

演能案内

名古屋観世会定例公演能

四月八日(日)十二時三十分開演

名古屋能楽堂

能班	梅若 玄祥 飯島 雅介 幸 想元 正樹 野村又三郎	河村総一郎 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
女	梅若 玄祥 飯島 雅介 幸 想元 正樹 野村又三郎	河村総一郎 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛
後見	祖父江修一 武田邦弘	地謡 八神孝充 吉沢 孝 武田 大志
狂言吹	野村又三郎	何某 野口 隆行 おぎの女 松田 高義 後見 伴野 俊彦
仕舞	小籠太 治 小籠太 若キリ	前野 郁子 今沢 美和 近藤 幸江 久田三津子
能熊	清沢 一政 杉江 元 野口 隆行	河村真之介 船戸昭弘 昭弘 竹市 洋
後見	八神 孝充 梅田 邦久	地謡 吉沢 孝 須田 龍 高橋 謙一
		吉沢 孝 池 武田 大志 前 古橋 正邦 祖父江 修一

(午後四時半頃終了予定)

主催 名古屋観世会

事務所 名古屋市名東区一社3-162
電話 052-734-6192

〔育料〕
 ※年間自由席(五枚綴り) 一〇〇〇〇円
 当日券(自由席一回綴り) 六〇〇〇円
 学生券 二〇〇〇円

平成24年度 名古屋観世会 定例公演

●六月十日(日)12時半始

頼政 久田勘鷹
船弁慶 片山九郎右衛門
前後之巻

●九月十七日(日)12時半始

小管 梅田邦久
海士 観世義之丞
懐中之舞

●十一月十二日(日)12時半始

井筒 観世尊之
天鼓 武田邦弘
弄鼓

八 「中日五流能」 ⑦

— 承前 —

昭和五〇年、この年は「中日五流能」が記念すべき第二〇回を迎えるにあたり、主権の中日新聞社は下欄の案内チラシを関係者に配布する。

因に当該「観世」誌一月号の座談会「中日五流能二十回を願みて」の出席者は順不同で「観世」檀常太郎、「空生」佐藤芳彦、「金剛」前西芳雄、中日五流能プロデューサー西田三好、中日新聞社代表取締役・大島一秀、中日新聞社事業局長・深見 勝。とき昭

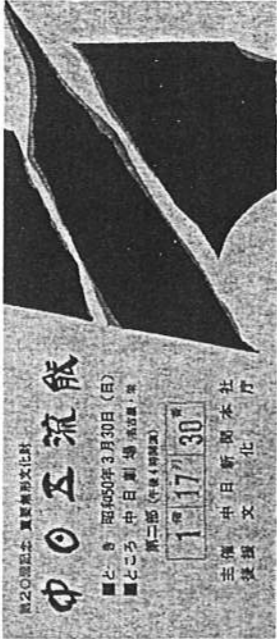
和四九年一〇月一七日（金）と、この名古屋市中区三の丸二丁目・中日新聞本社役員会議室。話題は概ね五項目、主なところを次に転載する。

初期の中日五流能
深見 本日はお忙しいところを、わざわざご滞方よりお集り下さいましてありがとうございます。来年は中日五流能を始めましてから丁度二〇回になりますので、その記念公演を催すことになっております。それでこの機会に今後の中日五流能はどうあるべきか、および今迄を願みたお話などをお願いしたいと思います。

先ず最初にこの中日五流能の中

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を巡る ④

竹尾 邦太郎



第20回記念入場券

心となって推進をして頂きました中日新聞社の大島代表取締役のご挨拶をお願い致します。

大島 もう二〇回になるかと思ふと感慨無量であります。最初はこのように続けてやるという考えではなく、当時、故田鍋太郎さんから名古屋能楽堂が戦災で焼

能の魅力を探るシリーズ

大槻能楽堂自主公演能

大阪 大槻能楽堂自主公演能「能の魅力を探るシリーズ」は、2012年度演能として「日本探訪」日本の歩んだ道・日本人の想い」をテーマに四月二十八日（土）を初回として、明年三月二十三日（土）まで十二回演能を企画、さらにナイトシアターとして、七月、九月、十一月に上演される。

四月、五月、六月のシリーズ演能は次のとおり。

▽四月二十八日（土）午後二時始。

お話し「日本は神国か、神はいづこより」大森 亮尚氏。

能「高砂」シテ上野雄三ツレ寺沢幸祐、ワキ福王知登、アイ善竹忠実、笛・竹市学、小鼓・荒木建作、大鼓・山本哲也、太鼓・中

田弘美、後見・大槻文蔵、赤松慎英、地謡・齊藤信隆ほか

▽五月二十六日（土）午後二時始。

お話し「伊勢と三輪、そして出雲」梅原猛氏。

能「三輪」シテ浅見武州、ワキ・福王茂十郎、アイ丸石やすし、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・林吉兵衛、大鼓・山本孝、太鼓・三島元太郎、後見・赤松植英、浅見滋一、地頭・大槻文蔵。

▽六月二十三日（土）午後二時始。

お話し「仏法伝来、仏教とは」興田聖徳氏。

能「詠法師」シテ浅井文義ツレ奇山桂三、ワキ・福王茂十郎、アイ茂山七五三、茂山逸平、笛・赤井啓三、小鼓・曾和正博、大鼓

若「山口正寿、後見・赤松植英、生一知哉、地頭・大槻文蔵。

能の魅力を探るシリーズ12回通し券：五〇〇〇円、自由席前売四二〇〇円（当日）四七〇〇円、学生席前売二六〇〇円（当日）三〇〇〇円

入場券発売所「大槻能楽堂」電話06・6711・8055、ロートンチケット・Lコト54617、電子チケットぴあ・Pコート419・143

能の魅力を探るシリーズ

7月、25年3月

七月（第四回）より明春三月（第十二回）の演目は次のとおり。

◎七月二十一日（土）能「西行」歌「片山幽雪、お話し・中西進

◎八月十八日（土）能「鶴羽」赤松植英、お話し・伊沢元彦

◎九月二十九日（土）能「社

山本能 だにまち能

4月7日 能「百萬」「通小町」

大阪 山本能楽堂定期能「4月のだにまち能」は4月7日（土）山本能楽堂で開催される。午後1時開演

上演は、能「百萬・法楽之舞」シテ山本章弘、子方吉井紹智、ワキ福王知登

狂言「権禰」シテ小笠原匡、アト泉傳也、小アト山本章

仕舞「小唄」波多野實、「藤山本博通」「歌占」林本大能「通小町」シテ藤本哲郎、ツレ山下麻乃、ワキ森本幸治

入場券／一般五五〇〇円、学生券三〇〇〇円

お問合せ／山本能楽堂（電話06・6943・9454、FAX06・6942・5744）

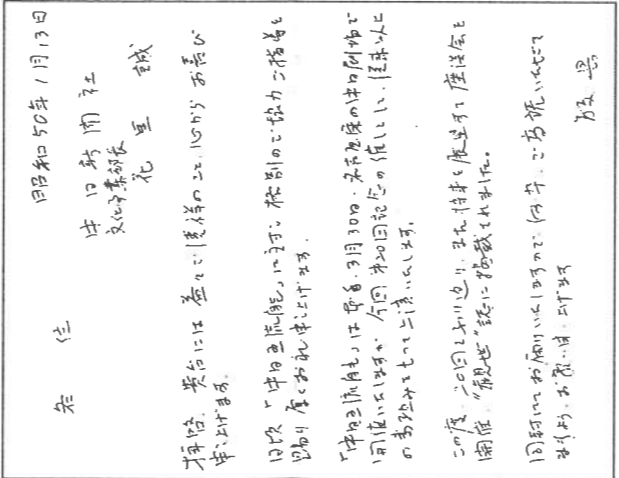
梅田邦久師 傘寿記念大会

東京で邦謡会

観世流シテ方、梅田邦久師傘寿記念、邦謡会発表会が四月二十日（月・休）東京国立能楽堂で開催される。

演目は素謡「神歌」、能「清経」替之型（シテ田中健昭、ツレ梅田嘉志）「百萬」法楽之舞（シテ声谷民枝、子方・分林道隆）素謡「求塚」「砦」「極」「木賊」舞雉子7番ほか仕舞、独吟など。

番外仕舞「美座」（片山幽雪）「陽田川」（観世鍊之丞）「船弁慶」（片山九郎右衛門）



第20回記念の案内チラシ

て以来そのままになって居り、再建の資金も集まらないので、資金助成のため、能をやつてもらいたいと話がありまして、名古屋の御園座で能をやるということになったのであります。利益があがれば全部差上げることにして、赤字であつても十万円を差上げるといふ旨で始めましたが、結果は大きな赤字でありました。しかし約束通り十万円を能楽堂再建資金として差上げました。その後それとは別に能を引続き行う計画をわが社

に進めましたが、適当な会場がないため所期の成果もあがらず、どうなるかと思つていましたが、丁度その頃、愛知文化講堂が新設され、そこで行うようになってから軌道にのつてきました。

西田 第一回は只今お話しのとおり、能楽堂再建資金助成のための能を行つたのですが、現在のような中日五流能をそれから続けるようなことは誰も考えてはなかつたのであります。このときは田鍋さんが出演者の交渉や番組の編成をや

られ、私はパンフレットの編纂、および新聞紙面の宣伝記事などを担当して、いわばお手伝いの形でありました。この能が終りましてから三年後に五流能を総じてやろうということに中日新聞社の方針が決りまして、こんとは私が一切のプロデューサーをお引き受けしまして、名称も中日五流能として中日新聞社の主催で行うことになったのであります。本来ならばこの二回目が中日五流能の初回でありますから、同じ中日新聞社主催の能でありますから、最初の能を第一回としたのであります。

会場は第一回のように御園座を使うことは困難でありましたので、当時適当な会場もありませんし、二回、三回は新設されました熱田神宮能楽殿を使い、第四回からはその頃完成しました、県立の愛知文化講堂を用うることになりました。ここは千五百人ほどの観客を収容することができるのでございます。

仮設舞台のこと
西田 また当時、能界各方面からの運動で、この文化講堂に組立
③面へつづく

梅若吉之丞 一周忌 名古屋能楽公演

四月十五日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

能通小町

立花香寿子、小松勝彦、高安勝久、河村総一郎、後藤孝幸、栗取希世

能狂言 三千石

主人 佐藤友彦、大島寛者、佐藤融、後見 今枝郁雄

能仕舞 願 昭君

圓田 晃一、梅若 修一、地謡 梅若 良祐、梅若 善高、梅若 基徳、梅若 猶義、高安勝久、河村寛之介、後藤孝幸、大野洋輝

能舞 融

舞 梅若 猶義、高安勝久、河村寛之介、後藤孝幸、大野洋輝

能圓

井上 靖浩

能後見

梅若 善高、梅若 基徳、梅若 善高、梅若 基徳、小川 晴子、梅若 雅一、立花香寿子、梅若 良祐、圓田 晃一、梅若 普久

（終了午後四時四十分頃予定）

主権 名古屋梅猶会

入場料五〇〇〇円（全自由席）
販売・出演能楽師・公演会場
お問合せ 名古屋能楽会定期能連絡所、小松勝彦方
〒511-0851 桑名市大字西別所一〇六一―五
（〇五九四一―二三―四五六―一）

和泉流狂言づくし

長母寺の開祖無住国師 七百年忌によせて

四月二十一日（土）午後二時始
名古屋能楽堂

能狂言 磁石

著者 井上靖浩、田舎人、野村文三郎、人買い、佐藤融、後見 今枝郁雄

能狂言 附子

大島寛者、野村万作、主 高野和彦、次郎寛者 深田博治、後見 月崎晴夫
（番組③面へつづく）

②面よりつづき

能舞台の建設を具へ運動しましたが、それが実現しまして、ようやく中日五流能の第四公演に間に合うことになったのであります。ところがこれは驚くほどの立派な舞台ができてまして、その組立に十五時間、分解に七時間を要するところが判り、能を一回公演するのに、組立、分解を含めまして前後三日間を要することがわかりました。また組立、分解費用も大変なものであります。当時、県の当事者が私共に設計上の相談がなかったものであります。この会場は段々と利用方面も多くなりましたので、能で三日間を独占することが問題となりまして、この立派な組立舞台もその後は組立、分解時間を少なくするために部分的に簡略にし、屋根を取り外したり、柱も取つたりして簡素な敷舞台に変わっていました。それで幸い昭和四一年中日新聞社の中日劇場が完成されましたので、同年の第十一回中日五流能から、その方へ移つたのであります。いまは文化講堂で他の会で能が行われることがありません。

中日劇場の能舞台セットは私の考案によります鏡板、切戸口、後勾欄、橋掛りなども備えまして、総てのバックを黒にしてその中に白木造りの能舞台が浮いてみえるようになっております。平巻は分解してスツクの袋に入れて保管出来るものであります。その後、東京五流能も始めましたが、全く同じ型式のものを東京でも一組作つて東京新聞社で保管して居ります。組立は一時間半、分解は二十分位あれば充分であります。劇場能の場合は能舞台設置時間が短かくなければならないことは最も肝要なことであります。

大島 揚幕も黒で作つたそうですね。

西田 バックが黒の場合は五色の幕も変な具合ですから、規定通りの寸法と形式で揚幕も黒布で作り、演者が橋掛りを歩く場合、まんなかを自当に挙げるように幕の中央に茶色のテープを張りつけてあります。

佐藤 面の孔から見えますか。

西田 光線が当たっているのよく見えます。

新作能のこと
深見 新作能もすい分とりあげていますね。

西田 この五流能とは別個に、能様式による「夕鶴」「東は東」を昭和三〇年八月に名古屋の御園座で昼夜二回公演しましたところ、非常に盛況でありました。この公演の影響で当時いわゆる狂言ブームや、新作能ブームが台頭してきました。その傾向に従つて中日五流能でも新作能や新作狂言を組入れることになりました。第四回より第十回までの番組がそうなるて居ります。

喜多美さんの「鶴」や「軍衣女人」を上演したり、金春の「奥の細道」、金剛の「泰山府君」(これは復曲、親世の「世阿彌」など、次々と新作を上演してきました。狂言では「雪まろげ」「とりかえはや」「へんじやく」「悪女」「狐川」など、特に私共で作者に依頼して茂山七五三、千之丞両氏によつて新作したものであります。舞姫子「塵埃之雨」「智恵子抄」なども上演いたしました。

榎 第五回から第七回までが新作能、新作狂言華やかな頃ですね。

西田 その頃「雪まろげ」「東は東」に万代喜子さんの出演があつて、能楽協会の問題になり、七五三、千之丞は協会を脱退してでも、自分達の道を進んでゆくといつて颯がしかつたですね。それでこの万代出演で能楽協会が私共へ目を光らせていました。

榎 協会から女優と共演することをにらまれていましたね。

西田 その後、新作狂言の「とりかえはや」にも万代さんを使う計画をしたら、こんどは協会から喜之さんを通じて、この狂言、とりかえはやと話がありました。それでまずおだやかに考え、万代さんを見込んで若い茂山喜吾さん(七五三のご子息)に代つて済んだこともありまして。

榎 今だったらこんなことは問題にならないでしょう。

西田 世阿彌生誕六百周年記念として片山博通氏が作曲された一世「阿彌」は名作でした。中日五流能のために制作するのだといつ

て、努力していられたのですが、公演十日前に突然、作者でありシテであつた片山さんが亡くなられたのは、全く困りました。しかし子息の博太郎さんが代勤して頂いたので無事能は終りました。この曲も昨年東京で元昭さんが再上演されましたが、同じ脚本ですが、演出の意図がすっかり変わつて、演じて一層面白くなったと思ひました。このように同じ脚本でありながら演出がすっかり変わったのですから、新作も大いに研究を重ねてよいものにしてゆきたいですね。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

◆初春の舞台から◆

「下田文庫 設立記念・東海能楽伝承会催能」「第一四回万作を観る会」 「宝生会定式能」と「青陽会定式能」

竹尾邦太郎

舞姫子「胡蝶」松田憲二 当地久しぶりの舞台。九十歳、淡々として静かな舞ぶりは枯淡の趣。「莊子」の胡蝶の夢の境地であろうか。今回の舞台は初世橋岡久太郎主宰の淡交会時代から同門であつた下田雄三(二九一八—二〇〇九)没後、雄三の師父・益三(一八八七—一九三二)との二代に亘る貴重な能楽関係の蔵書がこの度、東海能楽伝承会・主宰の篤範一に託されて「下田文庫」の設立が成り、その記念の一環として

の催能の一。松田憲二の他に同門の耆老としては藤井千鶴子の独吟「松風」などもあつた。

因に下田雄三の社中は名古屋和歌会・一章石会・岐阜花風会・高山・下呂・萩原各雄風会・傑文之屋に及び、昭和55年10月5日、下田雄三は熱田神宮能楽殿でこれら社中・東海地区連合会と先考下田益三50回忌・先姓下田トサ一周忌追善講会を催した。当日の番組パンフレットはB5判12頁、灰色

西田 鏡之丞さんも、もう作り舞台では危いからといって、お舞いになりません。ほんとうに惜しいことですね。近藤さんには「山姥・雪月花」を舞つて頂きましたが平生独特の舞が印象に残つて居ります。金春栄治郎さんの中日五流能や東京五流能へ出演されたのも大きな足跡です。殊に「京都婆小町」は金春最高の老女物だけに話題となりました。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

榎 「道成寺」はどうですか。

西田 サンケイで賑々やつて居りますが、私の方では元昭さんもやる気になつて居られませんでした。

段「桜間金太郎、能「班女、笹之伝」親世元正・宝生弥一、野口教弘・森常好、野村又三郎、藤田大五郎・幸直佳・安福春雄・親世元昭(地頭)片山博太郎(後見)、仕舞五番「頼政」親世元昭「野守」関根祥六「藤戸」藤井久雄「土蜘蛛」片山博太郎、片山謙次郎、能「望月・古式」金春信高、本田光洋・金春總高(花笠)江崎金治郎・茂山千之丞、森田光春・大倉長十郎、佐伯実・金春惣右衛門・金春欣三(地頭)桜間道雄(後見)。

午後四時開演・第二部は能「巻絹・イロエ」平生英雄・本間英孝・宝生弥一、茂山あきら、藤田六郎兵衛・大倉長十郎、渡部晴義・金春惣右衛門、野口教久(地頭)辰巳孝(後見)、狂言「纏綿」茂山千作、茂山千之丞(主)茂山あきら(何某)、一調一管「芭蕉」曾和博朗、杉市太郎、金剛殿、仕舞五番「通小町」野口教久「天鼓」佐野正治「笹之段」今井變三郎「笹澄」広田泰三「鳥遣」辰巳孝、能「草子洗小町」替巻東・彩色「梅若盛弘(鏡垣)梅若修一(官女)梅若善高(忠慶)梅若基直(官女)梅若盛弘(王)松本謙三

表紙に白抜きに梅大瓜基本一砵「多」と存じますが、何卒一同好と知友お誘い合せの上ご来観賜りますよう、ひとえにお願い申し上げます。

「冠」各役はシテ下雄三・ツシ藤井千鶴子・ワキ西村欽也・アト井上松次郎・笛三三男・小鼓福井啓次郎・大鼓河村総一郎・地謡橋岡久共、谷本正鉦・塚本秀雄・中川雅章ら・後見奥善助・松田憲二。この度の下田文庫設立記念の会に来賓の松田・藤井両氏の感慨如何はかりであつたらうか。それにしても、能の裾野の拡大に累年尽力された下田雄三も「道成寺」に縁無く、日本能楽会会員の認定に洩れたのは、よそながらも残念である。しかし残された足跡、大いに顕彰されてよかろう。

当日は橋岡久共先生をはじめ、諸先生のご出演を得、砵を披かされていただくことになりました。大いに念願致しております。

「田植」能「加茂」の替問「御田」が替を本狂言に移し「田植」。

「田植」能「加茂」の替問「御田」が替を本狂言に移し「田植」。

「田植」能「加茂」の替問「御田」が替を本狂言に移し「田植」。

・茂山千作・森田光春・橋沢寿・安福春雄・藤井久雄(地頭)大西信久(後見)、仕舞二番「鶴」山本勝一「那那・舞跡」大西信久、能「縁鼓・替之型」豊嶋弥左衛門・豊嶋三春・江崎金治郎・茂山千之丞、今井變三郎(地頭)金剛殿(後見)。

パンフレットの内容は第二〇回を記念して以下各氏による祝詞・文化庁長官安達健二・愛知県知事 中谷義明・名古屋市長本山政雄・シテ五流宗家、「番組」「演目」解説「西田三好、「能の作者考」おもて あきら、「能面解説」後藤 潤、「葉書解説」山辺知行、「作り物解説」浅井泰太郎、「能のふるさと」青木 実。上演曲目についての小文は、「琵琶湖ジャンソン」今井欣三郎、「鐘の音に終る」古川 久、「扇ものがたり」班女」沼澤 隆、「風俗史的にも面白い望月」杉本寿子、「纏ないの纏」坂本欣司、「歌合知恵合」草子洗小町」香西 精、「鏡」鼓」中村保雄、「前回の舞台を繰」今駒清則(攝影)、他に「中日五流能20回の歩み(曲目とシテ及び三夜)」、おもな出演者紹介、賛助企業広告、など。

以下次号

以下次号

以下次号

以下次号

以下次号

以下次号

以下次号

以下次号

以下次号

以下次号

(番組②面よりつづき)

狂言 悪太郎 栗太郎 野村 喜齋 後父 石田 幸雄 野村 万作 後見 岡 聡史

主催 名古屋市文化振興事業団
「東文化小劇場」
名古屋能楽堂
共催 朝日新聞 社

「チケット料金」
S 席六〇〇〇円、A 席五〇〇〇円
B 席四〇〇〇円、学生席二〇〇〇円

幸謡会大会

四月二十二日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

能組
番外仕舞 賀 茂 村井 邦子
仕舞 鞍馬天狗 三浦美田記
舞姫子 高 砂 山下須美子 船戸真之介 加藤 洋輝
花 筐 近藤 幸子 船戸 昭弘 大野 誠
仕舞 京都婆小町 石川 晴子

素謡 杜 若 山下須美子 小林 俊雄
能 羽 衣 鈴木壽太郎 飯島 雅介 船戸真之介 加藤 洋輝
彩色之伝 船戸 昭弘 大野 誠

仕舞 教 融 盛ヶケ 小林 俊雄
高取 良昌
舞姫子 屋 島 三浦美田記 船戸真之介 大野 誠
清 経 芝崎 恭子 船戸 昭弘 大野 誠

素謡 松 風 近藤 幸子 石川 晴子 高取 良昌
番外仕舞 三 郎 輪 近藤 幸江
野アト 大槻 文藏

附 祝 言
主催 幸 謡 会
近 謙 寺 江
岡崎市鶴田本町一―三
TEL (〇五六四) 二一―三二九九

「御米場歓迎」

福井県池田町提携 新作能面展48点展示

名古屋能楽堂で開催

名古屋能楽堂では、福井県池田町の能面美術館・同町伝統文化保存活用実行委員会と提携して「新作能面展」を三月六日より三月二十二日（水）まで特別企画展として開催。この能面公展は、既報のように、福井県池田町で行われた「第10回新作能面公展」（2月3日）

27日、池田町能面美術館）の応募作品四百六十九点のうち、優秀作品四十八点を展示するもの。前館提携の一環として、名古屋からは観世流シテ方・久田勘助師と和泉流狂言方・佐藤友彦師が公展展の審査員に加わっている。審査結果は次のとおり。
【大賞】福井県知事賞 森田美

【魚説法】 堂を建立した施主（アト和意）が供養に住持を呼び法談も頼みたいが相憎く住持は「田舎へ参られて留守でござ

ふところは御田植祭の華やき。シテと立衆の掛合テホよく、へいかに早乙女、と持ちかけるシテに、立衆の感え小気味よく、意地悪心に「懸想文が欲しいか、と煽るシテに、異口同音あ、言われ、はこう言い、へ懸ぶ人は持ちたり、と一蹴するところなど万作一門の結束力の強さ、アンサンプル上々。ただ、シテの伸びのある滑らかな声が以前より感じられないのは声の酷使、案じられる。
【アト】

神主（シテ万作）が早乙女（立衆 萬齋・博治・悠樹・和意・晴夫）を呼び出すと、下り端（学・嘉津幸・眞之介・洋輝）の囁子に乗って綺麗な縫綴着流シの早乙女達が打ち連れて賑やかに謡いながら登場、舞台一巡して橋懸に居並ぶところは御田植祭の華やき。シテと立衆の掛合テホよく、へいかに早乙女、と持ちかけるシテに、立衆の感え小気味よく、意地悪心に「懸想文が欲しいか、と煽るシテに、異口同音あ、言われ、はこう言い、へ懸ぶ人は持ちたり、と一蹴するところなど万作一門の結束力の強さ、アンサンプル上々。ただ、シテの伸びのある滑らかな声が以前より感じられないのは声の酷使、案じられる。
【アト】

③画よりつづき） 電（稲妻）は稲の結実期に多く発生、古来、これに因り稲が実るとの口碑があり、「加茂」後シテ別雷神はこれを司る神。されば、へ光稲妻の稲妻の奮にもへ役る程だに、へ時も到れば五穀成就も、と。前シテ里女はへいざいざ水を汲まうよ、へ水掬ふの神の心汲まうよ、と。「水掛綱」を引合いに出すまでもなく稲の生育に大事は前の水、と後の稲妻。加茂明神の神田に早苗を植えるという、前後を結ぶ疑問「御田」の存在理由も此処に。

【罰罪人】 祇園会に曳く山車の当番に当たっている主（アト万作）、山車の趣向について相談のため太郎冠者（シテ萬齋）に講中（立衆博治・悠樹・一之・連・修一・聡史）の面々を集めさせるが「とかく物事に差出る」太郎冠者が危儀の種。きつく釘を刺されても、事まつりとなれば忘我の境の太郎冠者、主を始め講中からの案が同意されそうになると文句をつ、その都度、主に叱られ、「あちへ失せう」と叩かれても頭は山車のことで一杯。太郎冠者の果見も、の声に一旦は抗うまも多数決の論理、講中の前に呼ばれて太郎冠者、「何を申しても」と主を指シ、とてもとても聞いては貰

れないといった様子で首を横に振り、逃げ出すのを呼び返され、「苦しくない、遺憾なしに」と言われ、ば、固よりうすくしていた太郎冠者、自案を開陳。ちらりと主に目を遣り、主の胸中見透かしたような太郎冠者の小憎らしさに、講中も講中だの思いの佛頂面の主、両人の人物描写が見事。
結局、罪人が鬼に責められるという太郎冠者案が採られ、ば、不服があれば従わざるを得ない主に、そうと決まれば何かと口を出す太郎冠者、両人の間も険悪になるとういもの。更に、役を決める段になれば亦一閃着、嫌なクシを引きそうな予感も案の定で罪人役は主、為て違つたりとはかりに鬼は太郎冠者、大事な会が太郎冠者に引つ掻き回され、仕切れなななつてしまった主の憤懣、悔恨、悲哀、の表情に滲む芸功、万作円熟の境をみせる。（43分・1月14日・第14回 万作を観る会）

【小袖曾我】 何事もなく母（ツレ愛）と従者（太刀持ツレ陽三）が座着くと次第（学・嘉津幸・虹）で十郎（シテ飛龍）五郎（ツレ大二郎）兄弟が郎党（立衆 正直・莊太郎）と出、舞台上立ち並び仇敵・工藤祐経を討つべき決意の程を意気盛んに勇ましく同吟するところが痛快。母のしもを喰むとい勘当中の五郎の許しを得に訪ねるところで立衆は切戸へ覗き、シテは母への案内を取り次ぐ従者と問答に、他流は従者の役を兄弟の乳母だった春日乃局

佐（大阪府）・作品・小徳見 第十回記念特別大賞 青木宏（東京都） 作品・黒式尉 池田町長賞 水谷靖（東京都） 作品・大童子 福井県教育委員会賞 宮屋三男（福岡県） 作品・童子 池田町教育委員会賞 林充子（神奈川県） 作品・橋姫 池田町伝統文化保存活用実行委員会賞 吉野豊也（富山県） 作品・響 池田町文化財保護委員長賞 林元仙（山梨県） 作品・鱧丸 審査員特別賞十点 桂作 三十一
なお池田町では、入賞作「能面」を使つての記念公演が上演されている。



青陽会「西王母」一政 清沢一政（杉浦賢次氏撮影）

「空腕」 應痛を難に腕自慢をひけらかす太郎冠者（シテ友彦）を懲らしめる気もあり、主（アト俊槍）は肝試しの魂胆在りく、明日の俄な客に供するため「観なりとも謝なりとも求めて来い」と従へ使いに遣る。口実を設け一度は抗うが、主命には逆らへず、丸腰では不安な太郎冠者、主から先祖伝来の太刀を借用して出掛けるが案の定、應痛風に吹かれ、凝心暗鬼を生じるの態。主は心許無いと跡を跟け、相手も居らずに追い躰り、太刀差し出して命乞いの太郎冠者を認め一打ち、太刀取り戻して帰る様子を見ようと。
一方、太郎冠者は切られて死の世界にと思いきや、命あると知れば心配はお太刀、無いと分つて後は己れの本心に任ずのみ、太刀の行方の詳細、武勇伝を仕方話に活

【小鍛冶・白頭】 帝の靈夢を受け、勅使（ワキツレ幸）は三桑宗近（ワキ雅介）に御剣を打つよう勅諭を伝えなが、相懸に遇う者が居らず困窮のワキ。しかし宣旨とあつては拒めず、氏神の稲荷明神へ祈書に掛けは呼び掛ける不思議な童子（シテ博祐）、既に己れの意図を知り、御剣に寄せては和漢の名刀の奇瑞をクリ・サシ・クセに説き、へ御剣を抜いてと居グセから居立ち、地（正直・孝・莊太郎）の返すからへ刃りを払ひ、と立つと、草薙剣の故事きびくとして型所にみせる処爽快。中人はへ御力を付け申すべし待ち給へと、立ち掛かつてワキを指シ、立つと身を翻す様に地の急調に走り込むのも鮮か。アヒ清治が天薙雲剣の故事を立シヤベリして退くと後場。
注連結 墨台が設えられ、ワキはノットを稲荷明神（後シテ博祐）は半幕に姿を現わす。へ謹上再拜、で一旦幕が下りて直ぐ、早苗（誠・昭弘・眞之介・洋輝）でシテは頭で指シ一ノ松へ走り出る。白頭、泥小飛出・平地注被・紺地半切の姿、へいかにや宗近、でワキを指シ、舞台へ入り働キから壇上ワキと刀身を鍛えるところ、後場は少々疲れがみえ切れを欠くように思えたが、キリは地のうちに二ノ松へ、薨雲に飛び乗り飛翔する心は小廻り二度、留メ

【阿五郎】 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ



青陽会定式能「鶴・白頭」アト 久田勘助（杉浦賢次氏撮影）

「西王母」 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

【醉薑】 津乃国の蘆朮（アト穂）と和泉の酢元（シテ後）が都へ商いに出、業種違いに拘らず商売上の確執。挨拶無しに梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

【阿五郎】 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

【阿五郎】 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

【前号の訂正】前号（542号）4頁3段の行目「自信」とあるは「自身」、同5行目「自身」とあるは「自信」の誤りでした。お詫びして訂正します。

【鶴・白頭】 旅傳（ワキ元）三熊野語から上洛の途次、声屋の里でうつほ舟（丸木を刳り抜いた舟）に乗る異形の舟人（シテ）は、素性を知えは頼頼に射落された鶴の亡霊と。ワキの求めにシテはその時の様子（ワキ）をサシ・クセにみせる前場。クセの上み端まえ、雲中に怪しい姿つきと見上れば（写

【阿五郎】 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

【阿五郎】 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

【阿五郎】 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

【阿五郎】 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

【前号の訂正】前号（542号）4頁3段の行目「自信」とあるは「自身」、同5行目「自身」とあるは「自信」の誤りでした。お詫びして訂正します。

【鶴・白頭】 旅傳（ワキ元）三熊野語から上洛の途次、声屋の里でうつほ舟（丸木を刳り抜いた舟）に乗る異形の舟人（シテ）は、素性を知えは頼頼に射落された鶴の亡霊と。ワキの求めにシテはその時の様子（ワキ）をサシ・クセにみせる前場。クセの上み端まえ、雲中に怪しい姿つきと見上れば（写

【阿五郎】 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

【阿五郎】 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

【阿五郎】 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

【阿五郎】 狂言口開で、官人（アヒ博造）が御世を寿ぎ、帝の行幸を願して退くと、真ノ来序（希世・孝一郎・総一郎・洋輝）で重々しく帝（ワキ勝久）が侍臣（ワキツレ正樹・進）を伴ひ座着き、治世の繁栄を喜ぶところ、一声で仙女（前シテ一政）が侍女（ツレ邦子）と奏聞の事あると参上。シテは三十年に一度咲くという梅花を「捧げ参らせ候」と。更にシテ・ワキ掛合を地（修一・嘉弘・幸親ら）を受け、帝の御政を古歌に詠える。ロンギでシテは左袖ワキへアシラと西王母の化現と明かし、天に帰つたら桃実を、と地一杯聞いて静かに橋懸へ入る。再び官人が出て桃実の有難さなどを立シヤベりに、西王母を迎えるに管絃の役者は集まれと願して退くと後場。
「これは不思議の御事かな、かの西王母の眞の姿を、もしま頼し給ふぞ」とワキの期待は、ワキツレと連吟に西王母を迎えようと管絃を促す待詠。軽やかな浮かれる様な下り端で出る西王母（後シテ

NHK放送予定(平成24年4月~5月)

Table with columns for date and program name, including NHK-FM Jazz and NHK-TV programs.

演能カレンダ―

名古屋能楽堂

Calendar table for Nagoya Noh Theater with dates and event names.

友 能 楽 の 友

社 友 能 楽 の 友 社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)

能「杜若」「是界」(17日)

名古屋宝生会の今年第三回の定式能は六月十七日(日)名古屋能楽堂で、宝生和美宗家が来演。午後一時始

梅猶会大阪 能楽公演日程

梅猶会の平成二十四年度(2012)大阪定期能楽公演は1月公演(第一回)につぎ、きたる6月2日(日)9月1日(日)、12月2日(日)に行われる。

名古屋能楽堂定例公演

名古屋能楽堂定例公演能は、既報のように六月二日公演を初回として平成二十四年度は明春三月まで催される。とくに今秋九月二日には、名古屋能楽堂15周年記念

能「海人」狂言「鬼丸」 6月2日(土)上演

特別公演が二部制で観世流、宝生流、金剛流の能楽が上演され、芸術の秋を飾る。本紙三月号定例公演案内の見出しで「8月に記念能」とあるのは「9月」の誤り。

金沢能楽会 定例能日程

「加賀宝生」といわれる伝説を受け継ぐ金沢能楽会は、現在石川県立能楽堂で年一回の定例能を催し、これまでの通算回数は一〇〇回以上に及んでいるが、平成二十四年の五月以降の演能予定は別項の通り。

金沢能楽会では(春季特別展)として、四月十四日から六月十七日まで「平家物語と能」のテーマで、前熊コレクション能楽束を中心に展覧している。

能「海人」(宝生流)シテ「海人の女・童女」竹内澄子、子方(藤原房助)片桐賢、ワキ(飯富雅介)一番組③④面掲載

原匡、主人・山本豪一 仕舞「氷室」井戸良祐「春盛」梅若善高「班女」赤瀬雅則「富士太鼓」梅若善徳

お詫びして訂正します。 6月公演の演目は次のとおりです。 6月2日 午後二時開演 狂言「鬼丸」(和泉流)

金沢能楽美術館特別展 平家物語と能 前熊コレクション 能装束を中心に

金沢能楽美術館では(春季特別展)として、四月十四日から六月十七日まで「平家物語と能」のテーマで、前熊コレクション能楽束を中心に展覧している。

能「加茂」佐野玄貞、狂言「水掛」清水宗治、能「玉鬘」福岡隆子

能「海人」(宝生流)シテ「海人の女・童女」竹内澄子、子方(藤原房助)片桐賢、ワキ(飯富雅介)一番組③④面掲載

大槻能楽堂ナ イトシアター 大槻能楽堂自主公演能は四月から毎十二回公演(前出既報)とともに、「ナイトシアター」が三回上演される。

青陽会定式能 (第256回)

五月三日(木・祝)十二時半開演 名古屋能楽堂 能 組 仕舞 草子洗小町 村井 邦子 角田 尚香

能「杜若」高安 勝久 能「是界」(シテ和久狂太郎、ソノ内藤隆能、ワキ飯富雅介)

能「海人」(宝生流)シテ「海人の女・童女」竹内澄子、子方(藤原房助)片桐賢、ワキ(飯富雅介)一番組③④面掲載

能「海人」(宝生流)シテ「海人の女・童女」竹内澄子、子方(藤原房助)片桐賢、ワキ(飯富雅介)一番組③④面掲載

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ④

竹尾 邦太郎

八 「中日五流能」 ⑧

— 承前 —

昭和五一年三月二八日、第廿二回「中日五流能」。午前十時開演の第一部は能「白田村」喜多長世・高安滋郎・野村又三郎・森田光春・鶴沢寿・栢原崇志・粟谷新太郎(地頭)長田謙(後見)、狂言「釈大名」野村万蔵・野村万之介(亭主)野村又三郎(太郎冠者)、仕舞三番「半芭」粟谷新太郎「羽衣夕七」金春欣三「船橋」金春兜実、能「花笠」豊之伝・大返「観世元正」片山伸吾(継体天皇)武田吉房(侍女)宝生弥一・森常好(御使)佐々木則之(官人)金井正洋(官人)藤田大五郎・幸直佳・安福春雄・山階信弘

(地頭)片山博太郎(後見)、仕舞一番「笠之段」岡根祥六「阿漕」山階信弘、能「海人」櫻中之舞「金春信高・金春徳高(厚節大)臣」江崎金治郎・野村万之介・森田光春・吉阪修一・渡部晴義・小寺俊三・金春欣三(地頭)金春兜実(後見)。

午後四時開演の第二部は能「通小町」村之廻「宝生英雄・本間英孝・宝生弥一・藤田大五郎・鶴沢寿・安福春雄・辰巳孝(地頭)野村蘭作(後見)、狂言「地蔵舞」山本真次郎・山本則直、仕舞四番「楊貴妃」野村蘭作「野守」辰巳孝「井筒」橋岡久共「熊坂」大槻季夫、能「住吉詣」祝之舞「片山博太郎(明石上)観世元昭(光源氏)片山慶次郎(惟光)梅田邦久

・橋岡向(侍女)竹前治房・久田徹二・沖宗久・八木康夫・佐藤大俊(從者)片山清司(童)河合雄一郎・高橋孝(隨身)江崎金次郎・山本真次郎(社人)森田光春・曾和博朗・栢原崇志・藤井久雄(地頭)大槻秀夫(後見)、仕舞四番「難波」豊嶋弥左衛門「綱之段」今井幾三郎「隅田川」藤井久雄「邯鄲」舞アト「観世武雄」能「殺生石」玉藻前「金剛殿」高安滋郎・山本則直・藤田六郎兵衛・吉阪修一・渡部晴義・小寺俊三、今井幾三郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)。

パンフレットの内容は「番組」「演目解説」西田三好、「能の作者考」おもてあきら、「能面解説」後藤淑、「装束解説」山辺知行、「能のふるさと」青木実、「作り物解説」浅井泰太郎、上演曲目についての識者の小文は「修羅能以前」香西精、「安堵」杉葉代子、「メロドラマに望まぬ花笠」杉本苑子、「海人の面」坂本欣司、「みやびの世界と尊を見まいな」池田廣司、「匾絵・住吉詣」中村保雄、「狐足」山崎有一云。他に「前回の舞台を想う」撮影 今駒清則、おもな出演

者紹介 賛助企業広告、など。

昭和五二年三月二七日、第廿二回「中日五流能」。午前十時開演の第一部は能「花月」野村蘭作・高安滋郎・茂山于五郎・寺井政敏・穂高光晴・渡部晴義・辰巳孝(地頭)本間英孝(後見)、狂言「昆布売」茂山于五郎・茂山正義、仕舞三番「女郎花」佐野正治「遊行柳キリ」辰巳孝「野守」本間英孝、能「熊野」読次之伝、村雨留・豊次之伝、陸行留「観世元昭」坂井春重・宝生弥一・宝生彰彦・藤田大五郎・鶴沢寿・栢原崇志・藤波重和(地頭)大西信久(後見)、仕舞五番「放下僧」小寺俊三「三輪」大西信久「野宮」藤波重和「鉄輪」藤波重満、能「祝義」藤田大五郎・吉阪修一・栢原崇志・三島太郎・今井幾三郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)。

午後三時四十分開演の第二部は能「鉢木」替装束「梅若万三郎・梅若万佐晴・宝生弥一・宝生彰彦(二階堂)野村万作(時頼の從者)石田幸雄(時頼の從者)藤田六郎兵衛・鶴沢寿・渡部晴義・片

山博太郎(地頭)梅若万紀夫(後見)、仕舞五番「王之段」観世武雄「松風」橋岡久共「山姥キリ」山本勝一「笠之段」梅若万紀夫「殺生石」片山博太郎、狂言「文蔵」野村万作・野村又三郎、能「羽衣」籠留「友枝喜久夫・江崎金治郎・寺井政敏・穂高光晴・渡部晴義・三島太郎・粟谷新太郎(地頭)長田謙(後見)、仕舞三番「生田教盛キリ」金春欣三「鞍馬天狗」金春兜実「花笠」道行「栗谷新太郎」能「邯鄲」十二段之能「金春信高・辻井八郎(舞童)高安滋郎・西村欽也・野村又三郎・森田光春・吉阪修一・栢原崇志・三島太郎・美橋汎(地頭)金春欣三(後見)。

パンフレットの内容は「番組」「演目解説」「能の作者考」「能面解説」「装束解説」「能のふるさと」「作り物解説」は筆者先号に同じ。上演曲目についての識者の小文は、「遊戯する少年」草深清、「昆布売の作年時」古川久、「熊野」香春実、「二字名一融」香西精、「ククリン」相鉢の木の時頼「杉本苑子、「語り」の面白さ」文蔵」坂本欣司、「羽衣雑話」長田午狂、「見

」今井欣三郎。他に「前回の舞台を想う」撮影 田中正夫、おもな出演者紹介、賛助企業広告など。なお今回、大鼓方高安流、安福春雄は欠勤で第一部「熊野」を門下の栢原崇志が、第二部「鉢木」を寛野流、渡部晴義が代動する。また小文を寄せた古川久(武蔵野女子大学教授)の赤塚に書く「所見」昆布売の作年時」を次に転載。

狂言を見初めたころから、各曲の作られた年時を知る便りは、ないものであろうかと思っていた。たまたま本曲について、小浜の老舗・天目屋の古文書に三代將軍頼朝・天目屋の古文書に三代將軍頼朝の論文を見た。しかし後にこれが「天正狂言本」に在るのを知り、当てにならぬと分かったことである。

また売り声をいろいろ節で謡う中に、海軍旗節があり、口三味線までついているのに注目される。しかし、それは和泉流だけの話で、大蔵・鷹流は平家・小歌・踊り節であり、「天正狂言本」ともなればただ「ふし」としか記してない。この方からの手がかり

⑧(面へつづく)

能 「楊貴妃」 「望月」

片山九郎右衛門後援会能
5月26日 京都観世会館

京都 片山九郎右衛門後援会能は、このたび十五周年を迎え、きたる五月二十六日(土)京都観世会館で能「望月」「楊貴妃」の二番を上演。「望月」はシテ片山九郎右衛門と子方片山清愛の出演、能「楊貴妃」は小春・平麗延で笛方の重習物の演出で片山幽雪が出演する。午後一時開演。

能組は次のとおり。
舞囃子「生田教盛」シテ観世鏡之丞
仕舞「相嶺」梅田邦久「王之段」観世喜正
能「楊貴妃」小春平麗延」シテ

片山幽雪、ワキ宝生閑間狂言・野村太郎、地謡・観世鏡之丞、梅田邦久ほか。
狂言「清水座頭」シテ野村万蔵
仕舞「程正」武田欣司、一隅田川「小林慶三」胡蝶「橋岡向」能「望月」シテ片山九郎右衛門、子方片山清愛、ワキ宝生閑哉、間狂言・野村万蔵、地謡・観世喜正、古橋正邦ほか
後援会年会費/特別会員二五〇〇〇円(80名限定)、正会員一万二千元、法人会員五万円。
後援会事務局 電話075・532・2840、FAX075・532・2841

演能案内

梅田邦久師傘寿記念
邦謡会発表会(四)

五月十九日(土)
午前九時五十分始
名古屋能楽堂

運 吟 名 古 屋 能 楽 堂

菊 慈 童 今 沢 美 和
清 沢 部 一 政 南
本 田 勲

素 謡 野 田 美 子
岩 田 時 代 森 幹 子
白 井 福 子 長 谷 川 雅 彦
三 浦 百 合 子
飯 島 美 津 代 近 藤 と き 子

運 吟 弱 法 師 峰 光 子
三 村 律 子

野 官 素 謡 美 濃 辺 眞 知 子 野 田 ち ず 子
卒 都 婆 小 町 高 野 子 勢 子 瀬 辺 聡 子
石 黒 田 美 子

仕 舞 玉 之 段 三 口 謙 介

素 謡 隅 田 川 遠 山 美 津 子 石 黒 田 美 子
兼 松 三 欣 葉 浦 美 智 代
三 口 謙 介 林 昭

素 謡 番 外 仕 舞 老 松 梅 田 邦 久
岩 船 梅 田 嘉 宏

主 催 邦 梅 田 邦 久
嘉 宏 会

【御来場歓迎】 (終了四時半頃)

第五十五回

狂言 やるまい会 名古屋公演
— 生物多样性 狂言之巻 —

五月二十六日(土) 午後二時三十分開演
名古屋能楽堂

狂 言 牛 馬 牛 馬 勇 善 竹 忠 一 郎 馬 目 代 善 竹 隆 司
馬 博 秀 善 竹 隆 平

居 囃 子 胡 蝶 味 方 健 味 方 圓
大 蔵 河 村 眞 之 介 大 蔵 加 藤 洋 樹
小 鼓 林 大 和 苗 大 野 誠

狂 言 蛸 蛸 七 重 野 村 又 三 郎 旅 節 松 田 高 義
所 の 著 者 伴 野 俊 彦
大 蔵 河 村 眞 之 介 苗 大 野 誠
小 鼓 林 大 和

狂 言 語 鶴 之 語 伊 藤 泰
亀 之 語 藤 波 徹
龍 之 語 藤 津 健 太 郎
虎 之 語 野 口 隆 行

狂 言 隠 狸 大 蔵 著 野 村 万 作 主 石 田 幸 雄

狂 言 犬 山 伏 山 伏 野 村 又 三 郎 出 家 野 口 隆 行
茶 屋 奥 津 健 太 郎
唐 犬 野 村 信 朗

(終演予定 午後四時頃)

主 催 十 四 世 野 村 又 三 郎
野 村 事 務 所 電 話 0 9 0 . 8 3 2 2 3 . 3 2 1 0

名古屋観世会

五月二十七日(日)
午前十一時始

名古屋能楽堂

番 外 仕 舞 社 若 若 前 田 和 子
小 鍛 治 山 下 麻 乃

舞 囃 子 葛 城 榑 原 和 美 寛 敏 一 加 藤 洋 輝
大 和 舞 後 藤 季 一 郎 鹿 取 幸 世

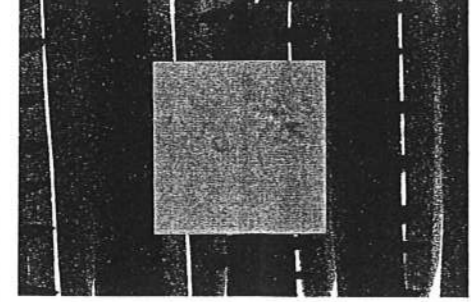
⑨(面へつづく)

②面 中日五流能 よりつつくつ)

も、望みがないわけである。そこで「狂言不審紙」を見る

昭和五年三月二十六日、第廿三回「中日五流能」。午前十時開演

午後四時開演の第二部は、能「弱法師・双調冒目之舞」金剛殿



重要無形文化財 第24回「中日五流能」

之段「広田陸一「班女」辰巳孝「天鼓」本間英孝、能「大原御幸」

パンフレットの内容は「番組」「演目解説」「能の作者考」「能面解説」「能のふるさと」「作り物解説」

昭和五四年三月二十五日、第廿四回「中日五流能」。午前十時開演

・関根祥六(地頭)大槻秀夫(後見)、仕舞五番「八鳥」本田光洋

◆早春の舞台から◆

「第一回 龍門の会」「名古屋観世会定例公演」

「望月」自身研鑽の場として立ち上げた金剛龍

げ知らせ候間、本国へも叶はず、この守山の宿に落ち留まり、加太

「野守」浦田保利、能「百萬・舞入」宇生英雄・片桐真(子方)宝

因に西田三好による三ツ折り案内リーフレット「観能の手びき」

竹尾邦太郎

最界 白最界、又白天狗とも申しますが、これは真金剛正(二

また豊満弥左衛門は自著「弥左衛門書談」(昭和55年10月15日)

ひてこの甲屋の亭主となり、往來の旅人を泊め申して身命を継ぎ

さて、宿を乞う女田友春ノ妻(ツレ見隠)に、供も無く子連れ

に記されていないので、全くわからない。皆で相談して、この小書を

更に流誌「金剛」第44号(昭和33年9月10日)から第56号まで連

今回シテを動めた金剛殿は演能年譜によるとこれまで六度「畏我

以下次号

(名古屋観能会番組編き)

Table listing performers for various plays: 天鼓, 山姥, 藤戸, 菊慈童, 花月, 砧, 蝉丸, 胡蝶, 胡蝶, 東北, 船弁慶, 象, 猿々, 浦々, 高々, 野々, 天人, 正, 吉野, 江口, 村, 海士, 海士.

〔御來場歓迎〕

主催 名古屋観能会 後援 正 花 本博通

名古屋能楽堂六月定例公演

六月二日(土)午後二時開演 名古屋能楽堂

狂言 鬼瓦 シテ 大野弘之 本師登喜 佐藤 融 (和泉造) 後見 佐藤 友彦

④面へつづく



名古屋観世会「巻絹」古橋正邦 (杉浦賢次氏撮影)

(③面よりつづき)
両袖張って、戻り返つたり、隙ついで頭を振つたり、乱足や合腰、正先で胸を吊るようになり、と身体能力の高さはきびく型を極め、舞臺剛の面目躍如。酔いに微睡むワキを討つところも気が入り痛快、三役・地の好演もあって「龍門之会」の門出の大曲、立派だった。(1時間25分・2月4日・第一回龍門之会・金剛能楽堂)

【巻絹】
言官により三熊野へ納めるべき巻絹を携え都ノ男(ツレ木志)、先づ言無天神の参詣を思い、折柄の梅の香に惹かれて触発され、心の裡に歌を手向け、朝臣(ワキ勝久)のもとへは選参、厳しく叱責するワキから罰を受け、下人(アヒ都雄)に縛られるツレの神妙な態度がよい。そうはさせじとはかみ、舞内から呼掛ける巫女(シテ正邦)は一ノ松でへ(八信心なし)その縄解けとこそ、と幣でキツとワキを指すところ迫力が。舞台へ入るとワキと問答、ツレの選参の因となった歌へのワキの疑念が晴らされること。地(邦久・邦弘・政一)のへ歌人を、と背後からツレを縛れむ様に眺め、へ免させ給ふべし、とワキに目を遣り、縛め解くとワキに示すか(写真)、へうち解け(この縄を)、と立ち大小前へ、ツレは笛前に下居。ツレの縛めを早く解いてやりたい逸る気持はあろうが、シテの縛めを解く時機(タイミング)は少々早いようにも。

神威を説き、和歌の徳を称揚するクリ・サシ・クセは、へ眠り(煩惱迷妄)の迷かに眼を去る、とサシの留メに、雁開いて大きくユウケンするのが我が意を得たり



名古屋観世会「筑紫興」左より鹿島俊裕、佐藤友彦

(③面よりつづき)
の喜び溢れるよう。舞舞セ済み、扇を幣に替えノットに。脇正で右極い、地と掛合にへ葦蔵世界、と立ち小廻り、大小前へ。選擇して神楽を幣で、直ッ(幣捨て)で神舞を舞上げると、地へ神謡すること(恐ろしけれ)、と再び幣に替え、巫女物狂は天神が巫女に憑く心にイロエの彷徨。キリは神應りの狂騒も目まぐるしく力強く型を極め、へ神は上らせ給ふ、と膝をつき幣をハツと背後へ捨てる姿に憑きが落ちた、を思わせた。シテの体軀に似合う大きな、力の籠った舞台だった。ツレは途中で退かず最後まで残る。(1時間10分)

【筑紫興】
年貢に唐物をも納めるため都に上る筑紫ノ百姓(アド俊裕)、途次、柑橋類を納める丹波ノ百姓(シテ友彦)と同道、同日同刻に上頭(現地に置く甚司、いわゆる地主)へ着いたのを疎勝とお褒めに与つたと羨者(アド観)。更に、年貢の数が多いので、直接それをお上に申し上げいって、シテとアドが貢物の一々を節を付け拍子にか、つて申し上げれば御意に叶い、万雑公事を免除されるとあって二人は阿々大笑。それが終わられ、今度は二人が作る田一反につき一笑を命じられてアドが二笑すれば、笑い気分でないシテは、ついでに笑つてくれと頼むが、よそ者の田のことは知らぬと拒まれ、羨者からも笑えと責められて無理に笑い、律儀に一筆半は一反と敬半(きだなか・五郎)ゆえ。褒められてお流れを頂戴、上機嫌に辞去するところ、笑わせたのはお上ではなく羨者の

【鉢木】
佐野源左衛門常世(シテ清和)、雪中の出の運び如何にも思わせ一ノ松へ、「あ、降つたる雪かな」と沁々慨嘆の心を吐露するところ、今冬の葦蔵地方の難儀も思われ惹きつける。へ鉢も打ち、で運じ出し、(面目からず)雪の日やな、と舞台へ入ると、軒に佇む羨者(ツレ嘉彦)に気付き、シテ・ツレ問答から宿をどう旅僧(ワキ茂十郎)との問答。宿を断られ、「あら曲もなや、由なき人を待ち申して候ものかな」と去つて行くワキの氣持を付度するツレ、へお宿を参らせ給へ候へ、とシテに願えば、「左様に思し召さば何とて以前には」と、シテも内心の思いは同じ。ワキの跡を追い呼び掛けるシテ、雪で遠方に暮れ佇むワキ、へ「袖なる雪を打払く」と袖を扇で払うシテに二ノ松で佇むワキの、埋もれる雪の深さを知る。



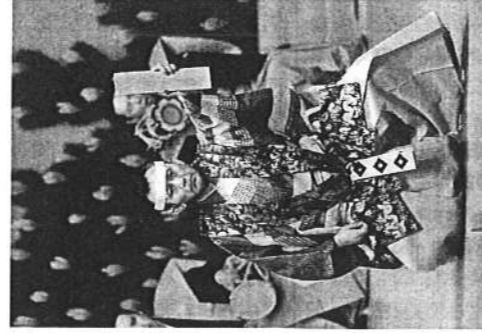
名古屋観世会「鉢木」マエ観世清和 (杉浦賢次氏撮影)

る。冒頭のシテとツレとワキ、三者の絡み合いが見事。初回(秀伸・邦弘・勲嶋ら)のへ見苦しく候へど、と追いついたシテがワキを押し止めるところはさらつとした印象。粟飯を勧め、夜衆としてへ捨人の為の鉢の木、を薪にするところろは右肩脱ぎ、へ先づ冬木、と小刀右逆手に握り、へ惜しみに、二度作り払い、羨者は居立つて突き抜けた。ワキと問答にシテは素性を明かし、「鎌倉に御大事あらば」「敵大勢ありとても」と右肩脱いで立つと、へ思ふ敵と奇り合ひ打ち合ひて、と真左手に纏の心に前方へ、右手刀の柄に掛け(写真)足指子二ツ強々と踏み意気盛んを見せる。ワキの別れとなり、へ出船の共に名残や、と一ノ松から去つて行く風情にしんみりさせられる。

シテとツレも中入すると早鼓で早打(アヒ靖浩・邦雄・俊裕)が鎌倉へ参集すべしの上意を触れるため東八箇國へ放たれ、一声の囃子(六郎兵衛・源次郎・貞之介)



の差し金に遣くない、と二人で羨者を探り回わし(写真)、三神(人)相应と駆け回り三人の笑と留メとなるのも目出度い。上々のアノサンブル。(32分)



名古屋観世会「鉢木」アト観世清和 (杉浦賢次氏撮影)

【羽衣・彩色之伝】
小書で衣は一ノ松勾欄に。漁夫・白龍(ワキ勝久)は殿敷斗目業流シに塵敷・水衣。徒筆でない辺りの雰囲気にならぬ美しい衣を見付け、「いかさま取りて帰れ」と丁寧に両手に戴



第16回関西観世花の会「羽衣」彩色之伝 (杉浦賢次氏撮影)

て勇躍獲せ馬を駆って佐野源左衛門常世(シテ清和)が出る。へ打つともあふれども、と馬が尻込みして三ノ松まで退くのが面白い。二階堂(ワキツレ知彦)の下人(アヒ融)との問答に、アとの探し求める風体見苦しい武者は己れ、と應ずることなく御前に参上を「畏つたと御申し候へ」と長刀の石突トンと突くところに覚悟の程をみせ、御前に出て畏ると「見忘れてあるか」の聲に面を上げ、最明寺降頼(ワキ茂十郎)の頭を見てハツと退り恐懼半伏する謹直な態度が実によい。雪の寒夜の思ひ出を語るワキの重々しい口調も最明寺に相应しく立派。その夜の恩義に報いるとて賜る安堵の御教書を読み、正先へ進み、満座の中へそれを高くと掲げる得意(写真)地・うちに三ノ松へ、長刀担げ拍子は踏ま留メた。(1時間34分・2月12日・名古屋観世会定例公演)

き戻るところへ、「なう、その衣は」と三ノ松から呼掛る天女(シテ幸江)、天冠に白蓮を立て、玲瓏たる増面に白綾着付、萌黄地縫箔の装束姿が如何にも優げ。ワキと問答、掛合のうちに、衣を返して貰えなければ、へ縫方も無く、へ涙の露の玉囊、初回(意・美紗子・和子ら)の哀調は全女性の地謡ならではの美しさ。へ天路を聞けば、と勾欄に寄り、遠く彼方へ見上げるシテの風情も切ない。舞台へ入つては、春風がへ空に吹くまで晴かして、の返す句にシラルところ、衣の返却を言じなかつたワキもシテを憐れみ、返すつもりも返せばそのまま逃げられるかも知れない疑念をシテに響められ、へあら恥かしてや、と返しに行くところなど、ほのぐとした気分が。

物着に返された衣、赤地舞衣を垂折に着けるとワキにアキラヒ、へ舞ふとかや、と左・右・と袖捌きしてへ東遊の駿河舞、と地次第で袖袂ク。小書でクリ・サシ・クセを抜き、へ南無無量命天子、と下居合衆、東遊びの(舞の曲)と立ち、舞に。舞の中、きれいに袖袂キ(写真)、舞上げるとイロエに。舞台一巡、橋懸へ抜け、一ノ松で袖袂キ舞台を望見、小刻みな運びに正中へ戻つて来るところに距離感が見えて好い。へ東遊の数々に、なり、慎ましく手綺麗な型の数々は女流の優しい長年の芸功。へ愛陽山や、と躊躇したまま、地を残し舞へ、ワキ留メの余情惻々。好舞台だった。(1時間7分・2月18日・関西観世花の会)「農山伏」と「小鍛冶・黒頭」は次号。

【資料】
※年間自由席(五枚綴り) 二〇〇〇円
当日券(自由席一回限り) 六〇〇〇円
学生券二〇〇〇円

【資料】
※年間自由席(五枚綴り) 二〇〇〇円
当日券(自由席一回限り) 六〇〇〇円
学生券二〇〇〇円

主権 名古屋市文化振興事業団
(名古屋能楽堂)
能楽協会名古屋支部
【入場料】前夜指定席四〇〇〇円
前夜自由席三〇〇〇円
(自由席のみ当日五〇〇円増)
取扱い 名古屋能楽堂 (〒4610522 231-0088)
ブレイクアウト(楽アレイケ・松坂屋地)
チケットぴあ (0570・02・9999、Eコード4119
1977)あ

名古屋観世会定例公演能
六月十日(日) 十二時三十分開演
名古屋能楽堂

能 頼 政
高杉江 元
高安 勝久
里元 正樹
河村真之介
後藤孝雄 一郎
鹿取 希世
同 佐藤 友彦
後見 高橋 一郎
地謡 吉沢 孝旭
梅田 嘉宏
武田 大志
祖父江 修一

狂言 墨 塗
大木 井上 靖浩
大筋 鹿島 俊裕
後見 佐藤 友彦

仕舞 敦 賀 茂
水無月 拔 盛 盛 盛
松山 幸親
武田 大志
祖父江 修一
鶴 飼 盛 盛
古橋 正邦
地謡 梅田 八神
加藤 邦久
梅田 孝亮
林 修彦

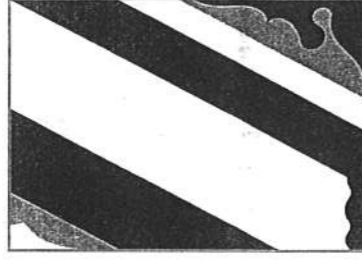
【資料】
※年間自由席(五枚綴り) 二〇〇〇円
当日券(自由席一回限り) 六〇〇〇円
学生券二〇〇〇円

主権 名古屋観世会
事務所 名古屋名東区一社3・162
電話 052・734・6192
※年間自由席(五枚綴り) 二〇〇〇円
当日券(自由席一回限り) 六〇〇〇円
学生券二〇〇〇円

【資料】
※年間自由席(五枚綴り) 二〇〇〇円
当日券(自由席一回限り) 六〇〇〇円
学生券二〇〇〇円

昭和五五年三月二〇日、第廿五回記念「中日五流能」。午前十時開演の第一部は能「三輪・神遊」喜多長世、江崎金治郎、野村又三郎、寺井政致、敷村鉄雄、柿原崇志、金春国和、栗谷菊生(地頭)長田鶴(後見)、狂言「水汲」野村方之丞、野村又三郎、仕舞「野守」栗谷菊生能「禪丸・替之」武田太知(冠髪)坂井音重(禪丸)西村欽也、飯富雅介、杉江元、野村方之丞、藤田六郎兵衛、嶋沢寿、安福春雄、藤井久雄(地頭)関根祥六(後見)、仕舞六番「八島」豊嶋三三春「富士太鼓」今井幾三郎「重僧」金剛永隆「嵐山」藤井徳三「実盛キリ」藤井久雄「舟舟慶キリ」梅若盛義、能「鵜飼・無間」金剛殿、江崎金治郎、岩城雅晴、野村耕介、寺井

政致、吉阪修一、柿原崇志、金春国和、今井幾三郎(地頭)藤田泰三(後見)。午後四時開演の第二部は能「仲光・發傷之舞」観世元昭、大槻秀夫(溝仲)山中貴博(美女丸)武田友志(季春)福王輝幸、茂山正義、藤田大五郎、嶋沢寿、安福春雄、関根祥六(地頭)武田太知(後見)、仕舞七番「雁」金春安明「花見」本田光洋「杜若キリ」金春欣三「天鼓」金春晃実「放下僧」坂井音重「半部クセ関根祥六



東京五流能
第6回
昭和51年10月31日
東京文化会館
東京文化会館
東京文化会館



北陸中日能
第2回
昭和53年11月28日(日)
北陸中日新聞社
北陸中日新聞社
北陸中日新聞社

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ⑫

竹尾 邦太郎

募集 お一人様二口三十円以上(東日本大震災ことも応募金)
対象 東日本大震災で両親を失った18歳以下の子どもたち
東日本大震災で両親を失った子どもを応援
亡くした子どもを応援

朝日新聞名古屋伝統文化
活性化プログラム2012
和泉流三派
チャリティ狂言会
六月十六日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

「融」武田志房、能「熊野・藤行」三段之舞、野村蘭作、衣裳正直、福王輝幸、岩城雅晴、藤田大五郎、敷村鉄雄、柿原崇志、辰巳孝(地頭)本間英孝(後見)、狂言「清水」茂山十五郎、茂山正義、仕舞二番「狐色」辰巳孝「善知鳥」本間英孝、能「黒塚・白頭」唐鳴之出、金春信高、西村欽也、飯富雅介、茂山十五郎、森田光春、吉阪修一、河村総一郎、金春国和、金春晃実(地頭)金春欣三(後見)。

第56期第3回
名古屋宝生会定式能
六月十七日(日)午後一時始
名古屋能楽堂
主権 朝日新聞
特別協賛 東海東京証券
協賛 h o y u

狂言 呂蓮 シテ 野村又三郎 7下 松田 善義
後見 伴野 俊彦
仕舞 兼平 辰巳満次郎 地謡 玉井 博祐
天鼓 衣斐 正宣 衣裳 愛子
和久佐太郎
能 是 界 飯富 雅介 元 河村総一郎 加藤 洋輝
相元 正樹 後藤 謙雄 幸 竹市 学
問 野口 隆行
後見 東川 和英 地謡 竹内 孝成 小倉 伸二
石原 尚人 辰巳 満次郎

「遊行柳ケレ」上田照也「妹輪」梅若盛義、能「采女・小波之伝」喜多長世、福王輝幸、岩城雅晴、西本平三郎、茂山十五郎、藤田大五郎、嶋沢寿、安福春雄、栗谷菊生(地頭)長田鶴(後見)、仕舞四番「嵐山」豊嶋三三春「東北ケレ」藤田泰三「野守」金剛永隆「昭君」栗谷菊生能「黒塚・白頭」金剛殿、西村欽也、飯富雅介、茂山正義、寛三男、敷村鉄雄、河村総一郎、小寺俊三、廣田隆一(地頭)廣田泰三(後見)。

主権 名古屋宝生会
名古屋市昭和区御器所3-19-8 02
TEL/FAX 052-882-5600
「正会会券」(年間週用四枚綴)一八〇〇円、
鑑賞券五〇〇円、学生券二〇〇円
お問合せは出演能楽師
又は名古屋宝生会

昭和五六年三月二九日、第二六回「中日五流能」。午前十時開演の第一部は能「自然居士」金春信高、西村欽也、森崎蔵、野村又三郎、森田光春、藤田善一、谷口正喜、金春晃実(地頭)金春欣三(後見)、狂言「太刀撃」茂山十五郎、茂山正義(主)茂山忠三郎(通行人)、仕舞四番「加茂」金春安明「実盛キリ」本田光洋「芭蕉キリ」金春晃実「船橋」金春欣三、能「半部・立花供養」観世元正、福王輝幸、茂山忠三郎、藤田大五郎、嶋沢寿、安福春雄、関根祥六(地頭)杉浦元三郎(後見)、仕舞五番「歌占キリ」辰巳孝「王之段」坂井音重「藤戸」関根祥六「隅田川」杉浦元三郎「船舟慶キリ」藤井徳三能「融・遊曲」大坪十喜雄、宍生弥一、茂山正義、森田光春、吉阪修一、谷口正喜、小寺俊三、辰巳孝(地頭)内藤泰三(後見)。

「ムトで見せる曲」太刀撃」小林 貴、「立花供養のこと」向時代との接点」橋本芳一、「君まさで心淋し」中村保雄、「風継と田村將軍」今井欣三郎、「でんでん虫」池田廣司、「入水の美」山崎有一郎、「現代に生きる黒塚」渡会憲介、「前回の舞台を想う」岩野俊夫 撮影、「主なる出演者紹介」賛助企業広告など。

主権 三 交 会
久田三津子
「御来場歓迎」
「入場無料」

昭和五七年三月二八日、第二七回「中日五流能」、午前十時開演の第一部は能「枕蓑重・前後之替

能楽の友 第3種郵便物認可 月刊(毎月一回)10日発行 (2)

⑤面よりつづき)
・鷲渉・藝装束」金剛殿・江崎金治郎・和田英基・是川正彦・野村又三郎・森田光春・吉阪修一・谷口正喜・三嶋太郎・樋田運雄(地頭)廣田泰三(後見)・狂言「磁石」山本東次郎・山本則直・山本則俊・仕舞三番「田村キリ」廣田泰三「蟬丸夕七」金剛永謙「昭君」豊嶋三千春・能「櫻貴妃」玉簾・台座「観世元昭」西村欽也・山本東次郎・藤田大五郎・桐沢運雄・河村総一郎・関根祥六(地頭)藤井徳三(後見)・仕舞四番「花月」橋岡久共「井筒」関根祥六「融」武田吉房・能「是界・白頭」喜多長世・岡治郎右衛門・飯富雅介・村山弘・山本則直・寛三男・北村治・河村総一郎・三嶋太郎・粟谷菊生(地頭)長田嗣(後見)。

午後四時開演の第二部は「景清・松門之応答・小返」武田太加志・武田宗和(八丸)古橋正士・西村欣也・森田光春・桐沢運雄・谷口正喜・藤井徳三(地頭)武田志房(後見)・狂言「鏡男」善竹忠一郎・善竹幸四郎・仕舞三番「薄装夕七」山本勝一「隅田川」藤井徳三「熊坂」坂井音重・能「葛城・神楽」野村蘭作・岡治郎右衛門・村山弘・飯富雅介・善竹忠重・藤田大五郎・北村治・寛敏一・三嶋太郎・辰巳孝(地頭)本間英孝(後見)・仕舞六番「難波」本田光洋「忠度」金寿安明「松風」金寿欣三「鶴」金寿兎美「玉之段」本間英孝「藤戸」辰巳孝・能「船弁慶・遊女之舞・春之出」金寿信高・横山三楽(子方)福王輝幸・森本幸治・岩城雅晴・善竹圭五郎・森田光春・吉阪修一・河村総一郎・三嶋太郎・金寿兎美(地頭)金寿欣三(後見)。

パンフレットの内容は、「番組」「演目解説」「能の作者考」「能面解説」「能のふるさと」、解説者は先号と同じ。上演曲目に関する識者の小文は「藤童のころ」渡会恵介、「狂言と民俗」磁石、「地田賢司」「扇貴妃の美観」藤井芳一、「天狗の足」是界山、「山崎有一郎」「日向の勾当」景清、「羽田 稜」「原話の骨格を留めた曲」鏡男、「小林 貢」「鷹野の雪女」葛城、「今井欣三

郎、「船弁慶の怪王」中村保雄、「前回の舞台を想う」岩野俊夫撮影、「主なる出演者紹介」、贊助企業松山岩など。

昭和五十八年三月二十七日、第二八回「中日五流能」午前九時開演の第一部は能「海人・機中之舞」大坪十喜雄・衣笠雅志(子方)西村欽也・飯富雅介・杉江元・野村又三郎・森田光春・吉阪修一・谷口正喜・三嶋太郎・辰巳孝(地頭)本間英孝(後見)・狂言「柿山伏」茂山忠三郎・茂山千五郎・仕舞三番「瓶」本間英孝「語法師」辰巳孝・能「松風・見覚」観世元正・坂井音重・福王輝幸・茂山千五郎・藤田大五郎・荒木照雄・安福春雄・関根祥六(地頭)武田志房(後見)・仕舞七番「笠之段」

金寿安明「生田キリ」本田光洋「遊行柳夕七」金寿兎美「通小町」金寿欣三「田村キリ」観世清次「隅田川」関根祥六「鞍馬天狗」阿久広・能「融・笏之舞」金寿信高・江崎金治郎・茂山正義・森田光春・中川隆夫・谷口正喜・三嶋太郎・金寿兎美(地頭)金寿欣三(後見)。

午後四時開演の第二部は能「烏頭」喜多長世・長田嗣・長田郷(子方)江崎金治郎・茂山正義・寛三男・吉阪修一・河村総一郎・粟谷菊生(地頭)高林白牛口二(後見)・仕舞七番「嵐山」角寛次郎「花置クルト」橋岡久共「舟弁慶キリ」藤井徳三「夷座キリ」豊嶋三千春「千手」廣田泰三「谷行」金剛永謙「山姥」粟谷菊生・能「大原御幸・寂光院」観世元昭「藤井久雄(法皇)武田志房(内侍)梅田邦久(回)福王輝幸・森本幸治・山本清・藤田大五郎・荒木照雄・安福春雄・藤井徳三(地頭)関根祥六(後見)・狂言「文山立」茂山千五郎・茂山忠三郎・能「小鍛冶・白頭」金剛殿・西村欽也・飯富雅介・茂山正義・藤田六郎兵衛・中川隆夫・河村総一郎・三嶋太郎・藤田隆一(地頭)廣田泰三(後見)。

パンフレットの内容は、「番組」「演目解説」「能の作者考」「能面解説」「能のふるさと」、解説者は先号と同じ。上演曲目に関する識者の小文は「玉之段の映

画化」今井欣三郎、「山伏の転位」草深 清、「松風の小書」権藤芳一、「融という人」羽田稜、「高頭の笠」山崎有一郎、「寂光院で思うこと」中村保雄、「山賊と権儀文例集」文山立一「小林 貢」「稲荷狐と小鍛冶」渡会恵介、「前回の舞台を想う」岩野俊夫 撮影、「主なる出演者紹介」が、パンフレット冒頭、主催の中日新聞本社から次の「ごあいさつ」がある。

わが国、能楽界の最高峰とされる五流のシテ方をはじめワキ方、ハヤシ方、狂言方各流の演者を一堂にお迎えいたし第28回中日五流能を盛大に開催する運びとなりました。

今回も東西各流の名手の出演による五流競演小書演出の豪華番組は必ずや鑑賞者の皆さまに深い感銘を与えるものと確信いたします。本公演がここまで育つてまいりましたのも、長年にわたり温かい支援を賜つてまいりました出演者各位をはじめ熱心な鑑賞者の皆さまのおかげと心から感謝申し上げます。今後ともさらに充実した内容で伝統ある能楽の普及と振興に努力を重ねてまいりますので、かわらぬご厚情をいただきますようお願い申し上げます。

これより先、前年度の三ツ折リフレット(番組案内の散らし)の挨拶の中には「小書演出もさることながら、27年間の長きに亘り五流能を温かい目で見守り続けてお慶びと衷心より厚く感謝申し上げます。今後とも、さらに充実した内容で能の伝統を生かしていく所存でありますので、ますますのご厚情をいただきますようお願い申し上げます。」とあり、早晚、納会を迎えるのでは、と思われたが、明確にそれを伝えることなく、第30回を目前にしながら第28回で「中日五流能」は終了ということになった。

私見だが終了に至つた遠因は、本紙第五四三号(昭和二十四年三月号)に既出の通り、第一回は出

演者の交渉及び番組編成は田鍋物太郎(当時、能楽協会名古屋支部長)が行つたが、第二回以降は西田三好が権儀の「切をプロデュース」、その結果、当地在住の宗家ワキ方高安・榎方藤田、このほか小鼓方幸清流の着宿・田鍋惣太郎はさて置き、当地の大鼓方・太鼓方、狂言方が重用されること殆んど無く、また流儀の流動に左右され易い五流能の難しさ。吾が佛尊の流儀・役者さ見えれば、の観客の気紛れ。その辺りが観客動員に影響を及ぼしたのであろう。

館尾だが第廿二回に一度だけ出演した小鼓方幸流・穂高光晴(大正二年「平成一四年」)が著した能楽界の人物月旦「近代能楽学諸家列傳」平成十年七月、能楽出版社刊

の西田三好の項には次の記述がある。一九〇一(明三四)一一・二六七。中日新聞社に深くかかわり、敗戦後、中日五流能を名古屋を中心企画し、東京・大阪・京都・金沢・福岡など能の愛好者の多い都市に、シテ方五流の主だった人々(津中)旧制静岡高校、東京帝大文学部国文学科卒。番外論文研究の権威、啓蒙書から研究所に至る著書多数、法政、青山などで教鞭を執る。小鼓の実技者として62歳から66歳にかけて三老女を演じた。しかし三好は低額に不満な出演者の希望を呑めないで、出演者の中には出演を拒否する者も現れ、三好もむきになつ

◆春の舞台から(その一)◆

「関西観世花の会」と「名古屋能楽堂定例公演」
「豊田市能楽堂三月能」
「茂山狂言会 春」

竹尾邦太郎

「鼻」弟の太郎(小アト信明)に何やら物性が憑いたらしいのを案じ何某(アト高義)、貴い山伏(シテ又三郎)に加持を頼もうと案内を乞へば、折しも三味境に入らんとするを妨げられ「案内申すとは誰ぞら」と詰問口調のシテに聞鑿を入れず「私



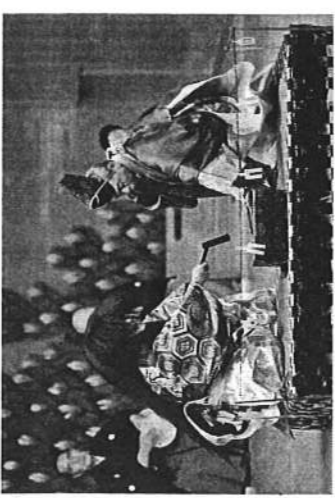
第16回関西観世花の会「鼻山伏」左よより松田高義、野村又三郎、野村信朗(杉浦賢次氏撮影)

切りになっているうちアトにも鼻の憑きものが感(写真)、果ては自身も取り憑かれ法力の虚しさ巧みせる。一頭に頂く故の兜巾帽子のため、また着流シ姿が珍しい。白大口を着けられないのはアトの類みに効々たるためであらう。

「小鍛冶・黒頭」帝の夢想に因る御剣を打つよう旨言を齎す勅使(ワキツレ幸)に恐懼する刀匠三桑宗近(ワキ殊外)、相繼に人を俾ず頼るは氏神。そこに先刻ワキの善姓知るかに呼掛る童子(シテ郁子)、小書で面・喝気・喝武驚・着着胸姿に箱籠を持つ。問答のうち二ノ松へ来たシテ、御剣のワキを見込めば、不垂するワキにシテは初回(善子・紀久子・恵子)へたと頼め、と一ノ松から運



関西観世花の会「小鍛冶・黒頭」マエ 前野郁子



関西観世花の会「小鍛冶」アト 前野郁子(杉浦賢次氏撮影)

と出し舞台へ、大小前に箱籠を置き下居。クリ・サシに漢家の剣の威徳を、ケセに本朝は草薙剣の靈剣を説きワキを励ます。

二ノ上々端まえへ遠山にかゝる薄雲を、遠か右前方へ眺める風趣が一転、裏に火を掛けられキツと面切るところへ(薄は)剣を抜いて、と箱籠を手にへ(刃を私ひ)忽ちに、サッと立ち四方の草を薙き払わんとするところ(写真)、気魄充分。へ天に輝き地に光ち響らして、の面腹には四散する敵の姿へ失せてげり、とワキへアシラフところに余裕。へ只今汝が打つべき、と箱籠でワキを指して出へ(心易くも)思ひて下向し給へ、と正中下居、ワキを見据えるのもワキに自信を持たせるため。素姓問われてシテ、「よし誰とでも(たゞ頼め)」とワキへアシラと中人地へ通力身の身を窺うちに二ノ松へ来たシテ、御剣の身を確認走り込む。ワキも退き、下人(アト又三郎)がこれまでの経緯を立シヤベリに、作業台の「用意仕り候へ」と触れて退くと後場。

藝装を改め、ノットに台上のワキ、幣を執り神妙に語出すとへ願はくは、と地が受けへ率士の(勅命に)、と居立ち頭を垂れ、へさあはば、と幣を左右に敲いへ天に仰ぎ、と幣上げ後ろに倒しへ(丹敷聞き入れ)納受せしめ給へや、で幣を載き頭を下げ、へ謹上再拝、台を下りる。ワキの謹直より上々、肅然とした空気に

礼、小刻みに足を掻き一ノ松へ走り、乗込み残り留メ。厚みのある全女性陣の地謡と相俣つて、キビしくと小気味よい舞台だった。(56分・2月18日・第16回関西観世花の会・名古屋能楽堂)

「桝山伏」茶屋(小アト友彦)に憩う桝直(アト融)後から来た山伏(シテ清造)が茶の湯加減が熱いの、ぬるいの、と茶屋に文句をつけるのに、差し出口を利いたばかりにトバツチリを受けて絡まれ、厚箱を持つよう強制されるが頑固に抵抗、成がかない。驕きの一帯は茶屋にもあること、茶屋は所蔵の大黒天(子方善犬)を双方に折らせ、影向(来聴)される大黒天に慕われた方を勝とすれば、へ謹上再拝、と囃子にかゝつて折る桝直を奪う大黒天。折くてはならじとへボロランへ、と折棒する山伏はさつぽを向かれ、鍔で押し連られ(写真)、果ては大黒天に迫込まれる。

アトは曲名に桝直とは言うもの、おれや磨などを各戸に配り、参詣者の案内や宿泊を業とする御頭、当然、口を入れたがる性(さが)なら、野や山に伏して岩木を枕とする山伏は、勢い街連に出て人に言えば善犬に振舞い自立ちたがるのかも。靖治・融、役に遭い、大黒天・善犬の可憐がシテを食う。(34分)

「隅田川」シテ饒。定例公演で本曲を平成15年に勤めてをり一回目。先回は狂と毎に小さな幣が三ツ付けてあ

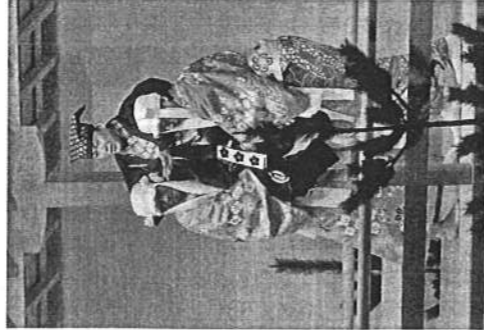
④面へつづく)



名古屋能楽堂三月定例公演「禰山山伏」
左よより井上誓太、佐藤友彦
(杉浦賢次氏撮影)



「隅田川」
左よより長田麟、後藤有哉



豊田市民能楽堂三月月能「禰太郎」
左よより茂山千三郎、茂山逸平
(杉浦賢次氏撮影)

⑤面よりつきまじり、我が子を探し求める神頼みの切妻を思ったが、今回は付けていない。カケリの、未だ我が子に巡り会えぬ狂おしさは千里を行くも親心、地(政允・彬・浩之ら)に揺曳、切ない。渡守(ワキ雅介)に乗船を乞うシテ、問答に「狂女なれども都の人とて、名に負ひたる優しさよ」のワキの言葉を耳にとめ、思い出される業平の一首。「かの業平もこの渡りにてへ名にし負はばい言問はん都鳥我が思ふ人はありや、と言いかげハツと前方に目を遣り、一機の望みに我が子を求める面使との微妙、芸勅をみる。白い水鳥に掻き立てられる我が子への思いを、業平が妻を思ふ心に重ねるシテ、ワキ掛合は、それを受ける地も好調。へ思へば限りなく遠くも来ぬるものかな、とワキ正から拳を見込み風情に覺える虚しさ。へさりとは、とワキへ笹で二ツ打つ様に向かい、へ舞せさせ給へ、と正中下居。笹で一ツ床を打ち、乗せて飛び給へ、の合巻は必死の哀願。ワキが「如何に旅人舟に召され候へ」とワキツレも促すと、「心得候」と立ちシテの斜め後ろに下居。ワキツレがワキと同装で葉袍上十の場合を見ることがあるが、今回は大口・樹葉袍で舞台の景が見栄えするのが良く(写真)、ワキの船中ノ語になる。淡々と語るうた徐々に情味が加わり、しみみりしてしてくところ、ワキ巧味をみせる。「生死の習ひ空しくなりて」でシテがひつそりとシテところ、ワキが話に気が入

り、船が着くのに「や」と氣づく呼吸(タイミング)も上々。「上がり候へ」とワキに促されてシテ、暫くは動けず、静かにシテ、解くと不安が現実になるのを恐れつ、も「なう〜今の御物語は」と曇り掛けるように拳を置してゆくシテ、ワキ問答が素直らしい。へそれは正しき我が子にて候へ、と安座双シテの悲嘆に、「さては御身の子」とワキが思わず放す棒の、大きな音が正に響き、ワキの介添にシテ解いて立つと塚の前、クドキはへさりりとはは人々、とキツとワキへ向き、へこの士を返して、と迫り、へ(この世の姿を)母に見せさせ給へや、と退つて下居、面伏せるところ願いは切実。へ残りてもかひあるべきは、と静かに直ルと返し句にはワキも下居。老少不定は世世の無常を我が身に體感すればへげに目の前の浮世、を慨嘆、安座双シテリ落胆。

念佛の段は、ひたすら淋しく悲しいシテもへ南無や西方極樂、とワキとの連吟に束の間我我。子の声を聞き始め、へ今一声こそ、



名古屋能楽堂三月定例公演
「隅田川」
前よより長田麟、橋本幸、飯置雅介

と鉦を打ち、塚から現われる子がへ幻に見えければ、揮木とり落して追う刃り心持ちよく表われる。へ我が子と見えしは、と塚を眺め、へ塚の上の草、に触れんと右手を差し伸べ近寄ると、へ茫然として、と左手で草を撫でさすりへたま、地一杯うきトメ。激憤を抑えて沁々と、後にしんとくる力の籠つた好舞台だった。雌子は誠・孝一郎・鉦一。(1時間20分・3月3日、名古屋能楽堂三月定例公演)

「禰太郎」

訴訟叶つて三年ぶりに西国から帰京の禰太郎(シテ十三郎)、先づ幼馴染として妻(アド逸平)の許へ戻るが、刃りの若い衆の悪さと勘繰られ、便りも無かつたを理由に棒使いを舞にしたと取り合つて貰えず、それを激怒すればへげに目の前の浮世、を慨嘆、安座双シテリ落胆。

念佛の段は、ひたすら淋しく悲しいシテもへ南無や西方極樂、とワキとの連吟に束の間我我。子の声を聞き始め、へ今一声こそ、

「田村」

句日を置かず歸のシテ。前は禁僧(ワキ雅介)に乞われて清水寺の懸起をシテ語に語り、刃りの花の名所をワキとの問答・掛合に教えなどする童子(実田村鷹ノ雲)。語は大小前で行立のま、へ今もその名に流れたる清水の、から初同(定・彬・輝久ら)が語り継ぐ。名所教えとなつて、へげに千釜に

とられたとあれこれ思ひはするもの、面当てにあつさり誓切ると南無阿彌陀佛を唱え、世捨人にならんとしてシテ作ら兼へ走り込むのが如何にも思慮の浅さ。それと知らず前後の一件交々案じる阿女、鉦を叩き南無阿彌陀佛を唱えてやって来るシテが佛門に入ったと知つて、「浅間しいていで御座る」「浅間しい事で御座る」と言い合つていくうちにシテが近づけば、内心はシテに世捨人になつて欲しい阿女、シテに懸念を述べればそこは老練なシテ、阿女を無らして焦らす意地悪。堪り兼ねて阿女が衣の袖や袂に取り纏つて修行を妨げにか、れば、その熱意に付け込みやりたし故。妻と愛人のどちらに在宅するかの日割り計算の悶着が解決すれば、阿女を巧みに操縦、手車を組ませてそれに乗り、賑やかに離れて行くところ(写真)世間も納得とはかりに見せつける積着。曲趣は時流に合わないが、いつの時代も男と女の境界、様々な問題が提起されようが、縮張るのは野暮、阿々大笑、笑いとばすのが要諦と言へば素と返されるリアクション(反動)も。つまりは話題が尽きずエンドレス...そこへ逃げるか。少々品に欠けるが大方の男のもつハリレム。大興願望、千三郎絶好調。(48分)

も換えしとはへ今、と蒸籠を手放しへこの時かや、と以心伝心にシテ、ワキ相奪ると、シテはワキの腕を掴み花の許へ引つ張つて行く心の心をみせるところ(写真)、地のへ裾の木の間に滴る月の雪も降る夜風の、で音開き、カザシて回り、善々として落花と戯れるところ、風情面白く、小柄なシテの如何にも童子ぶりである。クセはへ天も花に酔へりや、と頭を取つて貝、へ(あら面白の春へ)や、とクセ留メ一杯に下居、シテと地掛合のロンキ。へいかなる人やらん、の地にへ跡を惜しまば、とアキラと、へ(童歌無くも)思ひ給はば、で立つと中人へ、へ月のむら戸を、と橋懸へ入ると音開き、背にワキの姿意識するかに手元美しく戸を開ける型に力が籠れば、静かに兼へ退いて行く運どに悠揚迎らざる田村鷹の風格を窺わせる。ワキの求めに清水寺門前ノ者(アド洋海)、寺の謂れから田村鷹の事績までを逐一に力強く屋語に長広舌を揮つて退くと後場。茂山家一門の洋海、まだ一本調子ではあるが立派。

後シテは坂上田村鷹、宣言を受け勢州鈴鹿の鬼神退治。大小前、床几に掛かり馬の上の姿は英氣颯爽、クセ中、へ石



豊田市民能楽堂三月月能
「田村」マエ
「田村」アート
飯置雅介
長田麟・飯置雅介
長田麟
(杉浦賢次氏撮影)

山寺を、右へウケ合奪するとへ勢多の長橋踏み鳴らし、と指す廻シテ、ワキ相奪ると、シテはワキの腕を掴み花の許へ引つ張つて行く心の心をみせるところ(写真)、地のへ裾の木の間に滴る月の雪も降る夜風の、で音開き、カザシて回り、善々として落花と戯れるところ、風情面白く、小柄なシテの如何にも童子ぶりである。クセはへ天も花に酔へりや、と頭を取つて貝、へ(あら面白の春へ)や、とクセ留メ一杯に下居、シテと地掛合のロンキ。へいかなる人やらん、の地にへ跡を惜しまば、とアキラと、へ(童歌無くも)思ひ給はば、で立つと中人へ、へ月のむら戸を、と橋懸へ入ると音開き、背にワキの姿意識するかに手元美しく戸を開ける型に力が籠れば、静かに兼へ退いて行く運どに悠揚迎らざる田村鷹の風格を窺わせる。ワキの求めに清水寺門前ノ者(アド洋海)、寺の謂れから田村鷹の事績までを逐一に力強く屋語に長広舌を揮つて退くと後場。茂山家一門の洋海、まだ一本調子ではあるが立派。

の見事。深みのある地謡陣の好調と相俟つて充実した舞台だった。(1時間20分・3月10日、豊田市民能楽堂三月能)

庭を煮されてはか
なわん、と老僧(アド七五三)から花見禁僧を申し渡されて新祭意(シテ茂)、いつも見せつけた旦那衆へは、見せずはなりますまい」と質すが、禁制ときつく念を押され、ば厚直に従うだけ。しかし、いつも通り大拳やつて来た花見客(千三郎・薫・やすし・洋海・竜也・実)、禁制も次第に賑やか。その氣配にシテ、花を見るなどは言うもの、外からは拘束も出来ず奇立の一念。見なければ花に神酒を上げよと持ち掛けて、花に神酒とは、と茶化されれば「はながみと聞く時は花も神のうちではないか」と強弁するシテ、むつとするところが可笑しい。神酒を持つ一人を入れるつもりが致に押され、一向が能「鞍馬天狗」の一節へ興も迷わじ吹き続く木蔭に並み居ていざいざ花を眺めん、と朗々と謡いながら入つてくると、早速シテに盆がまわり、ざつと酒盛り。花に纏る小謡・小舞にみる茂山家一門の活きのよい肴の旨さである。實も賑わい、シテはへ神楽の夢は實にかけり、と能「道明寺」のキリを花見客の連吟で長々と舞うと、「だ〜酔ひましたので」と花の前で横臥。一回それを見て「いざ戻りませう」と立てば、「それならばおみやを差し上げませう」とシテ、一向それが、桜枝を掲げ打ち揃つて退くと、戻つた老僧が見たのは桜の木の状態。世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし(古今集)老僧の心中思いやられて哀感も。(36分)

「附子」吹く風に当つてさえ忽ち減却する猛毒、と脅しておいて附子なる物の毒を本狂忍者(シテ逸平)と次郎忍者(次アド誓吾)にさせる主(アドあきら)。附子の方から風が来た、と怯えては居ても怖い物

みださは誰しも、就中、小才の利く、好奇心の固まりの太郎冠者、次郎冠者が止めるのも聞かず「そと見うと」。風が吹いたら扇で吹き返せ、と互いに「罵け」「罵けぞ」と桶に近寄るところ雅氣全開、童心横溢、惹きつける。更には近寄るだけで足りず紐を解き、藩を取り、中を覗くことに。びくくしながら、その都度扇いでいたのだが段々図太くなり、中味が「黒うとんみりとして旨さうな物」と推量できると「行って来てう」と太郎冠者、次郎冠者がきつて止めるのをへ名残りの袖を振り切りて附子の傍にそ寄りける、と謡掛かりの熊鷹。砂糖と分れば、主の魂胆見えへくで増さも増し二人して食い出せば一湯千里、あつという間に空。こ、で太郎冠者、しつべい返しは主に一泡吹かさんと秘蔵の袖を茶碗を毀し、附子を食へ死を以て償おうの奇策。戻つた主の前で空になるまで食つたが、へ死ぬぬことの目出度さよ、の当てつけの連吟は精烈な皮肉。終始人を喰つた太郎冠者の汪洋とした大きさ、置いとかれまいと巧み取り付く次郎冠者、良いコンビだった。

「取猿」

狂者笠の大名(シテ正利)、出会った猿(次アド千五郎)に無心があることを太郎冠者(アド宗彦)を介して伝え、身に通うことなら、と猿が感えれば、どんな用とも言わずに猿は納得すくと勝手に言質を取つたつもり、「きつと一礼申しておりや」と軽く頭を下けると、大名の怒意まぎれに見せつける。大名の無心が非道ならばおみやを差し上げませう」とシテ、一向それが、桜枝を掲げ打ち揃つて退くと、戻つた老僧が見たのは桜の木の状態。世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし(古今集)老僧の心中思いやられて哀感も。(36分)

三代で動いた舞台、めでたかった。(43分・3月17日、茂山狂言会春・名古屋能楽堂)

NHK放送予定(平成24年6月~7月)

6月24日 NHK-FMラジオ才能鑑賞(日曜日6時00分~6時55分)
 6月24日 素謡「桜川」(観世流) 永島 忠修
 7月1日 素謡「草子洗小町」(観世流) 梅若長左衛門
 7月8日 素謡「融」(喜多流) 塩津哲生
 7月15日 素謡「班女」(金剛流) 種田道一
 7月22日 素謡「梅枝」(宝生流) 小倉敏克
 狂言「鴨子」(和泉流) 野村 萬

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL. 052-231-0088)

6月	17日(日)	名古屋宝生会 定式 能会	(有料)
	24日(日)	交流	(無料)
	28日(木)	平成24年度小・中学校芸術鑑賞会	(関係者)
	29日(金)	同上	
7月	1日(日)	名古屋能楽堂七月定期公演(番組①面)	(有料)
	6日(日)	名古屋能楽堂同好会「ゆかりの会」	(無料)
	8日(日)	第十三回御酒落名匠狂言会(番組①面)	(有料)
	14日(土)	百年記念鳳鳴会(番組①面)	(無料)
	15日(日)	第七回「能の旅人」(番組②面)	(有料)
	16日(月)	留也 舞会	(無料)
	21日(土)	第五回西村同門会研究能会	(有料)
	22日(日)	第六回西村同門会研究能会	(無料)
	24日(火)	25日(水)	名古屋能楽堂夏休み親子能楽教室
	29日(日)	第四回全国小学生能楽コンクール	(関係者)

能楽の友

発行能楽の友社
 名古屋市中千種区千種2丁目18-18
 (郵便番号 464-0858)
 電話 (052) 731-7983
 FAX (052) 733-2837
 振替口座 00800-6-36393
 購読料 1年 11000円
 1年 11800円
 1年 1000円
 郵送の場合

第11回 名駅新能 能「小鍛冶」狂言「六地藏」 7月29日 観世宗家来演

「名古屋名駅新能」は、ことし第11回をむかえ、きたる7月29日(日)、観世流宗家・観世清和師が来演して、JRR名古屋駅タワー

「能組」

舞雉子「絵馬」
 シテ久田勘麿、ツレ久田三津子、ツレ久田勘吉郎、笛 藤田六郎兵衛、小鼓・久田舜一郎、大鼓・河村真之介、太鼓・加藤洋輝
 地謡・梅田邦久、武田邦弘、梅田嘉宏、八神孝充、吉沢旭
 狂言「六地藏」シテ野村萬歳、アト高野和憲、小アト・野村又三

スカーフアン特設会場(JRR名古屋駅桜通口駅前広場)で開催される。開場午後五時、開演午後七時。入場は無料。ただし整理券が必要。整理券の応募方法は、往復はがきに郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、希望席数(二通二名まで)を記入のうえ、次の宛先へ送る。当選発表は、発送をもって替える。

宛先 〒553-0024 名古屋市中村区名駅町4-16大黒寺内。名古屋名駅新能実行委員会事務局。電話052・482・3380。応募締切は7月11日(水)必着。

※自由席は当日先着順。
 ホームページからの応募 URL: <http://www.tsig.jp>

「名古屋名駅新能」主催財団法人観世文庫、名古屋名駅新能実行委員会 後援 愛知県、名古屋市、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、愛知芸術文化協会ほか

特別協賛 東海旅客鉄道、トヨタ自動車、数島製パン、本州建設。

能「小鍛冶」シテ観世清和、ワキ森繁好、ワキツレ・則久英志、間狂言・佐藤友彦、笛 藤田六郎兵衛、小鼓・久田舜一郎、大鼓・河村真之介、太鼓・加藤洋輝
 後見・梅田邦久、上田公威
 地謡・上田貴弘、武田邦弘、久田勘麿、笠田昭雄、武田大志、松山幸親、八神孝充、吉沢旭

吉田城新能

7月28日 吉田城本丸広場
 豊橋市制一〇〇周年を記念して行われた吉田城新能はNPO法人三河三座によつて運営されてきたが、吉田城新能を夏の風物詩として定着させたいという声強く、広範な市民からなる実行委員会(森澤代表)が結成されることになり、きたる七月二十八日(土)吉田城本丸広場で、「宮沢賢治を現代能」をテーマに、観世流シテ方・中野直夫師による現代能「光の素足」が上演される(制作・中野直夫能の会)

プログラムは、舞雉子「山姥」狂言語り「童話、ひかりの素足」より、能「光の素足」

午後六時開場、六時半開演。
 入場料/一般三千八百円、学生千円、チケット取扱い/豊橋文化振興財団 豊川堂、精文館書店、チケットぴあ
 問い合わせ 実行委員会事務局
 NPO法人三河三座(T.E.L. 0532・32・3111)

第11回名古屋名駅新能の開催にあたって 東海旅客鉄道(株) 代表取締役会長 葛西 敬之
 名古屋名駅新能の開催を今年も迎えますことを心よりお祝い申し上げます。

名駅新能は、近代都市名古屋の玄関口であるJRR名古屋駅の一角において日本の伝統芸能である「能」が演じられる非常にユニークな催しであり、名古屋の夏を彩る風物詩として、毎年多くの方に楽しんでいただいております。回を重ね今年で11回目の開催となりましたのも、ひとえに財団法人観世文庫や名古屋名駅新能実行委員会をはじめ、地元の皆様方の尽力によるものと思います。

あわせて平成21年から始まった名古屋名駅新能全国学生コンクールも今年で4回目の開催となり、名駅新能のさらなる発展と能が若い世代へと着実に伝わりを見せていることに、協賛する一企業としても大変うれしく思っております。この大変意義深い行事が、今後も多くの皆様に親しまれることを期待いたします。

名古屋能楽堂七月定期公演

— 市民能楽セミナー —

七月一日(日) 午後二時開演
 名古屋能楽堂

解説 能の装束
 梅田邦久

狂言 薩摩守 新登 鹿島 俊宏 船頭 井上 靖浩 (和泉流) 茶屋 佐藤 友彦 後見 佐藤 融

成経 吉沢 八神 孝充 梅田 邦久
 能 俊 寛 高安 勝久 後藤 孝一郎 鹿取 希世 (観世流) 間 今枝 郁雄

後見 梅田 嘉宏 地謡 須山 幸輔 田 大志 祖父江 修一
 武田 邦弘 松山 幸親 久田 勘麿

チケット料金 主催 名古屋市中文化振興事業団 名古屋能楽堂 能楽協会名古屋支部
 前売 指定座 三〇〇〇円
 自由座 二〇〇〇円
 学生座 一〇〇〇円
 (自由席のみ当日五〇〇円増)
 取り扱い 名古屋能楽堂(052・231・0088) 柴アフレチケ02、松坂屋ほか
 チケットぴあ0570・02・9999 (Pコード4220・845)

第13回 お酒落 名匠狂言会

七月八日(日) 午後一時三十分
 名古屋能楽堂

(大蔵流)二人大名 大名 普竹 忠重 大蔵 岡村 和彦 渡瀬り 幸田 素之 後見 小林 雅敏

(和泉流)文蔵

主人 佐藤 友彦 太郎露者 今枝 郁雄 後見 大橋 則夫

(和泉流)見物左衛門

見物左衛門 野村 萬 後見 炭 光太郎

(和泉流)止動方角

太郎露者 井上 靖浩 主人 佐藤 融 馬鹿島 俊宏 後藤 孝一郎 後見 今枝 郁雄

(終演予定 十六時二十分)

主催 狂言共同社
 (チケット) 前席 B 席七〇〇〇円、A 席四〇〇〇円 (空席一〇〇〇円増)
 (取扱い) チケットぴあT.E.L.0532・32・3111
 (Pコード) 4220・1・0570・02・9999
 (ファミリー) マーティ、1・0970・02・9999
 名古屋能楽堂 (052・2331・0088)
 ナナイアバ、トクブレイガイド (052・834・8607) または 052・911・8784
 狂言共同社

百周年記念

鳳鳴会大会

七月十四日(土) 午前十時始
 名古屋能楽堂

番組

素謡 敦 盛 森 順子 武田 祥照
素謡 忠 度 坂倉 峰尾 武田 宗典
素謡 野 宮 奥田 昌人 清水 義也
松 風 関根はな恵 橋田多津子 武田 友志
仕舞 須磨源氏 田口 孝子
舞 輝之段 石川 幸子 都築 弘子
素謡 井 筒 葛谷 信子 長山 桂三
素謡 葵 上 北原麻由里 塚田 照夫 齊藤 弘美 関口 修亮
独吟 玉之段 榎木 映夫

— 一時三十分頃 —

番外一調 花 筐 武田 文志 観世新九郎
番外一調 萬 城 武田 志房 観世 元伯 藤田六郎兵衛
素謡 弱法師 鳥山 迪水 松本 千俊
舞雉子 砧 山崎 佐東子 大鼓 亀井 広忠 笛 藤田六郎兵衛 小鼓 観世新九郎
天 鼓 田岡 若子 大鼓 亀井 広忠 小鼓 観世新九郎 笛 藤田六郎兵衛 地謡 武田 宗典 坂口 貴信
淡 路 那野 晴海 大鼓 亀井 広忠 大鼓 観世 元伯 小鼓 観世新九郎 笛 竹市 孝学 地謡 関根はな恵 坂口 貴信 佐川 勝賢 長山 桂三
素謡 隅田川 武田 孝志 村瀬 豊衣子 武田 文志 佐川 勝賢
地謡 祖父江 修一 武田 友志 清水 義也 藤波 重彦

(番組②面へつづく)

演能案内

観世鏡之丞静雪 十三回忌追善能

能「鏡捨」上演
鏡仙会 6月30日上演
鏡仙会は、先代八世鏡之丞静雪の十三回忌を迎え、きたる六月三十日(土)観世能楽堂で鏡仙会特別公演として追善能を催す。午後一時三十分開演。
演能は、老女物最奥の能「鏡捨」(観世鏡之丞、能「狸々乱」(観世厚夫)。演目、演者は次のとおり。
連吟「海土」
能「鏡捨」シテ観世鏡之丞。ワキ空生欣哉。ワキツレ大日方寛、御厨誠吾、アイ山本真次郎。
笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓 亀井広忠、太鼓・

観世元伯、地頭・浅井文義。
仕舞「鏡」観世喜正「船弁慶」キリ・片山九郎右衛門
一調「勘進帳」観世清和、大鼓・亀井忠雄
狂言「無布施経」シテ野村万作、アト・石田幸雄
仕舞「花笠」クルと大槻文蔵「景清」片山幽雪、「野呂」梅若万三郎、「西行桜」梅若玄祥、「当麻」観世喜之
能「狸々乱」シテ観世厚夫、ワキ空生閑、笛・増仙幸、小鼓・観世新九郎、大鼓・柿原弘和、太鼓・金春国和、地頭・観世鏡之丞
入場料/全席指定席 正面一万二千円 聴正面八千円、中正面六千円。
問い合わせ、申し込み 鏡仙会 TEL03・3401・2285 FAX03・3401・2321 ホームページ http://www.kyogen.or.jp/

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ⑬

竹尾 邦太郎

八 「中日五流能」 ⑩

和33年度は一旦休止になる。
愛知文化講堂は昭和33年6月17日、開館式を迎えて式典のあと柿落シ記念公演に三宅藤九郎・和泉保之の「三番叟・橋懸ノ舞」、梅若六郎の仕舞「船弁慶」があり、6月29日には第一回「朝日五流能」が始動。翌年7月5日の第二回を以て終了、それとの競合を避けるためであったろうか。
昭和34年からは「中日五流能」は念願でもあったろう愛知文化講堂での大ホールの特設舞台で昭和40年まで、41年からは舞台を中日劇場に移して昭和58年まで、全28回の公演を催して全能楽界、能楽愛好家に大きな影響を与えてきたこと言を俟たない。
上演曲目数は能と狂言に限れば

たじみ能 8月25日 能「船弁慶」

「たじみ能」は、八月二十五日(土)、多治見文化会館大ホールで開催される。開演午後二時。
能組は、お話/清水寛二氏
狂言「勘繰」シテ野村又三郎、アト奥津健太郎、太郎冠者・野村信明、子方・野村さよ
能「船弁慶」前後之巻 シテ観世鏡之丞、子方・長山薫二、ワキ森常好、ワキツレ飯田善博、森常太郎、アイ野村又三郎
笛・鹿取希世、小鼓・船戸昭弘、大鼓・大倉慶之助、太鼓林雄一郎
地謡・西村高夫、岡田麗史、馬野正基、柴田稔、野村昌司、塚山桂三、谷本健吾、青木健一、後見清水寛二、安藤貴康
入場料/全席指定 一般三千円、たじもとC.L.U.B会員二千五百円、高校生以下千五百円、障がい者千五百円、取扱いり多治見市文化会館(TEL0572・23・2600)チケットぴあ(0570・02・99999、Pコード419・306)ロソンチケットイープラスなど。
多治見市文化会館は、多治見市十九町町2丁目8番地。

鳳鳴会が百周年記念大会

Table with 4 columns: 曲名, 流儀, 結社, 演奏者. Includes entries like 剛殺馬空鶴亀, 宮殿政, 八島, etc.

武田一門はじめ、社中による記念大会として多数の来会が期待されている。(番組④面)

「能」のお稽古 小学6年「社会教科書」

大阪 公益財団法人山本能楽堂(大阪市中央区徳井町一-三-1)は能の普及による教育文化活動に多年にわたり力を尽くしているが、このたび、山本真弘師が子どもたちに能の魅力を楽しみ指導した様子が、日本文教出版発行の小学校社会科用の教科書「小学社会6年(上)」の表紙の写真に掲載された。(文部科学省検定教科書)
なお、同教科書には「室町文化」として、写真つきで重要無形文化財「能」「狂言」の発展を掲載、紹介している。
「写真は小学6年教科書表紙の一部」

第六回 西村同門会研究能

七月二十二日(日) 名古屋能楽堂
十二時 ことも能楽教室 おけいこ発表会
仕舞、囃子、鼓けいこ、一口謡
開演一時
子梅千代 金春 嘉織 本田 光洋
能 藍染川 飯富 雅介 河井真之助 大野 誠
(金春流) 追善齋 原 隆大 後藤 津幸
問 今枝 郁雄
後見 高橋 孝忍 地謡 小島 芳樹 金春 穂高 本田 孝樹 水田 孝司 泉頭 尚久
宝生流 学生仕舞
舞囃子「田村」小林 隆 船戸 昭弘 山村 友子
宝生流 仕舞「葛城」「鞍馬天狗」
高安流 協仕舞「春栄」「和布刈」「羅生門」
狂言 痺 井上 寛大 井上 靖浩
(和泉流) 平塚 昭子 後見 佐藤 颯 長田 誠子
能 葵 上 岡 充 坂野 昭晃 加藤 洋輝
(喜多流) 梓の出 橋本 幸 船戸 昭弘 大野 誠
問 大橋 則夫
後見 長田 誠 地謡 竹田 加藤 領一 伊藤 英毅 加藤 誠子 黒野 安生 松井 俊介
主催 島方高安流 西村同門会 代表 飯富雅介
「入場無料」 連絡先 名古屋瑞穂区山町二-四四 052-185-1007

②面より「鳳鳴会」番組つづき

番外一調 笹之段 武田 友志 亀井 広忠
仕舞 賀 茂 白石 雅彦
網道明 伊東 秀人
之段 北原麻由里 太鼓 観世 元伯
舞囃子 羽 衣 沢田 房枝 大鼓 亀井 広忠 太鼓 観世 元伯 和音之舞 小鼓 観世新九郎 藤原 藤田 兵衛
地謡 関根 はな恵 清水 義也 佐川 勝貴 松木 千俊
唐 船 鳥山 迪水 大鼓 亀井 広忠 太鼓 観世 元伯 小鼓 観世新九郎 笛 竹市 学
地謡 武田 祥照 祖父 江修一 佐川 勝貴 坂口 貴信
養 老 橋田多津子 大鼓 亀井 広忠 太鼓 観世 元伯 小鼓 観世新九郎 笛 竹市 学
和音之舞 小鼓 観世新九郎
地謡 関根 はな恵 武田 宗典 佐川 勝貴 長山 佳三
素謡 鉢 木 武田 文志 松井 弘 坂口 貴信
番外仕舞 岩 船 武田 孝志 地謡 坂口 貴信 武田 宗典
「御来場歓迎」 「入場無料」
主催 鳳 鳴 会 武田 友志
「終了予定 午後五時三十分」

第七回 能の旅人

七月十五日(日) 午後二時開演 名古屋能楽堂
番組
能「屋島」について 解説 観世 喜正、河井真之介、後藤 津幸、竹市 学
一管 獅子 藤田六郎兵衛
ソノ 中所 宣夫
能 屋 島 高杉 江 元 河村真之介 竹市 学 相元 正樹 後藤 津幸
アイ 山本泰太郎
後見 高橋 真一 地謡 吉沢 宗旭 味方 駒瀬 直也 梅田 嘉宏 浦田 保規
AS 指席 五〇〇〇円
A 自由席 四〇〇〇円
S 自由席 二〇〇〇円
のうの事務所 TEL03・32266・1020
チケットぴあ 0570・02・99999 (Pコード420・375)

の奇麗な運命をクリ・サシにへ荒き渡風、とワキへアシラフところは訴えるか。クセは玉置が都に戻るも居場所無く、悩みを切腹に因らすの右近との出会いを言う居クセ、旅僧と里女、ワキとシテの「今日の逢瀬も同じ身を思へば、と玉置の成仏を願う。ロンギは、中人地へた、頼むそよ法の、とワキへアシラフ、へ申ひ給へ(我こそは)、と立つが名を明かす送り笛で消えるところ、余情。門前ノ者(アと傑絶)居語に二本の杉に纏わる玉置のことも樹切れよく克明に語って退くと後場。

ワキの回向にノ松へ現れる面女増髪・唐織附掛・付髪を玉置ノ内侍ノ亡霊(後シテ皇子)、へ恐むわたる身は、と光瀬氏が玉置に逢ひ来た歌を謡い、へ乱る、色は、で舞台へ入り、恥かしくや、と拍子二ツ、へ九十九髪、と一ツ踏むと哀歌に乱れる心をカケリ(希世・聡介・眞之介)の狂乱に。狂おしい心には少々動きに切れがなく残念だが、地と掛合にへ黒髪、と付髪しごと様は堪り見詰めたところは、恋しい昔に執着の心がよく見えた。キリ以下は八重に乱れつる、と扇二度ハネて出ると、へ影もよしなや恥かしくや、扇カサテ水鏡に眺めるところ、懺悔の心をみせ印象的だった。(1時間14分)

「井杭」 戦前の男児なら「チチンブイブイ」と呪文を唱え印を結ば隠遁の術、姿は見えず透明人間は江戸川乱歩の世界。伝伝にも古来から隠れ妻・隠れ笠、狂言「節分」でもお馴染み。さて、当令では糸り見られないが昔では大人が男児の顔を「坊主・元気が」とか、児の名が秀吉なら「秀坊、頑張ってるか」と親しみをこめて叩いた(勿論、軽く)ものだった。本曲の主人公は井杭(倉大)、目を掛けてくれる何某(ツレ麩)を訪ねる度に「井杭よう来た」と懇ろに迎えられるも、その都度顔を叩かれるのに閉口、清水観音に祈願、賜った頭巾を着けると己れの姿が何某には見えなくなると分かり、今迄の鬱憤晴らしの悪戯心。翻弄されて何某は通り掛かった算置

(シテ増造)を呼び止め、井杭の所在を突き止めさせるが、これがよく当たり、井杭もうかしくしては居られず、苦境脱出は大人の共同作戦を断つこと。悔れない子供の知恵は二人をまごつかせ、うろたえさせ、仲違いさせて果ては取っ組み合いの喧嘩をさせてしまうことに。連り過ぎを後悔する気持で「許させられい〜」と逃げた居杭、大人を喚つて素大岩好演。番組にツレとあるが、こちらがシテであろう。(27分)

「国栖」 天智天皇没後、長子の天友皇子を擁する近江朝廷と吉野に纏る皇弟の大海人皇子が六七二年夏に起こした壬申の乱を下敷きに古伊王権争いの史劇を脚色。

先づ興(正樹・孝)に乗る王(土方・眞)を先立て侍臣(ワキ勝久)が出、連行はへ御幸と思へば頼もしや、の詞草通り落ちて行くと哀歌に乱れる心をカケリ(希世・聡介・眞之介)の狂乱に。狂おしい心には少々動きに切れがなく残念だが、地と掛合にへ黒髪、と付髪しごと様は堪り見詰めたところは、恋しい昔に執着の心がよく見えた。キリ以下は八重に乱れつる、と扇二度ハネて出ると、へ影もよしなや恥かしくや、扇カサテ水鏡に眺めるところ、懺悔の心をみせ印象的だった。(1時間14分)

戦前の男児なら「チチンブイブイ」と呪文を唱え印を結ば隠遁の術、姿は見えず透明人間は江戸川乱歩の世界。伝伝にも古来から隠れ妻・隠れ笠、狂言「節分」でもお馴染み。さて、当令では糸り見られないが昔では大人が男児の顔を「坊主・元気が」とか、児の名が秀吉なら「秀坊、頑張ってるか」と親しみをこめて叩いた(勿論、軽く)ものだった。本曲の主人公は井杭(倉大)、目を掛けてくれる何某(ツレ麩)を訪ねる度に「井杭よう来た」と懇ろに迎えられるも、その都度顔を叩かれるのに閉口、清水観音に祈願、賜った頭巾を着けると己れの姿が何某には見えなくなると分かり、今迄の鬱憤晴らしの悪戯心。翻弄されて何某は通り掛かった算置

ノ松で露を取り出ると、逢柴掛に天女之舞をきれいに舞上げ、蔵王権現(後シテ増次郎)が敷斗目を被きへ小女子が、と出る。へひかれ奏つる音楽に、と一ノ松へ来ると近寄る天女。シテは掛合に、地のへ則ち姿を現して、で敷斗目を



観世会定例公演「班女・笹之伝」
マエ 梅若玄祥 (杉浦賢次氏撮影)

「班女・笹之伝」 東に下る吉田少将との一夜の契りを忘れられぬ野上ノ宿の遊女花子(シテ玄祥)、形見に交わした眞に再會を祈念するか日夜眺め入つては閉じ籠るばかり、宿ノ長(アト又三郎)の怒りを買い放逐される。アトに呼び出されるシテの、運命の重さは胸中の重苦しさ、「疾う〜早うお出やれ」と怒鳴るアトは、もどかしさに癪癪を起し、「えい、早うお出やらいそ」と強く拍子二ツ踏み脚座へ。この見舞にもひたすら黙りの常座のシテ、空気が凍る。荒々しくシテに寄るアト、「えい、まだその願を」と叩きつけて憤然となつてゆき、シテは拾い上げて両手に、沁々見詰める(写真)のが切なく、遅々とした中人は前座の不安。



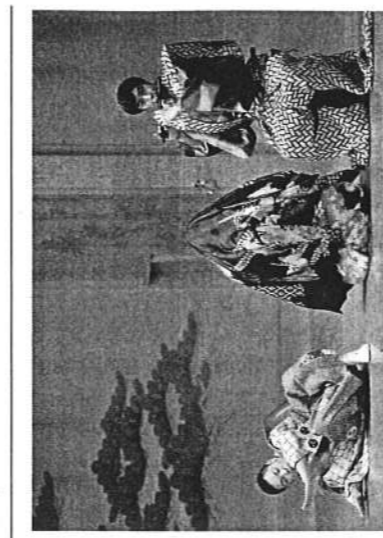
観世会定例公演「班女・笹之伝」
アト 梅若玄祥 (杉浦賢次氏撮影)

はねると、面泥大飛出・赤頭・厚板着付・半切袴袴衣(エモノ付)の姿で舞台に入る。雄壮活跳、力感溢れるスケールの大きなキリは素晴らしかつた。(1時間12分、3月18日・名古屋生学生会式能)

解落の逢柴、野上ノ宿へ寄るもシテは既に放逐されてワキを慕い焦がれ狂おしく上洛。神を頼むシテの、逢柴ぬえへのカケリは無嫌は、御手洗川は亂の森でのワキとの出会い。少将の従者(クキツル幸・正樹)の一人に呼び止められ、問答に漢の故郷は班女の秋風

に及び、思い出させられるのは男女の仲の惨さ。クセ中、へ徒し言葉の人心、と一ノ松へ、へ欄干に立ちつくと、と右手に持つ笹に左手添え、左へ薄く眺める姿(写真)の哀愁、大きなシテが艶々と見えるのも芸の力である。舞台へ戻り、へあの松をこそは、と毎で華を指シ、へ(我が待つ)人よりの誓いを、とシラトと上テ端に解ぬ身の程を、とスミからカサテ左へ廻り込み大小前、へ班女が悶ぞ羨しき、とクセ切、左袖抱きしめるかに胸へ当てるのが、連る類

観世会定例公演「吹取」左より野村又三郎・松田高義・野口隆行 (杉浦賢次氏撮影)



観世会定例公演「吹取」
左より野村又三郎・松田高義・野口隆行 (杉浦賢次氏撮影)

なくも美に艶つぽい。中之舞三段、艶深く舞上げて笹を捨て扇に(小書はクセの上テ端までを毎で、とあるが)。地(邦久・勸助・正邦ら)と掛合に、なお形見の扇を懐し、へその色衣のへ夫の約言、と一ノ松は裏勾欄へ出抜けるのが珍しく、へ秋風は、と扇を抱き、へ(かれ〜の契り)あら由なや、と諦めたように打合せ、へ羨望あるものは人心、と舞台へ戻るとへ逢柴はぞぞ恋は添ふものを、の返シ句にシラル。ワキはワキツルを介しシテの扇に関心を示すが、シテはへ人に見する事あらじ、と扇を懐中してそれを上から押さえる頑なさ。ロンギにシテ・ワキ互いに画面を見せ合う場の、シテの喜びの風情にはやつと巡り合えた安堵の気持ちのみえようだった。囃子は六郎兵衛・孝一郎・総一郎。(1時間28分)

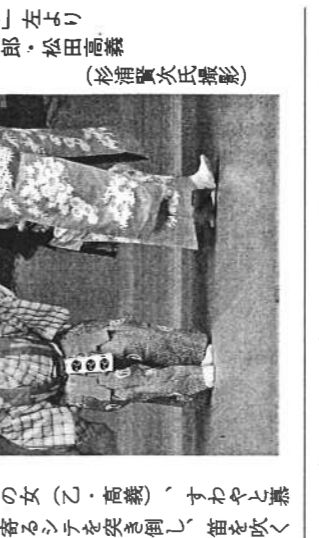
「吹取」 いをする男(シテ又三郎)、名月の夜、五条ノ橋で笛を吹き、その音につれて現れる女を妻にせよ、との誓を帯てるが笛に無調法、思案の上、日頃目を掛けてくれる笛が傳手の風流人・何某(アト隆行)に代役を依頼、橋へ回還するが何ぶん今宵は名月、心ゆくまで月を愛でるにやぶさかでないアト、早くも月の出に気付けば松に懸かる月、流れに映る月の美しさに気を取られ笛どころでない風情。早く吹いて貰いたいと焦るシテは、名月は毎年出るのが今宵は私の一大事、と急かせ喧しく催促すれば、やつと笛を取



観世会定例公演「吹取」
左より野村又三郎・松田高義・野口隆行 (杉浦賢次氏撮影)

清水観音に妻乞いをする男(シテ又三郎)、名月の夜、五条ノ橋で笛を吹き、その音につれて現れる女を妻にせよ、との誓を帯てるが笛に無調法、思案の上、日頃目を掛けてくれる笛が傳手の風流人・何某(アト隆行)に代役を依頼、橋へ回還するが何ぶん今宵は名月、心ゆくまで月を愛でるにやぶさかでないアト、早くも月の出に気付けば松に懸かる月、流れに映る月の美しさに気を取られ笛どころでない風情。早く吹いて貰いたいと焦るシテは、名月は毎年出るのが今宵は私の一大事、と急かせ喧しく催促すれば、やつと笛を取

清水観音に妻乞いをする男(シテ又三郎)、名月の夜、五条ノ橋で笛を吹き、その音につれて現れる女を妻にせよ、との誓を帯てるが笛に無調法、思案の上、日頃目を掛けてくれる笛が傳手の風流人・何某(アト隆行)に代役を依頼、橋へ回還するが何ぶん今宵は名月、心ゆくまで月を愛でるにやぶさかでないアト、早くも月の出に気付けば松に懸かる月、流れに映る月の美しさに気を取られ笛どころでない風情。早く吹いて貰いたいと焦るシテは、名月は毎年出るのが今宵は私の一大事、と急かせ喧しく催促すれば、やつと笛を取



観世会定例公演「熊坂」
清沢一政 (杉浦賢次氏撮影)

清水観音に妻乞いをする男(シテ又三郎)、名月の夜、五条ノ橋で笛を吹き、その音につれて現れる女を妻にせよ、との誓を帯てるが笛に無調法、思案の上、日頃目を掛けてくれる笛が傳手の風流人・何某(アト隆行)に代役を依頼、橋へ回還するが何ぶん今宵は名月、心ゆくまで月を愛でるにやぶさかでないアト、早くも月の出に気付けば松に懸かる月、流れに映る月の美しさに気を取られ笛どころでない風情。早く吹いて貰いたいと焦るシテは、名月は毎年出るのが今宵は私の一大事、と急かせ喧しく催促すれば、やつと笛を取

清水観音に妻乞いをする男(シテ又三郎)、名月の夜、五条ノ橋で笛を吹き、その音につれて現れる女を妻にせよ、との誓を帯てるが笛に無調法、思案の上、日頃目を掛けてくれる笛が傳手の風流人・何某(アト隆行)に代役を依頼、橋へ回還するが何ぶん今宵は名月、心ゆくまで月を愛でるにやぶさかでないアト、早くも月の出に気付けば松に懸かる月、流れに映る月の美しさに気を取られ笛どころでない風情。早く吹いて貰いたいと焦るシテは、名月は毎年出るのが今宵は私の一大事、と急かせ喧しく催促すれば、やつと笛を取

清水観音に妻乞いをする男(シテ又三郎)、名月の夜、五条ノ橋で笛を吹き、その音につれて現れる女を妻にせよ、との誓を帯てるが笛に無調法、思案の上、日頃目を掛けてくれる笛が傳手の風流人・何某(アト隆行)に代役を依頼、橋へ回還するが何ぶん今宵は名月、心ゆくまで月を愛でるにやぶさかでないアト、早くも月の出に気付けば松に懸かる月、流れに映る月の美しさに気を取られ笛どころでない風情。早く吹いて貰いたいと焦るシテは、名月は毎年出るのが今宵は私の一大事、と急かせ喧しく催促すれば、やつと笛を取

清水観音に妻乞いをする男(シテ又三郎)、名月の夜、五条ノ橋で笛を吹き、その音につれて現れる女を妻にせよ、との誓を帯てるが笛に無調法、思案の上、日頃目を掛けてくれる笛が傳手の風流人・何某(アト隆行)に代役を依頼、橋へ回還するが何ぶん今宵は名月、心ゆくまで月を愛でるにやぶさかでないアト、早くも月の出に気付けば松に懸かる月、流れに映る月の美しさに気を取られ笛どころでない風情。早く吹いて貰いたいと焦るシテは、名月は毎年出るのが今宵は私の一大事、と急かせ喧しく催促すれば、やつと笛を取

清水観音に妻乞いをする男(シテ又三郎)、名月の夜、五条ノ橋で笛を吹き、その音につれて現れる女を妻にせよ、との誓を帯てるが笛に無調法、思案の上、日頃目を掛けてくれる笛が傳手の風流人・何某(アト隆行)に代役を依頼、橋へ回還するが何ぶん今宵は名月、心ゆくまで月を愛でるにやぶさかでないアト、早くも月の出に気付けば松に懸かる月、流れに映る月の美しさに気を取られ笛どころでない風情。早く吹いて貰いたいと焦るシテは、名月は毎年出るのが今宵は私の一大事、と急かせ喧しく催促すれば、やつと笛を取

清水観音に妻乞いをする男(シテ又三郎)、名月の夜、五条ノ橋で笛を吹き、その音につれて現れる女を妻にせよ、との誓を帯てるが笛に無調法、思案の上、日頃目を掛けてくれる笛が傳手の風流人・何某(アト隆行)に代役を依頼、橋へ回還するが何ぶん今宵は名月、心ゆくまで月を愛でるにやぶさかでないアト、早くも月の出に気付けば松に懸かる月、流れに映る月の美しさに気を取られ笛どころでない風情。早く吹いて貰いたいと焦るシテは、名月は毎年出るのが今宵は私の一大事、と急かせ喧しく催促すれば、やつと笛を取

NHK放送予定(平成24年7月~8月)

7月29日 NHK-FMラジオ能楽鑑賞(日曜日 6時00分~6時55分) 萬 野村 萬 野村 萬
 「種酒の酒」(和泉流) 野村 萬 野村 萬
 8月5日 シリウス人間国宝に聞く① 泉 東京文化財研究所
 宝生流 三川 泉 国立文化財機構 東京文化財研究所
 聞き手 国立文化財機構 高桑いずみ 無形文化財研究室 高桑いずみ
 8月12日 シリウス人間国宝に聞く② 忠雄 大藪方 葛野流 亀井 忠雄
 8月19日 シリウス人間国宝に聞く③ 萬 狂言方 和泉流 野村 萬
 8月26日 シリウス人間国宝に聞く④ 茂山 千作 狂言方 大藏流 茂山 千作

演能カレンダー

名古屋能楽堂 (TEL 052-231-0088)

[7月]
 21日(出) 第5回まいまい狂言会 (有料)
 22日(出) 第六回西村同門会研究会 (無料)
 24日(休) 名古屋能楽堂夏休み親子能楽教室 (関係者)(無料)

[8月]
 29日(日) 第4回全国学生能楽コンクール (関係者)(無料)
 [8月]
 5日(日) 第34回七彩色会 (無料)
 6日(月) 名古屋和泉宗家・故和泉元秀追善公演 (有料)
 11日(出) 青陽会定式能(第56期第3回) (番組②面) (有料)
 21日(火) 名古屋学生能楽連盟8月例会 (無料)
 26日(日) 衣裳正宣後援会能 (番組②面) (有料)
 [9月]
 17日(月) 名古屋観世会定例公演能 (番組②面)

能楽の友

友楽能行社

名古屋千種区千種2丁目18-18
 (郵便番号 464-0858)
 電話 (052) 731-7984
 FAX (052) 733-2837
 振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 11000円
 1年 11800円
 郵送の場合 11000円

名古屋能楽堂 開館15周年 9月2日特別公演 2部制で開催

平成24年度 **大阪新能**

8月11・12日 生国魂神社

平成24年度「大阪新能」は、八月十一日(土)八月十二日(日)の二日間、生国魂神社で開催される。午後五時半開演。

演能は次のとおり

●八月十一日(土)
 観世流能「竹生鳥」梅若猶義
 観世流能「千手」大西智久
 観世流能「安達原」山本博通他

●八月十二日(日)
 観世流能「鶴亀」国枝良雄
 宝生流半能「半郎」石屋榮都
 観世流能「船弁慶」武蔵康之他

会場 生国魂神社(大阪市天王寺区生玉町13-9)
 料金 一般三〇〇〇円、当日三五〇〇円
 学生二五〇〇円(当日のみ)

問い合わせ 生国魂神社(TEL 06-6711-0002)▷能

名古屋能楽堂は、開館十五周年を迎え、記念特別公演を九月二日(日)第一部、第二部の二部制で開催。観世流能「嵐山」金剛流能「狸々」観世流能「草子洗小町」宝生流能「岩船」喜多流仕舞東北金春流仕舞「小登」和泉流香間狂言「猿舞」和泉流狂言「養の目」などシテ方五流、狂言方総出演で祝賀する。

主催・公益財団法人名古屋文化振興事業団「名古屋能楽堂」公益財団法人能楽協会名古屋支部(番組④面)

大槻能楽堂 自主公演能

大槻能楽堂自主公演能は、八月三日(金)能「土蜘蛛」八月十八日(土)能「鶉羽」九月七日(金)能「安宅」九月二十九日(土)能「杜若」が上演される。

●八月三日(金) 能「土蜘蛛」八月十八日(土) 能「鶉羽」九月七日(金) 能「安宅」九月二十九日(土) 能「杜若」が上演される。

●八月三日(金) 午前十時始(第534回)
 狂言「仏師」(善竹陸守)
 能「土蜘蛛」(浦田保穂)
 前売二〇〇〇円、当日二五〇〇円
 ▷八月十八日(土)午後二時始(第535回)
 能「鶉羽」(赤松積英)
 前売四二〇〇円、当日四七〇〇円
 ▷九月七日(金)午後六時半開演
 狂言「左近三郎」(善竹忠一郎)
 能「安宅」勸進帳 延年之舞(大槻文蔵)

第26回 長良川新能 能「鶴」狂言「彌宜山伏」

8月31日 長良川特設舞台

歴史ある鶴飼で知られる長良川では、毎年「伝統文化の夕べ」として、「長良川新能」が開催されているが、ことしは八月三十一日(金)(開演午後五時)長良川河川敷特設舞台(岐阜クラントホテル前河原)で開催される。今回は第26回。主催は、長良川新能実行委員会・岐阜市。後援岐阜県、岐阜県教育委員会。

上演は、能「鶴」(ぬえ)白頭(片山九郎右衛門)、狂言「彌宜山伏」(井上靖造 仕舞「頼政」(観世喜正) 連吟/公孫の子どもたち、素謡/みなもと会、連調/桂会 開演午後六時、入場無料 雨天または増水時には、岐阜市民会館(岐阜市美江寺町2-1)にて開催。

問い合わせ先/岐阜市役所市民参画部男女共同参画・文化部、電話058-265-4141(内線6166)

能「善知鳥」「殺生石」梅猶会大阪能楽公演

9月1日 大阪能楽会館

梅猶会の平成24年度第3回大阪能楽公演は、九月一日(土)大阪能楽会館で開催される。(午後一時開演)

能組は次のとおり。

能「善知鳥」シテ梅若基徳、ツレ立花香美子、子方梅若利成、ワキ梅若茂十郎
 狂言「伯母ケ酒」茂山あきら、丸石やすし
 仕舞「笹之段」梅若善久「花籃」池内光之助「野宮」国枝良雄

「阿漕」井戸和男
 能「殺生石」シテ井戸良祐、ワキ広谷和夫
 研究能「玉鬘」シテ小川晴子、ワキ梅若知登

全田席、入場料前売四五〇〇円、当日券五〇〇〇円、学生前売二五〇〇円、当日券三〇〇〇円 申し込み/出演能楽師、公演会場、吉田書店、ロソンチケット (TEL 52436)

梅猶会定期能連絡所、梅若善高方(〒560-0084)豊中市新千里南町3-18-12、電話06(6831)7854

能装束・能面展

8月3日~5日 文化博物館

公益財団法人・片山家能楽・京舞保存財団主催の「第16回能装束・能面展」が八月三日(金)から八月五日(日)の三日間、京都文化博物館で開催される。入場無料。

後援は、京都府京都文化博物館、NHK京都放送局、京都新聞社、協力・立命館大学アト・リサーチセンター。

出展は、財団所蔵の能装束・能面、小物、井上流京舞の扇などの展示、ビデオ放映、パネル展示が行われる。

また、期間中、観世流能楽師および能面打の長井泰勇氏により能装束と能面についての解説が行われるほか、八月四日(土)には十松屋福井鳳錦の福井秀氏を迎え、「扇と能楽」についての講演が催される。午後二時より開催。

御 中 何

名古屋観世九皇会	観世清和	十世片山九郎右衛門	大槻清韻会	鳳鳴会	名古屋観世九皇会
観世喜正	観世清和	片山幽雪	大槻文蔵	武田友志	観世喜正
高橋 一	梅若 玄祥	浦田 保浩	梅若 猶義	武田 志房	観世喜之
高橋 一	梅若 玄祥	浦田 保浩	梅若 猶義	武田 志房	観世喜之

名古屋観世九皇会	観世清和	十世片山九郎右衛門	大槻清韻会	鳳鳴会	名古屋観世九皇会
観世喜正	観世清和	片山幽雪	大槻文蔵	武田友志	観世喜正
高橋 一	梅若 玄祥	浦田 保浩	梅若 猶義	武田 志房	観世喜之
高橋 一	梅若 玄祥	浦田 保浩	梅若 猶義	武田 志房	観世喜之

演能案内

青陽会定式能(第356回期)

八月十一日(土) 十二時半開演
名古屋能楽堂

田村 花清 仕舞 鹿高 俊裕
 声 杉江 元 河村 裕一郎 鹿取 泰世
 元 樹 船戸 昭弘
 後見 梅前野 邦久 地謡 久田三津子
 角田 尚香 武田 大志
 今次 美和 地謡 久田三津子
 角田 尚香 武田 大志

竹の子 狂言 今枝 郁雄 佐藤 友彦
 後見 鹿取 俊裕
 通野 岩 仕舞 高橋 正邦 須部 一政
 小町 宮船 梅田 邦久 渡久 一樹

鐵輪 長野 路子 井上 靖浩
 高安 勝久 河村 裕一郎 大加藤 洋輝
 杉江 元 後藤 嘉津幸 大野 誠
 後見 久田三津子 地謡 八神 孝充 武田 大志
 梅田 邦久 高橋 山神井 藤 幸親 久田 三津子 渡久 一樹 武田 大志

附祝言 主権 青陽会
 事務所 名古屋市長区一社三の二六二
 久田 勘助 事務所
 電話 〇五二七三四一六一九二

「チケット」
 前売券 二、五〇〇円、当日券 三、〇〇〇円、学生 一、五〇〇円
 取扱いは「チケットぴあ」 電話 05770・02・9999 (Pコード)
 77866・3355 URL: http://pia.jp/t
 サークルKサンクス、セブンイレブン各店舗

衣斐正宜後援会能

八月二十六日(日) 午後二時始
名古屋能楽堂

口演 「筋談説教」
 今を生きる 「親鸞聖人御一代記より
 出家・得度の段」
 有隣寺住職 相父江佳乃

能 綾鼓 内藤 飛能 衣斐 正宜
 高安 勝久 河村 真之介 加藤 洋輝
 住持 幸英 藤田 六郎 兵衛
 問 松田 高義

狂言 蟹山伏 野村 又三郎 野口 隆行 奥津 隆太郎
 後見 伴野 俊彦
 能 乱 飯富 雅久 河村 裕一郎 観世 元伯
 後藤 嘉津幸 竹市 学
 後見 衣斐 正宜 地謡 久田三津子 武田 大志
 和久 庄太郎 水川 上友 光輝 和順 優夫

「入場料」会員制五十円、学生二十円
 「お問合わせ先」
 衣斐正宜後援会事務所
 電話 052・882・5600

名古屋観世会定例公演能

九月十七日(祝) 十二時三十分始
名古屋能楽堂

能 小督 八神 孝充 吉沢 旭 梅田 邦久 地謡 久田三津子 武田 大志
 飯富 雅介 瓦 敏一 竹市 学
 後藤 嘉津幸
 問 井上 靖浩

狂言 井碯 句富 佐藤 融 新市 今枝 藤 友彦
 通行人 佐藤 友彦
 休息十五分

仕舞 清殺生石 武田 邦弘 地謡 高橋 正一 渡久 一樹 武田 大志
 能 海士 高安 勝久 河村 裕一郎 加藤 洋輝
 梅田 邦久 久田 三津子 大野 誠
 問 鹿高 俊裕

附祝言 主権 名古屋観世会
 事務所 名古屋市長区一社三の二六二
 (久田勘助方)
 TEL 052・734・6192

「有料」
 年間自由席(5枚綴) 二〇〇〇円
 当日券(自由席一回限り) 六〇〇〇円、学生券 二〇〇円

暑中御見舞 申し上げます

大西 智久
 梅若 万三郎
 観 芳 会
 観 世 芳 伸
 幽 花 会
 片 山 伸 吾
 怡 楽 会
 山 階 彌 右 衛 門
 山 階 弥 次
 久 田 観 正 会
 久 田 勘 鷗
 星 野 路 子 親 子
 武 田 謳 楽 会
 武 武 田 欣 司
 武 田 大 志 弘

橋岡 舞謡会 橋岡 久太郎
 坪内 芑路之
 荒木 功亮
 小宮 下年彦
 塚田 重章
 松原 章雄
 小倉 美美富
 橋岡 佐喜男
 野池 尚美
 島田 博人

初陽会
 武田 宗典和
 上田 観正会能楽堂
 上田 観正会 TEL 〇七八一
 六九一五五四九

梅若 善高
 春 鶯 会
 豊中市新千里南町三丁目18
 電話 〇六八三二一七八五
 166 0003 真光寺 豊中 4-27-7-988
 電話 〇三三三二一〇五七〇

松盛会
 小松 勝憲
 三重県桑名市西別所一〇六一の五
 TEL・FAX 〇五九四二二三四五八二

梅若 修一
 梅 春 会
 井戸 和男
 良祐
 〒545 004 大阪市阿倍野区文の里3-16-17
 電話 〇六二六六二二二二二九

上田 貴弘
 大 公 拓 司 介 威

橋岡 舞謡会 橋岡 久太郎
 坪内 芑路之
 荒木 功亮
 小宮 下年彦
 塚田 重章
 松原 章雄
 小倉 美美富
 橋岡 佐喜男
 野池 尚美
 島田 博人

橋岡 舞謡会 橋岡 久太郎
 坪内 芑路之
 荒木 功亮
 小宮 下年彦
 塚田 重章
 松原 章雄
 小倉 美美富
 橋岡 佐喜男
 野池 尚美
 島田 博人

中 森 貫 太
 鎌倉市長谷3-5-13

笙月会
 中 川 雅 章
 〒500 000 長浜市比叡寺町八ノ二九
 電話 〇七五五〇六三〇番

洗心会 奥村 富久子
 松盛会
 小松 勝憲
 三重県桑名市西別所一〇六一の五
 TEL・FAX 〇五九四二二三四五八二

梅若 修一
 梅 春 会
 井戸 和男
 良祐
 〒545 004 大阪市阿倍野区文の里3-16-17
 電話 〇六二六六二二二二二九

上田 貴弘
 大 公 拓 司 介 威

橋岡 舞謡会 橋岡 久太郎
 坪内 芑路之
 荒木 功亮
 小宮 下年彦
 塚田 重章
 松原 章雄
 小倉 美美富
 橋岡 佐喜男
 野池 尚美
 島田 博人

橋岡 舞謡会 橋岡 久太郎
 坪内 芑路之
 荒木 功亮
 小宮 下年彦
 塚田 重章
 松原 章雄
 小倉 美美富
 橋岡 佐喜男
 野池 尚美
 島田 博人

中 森 貫 太
 鎌倉市長谷3-5-13

笙月会
 中 川 雅 章
 〒500 000 長浜市比叡寺町八ノ二九
 電話 〇七五五〇六三〇番

洗心会 奥村 富久子
 松盛会
 小松 勝憲
 三重県桑名市西別所一〇六一の五
 TEL・FAX 〇五九四二二三四五八二

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ④④

竹尾 邦太郎

九 「梅若盛義後援会」①

表記設立に至る前段のこともを先づ記す。梅猶会を主宰する盛義の師父・猶義は明治四四年(一九一三)九月一日生、昭和四七年(一九七二)七月五日没、享年六十一歳。晩年、名古屋での猶義の活躍を列記すれば、昭和四四年六月三日、「素謡と映画の會」を丸茶カーネーション・ホール(采町ビル一階)で催す。午後五時半始で、映画は文部省特選イーストマンカラー「能・鑑賞の知識」16mm版全四巻、国際文化振興会後援のもと昭和四二年制作。番組に(映画の内登)として次のよう

「能」は、いろいろのきびしい約束ごとの上になりたつています。能の鑑賞の為の知識を身につけることは、能の限りのない深さに入つてゆく第一歩ともなるとしよう。

「能」は、遠く平安朝の頃、大和地方に起り、今から凡そ六〇〇年前、親阿弥清次、世阿弥清父子の出現によって集大成され、格調高い能精神が確立されました。世阿弥直筆の「風姿花伝」「松浦能」「二曲三体人形図」などの重要文化財、「重屋本」「光悦本」「元和卯月本」など、能六〇〇年の歴史を物語る貴重な資料が、観世宗家、法政大学能楽研究所のご好意によって、この映画で初めて公開されています。映画は更に能舞台の変遷を描き、靖国神社境内の能舞台(西本願寺(京都))にある大正九年建立の現存最古の能舞台を収録して、現代の能楽堂の独特の構造を克明に説明しています。また能の面(おもて)、装束の代表的のものを示し、能楽師が

舞台に出るまでの準備と心構えシテ、ワキ、その他の役々、地謡、後見、雛子方を舞台上に説明して、「能」の本質を分かりやすく解説してあります。最後に梅若猶義所演の能「葵上」「羽衣」をみせてこの映画「能」は終わります。

映画のあとは仕舞二番「駒之段」大嶽賢次郎「杜若」熊沢恵美子、素謡「班女」梅若猶義・梅若盛義・梅若善高、仕舞二番「鐘之段」岡田朗詠「鳩飼」梅若修一、素謡「鞍馬天狗」梅若猶義・梅若猶彦・佐藤太俊。因に会員券は全自由席、八百円、映画フィルムは頒價二万円と。

昭和四五年八月二九日(土)午後四時半始で「素謡と袴能の夕」が熱田神宮能楽殿で。番組の挨拶に「名古屋梅猶会には毎々ご後援を頂き有難く厚く御礼申し上げます。さて、例年催しております素謡会を、このたびは素謡と袴能の夕として開催させていただきます。何卒ご同好ご知己お誘い合せご後援の程お願い申し上げます。」と。番組は仕舞三番「松虫クセ」熊沢恵美子「善知鳥」久田秀雄「兩恋置」佐藤太俊、素謡三番「俊寛」梅若修一・大嶽賢次郎(ヤス)前川芳周(ナリ)梅若善高、「野宮」梅若盛義・井戸良造、「紅葉狩」梅若猶義・熊沢恵美子・岡田朗詠・井戸和男、池内光之助、袴能「阿漕」梅若猶義・西村欽也・藤田昭彦・福井啓次郎・寛弘一・助川龍夫・梅若盛義(地頭)岡田朗詠(後見)。

昭和四六年二月二日、昭和三年(一九五九)発会以来、恒例となつていた年度の名古屋梅猶

会公演で「声刈」を勤めた主宰・猶義、これが当地最後の舞台となり、昭和四七年七月五日死去、当時、三五歳だった息、盛義が梅猶会を率いることになる。

昭和四八年四月二日、猶義一周忌追善に「安宅・勸進帳」を、昭和四九年一〇月二〇日、三回忌追善の別会能に「善知鳥・春之翫・外之浜風」を手向ける。一年後、昭和五〇年二月二五日、第一回名古屋梅若盛義後援会が発足。能組は「通小町・雨夜之伝」梅若盛義・梅若修一・西村欽也・藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・寛弘一・梅若善高(地頭)岡田朗詠(後見)、狂言「呂蓮」野村又三郎・佐藤卯三郎・井上礼之助、仕舞「鞍馬天狗」梅若盛彦、能「船弁慶」重き前後之着・早妻采「梅若盛義・梅若盛弘(子方)高安滋郎・高安勝久・飯富雅介・野村又三郎、岡田朗詠(地頭)梅若善高(後見)。

「梅若盛義後援会」は東京・大塚・名古屋にあり、設立の趣意は名古屋と同年(昭和五〇年)に発足した大阪・梅若盛義後援会の第三回(昭和五二年二月三日)能組の次の「ごあいさつ」にある。

時下殊の外寒きよき好季節に皆々様益々ご健勝の趣お慶び申し上げます。梅若盛義後援会には皆様のあたたかきご支援を賜わり厚く御礼申し上げます。

さて、当会ここに第三回を迎えなお益々充実前進しております。なおおかれてはひたすらご父猶義師の後継者たらんと心挂ともに研鑽と努力を傾注しておられすでにその域に近ずかんばかりの心構えておられます。

何卒皆様には尚一層のご後援を賜りますようお願い申し上げます。梅若盛義後援会

昭和五一年一月六日、第二回名古屋・梅若盛義後援会。能組は能「花筐・置之伝」梅若盛義・梅若修一・梅若盛彦(子方)高安滋郎・西村欽也・高安勝久・飯富雅介・寛三男・後藤孝一郎・寛弘一

・親世静夫(地頭)井戸良造(後見)、狂言「竹生島参り」井上次郎・井上礼之助、舞獅子「野宮・拝留」親世静夫・藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・寛弘一・岡田朗詠(地頭)、仕舞二番「竹生島」梅若盛弘「龍虎」岡田朗詠、梅若善高、能「菊菱置、遊舞之楽」梅若盛義・西村欽也・藤田昭彦・柳原富司忠・吉田定男・助川龍夫・梅若修一(地頭)岡田朗詠(後見)。

昭和五二年一月二日、第三回・梅若盛義後援会。能組は能「野宮・拝留」梅若盛義・西村欽也・佐藤友彦・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・寛弘一・岡田朗詠(地頭)梅若善高(後見)、狂言「雁大名」井上礼之助・佐藤秀雄・井上於次郎、仕舞二番「富士太鼓」梅若善高「美盛」岡田朗詠・能「土御鉢・入道之伝」梅若盛義・梅若修一(頼光)菊池重郷(胡蝶)熊沢恵美子(トモ)高安滋郎・高安勝久・飯富雅介・大野弘一・寛三男・後藤孝一郎・寛弘一・助川龍夫・梅若善高(地頭)岡田朗詠(後見)。

昭和五三年七月、「梅若盛義後援会」入会のご願いの刷物が後援会々長・森田茂、副会長・水上勉の連名で出される。

曰く「新秋發朗の候、皆々様には益々ご清祥の御事とお慶び申し上げます。さて、梅若盛義後援会も、発足以来十数年(東京では少なくとも昭和三〇年代後半から四〇年代にかけて発足、名古屋・大阪は昭和五〇年に立ち上げられた)、皆様方の温かいご支援のお蔭をもちまして過分の盛況裡に会を重ねて参りました事を厚く御礼申し上げます。

つきましては、故 梅若猶義師七回忌を機会に、後継者梅若盛義師が、古典芸能者として祖父伝来の芸術保持とその発展のために、更に精進と大成を希い、後援会も一新して支援環境の一層の充実・拡大を企図するすることに致しました。

何卒御賛同の上、有縁の方々にも御誘い賜り、本会への御入会を(㊦回つづく)

暑中御見舞 申し上げます	
賀水会 桑名賀水会 名鉄百貨店友の会	加賀敏彦
観修会 祖父江 修一 〒507 岐阜県多治見市日ノ出町2の2 電話〇五七二二三二五六六	辰巳満次郎
幸謡会 近藤 幸江 〒441 岡崎市鳴田本町十一番地ノ三 電話(〇五七四) 〇五五二九	佐野由於
千早会 八神 孝充 〒464 名古屋手禮池町2-1-9 電話・FAX(〇五二)七五三三四二一九	倉本 雅
桜月会 加藤 春枝 〒509 岐阜県可児市鼻ヶ丘3-1-113 電話(〇五七四) 六四一三〇六	司 宝 会 佐藤耕司
名古屋宝生会	金 剛 永 謹 龍 謹
宝生和英	廣田鑑賞会 廣田 陞 一 廣田 幸 稔
近藤乾之助 〒170 東京都豊島区巣鴨五十一三三八 電話〇三(三五)五二一三七六番	廣田 幸 稔

惠美寿会 衣斐正宜 衣斐正宜後援会	松野恭憲能の会 松野 恭 憲
名古屋巽会 豊橋巽会	金剛流 今井清隆 今井克紀
豊嶋能の会 豊嶋 春 会	金剛流 宇高 通 成 宇高 徳 成
金 剛 永 謹 龍 謹	シテ方金春流宗家 金 春 安 明
廣田鑑賞会 廣田 陞 一 廣田 幸 稔	本 田 光 洋 〒164 東京都中野区上高田二二五ノ二 電話〇三(三五)八六二五六二番
菊 之 会 廣 田 泰 三 廣 田 泰 能	松野恭憲能の会 松野 恭 憲

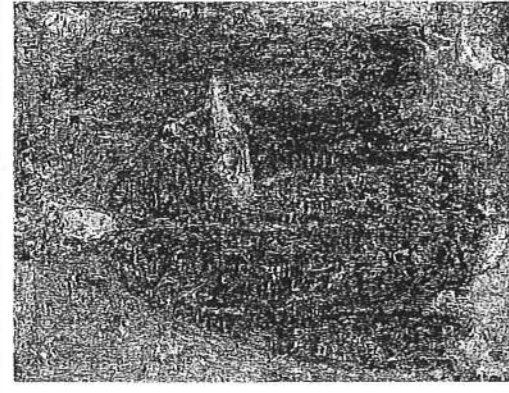
名古屋能楽堂開館15周年記念

九月特別公演

九月二日(日) 名古屋能楽堂

Table of performance details including cast members and roles for the September special performance at Nagoya Nohkaido.

Table of performance details for the second part of the September special performance.



「黒川能中之舞」森田 茂 (第20回日展)



「新能」井手宣通 (第7回日展)

梅若盛義後援会の趣旨
一、趣旨 本会は、梅若盛義後援会と称し、梅若盛義師が、伝統芸能者として、能楽の正しい伝承・向上発展のために精進を重ね大成することを希い、師を敬愛し支援する人々

一、事業 (一)梅若盛義師の演能活動に必要な支援を行なう。(一)梅若盛義師の芸道精進の跡を会員に披露するために演能会を年一二回主催する。(一)会員相互の親睦と、能楽の鑑賞理解を深めるために必要な諸事業を行なう。

次を通り。
会長・森田 茂 副会長・水上 勉
理事・井出宣通 乾 由明
宇野千代 大石隆子
岡副鉄夫 奥田継市
金子鶴亭 木下 繁
木村隆男 實永直樹
人員補部 日比野五風

昭和五三年二月五日、例年一月に催されてきた名古屋・梅若盛義後援会、此の年は師父・猶義七回忌に当り梅若猶義七回忌追善能楽会に替り、盛義は「葉上・梓之出・空之折」を手向ける。

昭和三十四年六月三〇日、名古屋・梅若盛義後援会は能組に催会回数を明記していないが第四回。仕舞二番「雨之段」梅若善高「旋漣」梅若修一、一調「山姥」鬼頭喜太郎、岡田朗詠(謡)、狂言「三人片輪」野村又三郎、佐藤友彦・井上礼之助・井上松次郎、舞囃子「芭蕉」観世静夫・藤田六郎兵衛、福井啓次郎・眞鍮一・岡田朗詠(地頭)、能「屋島・大事」梅若盛義・井戸和男・野村又三郎(那須真市之語)藤田昭彦、後藤孝一郎、河村総一郎、観世静夫(地頭)岡田朗詠(後見)。これまで盛義は毎回演舞二番能を続けてきたが、今回は一番、因に此の年、九月二日の大阪は三輪・白式神楽、一月六日の東京は「一齣・十三段之舞」と何れも一番だった。

何 御 中 暑

Table of names and addresses for various associations and individuals, including '金春穂高', '伊勢金春会', '長田驍後援会', '福王茂十郎', '高安勝久', '西村同門会', '谷田同門会', and '(株)大阪能楽会館'.

Table of names and addresses for various associations and individuals, including '宝生欣哉', '清水利宣', '藤田舞台', '藤田六郎兵衛', '大倉源次郎', '幸友会', '福井四郎兵衛', '福井良治', '福井聡介', '桂', '後藤孝一郎', '嘉津幸', and '船戸昭弘'.

春から初夏への舞台

梅若吉之丞一周忌 平成廿四年 度梅猶会名古屋公演「お豆腐の和らい12」と「青陽会定式能」

竹尾邦太郎

通小町

いつも木の葉や柴を持参する里女(ツレ香妻)は何者か、と訝る夏安居の備(ワキ勝久)、女は羞じらい名を明かさず市原野辺の姥とはかりで消える。面小面・榛白・白地露文袴袴付・赤地金龍目地紋菊袴袴付・高織委の艶やかな、機とあれば面深井に色無しの思わぬでもないが、中人が無く、深草少将ノ怨霊(シテ勝憲)との絡みを控え後見座にクツログ短時間色入りに替える物着もならず、里女が小町ノ幽霊とあるから承事。ワキが市原野へ出向き小町ノ霊を申うところへ一声の離子(香世・孝一郎・総一郎)で振衣のシテが舞を放れ、同時にツレも後見座から舞座へ。シテの出現を知らぬツレがワキの用いを憂げ、授戒を希すれば、早くも一ノ松に姿を見せるシテは被衣を少したくるとツレの授戒へいや叶ふまし、と被衣の下からワキを威圧へはや降り給へお備と。へ共に戒を受け給へ、とワキの意を代弁する地・修一・和男・光之助らにも、己れよければ他は知らぬ独自のツレに、振られた恨みは頑なにツレの授戒を妨げるシテ。シテとツレの掛合が旨く絡み、へ包めど我も纏に出て、の返シ向に被衣を捨てるシテ、へ尾花招かは止れかし、と招き、へさらは傾倒へ袂を取つて、と左手がつとツレの肩にかけるところ、執心の深さ如実。面覆男・黒頭・標浅黄・白襟着付・暗緑色大口・黒縹水衣の無気味は当今のストーリーのそれか。

に。へ独寝ならばへつらからし、と安座へ九十九夜なりへ(今は一夜よ)轉しや、とすつと立つと、もはや草は不要、捨てると扇を取り、へあら忙がしや、と迫る小町との逢瀬、へすははや今日も、と正先から幕へ見込んだ姿が佳。袈衣の品のよい着こなし、飲酒はどのようなか、の思いを巡らす心か。

シテの生真面目な舞台に絡む芯の強いツレの旨さが光る。ワキへの合掌留メ。蛇足 小町の酷い仕打ちに耐えてきた深草少将が、唯一念の悟りであつさり小町と共に成佛するのは聊か不条理では。(1時間)

三千石

無断欠勤の太郎冠者(アト 龍) 聞けば都見物と分り激怒する主(シテ友彦)も都の様子は知らない。問われて太郎冠者、都ではやる「三千石」の話を聞かせれば、主は耳にしたくもないといつた態度にそっぽを向くばかりが、到頭文字通り頭に来る。空気の読めない太郎冠者に苛立ち、頭に来た理由を滔々と語る主の、忿激運る方ない口吻は如何にも。

「三千石」は先祖が合戦前に殿様の前で披露、これが勝利の前触れとなつて恩賞に与つた大事の譚、故に家の至と期印して門外不出、これを何ぞ都ではやらせた、と刀の柄に手を掛け手討ちの剣幕。そんなこと、は露知らぬ太郎冠者は隠微心算、生得の気転を利かせ、命乞ひの涙とみせて主の所作が大敵様によく似る、などと懐旧の涙に降り替える。亡父を慕ふこと一方ならぬ主の弱味に付け入り太郎冠者、まんまと命拾ひの上、調子に乗せて主の持ち物まで巻き上げてしまう。挙句、子が親

に似るは目出度い、と商人阿々大笑の笑と留メ。活きくと呼吸の合つた父子舞演の美。(27分) 「融・舞返」 小書の記載はないが「思立之出」(今合返)へ思ひ立つ心、に如何にも飄然と出る旅備(ワキ勝久)、一声で田子を担ぐ老翁(シテ猶義)が一ノ松へ出てへ塩櫃の浦さび渡る気色かな、と謡いながら田子を置くと(サシ・下歌・上歌は省く)、問答に都で汲汲を、と見始めれば、シテは果れたまよう「あら何ともなや、此処を何処と知りし召されて候ぞ」とワキを嘲笑の心。シテはワキとの問答に此処河原の院は融大臣が陸奥塩櫃の浦の景観を都に移した海辺へ池水を汲め、と舞台へ入るとへ汲汲とと思さぬや、とたしなめるところ、力が入る。著名な龍か島に目がゆけば折柄の月の出、ワキはその場の気色を我が身の上に重ね、思い出される唐詩を口ずさぬば、シテと掛合に作者の買島に及び、推が敵か、詩句を違ふ苦心はへ今目前の秋暮にあり、とシテ。ワキ同吟に作者の心に思いを馳せ、地(見一・和男・喜久ら)となり、シテの、へ霧の籠の鳥隠れ、と廊下で見廻す面使との姿が佳。

シテとワキ、出遇いから問答。掛合と息の合つた明晰な口跡にテノボの快調、響きつける。ワキの「は、主は耳にしたくもないといつた態度にそっぽを向くばかりが、到頭文字通り頭に来る。空気の読めない太郎冠者に苛立ち、頭に来た理由を滔々と語る主の、忿激運る方ない口吻は如何にも。」

「三千石」は先祖が合戦前に殿様の前で披露、これが勝利の前触れとなつて恩賞に与つた大事の譚、故に家の至と期印して門外不出、これを何ぞ都ではやらせた、と刀の柄に手を掛け手討ちの剣幕。そんなこと、は露知らぬ太郎冠者は隠微心算、生得の気転を利かせ、命乞ひの涙とみせて主の所作が大敵様によく似る、などと懐旧の涙に降り替える。亡父を慕ふこと一方ならぬ主の弱味に付け入り太郎冠者、まんまと命拾ひの上、調子に乗せて主の持ち物まで巻き上げてしまう。挙句、子が親

幸・真之介・洋舞)で颯爽と出るとへあら面白曲水の盃と、廊下へ受けたり、と両手に戴いて立つと拍子を踏み、扇畳み笠の様に持つと舞に。舞の中、袖巻キ上げ舞際まで流れ左右に小廻り、三鼓の流しで展ると向袖返シて舞右手に養子舞は三段、所作清麗で美しい。小書「舞返」で直ッて急之舞は一ノ松で舞上げるとへあら面白、と地のうちに舞台へ戻ると地と掛合にキリの型所をてきはまきと綺麗に極めへ明方の、とワキ柱へ眺め、左袖巻上げると地のうちにここの光陰に誘はれて、するくと幕へ入り、ワキが立つて常座で見送り感無メ。師父・吉之丞没後半年、一周忌通書に相応しい自信に満ちた好舞台だつた。(1時間16分・4月15日・梅若吉之丞一周忌 平成24年度梅猶会名古屋能楽公演)

縄綱

賭事に嵌つて二進も三進も行かない主(アト洋海)、到頭太郎冠者(シテあきら)を何某(次アト逸平)に質(カタ)として連れねばならぬ破目に。しかし面と向かつて事の次第を太郎冠者に申し渡すのも気が含める主、文を認め持参させれば当然何某に使われることに。文を持たせたと怪しいとは思つた太郎冠者、主命には逆らえない。主への怒りは主を困らせることに、と何某が用を申し付ければ口実を楯に悉く拒み、まんまと役立たずを演ずれば、困つた何某は金銭での舞用を主に要求する。主は一計を案じて何某と談合、賭に勝つたことにして一旦太郎冠者を戻して貰い、太郎冠者が得意の縄綱を何某に見せることにして主自身は太郎冠者の後ろで縄尻を持つて控え、途中で何某と入れ替ることに。太郎冠者は主の許に戻つてすつかり安堵、問はず語り何某方の様子のあれこれ、次第に熱を帯びて語り出し、お囚様の發委のこと、守りをさせられた幼女のことなど、活きくと傳々として語る重口暴言の数々。力のある軽妙な話術にあきらが精彩をみせれば、逸平も伍して好演。(29分)

「ダイジエラスト狂言」 鬼瓦・悪坊・神鳴・水掛堂

書て茂山千之丞の構成・演出で産声を上げ、現在まで三十数回上演を重ねるという「室町歌謡組曲 遊びをせむとや」は「闇吟集」や「宗安小唄集」などから千之丞が採った歌謡に狂言の節を付けたものを加えメドレーとして構成されたもの。大方は四拍子の伴奏で地頭を中心に七・八人で謡われるが、「ダイジエラスト狂言」は敘種の本狂言の極く短い型の見所といつたところをメドレーとしたもので、言わば「立方の狂言組曲」。起承転結がメドレー中に意図されているのか分からないが、あれよくと言う間に場面が転換してしまうので印象は希薄。いつときの面白さで余韻は残らなかった。

梟

山から戻つてから様子のおかしい兄(アト逸)を兼して法印(シテ千三郎)の許に加持を頼みに向う、弟(次アト實)、別行の仔細あるが行つてやろう、と勿体ぶる法印の所作に性格がよくでる。弟にくつたり売れか、る兄に加持を施せば、奇声を上げられ不審する法印、弟に山での様子を聞え葉の菓を下ろしたと。「皆まで言ふな」と弟を制して法印、義が悪いと断じるところ如何にも尊大。更に加持を加えれば奇声は弟へも伝染、ふらくと兄、弟と奇声を発しながら幕へ入ると、倒れて居た法印も立ち上がり、ふらくと橋へ、両手を上げ「ボホン」と一声、千三郎達者。(16分・4月20日・お豆腐の和らい12・アートピアホール)

「杜若」

都方の僧(ワキ勝久)、東へ下る途次、三河國八幡に杜若を眺め憩うところ、里女(実ハ杜若ノ精、シテ孝亮)に呼びとめられて問答に杜若を詠んだ古歌の作者を問えば、シテは前置き長く「或る人がきつばたの五文字を句の上に置き、旅の心を詠めと言ひければ、唐衣着つ、馴れにし羨しあれば逢々來ぬる旅をしせ思ふ」と詠

伺

大倉流小鼓 松月会
久田舜一郎
久田陽春子
高橋奈王子

叶石会 河村 総一郎
河村 眞之介

河村 大

石井 仁兵衛
石井 保彦

飯 嶋 六之佐

亀 井 俊一
保忠雄
実 雄

下田 文庫
こども能楽教室
東海能楽伝承会
呉竹 会
寛 鑛

〒43-0001 名古屋市中村区下米野町3-29
電話(五二)四五一九九七

御

中

暑

谷口正喜
〒602-0915 京都市上京区中立売通室町西入
室町スカイハイツ610号

青流大鼓
青耀会

上田 悟
〒501-0021 大津市緑町二四一二〇

長生会

鬼頭 義命

〒491-0001 愛知県稲沢市平和町城西四
電話(五七六)四一九六〇番

茂山 千作

千五郎

七五三

千三郎

茂山 良暢

〒600-0001 京都市左京区北白川東小倉町28
電話(七五)七〇二二〇二番
FAX(七五)七〇二二二三

大蔵 会
大蔵狂言会

大蔵 彌太郎

千太郎

基 誠

〒215-0027 神奈川県横浜市麻生区岡上邸1
TEL(四四)九九七一八七

⑤面よりつづき
み、「これ在原の業平の、この社若を詠みし歌なり」と。そしてシテ・ワキ掛合になると、八橋の社若にぞつこの業平を強調するシテ、初回(勘齋・修一・一政ら)にシテの気持もワキに馴れ親しみ、問答になつて庵へワキを誘うなど艶めく。物着に初冠(巻襷)縫笠腰巻・紫長絹の姿。クセは上ゲ端まえ、へ淺間の織なれや、と薄く上方を眺め、左へ出るのはへくゆる煙の、行方を追うか。へ(飛ぶ螢の)雲の上まで往ぬべくは、と左袖返シ雪ノ扇の姿がよく、序之舞に袖被クところも美しい。キリに正先でへ心開けて、のユークンに伸びやかさが欲しいが一体は堅実に舞上げた。(1時間16分)

「胸突」 借金を取り立てに乙アト靖造、甲(シテ)の許へ出掛け、居留守を使うをまんまと捕えて返済を迫れば、「貸すも慣い、借るも慣い」などとあれこれ言を左右にいつかな控が明かない。そのうち、はつみで胸を突かれた甲、大仰に「ア痛く」と倒れ、ば、「怪我のことぢや堪忍し居れ」と乙が許しを乞うと、甲は益々図に乗り、刃り傳らぬ悲鳴を上げるので、世間体もあり困惑する乙。「五石の米を二石許す」な

どと米の貸しを削減、最後は「米のことは許さうぞ」と乙は甲の機嫌をとるがそこが付け目の甲、要求益々エスカレートして鳥目二百匹まで全てチカラにと。こ、まてくると乙の頭も真白に、麻痺しようか。「こ、に借状がある」と甲に渡せば、構着に寝そべる姿勢でそれを見る甲(写真)、結局「ア痛く」は嘘、えげつない曲趣だが甲、乙の熱演がそれを帳消しにしたか。(23分)



青陽会「胸突」
左より 井上靖浩、佐藤 融
(撮影・杉浦賢次氏)



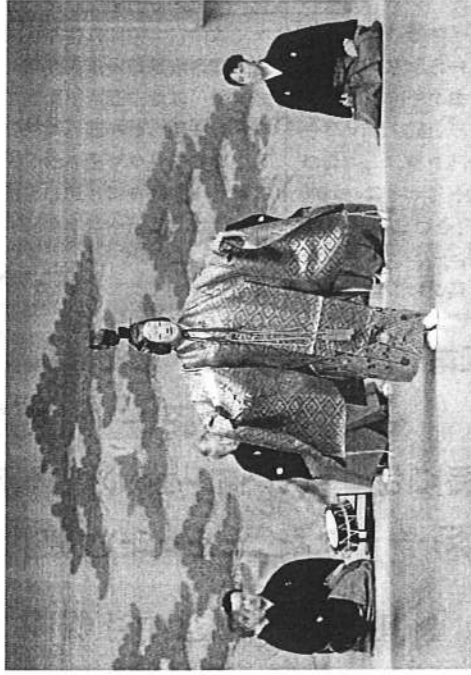
青陽会「船弁慶・前後之替」マ江 元
左より武田太志、杉江 元
(撮影・杉浦賢次氏)

「船弁慶・前後之替」

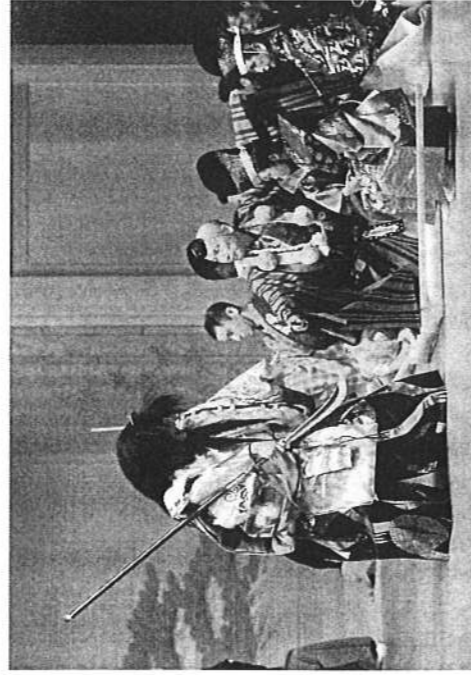
「時節を御待ちあれ」との義経の言葉伝える弁慶(ワキ元)、
「これは思ひも奇らぬ仰せかな」と替(前シテ太志)、ワキの差し金と曲解したシテに、あつさり「それはともかくもにて候」が余り感情に出ないところにワキの妙味。義経(子方・紹智)の詞に、菊の酒をへ静にこそは勧めけれ、とワキ(写真)、別れの辛さに涙

に咽ぶシテは勅を受けず、では一さしとワキに勧められ、物着に金色烏帽子を着けると舞う中之舞。二段オロシにするくと一ノ松へ抜けると勾欄に寄つて義経を見込み、背を向け膝をつき、ひつそりシヲリ、シヲリ返シして立つと舞台へ戻り、扇右手に替えて舞は三段を舞上げてワカ。へたゞ頼め、と諷い、へ舟子ども、で中正から幕を見込み、抱へ扇に出帆を急がすと烏帽子バラリと脱ぎ落して立

つと中入。一ノ松で船頭(アと郁雄)のシテの胸中を付度する立シヤベリ、配船を言うワとの問答、出帆を危惧する義経ノ従者(ワキツレ正樹)とワキの問答あつて漸く出帆。
船中は、荒天になって燃てるワキツレが禁句を言いだしてアとの怒りを買ひ、ワキに替められ、緊迫するところ獲まつける。知盛ノ怨霊(後シテ太志)は半幕で幕内の床几にかゝり、へそもくくこれは桓武天皇九代の後胤、と諷い出し、へ言をしるべに、と一日幕を下ろすと、早苗(学・轟津幸・眞之介・洋輝)でサツと幕が上がり一氣に走り出ると、地(邦弘・修一・一政ら)はへ言をしるべに、の返シ句。傳丈夫のシテの長刀捌きは大きく豪快、義経に肉迫するシテの勢いを阻止するワキ(写真)、武技では敵わず数珠を押し揉むワキにへ祈り折られ、幕際まで後退のシテは、そこで勾欄に足を掛け、頭ヲ取ツて義経を見込むと再び一氣に接近するがへ祈り退け、られキリ、へまた引くゆに、橋懸へ流され、地を残して入り残り留メになった。シテの近年の売実ぶりが楽しい。(1時間26分。5月3日・青陽会)



青陽会「杜若」
八神季充
(撮影・杉浦賢次氏)



青陽会「船弁慶・前後之替」アト
左より武田太志、今枝都雄、杉江 元、吉井紹智、橋元正樹
(撮影・杉浦賢次氏)

暑中御伺

ウシマド写真工房
牛窓正勝 雅之
〒600 京都市上京区北野上七軒
TEL07546112341
FAX07546115721

四五〇年余の伝統を護る
一色能
一色町能楽保存会
会長 吉川貞夫
〒516 001 伊勢市一色町130番地の2
電話0596255152

野村又三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎
〒490 名古屋市中区栄一1120-14
野村事務所 貸付
電話 052(355)7971
FAX052(355)7972

狂言やるまい会
野村又三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎
〒466 名古屋市中区昭和区滝川町54
サンハウス滝川3D 井上芳
F電話 052・834・8607

狂言共同社
鹿今井佐大 井上藤野 上藤野 次郎
見島枝上 藤野 弘友 菊次郎
政俊 靖靖 靖 浩融 之彦
行裕 雄雄 雄 浩融 之彦
〒466 名古屋市中区昭和区滝川町54
サンハウス滝川3D 井上芳
F電話 052・834・8607

「おこたわり」暑中広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

能楽の友社

お稽古用敷舞台
彰 諷 閣
連絡先 安城市三河安城東町一七上三
グレイシヤスヒラ安城内
電話(0566)七七八四一

葵心庵舞台
尾張旭市東本道町原田二四九三二
若杉ヒル(旭市役所南)
電話 〇五六二五③二三四六番
能舞台 電話〇五六二五④六九八

楽諷庵舞台
連絡は 名古屋市中区栄五十六一四
電話(三六二)一八三番

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五十六一四
電話(三六二)一八三番

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓 後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

NHK放送予定(平成24年8月～9月)

Table with NHK-FM radio broadcast schedule for August and September, listing dates and program names like '狂言方', '無形文化財研究', etc.

演能カレンダー

名古屋能楽堂

Calendar table for NAGOYA NOKOROJIKAN, listing dates from August to September and corresponding performance events.

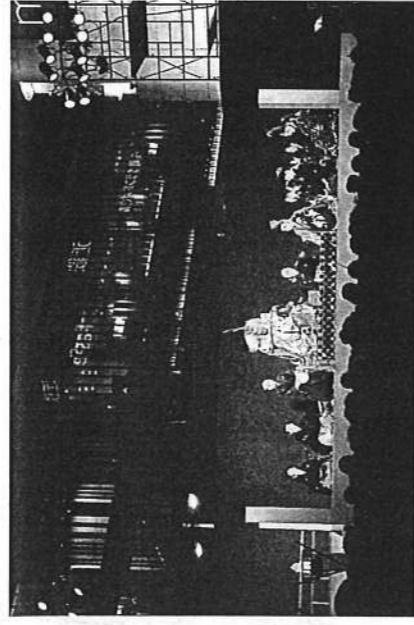
能楽の友

発行能楽の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393

第11回 名古屋名駅新能

能「小鍛冶」狂言「六地蔵」

(②面関連記事)



第6回 萬歳楽座公演

10月16日 国立能楽堂

第万歳流十一世宗家・藤田六郎兵衛衛が主催する萬歳楽座は、平成二十二年春、東京国立能楽堂で第一回公演を行い、その企画性と演能が注目され、文化賞芸術大賞を受賞しているが、きたる十月十六日(火)国立能楽堂で「第六回公演として、二喜二調音取(藤田六郎兵衛)「神楽式三番叟(双之舞(三番叟・野村万作、三番叟・野村萬斎、千歳 野村裕基)能乱(置壺、双之舞(狸々、観世清和 狸々、片山九郎右衛門、高風、宝生剛)を上演する。

「神楽式三番叟」は、藤田家所蔵の百二十余年前の演出、上演記録による初披露。

能「屋島」大事 奈須与市語上演

10月14日 第2回久田観正能

NPO法人名古屋能楽振興協会主催の「第二回久田観正能」は今年秋十月十四日(日)名古屋能楽堂で開催される。

梅枝 飯富雅介 河村真之介 鹿取希世
近藤幸江 橋本幸 船戸昭弘
野村又三郎
後見 山田 薫 吉沢 孝九郎 山本 正人
武富 康之 地謡 須部 孝九郎 赤松 慎文 榎英

能「頼政」上演

10月8日 豊田市能楽堂

豊田市能楽堂では、特別公演として、今年秋十月八日(月)紀・世阿弥の名作修羅能「頼政」を親世流シテ方・梅若玄祥師により上演する。午後二時開演、入場料は全席指定・正面席六千円、脇・中正面席四千円。

幸謡会能

九月一日(土) 午後二時開演
名古屋能楽堂

松放 下僧 小鼓 村井 邦子
風 前野 郁子
梅枝 飯富雅介 河村真之介 鹿取希世
近藤幸江 橋本幸 船戸昭弘
野村又三郎

邦謡会能

九月八日(土) 午後一時開演
名古屋能楽堂

能「養老」 飯富雅介 河村真之介 上田 学
水後之伝 橋本幸 船戸昭弘
梅田嘉宏 榎元 正樹
後見 青木 正邦 本 藤田 孝九郎 橋本 孝九郎 橋本 孝九郎

第六回 名古屋片山能

九月十五日(土) 午後二時開演
名古屋能楽堂

能「大原御幸」 片山 幽雪
能「尊」 飯富雅介 河村真之介 大野 誠
後見 梅田 嘉宏 地謡 吉沢 孝九郎 山本 正人
武田 欣司 味方 重吉 大志 武田 邦弘

能「正」 飯富雅介 河村真之介 大野 誠
後見 梅田 嘉宏 地謡 吉沢 孝九郎 山本 正人
武田 欣司 味方 重吉 大志 武田 邦弘

指定席(正面・脇正面) 五〇〇〇円
自由席(中正面・脇正面後方) 四〇〇〇円
学生席(自由席のみ) 一〇〇〇円

②面よりつづき
田茂)の主催で、能楽研究家・堀上謙が実行委員長として同行(「能楽タイムズ」昭和五十七年七月号に記事有)、近畿日本ツーリストでツアーが組まれる。公演の主旨は彼地の文化人や在ニエーヨークの邦人らを招待するものと。

そして此の年、一月二七日、今回も催能回教の明記はないが名古屋・梅若盛義後援会は第六回を数えることになる。能組は能「求塚」梅若盛義・池内光之助・井戸和男・西村欽也・佐藤友彦・寛三男・福井啓次郎・寛一・助川龍夫・岡田朗詠(地頭)井戸良造(後見)、狂言「雁鴎」井上松次郎・井上礼之助・大野弘之、能「石橋・大獅子」梅若盛義・岡田晃一・熊澤恵美子・森勝子・西村欽也・藤田明彦・後藤孝一郎・吉田定男・鬼頭喜太郎・梅若修一(地頭)岡田朗詠(後見)。

五年ぶりに独演二番能を勤めた梅若盛義は当時五四歳、名古屋・梅若盛義後援会能はこの時が最終回で、発展的解消をしたようである。以後、個人研鑽の場は八年後の平成二年に立ち上げた東京は松涛・観世能楽堂と十駄会・国立能楽堂を交互に舞台とする年二回公演の「こゝろみの会」に移したようである。

平成一四年二月には五世梅若吉之丞を襲名、講演会々長・森田茂は記念の能組案内パンフレットに次の挨拶を寄せている。

梅若盛義先生には、吉之丞様の御名を御襲名なさいまして、誠に御幸出度う存じます。猶義の御名を御襲名なさいました先生の御子息盛彦様も御幸出度う存じます。私は盛義(吉之丞)先生とは、古いおつき合いです。海外演能も教多く、とくに二十年ほど前、パリで先生がなさった能によって、日本の能を知り大いに興味を持たれた方も多いのではないでしょうか。ソルボンヌ大学のシェファール教授が大勢の学生をつれて来て御覧になったのです。パリの会場は満員、入場出来ないで並んでおる人々が何百人が居りました。当

時、パリ駐在の日本大使伊川様が大勢パリの高貴な人々を招待して下さいました。第一曲が終つて出口の扉をあけましたが、一人も帰る人がおりませんでした。当時、パリの新聞にも大きく報道されました。大成功でありました。

——中略——

梅若先生の御指導により、私は能二回、舞台上立たせていただきました。私の妻は、九回舞台上立たせていただきました。

私は、能を主題にした絵を描いておりますが、私自身が舞台上立つ事によって学んだ事も多く、先生にたいへん感謝しております。御襲名を心よりお祝いしますとともに、先生の一層の御活躍をお祈りいたします。

種遺 平成一六年は師父・梅若猶義の二三回忌にあたり、主宰する梅猶会で三月七日「半部・立花供養」を手向ける。

平成二三年、名古屋・梅若吉之丞後援会が発足、一月一九日に第一回梅若吉之丞後援会を催すにあつて春には早くも番組が出来上つていた。仕舞三番「松風」小松勝憲「敦盛キリ」立花香寿子「天鼓」井戸良祐、能「鷓鴣小町」梅若吉之丞、高安勝久、大野誠、後藤孝一郎、河村総一郎、梅若善高(地頭)上野朝義(後見)、仕舞三番「兼平」岡田晃一「江口キリ」池内光之助、善知鳥、井戸和男、狂言「木山伏」野村又三郎、松田高義・奥津健太郎・野村信朗、能「求塚」梅若猶義・梅若雅一・井戸良祐・飯富雅介・根元正樹・橋本幸・野村又三郎・鹿取希世・後藤嘉津幸・寛一・上田悟・梅若修一(地頭)梅若吉之丞(後見)、仕舞四番「連盛」梅若基徳「井筒」梅若善久「船弁慶」梅若雅一「実盛キリ」梅若善高、能「岩船」梅若秀成・福王知登・竹市学・船戸昭弘・河村眞之介、上田慎也・井戸和男(地頭)梅若吉之丞(後見)、仕舞「竹生鳥」梅若利成、舞獅子「巻紙」梅若修一・竹市学、後藤嘉津幸・河村眞之介・上田悟・梅若善高(地頭)、の大能。この能会、当初のB5割番組パンフレット表紙は、梅若吉之丞門下、準職

分の熊澤恵美子が平成二一年八月二四日に病没したのを悼み「熊澤恵美子 偲ぶ会」となつてをり、パンフレット裏に夫君の熊澤敦が次の挨拶を寄せている。

ご挨拶 五世 梅若吉之丞
梅若吉之丞後援会第一回公演
「熊澤恵美子を偲ぶ会」に
よせて

平素は 私ならびに梅猶会に色々とお力添え賜り 厚く御礼申し上げます。

この度 熊澤 敦氏の格別の御後援により梅若吉之丞後援会発足の運びと相成り、併せて会長をお願い申し、誠に力強い後援会となりましたことを感謝致しております。

第一回の公演に当たり 私が「鷓鴣小町」を 息猶義に「求塚」 孫秀成(初シテ)「岩船」をそれぞれ勤めさせていただき、三代揃つて同じ舞台上能を舞えることは光栄なことであり故人へのお手向けに思っております。

向後は 梅猶会一同 心を一つに 能楽の発展に精進いたす所存でございます。
皆様には ご用業多の折とは存じますが お誘い合わせいただきご高覧くださいようお願い申し上げます。

◆初夏から仲夏の舞台◆

「第55回やるまい会」と「名古屋能楽堂定例公演」「観世会定例公演」

竹尾邦太郎

今、環境問題などから生物の保護育成を呼び掛ける運動が話題になるが、今年の「やるまい会」は狂言に採り上げられた動物の種々相を種に「生物多様性 狂言之巻」の副題をもつ。

昔は貴重な労働力だった牛と馬、大別すれば日本の東は馬、西は牛の市だったろうか。本曲のように

牛と馬混合の市を見たことはないが、新市が立つて一番に坑に就いた者は恩典に与れるとあれば、誰しも一番乗りを競うことだろう。早速やって来たのは馬博(アト陸平)、前夜から順番を待つなどは当世でも様々な方面にみられること、場所を確保して一攫入りすれば、我こそは一番とやって来た牛博(シテ忠一郎)、既に誰

初秋の候 皆様御健勝のことと存じ上げます
この度吉之丞先生御一門のお能を一番でも多く見せて頂くために後援会を発足させました その第一回の公演としてかかる豪華で興味深いお番組を見ました

その上この会を熊澤恵美子を偲ぶ会として頂きましたことは私としては感謝の極みであります 今後とも吉之丞先生一門の益々の御繁栄を心から祈念いたします
梅若吉之丞先生後援会
会長 熊澤 敦

ところが九月八日、肝心要の熊澤敦・後援会長が病を得て急逝、催会を危惧したが直ぐにパンフレットには次の一葉が添付される。

初秋の候 皆様にはご滞拝にお越しのことと拝察申し上げます
来る十一月十九日(日)に開催の梅若吉之丞後援会 会長 熊澤敦氏におかれましてはかねてよりご養集中のところ九月八日逝去されました
謹んでお悔やみ申し上げますとともに 当会は故熊澤 敦氏のご遺思をそのままに現パンフレットによりすめさせていただきます
皆様にはご了解تامわり一

やらが居ると知れば折角の意気込みも無駄、業腹を抑えかね、牛を撃く腹からアドの上手に敵む。竹杖に白布を括つて手綱とし、黒垂を付けて牛、白垂を付けて馬、を象徴させる先人の知恵の妙は、半橋のシテが手綱を弛めて持ち、括柄のアドは手綱を締めて持つなど牛馬の動態も纏わせて傑作。

案の定シテとアドが一番乗りを争うを仲裁する目代(アト陸司)、双方の言い分を質せば夫々牛、馬の持ち味を刀裁、果ては牛・馬互いの系図争いに発展するところ「酢薑」に似る。結局、埒

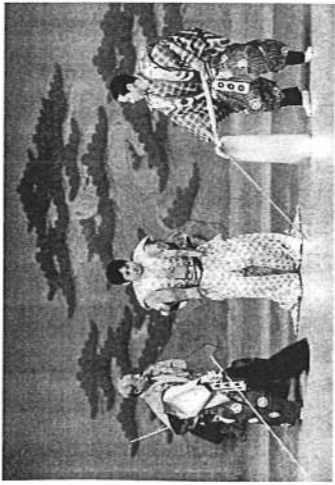
層のご後援のほどお願い申し上げます
梅若吉之丞

しかし、悲しみの中にも熊澤敦・後援会長の追悼公演を願い、舞台上に意欲をみせていた梅若吉之丞その人も既に病篤く当日の出演は不可能になり、後嗣・二世猶義が因らずも代動で秘曲「鷓鴣小町」を抜くことになる。せめて後見を勤めたかつたであろう無念、察するに余りある。記念すべき第一回後援会梅若吉之丞の強い思いでパンフレットの番組通り滞り無く済まされたが、その九日後の一月二八日、後援会長の後を追うように梅若吉之丞、五世も流しく旅立たれる。享年七三歳、長寿社会と言われる当今、いかにも若い。改めて御冥福を祈るばかりである。

当地名古屋シテの最後の舞台は平成二二年五月二日、「故熊澤恵美子追悼能の会」の「井筒・物着」七三歳。当地初演は昭和三三年九月二日、「杉浦竹翠師範一〇周年記念茶話会」仕舞「花筐」二二歳。他に昭和三四年三月二八日、「中目五流能」能「松風・見望」ツル(シテ猶義)、五月三〇日「梅猶会名古屋演能・第一回」能「船弁慶」シテ(地頭・猶義)二二歳。

皆々様にはご了解تامわり一

が明かず、この上は何ぞ勝負を賭けて、と提案する目代に、胸競べを主張するアド案が通り、勝負に加わらなければ負けとあつて己むを得ないシテ、「さあくと声を



やるまい会 「牛馬」左より善竹忠一郎、陸平(杉浦賢次氏撮影)

掛けう。三つめの声から駆け出せ」と目代(写真)。馬は「千鳥」の流鬮馬を、牛は「木六駄」の「させいほうせい」を連想させて面白かつた。善竹忠一郎一家の端正な、品位のある舞台だった。(34分)

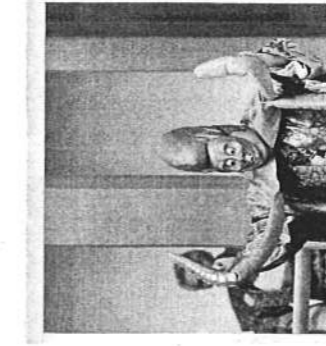
舞狂言。狂言次第(誠・大和・貞之介)で出る日回国ノ者と名乗る旅僧(ワキ高義)、駿河国清水ノ浦に着き傍らの本郡婆の陰に憩うところ、呼掛で現われる怪しげな者(シテ又三郎)、昨春この浦で身死なされたが、その九日後の一月二八日、後援会長の後を追うように梅若吉之丞、五世も流しく旅立たれる。享年七三歳、長寿社会と言われる当今、いかにも若い。改めて御冥福を祈るばかりである。

後場、ワキから本郡婆の謂れ問われて語る所ノ者(アヒ俊彦)、昨春に水揚げされて喰われた大蛸、化生となつて人々を悩ますゆえ供養に建てた、と淡々と語るが語調にもう少し勢い、力が欲しい。アトからワキも回向を勤められ、小遣にするつもりで捕つた狸をむさく取り上げられては敵わぬシテ、向きに否定したのが徒の秀向(と)、読経を始めるのは能の結語に同じ。次いで狂言一声の唾子で蛸の精(後シテ又三郎)が異形を見せ一ノ松へ。へあら有難の、と誦経を喜び、舞台へ入れればワキと問答に最期の様子を引き立てられて後ろより、とカケリを見せる。狂乱は包丁押し当てられる畏怖、地(健太郎・隆行ら)の返し句に如実である。後シテ蛸ノ精の姿は、髭頭巾・面喰吹・厚板着付・下袴(履広ガリ様)・法被(袖折込)・蛸足垂ラミタ物ヲ背負フ、全体の色、模様も蛸の疣めいてリアル(写真真)。

所作にみる軟体動物・蛸の形態模写が巧み、面白い。カケリからキリへ、姐の上に押伏せられた身を起こせば、へ四方へ躍動の、と伸されて陽に曝される苦しみを、へ只一声をなまだこ(南無阿弥陀佛)とて、とバツと飛返りに成佛の心をみせるのが鮮やか。(27分)



やるまい会 「蛸」まへ野村又三郎(杉浦賢次氏撮影)



やるまい会 「蛸」あと野村又三郎(杉浦賢次氏撮影)

「隠狸」 太郎冠者(シテ方作)が狸を勤ると聞き及ぶ主(アド幸雄)、客に狸汁を振舞おうとシテにそれを買せば、小遣にするつもりで捕つた狸をむさく取り上げられては敵わぬシテ、向きに否定したのが徒(あだ)。先烈シテの性格を知悉するアドは、それなら市で求めて

④面くつづく



やるまい会「隠狸」
左より石田幸雄、野村万作
(杉浦賢次氏撮影)

ようやくと「鶴岡」を舞い終えれば更に「兎の舞を教へて呉れい」と。拒んでも又連舞にされ、「さてよい寛へトをおだてれば相手は一枚上 小舞謡「兎」のトメの文句へ兎ちや、をへ狸ちや、と替えてアトは確りとシテの狸へ手を(写真)。

名手の阿吽の呼吸の直しきを得た好舞台。(27分)

③面よりつつき

こい、と。またシテの風評だけでは心許ないと証拠をも見つけ、シテの様子も知らうと市へ。

一方、序でにしばかりに早速捕獲してあった狸を市で売り捌いてしまおうとシテ、「狸は狸、大狸」と売り掛けは目敵く見つけるアト。何とか狸を隠し集めたいシテの焦燥、場所柄も弁えず市で持参の酒を振舞い、徐々に警戒をとかせて本音を言わせたいアトの魂胆。因より酒好きのシテ、アトと酒盛りになれば緊張も弛み、お定まりの肴に小舞。「兎」を舞うシテに「兎ばかりではない、狸が出たやうな」アトの皮肉に「訊かないことを」とまた黙す余裕のシテも、盃が進むにつれ次第に気も大きき、アトが「花の袖」を舞えば褒めそやし、「これは食えずはなりませんまい」と詠うシテ、盃の応酬に「とかく身共は手酌が好い」と酔いに慎重なアトが、もつと最い舞を是非にとシテに求めれば、腰の狸が気懸りでうつかり受けも出来ず、拒めばそれなら連舞を、とまては観念せざるを得ず、



やるまい会「犬山伏」
左より野村又三郎、野口隆行、
奥津健太郎 (杉浦賢次氏撮影)

「犬山伏」

街道の茶屋(健太郎)に憩う僧(アト隆行)、そこへ「やい(茶屋、茶を飲まう)」と居丈高にやって来た山伏(シテ又三郎)、足拍子一ツ強く踏みも示威。出された茶が熱いの微温いのちやもんを付けるのを見かねた僧が、茶屋との間に入つて執り成す賢しな態度に、苛立つ山伏は余計なお節介とはかりに激怒、腹癒せは晩の泊りまで僧に肩箱を持たせいと。強刀つれの厚箱を持つ法はない、と志は頑強な僧、仲敷に入つて茶屋(写真)が喧嘩を預り、双方に勝負で決める事に同意させ、飼犬トラ(信明)が懐いた方を勝と。先刻、茶屋から入れ知恵された僧がへなからたんのうとらやあや、と怪を唱えればトラは慕い寄り、山伏が祈禱すればトラに吠えられ散々の為体は、相折りを望んでも完敗、犬に追われる。尊大な山伏が犬に一泡吹かされるところ、親子共演がいつぞ微笑ましい。(26分・5月26日・第55回やるまい会)



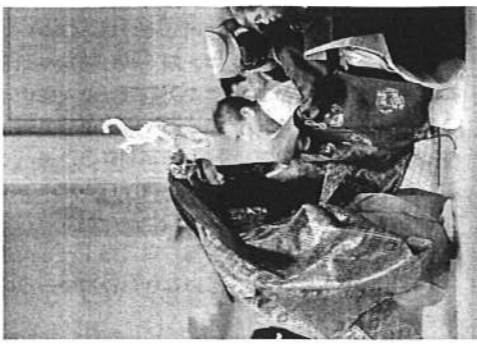
名古屋能楽堂定例公演「鬼瓦」
左より佐藤弘、大野弘之
(杉浦賢次氏撮影)

「鬼瓦」

訴訟叶て帰国の途に就く大名(シテ弘之)、在京中、上首尾にゆくことを祈願した因幡堂へ太郎冠者(アト融)を伴いお礼に参詣する。本尊業師如来の御利生を多とするシテ、国正に勧請して堂の建立を思い、建物の造作を見て回るうちに「あれは何ちや」とアトに問い、見上げるシテ(写真)。「何鬼瓦ちや」と落涙するシテを細君の面影は顔の造作の詳細を語り出し、「あの目のくるくとしてた所、また鼻のいかつた所などは其ま、では無いか」とアトの同意を求めるところなど、如何にも純朴な田舎大名の面目躍如。「一いつと笑ふた顔があの鬼瓦に似て懐しい」など大いに笑いを誘ふ。懐け下れば直ぐにもお会い出来ること、とアトに誓われ、我に返つて由無い事に落涙した、と心情一気に変わるところ可笑しい。なお堂回りの場で建築様の細部の一々詳述されらうか。(18分)

「海人」

生母が海女と知り、讃岐老彦浦へ退善のため従臣(ワキ雅介)従者(ワキツレ正樹・幸)を伴い西下の房前大臣(子方・片岡賢)一行、そこで一人の海女(シテ澄子)と出遇い、新珠島の謂れを聞いて出生の謎を知れば、「やあ、これこそ房前の大臣よ」と名乗る子方の元氣は口跡爽やかに気品も。「さては御身の上にて候ひけるそや」とシテは鎌を取り落



名古屋能楽堂定例公演「海人」
左より竹内澄子、片桐賢(子方)
(杉浦賢次氏撮影)

したが、驚きの演出だつたらうか。新珠島の謂れの因は珠取りの様を真似て君にお見せ、よ、のワキの勤めは眼目の珠之段。へ一つ

の利剣を抜き持つて、と剣に擬した扇を見詰めるどころ、意を決する心をよせてよかつたが、へ彼の海底に飛び入れれば、と地(正直・寿一・耕同ら)になり、正先からへ海邊々、と巻座の方へ、大きく両手上げ掻き分け、戻つてへ直下とみれば、と覗き見るところは、大胆に程まで進み舞台の外、下へ深々と覗く気合が欲しかった。浦人(アト靖造)がワキの呼び出しに、海女が明珠を取り戻したという伝聞を唐語に、管絃譜で亡母の霊が申される旨を触れて退くと後場。

出端の離子(学・嘉津幸・眞之介・洋輝)で龍女(後シテ澄子)が。出。面涙眼。黒垂。輪籠籠戴。楯大口。紫舞衣重折の姿、右手に扇、左手に経巻を持ち一ノ松、地が「寂寞無人声」と謡い、シテは舞台へ入るとへあら有難の御巾ひやな、と経巻を戴き、へなほく転説し給ふべし、と子方に向くとへ深達罪福相、と正に直して出、経を開き、地と掛合に読み終え、二ツ折にして子方へ渡すと(写真)、舞になる。早舞三段、手堅く舞つたという印象。子方がよく頑張つていた。(1時間25分・6月2日・名古屋能楽堂定例公演)

「頼政」

旅僧(ワキ勝久)徒僧(ワキツレ元・正樹)を伴い京から奈良への途次、宇治へ立ち寄る。僧の旅は修行もあるが大方は名所旧跡を訪ねる物見遊山、一人よりは連れ立つての方が面白く、進行も心弾も

うか。ワキ方高安流は座付制度の名残り、金剛流「頼政」にワキツレをつける(本もワキのみのこと)ので観世流の今回も。宇治では予て聞き及ぶ名所のこと、折から一老翁(シテ勘鷹)に呼び止められて尋ねれば、土地の者には新様なこと無縁と土地目億ある名所旧跡を旅僧の方から切り出せば、つい乗らざるを得ない老翁。冒頭のシテ、ワキ問答、掛合が機微を穿ち掻きつける。初回(邦弘・正邦・修一ら)へおほろくとして、立ちのぼる川霧の気色、面便と眺めやる趣が佳。ワキを平等院へ案内し、をわけて語る扇の芝のこ、頼政の年月節日に当ること、ワキとの問答、掛合に思ひの深さが。

後は在世中の姿で現れる源三位頼政(後シテ勘鷹)、治承の夏、高倉宮を擁して拳兵するも敗走、都を逃れ三井寺から南下、宇治川を挟み対峙する平氏の大軍との戦を浩厚するクセ、床几の型が見事。へ(宇治の川橋)打ち渡り、と腰を浮かせ強く拍子二ツ踏むところは追われる切迫感。へ宇治橋の中の間、と敵の通行を不可能に橋板をへ引き離し、と左袖サツと返し曇ノ扇の様に扇を前へ出



観世会定例公演「頼政」
久田勘鷹
(杉浦賢次氏撮影)

し、上方へ上げる、橋板引の割がす勢いの型(写真)、シテ語となつて、橋が渡れず、大軍が激流を物ともせずへざつくと、馬を乗り入れる型も大きく素晴らしかつた。キリはへ跡吊ひ給へ、と居立ッてワキへアシラと、立つて置りへ扇の芝の(真の藤に)、と大小前から扇をスミへ投げ(止まらず落ちた、膝をついて袖披キ、立つと右ウケ留メ拍子踏んだ。(1時間20分)

「墨塗」

訴訟叶い帰国の途に就く大名(シテ靖造)、都で馴染んだ女(小アト俊雄)を伴う。関連の訪問に嫌味や呼び止められて尋ねれば、土地の者には新様なこと無縁と土地目億ある名所旧跡を旅僧の方から切り出せば、つい乗らざるを得ない老翁。冒頭のシテ、ワキ問答、掛合が機微を穿ち掻きつける。初回(邦弘・正邦・修一ら)へおほろくとして、立ちのぼる川霧の気色、面便と眺めやる趣が佳。ワキを平等院へ案内し、をわけて語る扇の芝のこ、頼政の年月節日に当ること、ワキとの問答、掛合に思ひの深さが。

焦れたがるは太郎冠者、大名を夏、高倉宮を擁して拳兵するも敗走、都を逃れ三井寺から南下、宇治川を挟み対峙する平氏の大軍との戦を浩厚するクセ、床几の型が見事。へ(宇治の川橋)打ち渡り、と腰を浮かせ強く拍子二ツ踏むところは追われる切迫感。へ宇治橋の中の間、と敵の通行を不可能に橋板をへ引き離し、と左袖サツと返し曇ノ扇の様に扇を前へ出



観世会定例公演「船弁慶・前後之替」
左より片山九郎右衛門
(杉浦賢次氏撮影)

「船弁慶・前後之替」

静の哀れを一ノ松で立シヤベリに船頭(アト融)、舞台へ入り弁慶と問答に「然らば御沙汰次第にお船を出し候」と退くと、弁慶は立つて大小前へ。そこへ判官(ワキ雅介)は判官の諷解を得て静に同行を思い止まるよう伝えれば「これは思ひも寄らぬ仰せかな」の静の応対に、「あら事々しや」と、づいと一足出る弁慶、「御留りあるが肝要にて候」と重ねて翻意を促すが、静は弁慶の独断と曲解、直に判官へ質すと。「それはともかくもにて候」と憤然色をなす程でもないが、むつとした素懐に感臣弁慶の連る顔なさも。君の御座と分り恥じる静、それみろ、とはいやくと上へ。判官、はいやにリアルにみえた。

門出の宴は静の惜別の舞、シテ・ワキ掛合に壺を口にせず、物着に金色鳥帽子をつける。イロエは抜き、クセは上ゲ端あと、へ御身の料の無き田を、と判官の前に膝をつき、判官を見詰めるどころ切腹になり、途中で一ノ松に抜けて勾欄に寄り、判官を見込む

も弁慶に折り退けられへまた引く泣に、地を蹴して走り込んだ。後場はまぎびくした型の美しさは技の切れの素晴らしさ、堪能した。判官清盛君、梅纏は双葉より秀し。(1時間15分・6月10日・観世会定例公演)



観世会定例公演「墨塗」
左より今枝靖雄、鹿島俊裕
(杉浦賢次氏撮影)

静の哀れを一ノ松で立シヤベリに船頭(アト融)、舞台へ入り弁慶と問答に「然らば御沙汰次第にお船を出し候」と退くと、弁慶は立つて大小前へ。そこへ判官(ワキ雅介)は判官の諷解を得て静に同行を思い止まるよう伝えれば「これは思ひも寄らぬ仰せかな」の静の応対に、「あら事々しや」と、づいと一足出る弁慶、「御留りあるが肝要にて候」と重ねて翻意を促すが、静は弁慶の独断と曲解、直に判官へ質すと。「それはともかくもにて候」と憤然色をなす程でもないが、むつとした素懐に感臣弁慶の連る顔なさも。君の御座と分り恥じる静、それみろ、とはいやくと上へ。判官、はいやにリアルにみえた。

NHK放送予定(平成24年9月~10月)

9月23日 素謡 NHK-FMラジオ能楽鑑賞(日曜日 6時00分~6時55分)
 9月23日 素謡 金春流「東北」金春安明
 一調一声「三井寺」人間国宝・北村治道
 9月30日 素謡 粟谷菊生 小鼓 北村治
 10月7日 素謡 黒塚 佐々木宗生
 10月14日 素謡 黒塚 梅若紀彰
 10月21日 素謡 玉小 寶 佐野由於
 10月28日 素謡 親世流「定家」山本順之
 狂言 大蔵流「口真似」善竹忠一郎

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆
 (TEL 052-231-0088)

[9月]
 23日(日) 狂言 泉乃大
 29日(出) 狂言 泉乃大
 30日(日) 狂言 泉乃大

[10月]
 2日(火) 五世梅若吉之丞一周忌追善名古屋能楽堂大会 (有料)
 7日(日) 第二回久田観正能会 (番組①面) (無料)
 14日(日) 松田武田謡楽会 (番組②面) (無料)
 20日(出) 名古屋能楽堂十ヶ月定例公演「能・狂言と文学」 (番組②面) (無料)
 21日(日) 名古屋能楽堂十ヶ月定例公演「能・狂言と文学」 (番組②面) (無料)
 26日(金) 徳川園80周年記念・徳川さんと河村さんが語る徳川園の歴史と思い出(無料)(要整理券)
 27日(出)

能 楽 の 友

友 能 楽 の 友 社
 名古屋千種区千種2丁目18-18
 (郵便番号 464-0858)
 電話 (052) 731-7984
 F A X (052) 731-2837
 振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 11000円
 1年 11800円
 郵送の場合 11000円

義仲・巴能楽公演

10月27日 木曾文化公園
 木曾の歴史文化創造実行委員会では、十月二十七日(土)木曾町日義の木曾文化公園文化ホールで「義仲・巴能楽公演」を開催する。

源能は、喜多流能(巴)シテ大島布恵、和泉流狂言(機織)シテ井上清造、開場午後四時、開演午後五時。

共催は、木曾町、木曾町教育委員会、木曾町観光協会。

入場料二千円(全自由席)問い合わせ/木曾町観光協会(TEL 02664・222・4000)

プレイガイドは木曾町観光協会木曾福島駅前案内所(TEL 02664・222・4025)ほか全国のセブンイレブン、ローソン、ファミリーマート、サークルKなど。木曾福島駅から会場まで臨時バスも運行(約15分)

大槻能楽堂 ナイトシアター

大阪 大槻能楽堂自主公演能ナイトシアターは、11月2日午後六時半から大阪・大槻能楽堂で開催される。

お話し「浄土観と地獄観」山折哲雄氏。

狂言「朝比奈」シテ朝比奈、茂山十五郎、アト蘭魔王、茂山十三郎。

能古演出による「機織」シテ・鶴使いの老人、山本順之シテ・地獄の鬼、梅若玄祥、ワキ福王茂十郎。

大槻能楽堂事務局(TEL 06・67661・8055)。

第33回 名古屋金春会

11月4日(日) 名古屋能楽堂
 能「自然居士」「藤戸」「狂言」「太子手鉢」

名古屋能楽会・名古屋春会主催の「第三十三回名古屋金春会演能」がきたる十一月四日(日)名古屋能楽堂で開催される。午後二時開演。番組は次のとおり。

仕舞老松高橋汎「笹ノ段」佐藤俊之「藤二本田布田樹」能「自然居士」シテ金春種高、子方金春梓沙、ワキ飯富雅介、ワキッレ橋本幸、アイ・井上清浩。笛竹正学、小鼓船戸昭弘、大鼓河村総一郎、後見佐藤俊之、鬼頭尚久、地謡金春安明、吉塚徹明ほか。

「狂言」太子手鉢シテ佐藤友彦、アト今枝郁雄。
 「仕舞」笹ノ段井上真貴、「野

武蔵野大学能楽公開講座

10月4日、18日
 武蔵野大学の平成24年度能楽資料センター公開講座は、十月に2講座が開催される。

▽10月4日(木)
 「東アジアと能楽—近代国家の歩みの中で」ウイリアムズ大学准教授 A K P同志社留学センター 所長 加賀谷直子氏
 △10月18日(木)
 「観梅問題の七〇〇年—梅若流から親世流への復帰まで」シテ方親世流能楽師・日本芸術院会員、梅若六郎玄祥氏、武蔵野大学名誉教授・小林真氏、武蔵野大学客員教授・羽田純氏。

第10回 新作能面展

中部能面研究社
 中部能面研究社(徳部兼代表)主催「第10回新作能面展」が10月16日から21日まで名古屋博物館キヤラリで開催される。

小鼓方 福井良治氏

9月7日告別式執行
 能楽小鼓方幸津流 福井良治氏は九月三日心不全のため逝去した。享年58。

通夜は九月六日午後六時から、告別式は七日午前十一時三十分から名古屋千種区千種19のいちやなぎ中央斎場で執り行われ、能楽関係はじめ医界はか関係者多数が会葬した。喪主は舅長聡介氏。

市川海老蔵 古典への誘い

十月二日(火)~四日(木)
 名古屋能楽堂

一、演目・出演者
 一、オリーブニングトーク 市川海老蔵ほか
 二、半能「石橋」
 10月2日17時 片山九郎右衛門、味方 玄
 10月3日13時 梅若紀彰、味方 玄
 10月3日17時 親世喜正、武田 玄亮
 10月4日13時 片山九郎右衛門、坂口 貴信
 10月4日17時 親世喜正、林宗一郎
 特別出演 大鼓 亀井忠雄
 大鼓 亀井忠雄
 笛 藤田六郎兵衛

三、舞踊「連獅子」 市川海老蔵・中村孝太郎
 主催 中京テレビ放送
 問合せ 電話052・957・3333
 チケット料金 一三〇〇円
 販売所「チケットぴあ、ローソンチケット、愛知文化センタープレイガイド、栄アレチケ92、名古屋能楽堂、中日サービスセンター等」

五世梅若吉之丞 一周忌追善 名古屋猶諷会大会

十月七日(日) 午前九時三十分始
 名古屋能楽堂

素謡 大仏供養
 後方 花井 涼子
 プレシ 加藤 麗子
 高田 奈樹 大達 進

通小町
 山崎 淳子
 青木 弘子 森脇 康子

葵上
 松田善香子
 大井 和子 高瀬 和里
 福田 朝代

漫吟 二人静
 草別ひるみ
 森脇 康三美子

仕舞 笠之段
 木村 恵一
 熊坂 小林 正明

素謡 定遊行柳
 河合 敦子 梅若 善久
 松久 素子 梅若 善高

木賊
 子方 梅若 利成
 プレシ 梅若 利成
 久地 米玄祐 梅若 修一

舞獅子 江口
 三浦 祐子 河村 総一郎
 後見 後藤 孝一郎 鹿取 希世

敦盛
 厚見 ゆり子 河村 眞之介
 後藤 孝一郎 大野 誠

能半部
 飯富 雅介 河村 総一郎
 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛
 松田 善義

漫吟 当麻
 武原 美恵

素謡 道成寺
 神谷 千津 梅若 猶義
 梅若 雅一

仕舞 卒都婆小町 日下 佐起子
 舞獅子 花筐 熊谷 柳子 河村 総一郎 鹿取 希世
 日下 ますみ子
 飯富 雅介 河村 眞之介 上田 兵悟
 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛
 素謡 隅田川
 梅若 利成 間野 村又三郎
 安藤 美恵子 梅若 善徳 井戸 良祐

漫吟 松風
 梅若 猶義 倉田 善和子

素謡 忠度
 大林 治郎 井戸 良祐

舞獅子 羽衣
 辻 以美子 河村 眞之介 上田 兵悟
 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛 鹿取 希世
 河合 紀代美 河村 総一郎 上田 兵悟
 後藤 孝一郎 大野 誠 誠悟
 船辨 鹿島 松崎 寛子 河村 眞之介 鹿取 希世
 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛 大野 誠
 融 水野 祐利 河村 眞之介 上田 兵悟
 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛 大野 誠

番外仕舞 清経 梅若 秀成 (終了予定十八時半頃)

【御来場歓迎】 主催 猶諷会
 事務局 511-081 桑名市西別所106115
 小松勝勝方
 電話 0594・23・4582

第二回 久田観正能

十月十四日(日) 開演一時
 名古屋能楽堂

漫吟 大原御幸 久田 勘鷹
 舞獅子 船弁慶 平沙 久田 勘鷹 河村 眞之介 加藤 洋輝
 船戸 昭弘 鹿取 希世

お話し 作家
 能に描かれた源平合戦 林 望
 地謡 吉沢 上田 拓
 藤谷 晋也 下川 宜弘

能屋島

ソレ久保信一朗
 神シテ久田 勘鷹
 大 江崎 敬三 河村 総一郎 鹿取 希世
 那須 孝常 和田 英基 吉兵衛
 間 佐藤 友彦

後見 藤谷 晋也 吉沢 八神次
 下川 宜長 地謡 松山 孝允 上田 兵悟
 笠田 昭雄 山田 義高

附 祝 言

主催 NPO法人名古屋能楽振興協会
 事務局 名古屋市中東区一社31162
 TEL 052・734・6192
 FAX 052・705・1585

【チケット料金】
 前売(当日は各五〇〇円、自由席五〇〇円、学生三〇〇円)
 取扱い「名古屋能楽堂、名古屋能楽振興協会事務局、自由席はプレイガイド、二題、チケットぴあなど」



金剛

第一巻

流誌「金剛」復刊第一号

昭和廿五年三月一日、流誌「金地の流勢」欄の中「名古屋」に竹剛の復刊第一号が上梓され「各市秀雄が次の稿を寄せる。

十 「中部金剛会」 ①

竹尾 邦太郎

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ④

戦前華かだった名古屋地方の能楽界も、戦争のため散々なっていたらしくなつた。布池町の能楽堂は焼失し、楽師や流儀の住宅も焼失われ、命からかく各地に四散するのやむなきに至つた。

それでも一年後の二十二年秋には復旧のきざしが現われ、復興業障子連合会なるものがつくられた。観世、幸生、金剛三流連合で焼残つた真照宮の社務所でその第一回を催したのだが、まことにさ、やかなもので……然しその当時としては、そんな催しでも出来るようになった喜びと、往時を偲んで、涙のこぼれる思いだつた。

この連合会はその後隔月に催され、現在は流儀の大塚二邸の舞台を会場としている。

山田七三郎氏は罹災後瀬戸市に疎開したがそれを機会にこの陶器の町に新たに金剛流を開拓し、二十一年の春には、早くも神社奉納業障子連合会が催された。これはこの地方で終戦後各流連して最初の事であつた。続いて秋の十一月三日には瀬戸宮女講堂で瀬戸金剛会業障子連合会が行われます。盛大となった同年の十二月に、山田

師の遷厝を祝う業障子が名古屋市内の十州樓で催され、名古屋春集會を中心として、流儀の者が多数集まつて同師の健闘を壽いだ。これが戦後名古屋で初めての催しであつた。なお山田師は岐阜にも流儀を拡げ、岐阜金剛会の発会も見えた。

二十三年になつて定式能が復旧した。舞台は市一女の講堂で、年六回(三流交互)の催能。二十四年からは市の商工会議所樓上に特設舞台が設けられ、漸く本格的となつてきた。流儀では三月二十七日に金剛滋夫師の「花形見」と豊嶋弥左衛門師の「山姥」の二番能があり、次で五月二十二日には新に職分を許された大塚二、竹市秀雄の披露能が催され、宗家は大曲「小原御幸」を舞われ、豊嶋師は「船井慶」、大塚は「望月」竹市は「乱」をおのく披露、来援の楽師も多く盛況をきわめ、大いに流儀の氣勢をあげた。

豊嶋師の名古屋出張稽古は二十三年の早々から復活し、今につづいている。職分披露能を機に清風社(大塚)竹譚会(竹市)の二つ



竹尾邦太郎氏「私の思い出」より
松野秀風著
松野秀風著「私の思い出」より
転載

松譚会秋の会

十月二十日(土) 午前十時始
名古屋能楽堂

- 番組
- 業障子 西王母 武山美枝子 河村総一郎 大加藤洋輝
 - 業障子 熊野 木村照子 河村総一郎 大野誠
 - 業障子 鶴亀 山田肇子 河村総一郎 大野誠
 - 業障子 天鼓 深沢清子 河村総一郎 大野誠
 - 業障子 養老 橋本鏡子 河村総一郎 大野誠
 - 業障子 菊慈童 伊藤弘 牛島新博
 - 業障子 草子洗小町 白鳥茂代 河村総一郎 竹市学
 - 業障子 船弁慶 中島康子 河村総一郎 竹市学
 - 業障子 花筐 武山美枝子 河村総一郎 竹市学
 - 業障子 高砂 若山直代 河村総一郎 加藤洋輝
 - 業障子 松風 寺尾淳子 河村総一郎 竹市学
 - 業障子 狸々 小川博三 河村総一郎 加藤洋輝
- 業障子 経正 安藤嘉彦 吉田定雄
- 業障子 賀茂 林勝彦 尾身誠
- 業障子 連吟蝉丸 中村公代
- 業障子 独吟鞍馬天狗 立石良衛
- 業障子 草子洗小町 白鳥茂代 河村総一郎 竹市学
- 業障子 船弁慶 中島康子 河村総一郎 竹市学
- 業障子 花筐 武山美枝子 河村総一郎 竹市学
- 業障子 高砂 若山直代 河村総一郎 加藤洋輝
- 業障子 松風 寺尾淳子 河村総一郎 竹市学
- 業障子 狸々 小川博三 河村総一郎 加藤洋輝

武田譚楽会秋季大会

十月二十一日(日) 九時三十分始
名古屋能楽堂

- 業障子 俊寛 橋本鏡子 坂下健一

業障子 西王母 武山美枝子 河村総一郎 大加藤洋輝

業障子 熊野 木村照子 河村総一郎 大野誠

業障子 鶴亀 山田肇子 河村総一郎 大野誠

業障子 天鼓 深沢清子 河村総一郎 大野誠

業障子 養老 橋本鏡子 河村総一郎 大野誠

業障子 菊慈童 伊藤弘 牛島新博

業障子 草子洗小町 白鳥茂代 河村総一郎 竹市学

業障子 船弁慶 中島康子 河村総一郎 竹市学

業障子 花筐 武山美枝子 河村総一郎 竹市学

業障子 高砂 若山直代 河村総一郎 加藤洋輝

業障子 松風 寺尾淳子 河村総一郎 竹市学

業障子 狸々 小川博三 河村総一郎 加藤洋輝

師の遷厝を祝う業障子が名古屋市内の十州樓で催され、名古屋春集會を中心として、流儀の者が多数集まつて同師の健闘を壽いだ。これが戦後名古屋で初めての催しであつた。なお山田師は岐阜にも流儀を拡げ、岐阜金剛会の発会も見えた。

二十三年になつて定式能が復旧した。舞台は市一女の講堂で、年六回(三流交互)の催能。二十四年からは市の商工会議所樓上に特設舞台が設けられ、漸く本格的となつてきた。流儀では三月二十七日に金剛滋夫師の「花形見」と豊嶋弥左衛門師の「山姥」の二番能があり、次で五月二十二日には新に職分を許された大塚二、竹市秀雄の披露能が催され、宗家は大曲「小原御幸」を舞われ、豊嶋師は「船井慶」、大塚は「望月」竹市は「乱」をおのく披露、来援の楽師も多く盛況をきわめ、大いに流儀の氣勢をあげた。

豊嶋師の名古屋出張稽古は二十三年の早々から復活し、今につづいている。職分披露能を機に清風社(大塚)竹譚会(竹市)の二つ

- 業障子 田村 山本ますみ 川合圭子
- 業障子 敦盛衣 若林典子 水田麗子
- 業障子 高砂 齋藤忠佳 河村真之介 麦谷清一郎
- 業障子 小袖曾我 小瀬古磨己 河村真之介 藤田六郎兵衛
- 業障子 海士 岡田明子 河村真之介 麦谷清一郎
- 業障子 天鼓 片山九郎右衛門
- 業障子 七回忌退善 立花供養
- 業障子 半部 高安勝久 河村真之介 藤田六郎兵衛
- 業障子 雲林院 井出モト子 加藤愛郎
- 業障子 望月 前山桂子 長谷川邦彦
- 業障子 三笑 桑原善子 麦谷清一郎

名古屋能楽堂十月定例公演

十月二十六日(金)
午後六時三十分開演
名古屋能楽堂

- 番組
- 業障子 石神 野村又三郎 佐藤清
 - 業障子 枕慈童 飯富雅介 河村真之介 加藤洋輝
 - 業障子 石神 野村又三郎 佐藤清
 - 業障子 枕慈童 飯富雅介 河村真之介 加藤洋輝
- 入場料 前夜席定席四〇〇〇円
前夜自由席三〇〇〇円
自由席のみ当日五〇〇円増
- 取扱い 名古屋能楽堂 (TEL052-231-0088)
柴アレチケ
チケットぴあ (0570-02-9999, Pコート422
1973)

- 業障子 養老 市川敦子 河村真之介 麦谷清一郎
- 業障子 井筒 井田順子 河村真之介 藤田六郎兵衛
- 業障子 遊行柳 田中萬子 河村真之介 麦谷清一郎
- 業障子 歌占 川合圭子
- 業障子 笹之段 松陰真澄
- 業障子 女太郎花 白井京子
- 業障子 杜若 高安勝久 河村真之介 麦谷清一郎
- 業障子 通小町 加藤愛郎
- 業障子 山姥 井田順子 阿竹登代子
- 業障子 郡 野村又三郎 武田大志
- 業障子 松 虫 武田邦弘

「養老」は「神舞」を舞うが、「富士山」は金春流では本籍を中...

「養老」は帝の勅使ワキが勅により不老の霊泉を尋ねて美濃国に...

「富士山」は唐土の臣下ワキが勅により不死の仙薬を求めて富士山に...

「是界」 佛教の繁栄を減ばし「我が行力を...

⑤面よりつづき) かけた「巨」に当たり、これが結構、と品運坊とすることになって...

「三九十八」 未だ独身の男(シテ正邦、妻乞いに清水観音へ祈念...

「養老」は帝の勅使ワキが勅により不老の霊泉を尋ねて美濃国に...

められる仙薬の事も立シヤベリに思くと後場。遠来の唐の臣下達...

「富士山」 金剛・金春のみに有る勳能の稀曲だが五流に有る「養老」に似...

に働き掛け、兩人して佛教の聖地は近くの比叡山を窺うことに。シ...

「熊坂」 旅僧(ワキ知登)、美濃国赤坂中・厚板着付・赤地半切・紺地袴...

うてもなほ太かれと申す程に」と、自身を鼓舞しなければなら...

「熊坂」 旅僧(ワキ知登)、美濃国赤坂中・厚板着付・赤地半切・紺地袴...

ツレ元・正樹)を併い軍に乗ると大徳ノ難子(学・嘉津幸・総一郎...

男のおたくぶりが堂に入る。(20分) 「熊坂」 旅僧(ワキ知登)、美濃国赤坂...

「薩摩守」 忠度(ただのり)を只乗りに掛けた洒落。住吉天王寺参詣の僧...

「俊寛」 後白河法皇を擁して俊寛・康頼・成経ら、平家討伐を謀るが露見...

「二人大名」 「何れも御存知の者で御座る」と大名・甲(シテ忠重)...

「薩摩守」 忠度(ただのり)を只乗りに掛けた洒落。住吉天王寺参詣の僧...

「熊坂」 旅僧(ワキ知登)、美濃国赤坂中・厚板着付・赤地半切・紺地袴...

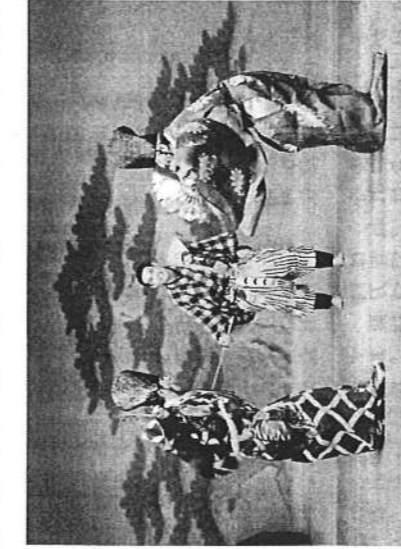
「二人大名」 「何れも御存知の者で御座る」と大名・甲(シテ忠重)...

「俊寛」 後白河法皇を擁して俊寛・康頼・成経ら、平家討伐を謀るが露見...

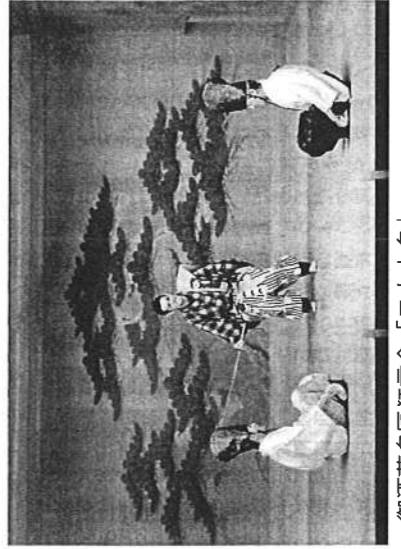
「薩摩守」 忠度(ただのり)を只乗りに掛けた洒落。住吉天王寺参詣の僧...

「熊坂」 旅僧(ワキ知登)、美濃国赤坂中・厚板着付・赤地半切・紺地袴...

「俊寛」 後白河法皇を擁して俊寛・康頼・成経ら、平家討伐を謀るが露見...



御洒落名匠狂言会「二人大名」 左より岡村和彦、牟田素之、善竹忠重



御洒落名匠狂言会「二人大名」 左より岡村和彦、牟田素之、善竹忠重 (杉浦賢次氏撮影)

「二人大名」 「何れも御存知の者で御座る」と大名・甲(シテ忠重)...

「俊寛」 後白河法皇を擁して俊寛・康頼・成経ら、平家討伐を謀るが露見...



名古屋能楽堂定例公演「薩摩守」 鹿島俊裕、井上靖浩 (杉浦賢次氏撮影)



名古屋能楽堂定例公演「俊寛」 梅田邦久 (杉浦賢次氏撮影)

NHK放送予定(平成24年10月~11月)

Table with NHK broadcast schedule: 10月21日 素謡 観世流[定家] 山本順之, 10月28日 素謡 大蔵流[口真似] 善竹忠一郎, 11月4日 素謡 観世流[鶴] 武田宗和, 11月11日 素謡 宝生流[鳥追] 金森秀祥, 11月18日 素謡 金剛流[三井寺] 豊嶋三千春, 11月25日 素謡 観世流[藤戸] 五木田三郎

演能力レンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088) (能楽関係のみ)

Table with performance dates: [10月] 28日(金) 名古屋能楽堂十月定期公演, 27日(土) 徳川園80周年記念, [11月] 4日(日) 第33回名古屋金春流友会, 5日(月) 第33回名古屋金春会, 11日(日) 素謡と仕舞のおさらい会, 18日(日) 名古屋観世会定期公演, 19日(月) 第56回名古屋宝生会, 25日(日) 名匠狂勤会, [12月] 2日(日) 名古屋能楽堂十二月定期公演

社友の音楽能行

名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 (052) 731-7983 4 F A X (052) 733-2837 振替口座 00800-6-36393 購読料 1年1100円 1年1800円 郵送の場合 1年1100円 1年1800円

能楽の友

狂言やるまい会東京公演

狂言三番 11月4日

狂言やるまい会(野村又三郎師主宰)は、第二十八回東京公演を十一月四日(日)東京・品川区上大崎の十四世喜多六平太記念能楽堂で開催する、午後二時開演。公演は(駆け引きのあり方と題して、盗人と訴人による罪の自白をめぐる)「牛盗人」(シテ奥津健太郎)、「酒乱の亭主と美妾に戻つた妻を庇う舅の」[賢聖](シテ野口隆行)病気の妻になるカツムリに成り

翔の会「鷲」「道成寺」

親世流シテ方武田邦弘師は、このたび古稀を迎え、きたる十二月九日(日)、第五回翔の会を京都観世会館で開催(大曲)鷲を上演、また武田大志師の独立七周年を記念して能「道成寺」を披露する。当日は正午始め。能組は、能「鷲」(シテ武田邦弘、ソレ井上裕久、ワキ榎王茂十郎)舞雩子「砧」(片山彌雪)狂言、展祈(佐藤友彦)能「道成寺」(シテ武田大志、ワキ榎王和幸、地頭片山九郎右衛門)ほか仕舞七番 入場券・前売券一万円、当日券一万一千円、学生券三千円。問い合わせ、申込み/京都観世

五色の会 能「藤戸」上演

12月23日 岡崎 花朋会敷舞台

金剛流・朋の会(羽多野良子師主宰)は「五色の会」第十四回能を見る「公演」をきたる十二月二十三日(日)旭、岡崎市の花朋会敷舞台(岡崎市大西町長四七-四)で開催する。「五色の会・能を観る」公演は今回で十四回を迎え、長年愛好者

梅猶会大阪

能楽公演 12月2日 大槻能楽堂

梅猶会は平成二十四年度第四回大阪能楽公演を十二月二日午後一時から大槻能楽堂で開催する。能組は「蟬丸」(登之丞)逆襲・梅若善久、蟬丸・梅若善高、ワキ・福王知登 狂言「抜殻」善竹忠一郎、善竹隆司 仕舞「松虫」立花香寿子龍田小川晴子、「巻絹」越知芳彦一放下僧「梅若雅」一「野守」梅若猶義能「玄象」シテ梅若修一、竜神・梅若秀成、姥・井戸良祐、師長・梅若基徳、ワキ榎王和幸 入場料前売四五百円、申込み出演楽師、大槻能楽堂TEL06-67611812、電話06-68317854 梅猶会定期能連絡所/豊中市新千里南町3-18 TEL06-68317854

演能案内

第33回 名古屋金春会

十一月四日(日)午後二時開演 名古屋能楽堂

番組 仕舞 笹ノ段 高橋 汎 永田 孝司 融ノ段 佐藤 俊之 地謡 吉場 貴廣 林井上 功 方 金春 梓沙 金春 穂高 飯富 雅介 河村 総一郎 竹市 孝 橋本 幸 船戸 昭弘 後見 佐藤 俊之 地謡 豊田 均 高橋 貴廣 尚久 地謡 箕浦 剛 吉場 貴廣 鬼頭 尚久 加藤 剛 井上 貴廣 後見 井上 靖浩

仕舞 笹ノ段 井上 貴寛 廣瀬 雅弘 野宮 金春 安明 地謡 佐藤 俊之 高橋 貴廣 鳩ノ段 鬼頭 尚久 箕浦 剛 後見 金春 安明 地謡 前田 登 井上 貴寛 本田 芳樹 加藤 英昭 鬼頭 尚久 高橋 貴廣 藤戸 光洋 高安 勝久 河村 眞之介 加藤 洋輝 杉江 元 後藤 嘉津幸 鹿取 希世 後見 佐藤 融 小島 芳樹 高橋 貴寛 加藤 英昭 鬼頭 尚久 附祝言 (午後五時四十分頃終了)

チケット料金 正面指定席五〇〇〇円 中ワキ自由席二般四〇〇〇円、学生三〇〇〇円 チケット取扱い 名古屋能楽堂 TEL 052-231-0088 名古屋金春会(マツオカ方) 05866451539 主催 名古屋秀麗会 名古屋春栄会

名古屋観世会定例公演能

十一月十一日(日)十二時三十分開演 名古屋能楽堂

能 井筒 飯富 雅介 河村 総一郎 廣田 六郎兵衛 後藤 嘉津幸 後見 高橋 邦一 地謡 吉沢 八代 幸親 充 堀 孝 観 久 榎 田 大志 古 橋 久 正 邦 正 野 方

狂言 佐波狐 後藤の百姓 松田 高義 後藤の百姓 奥津健太郎 善者 野村又三郎 仕舞 和布刈 久田 勘助 梅田 八神 孝 充 葛城 孝 高橋 謙一 地謡 梅田 八神 孝 充 車僧 観世 喜正 清原 政一

能 天鼓 武田 邦弘 高安 勝久 河村 眞之介 加藤 洋輝 弄鼓之舞 野村又三郎 後見 武田 大志 地謡 吉沢 八代 孝 充 祖父江 修一 地謡 須田 勘 榎 田 大志 幸親 充 堀 孝 観 久 榎 田 大志 清原 政一

「有料」 当日券 自由席六千円 事務局長 名古屋市長区一社3-1162 学生券二千円 電話 052-734-6192

名古屋市民芸術祭2012参加

名古屋宝生会定式能(第456回)

十一月十八日(日)午後一時始 名古屋能楽堂

トモ 内藤 飛能 子方 坂口 伶 衣妻 正宣 河村 総一郎 鹿取 希世 福井 聡介 後見 辰和久 莊太郎 地謡 真野 久 佐藤 賢一 辰巳 大二郎 大森 尚人 大友 順

狂言 謀生種

仕舞 松 虫 七玉井 博祐 佐藤 賢一 阿 漕 和久 莊太郎 地謡 内藤 飛能 後見 大野 弘之

紅葉狩

高安 勝久 河村 眞之介 加藤 洋輝 杉江 淳 後藤 孝一郎 大野 誠 後見 辰和久 莊太郎 地謡 柴田 美枝子 玉井 博祐 辰巳 大二郎 藤田 光孝 芳澤 久子

附祝言 (終了予定 四時頃)

入場券料 (全自由席) 正会員一万八千円 (非会員適用四枚綴り) 観賞券五千円(各一回限り) 学生券二千円(各一回限り) 柴浦レチケ、名古屋市文化振興事業団、出演能楽師 名古屋宝生会 名古屋市昭和区柳新町3-1-23 1-82 (衣裳正宣方) TEL FAX 052-882-5600

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ④

竹尾 邦太郎

十 「中部金剛会」 ②

—— 承前 ——

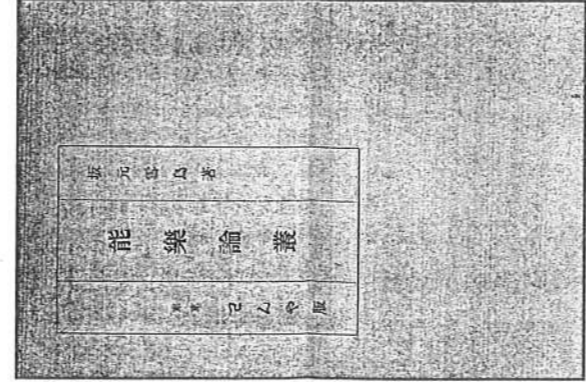
◇ 尾崎宮一郎の時代(続)
山田 尾崎さん一人の時代は、流儀はなかく発展して、地元の名古屋は元より東は浜松まで勢力範囲に入っていました。今も流友で名古屋に住んでいる大鐘一栄氏などが、そのころ浜松でお弟子をとっていたのですからね。

白木 尾崎が「石橋」の前シテで出て、常盤で名乗っている時に

ウンとひっくり返ってしまったので、そのまま、楽屋へかつぎ込んだ事があった。年月は忘れてしまおうが、その時わしは後貞をしとった。
栗林 あなたがその後を舞われたのですか。
白木 いや、前はそれなりやめて、後の獅子を出したように思う。尾崎は初めから前シテだけだったのだ。

◇ 山田氏の功績

片岡 寺田・尾崎両雄の間がうまく行かないながらも、生きていられる間はよかつたが寺田さんが大正十一年に、尾崎さんもその前後に亡くなられてからは、流勢は火の消えたようになった。それを救つて下さつたのが山田さんという事になるのではしうね。
大塚 全くさうで山田さんの功績も大きい。
白木 わしも古くからやり、半クロのようになっていたのだが、あんまり深入りせず、昭和七、八年頃素人としての舞台生活五十年を機に「望月」を舞つて引退したのだが、山田君は一時衰微した流儀をつないで、今日の勢いにまで盛り返してくれた。
栗林 山田さんとの苦心談でも一つ。
山田 私は微力ですがタネの絶えるのを防いだだけです。自慢するほどの事は何もありませんが、たゞ現在名古屋における金剛会の中心となり、指導者となっている竹市、大塚、片岡三君をはじめ、その他の有力な人達を育て上げる



坂本雪鳥 著
「能楽論叢」

事 の出来たのは、自分として非常にうれしく思っています。尤も最近の二十年間に豊嶋弥左衛門氏の大きな力が加わっているのを忘れてはなりません。
片岡 話が少し飛びますが、名古屋公芸堂が出来ても間もなく潰された能で、流儀から「小袖巻我」が出て、右京宗家の十郎、巖先生の五郎、地頭が廣田弘氏で母に豊嶋師が出られたのですが、その時初めて師の謡を聞き、型を見て眼のさめた心地がしたのです。それが

機縁で山田師を通じて巖先生にお願い、毎月一回豊嶋師に当地へ来て頂く事になったのですが、それ以来われわれの能楽に対する興味も倍加し、又相当の自信をもつて舞い謡う事が出来るようになったのです。
大塚・竹市 全く同感です。

◇ 明治時代の演能

栗林 話題を変えて、明治時代の名古屋における演能についてお話し願いますよか。

白木 明治もあんまり古いことは知らんが流祖善寛の五百年忌普能が明治三十九年の秋に那古野神社(西区茶屋町)で催されたことがあったね。
西村 二日間の興行だったが大変な人気で入場券にはプレミアムといつても当時のことだから一円か二円だったろう一がついた。あの舞台には屋根がなかった。入場券を前売りし、東京、京都から来てもらつてるんだから、当日雨が降つても雨天順延とはいかない。仮屋根をつくるには百円か、る。しかし当日晴天だったらムダになるがどうしたもんかと、相当問題になったことを覚えている。
山田 あの時はたしか右京宗家をはじめ謹之輔、巖、尾崎師らが始めて舞われた。(註次に当日の番組。平成13年7月22日発行「近代名古屋の能楽を支えた人々」一東海能楽研究会代表貞敏一、より転載)
明治39年10月28日・那古野神社
(⑨ 園へつづく)

名匠狂言会

十一月十九日(月)
午後六時三十分開演
名古屋能楽堂

【東京】
和泉流 鍋八撥 飛流り 野村 万作 飛流り 野村 萬斎
曲代 大野 誠
後見 深田 博治

【京都】
大藏流 寝音曲 大藏流 茂山千五郎 主人 茂山七五三
後見 井口 竜也

【名古屋】
和泉流 仁王 飛流り 野村又三郎 師業 佐藤 友彦
住所の者 井上 靖浩
住所の者 佐藤 融
後見 松田 高義

入場料(全席指定) S席八五〇〇円 主催 中日新聞社
A席七五〇〇円
入場券取扱 中日新聞コンサートデスク(T E L 0 5 2 2 3 2 0 9 1 9)
チケットぴあ(T E L 0 5 7 0 0 2 9 9 9 9)、P コーポ
4 2 3 1 3 8 7) サークルKサンクス、セブンイレブン

久田観正会

十一月二十五日(日)午前九時半始
名古屋能楽堂

番組

仕舞 阿漕 金井 美晴
道明寺 伊藤 晏義

仕舞 賀茂 濱口 矩光
羽衣 浅見 夏代
鞍馬天狗 堤 賢太郎

素謡 鶴亀 水無瀬 翠瑞 平澤 貴久
東北 豊島 摩子 小川 浩
紅葉 高田 秀夫 大川 宏
狩 飯田 吉平 広瀬 之彦
石川 保博

素謡 三輪 杉江 元 河村真之介 加藤 洋輝
船戸 昭弘 鹿取 希世

素謡 忠度 柴田 雄次 濱口 矩光

仕舞 玉鬘 池野 章
遊羽社 後藤 玲子
行 飯田 吉平
柳 志賀 穂子

井筒

柴田得美子
江崎 敬三 河村真之介 藤田六郎兵衛
久田舞一郎
間 野村又三郎

素謡 塚 前川千鶴子 笠田 稔
前川 幸子

舞囃子 碓 前 岡佳代子 河村真一郎 鹿取 希世
船戸 昭弘

素謡 正 藤 締和 加藤 利幸
前川 幸子
義盛 堤 賢太郎
前川千鶴子 上田 拓司

大竹重三江
間 野村又三郎

番外仕舞 山定 家 久田三津子
姥 久田 勤鸞

【入場無料】
【御来場歓迎】

主催 久田 観正会
久田 勤鸞
お問合せ/名古屋市長東区一社三十一番二
T E L 0 5 2 2 7 3 4 6 1 9 2

名古屋能楽堂十二月定例公演

十二月二日(日)十二時三十分開演
名古屋能楽堂

玉井 博祐
能 忠度 杉江 元 河村真之助 大野 誠
(宝生流) 相元 正樹 後藤 孝一郎

間 藤波 徹

後見 竹内 澄子 地謡 建田 節武 稲川 孝一
衣斐 愛子 内藤 智幸 飛田 正直
藤 飛能 和久 辻太郎

狂言 鈍太郎 井上 靖浩 今枝 郁雄
(和泉流) 鹿高 俊裕

仕舞 竹生鳥 松井 俊介 地謡 伊藤 英毅
(喜多流) 長田 郷麿

仕舞 放下僧 伊藤 雅子 地謡 熊谷 真知子
(金剛流) 加藤 かおる
鈴木 昌美

舞囃子 松風 奥頭 尚久 河村真之介 大野 誠
(金養流) 後藤 嘉津幸

地謡 前田 英昭 藤 謙
加藤 小島 芳樹
加藤 希世

八神 孝元
能 鉄輪 高安 勝久 船戸 弘一 加藤 洋輝
(観世流) 相元 正樹

間 野村又三郎

後見 前野 郁子 吉沢 幸旭 清沢 一政
武田 邦弘 梅田 大志 久田 勤鸞
藤 飛能 相父 江修一

附 祝 言

(午後四時三十分終了予定)

主催 名古屋市文化振興事業団
(名古屋能楽堂)
能楽協会名古屋支部

【チケット料金】
前売(指定)四千円、自由席一般三千円
学生二千円(自由席のみ当日五百円増)
抽籤券取扱所/名古屋能楽堂(T E L 0 5 2 2 7 3 1 0 0 8 8)
柴阿礼チケ92、T E L 0 5 2 2 9 5 5 3 3 0 7 7 7 7
名古屋文化振興事業団チケットガイド
名古屋能楽堂(T E L 0 5 2 2 4 9 9 8 7)
チケットぴあ(T E L 0 5 7 0 2 2 9 9 9 9)
(P コーポ 4 2 4 4 1 1 5)

第15回 伊勢の伝統の能楽まつり

9月30日 いせトピアで開催

能楽伊勢三座の流れを汲む一色能・通能と馬瀨狂言の各保存会が結集し、伊勢の伝統の能楽を継承する会が組織され、毎年秋に公演している「伊勢の伝統の能楽まつり」は、ことし第15回を迎え、九月三十日(日)伊勢市生涯学習センター(いせトピア)で開催され、通能、采女をはじめ狂言三番、仕舞、連吟など合わせて四十

数種が公演された。主催 伊勢の伝統の能楽を継承する会(会長 吉川貞士氏、事務所・伊勢市一色町一三〇六番地二) 電話〇五六九・二五・六五二六) 共催 一色町能楽保存会、通能能楽保存会、馬瀨狂言保存会 後援 三重県、三重県教育委員会、伊勢市、伊勢市教育委員会、三重県文化振興事業団



御酒落名匠狂言会 野村 萬 (杉浦賢次氏撮影) 「見物左衛門」

因に「花見」はくずる左衛門を誘うも既に留守。独り清水寺は地主の桜を愛で、持参の花見酒に独吟の興やら亭師の隣から誘われ肴の一さしも。あちこちの桜を訪ねる原に遊興は、嵐山では童の釣りや上つ方の船遊びに眼福を得、更に御室の桜に誘われるも黄昏時、草臥れて帰路に就くという長閑な

伊味の趣。昭和57年の「花見」シテの装束付は露敷斗目兼付・長袴・段シラ織風小袖兼折・右腰二瓢箪、遊治郎然としていた。

「止動方角」

本比への流 行に伯父(小アト弘之)から借用してまで出掛けたい主(アト麴、太郎冠者(シテ靖造)を伯父御宅へ運わす)について序では太刀と馬も借りてこいと高圧的な態度。遠慮を知らない主の鉄面皮に内心憤慨するもの、逆らえない主命、一人で三つ借りなければならない徳効な用に、すんなりとは請け合えない太郎冠者、一呼吸ためらい、せめてもの抵抗は仏頂面に不承不承「ハア」と蒸え切らない態度。この不眠げな夜事にも主には底の河童、空気が読めない。導入部のシテ・アトの連り取りに生彩。

汝と伯父御は合口ではないが、の主の言葉通り、太郎冠者に遠慮はあるもの、好人物の伯父

「屋島・弓流・那須語」

旅僧(ワキ勝久)、從僧(ワキツレ元・正麴)を伴い屋島の浦で老若二人の漁夫(シテ喜正ツレ直夫)に出会い、塩屋に宿を許されると、此の地が源平の古戦場とて合戦譚を所望すれば、仕方を交え熱心に語り出すシテ。

前場はワキの名匠のあと連行を省き、浦に着くと漁夫二人が土地の情景を描写するカシ・下歌・上歌も省くので春宵のまつりたしな情緒、雰囲気は感ぜられない憾み。宿の貸借を巡るワキ・ツレ問答、シテ・ツレ問答も埋々と、シテは床几に掛けず下居に膝を抱え

ているのが貧しい苦慮の内を思わせる。シテは面笑耐、襟淺黄・淡黄小格子目引兼付。褐色水衣・白茶染分履衰姿、初同(玄・保親・団)・兼玄・宗一郎・旭)へ屋島に立てる、と立ち正中へ、ワキに向き下居、浦の慰みは田鶴の群、(兼居)と右へ都の方を眺める心はへ我等も

元は、とシラリ、へ纏て涙に咽びけり、の返し句にシラリ返すと、こゝろ切ない。シテ語は口跡確かに慥切れよく、「御着背長」で背筋すつと伸はし居立つと、「一鏢踏ん張り」と手綱引き絞るかの張る力。

ツレと掛合に悪七兵衛兼清と源氏方の三休合十郎回後の格闘はいわゆる鏢引の場、「著たる兜」と鏢に見なす開いた厘左手に、鏢握む心でぐいと居立つとへ引きちぎつて、と、力余り手に鏢の残片持つたま、胸で受け留める様に厘で強く胸を打ち、腰落し下居のところが鮮烈。へ纏の波松風はかき、を常座で面伏せて膝き、へ音淋しくそなりにける、と正中でワキにアシラと下居、直ルと後員が水衣の袖を下ろす。語の詳しさを訝られ、名を問われてシテ、それは修羅遣に戻る時、へよし常の浮世の夢はし、と義経を句わせ、へ夢ばし見まし給ふなよ、と扇でワキを指し、指は開きに返し句一杯に送り届て膝かに中人。

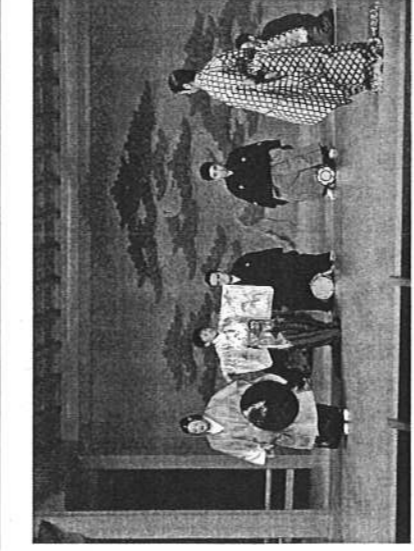
問(アト)はワキの求めに那須の与一の扇の的を語る替問「那須語」、浦人アと泰太郎は当地で珍らしい大蔵流、森東は独立した「語」と異なり長袴でなく半袴出立。いかにも武家式楽の伝統を継ぐ苦風は剛直で、修羅能のアトに相応しく、与一、判官など立場替える動きは半袴の敏捷、壮快だが扇を射当て「春風にもみこもみ接まれ海へ」は少々蒼下が悪い。きらい。

後場は面神体・黒垂・梨子打鳥



御酒落名匠狂言会 「止動方角」 左よより鹿島俊裕(馬)、佐藤 融、井上靖浩 (杉浦賢次氏撮影)

帽子・白鉢巻・厚板着付・紺地立浪立半切・袷法被・太刀の勇姿。眼目の弓流は「なおく弓物語を」とワキの勧めに正中へ、小鼓方の真ノ床几に掛け、へ忘れぬものを、と地クリはへ纏を浸して(攻め戦ふ)、で床几を立ちイロエに弓流の場。ワキの前で弓に見なす扇を落し、流れる弓を追う心に纏へ向かう。弓取らずまいの敵の妨害「されども」とキツと面切り、弓を引掛んとする熊手を合際のみせ、扇を拍うと床几に(此の度は真ノ床几に変え常の鑿桶じ)。老臣兼房の、弓よりは命、と謀める地のサシを省きクセ。クセ中、へ然らずは敵に、と



西村同門会研究会「藍染川・追善留」 大 左よより本田光洋、金春嘉織、原 (杉浦賢次氏撮影)

扇を左手から右手に着き弓は敵の手に渡さしを教徽的に見せ、床几を立てはカケリに修羅遣の戦闘きびくくと、へあら物々しや手並は知りぬ、のユートン扇に敵を呑む気魄。

キリはへ春の夜の波より明け、の雲ノ扇に合戦あとの朝はらけの静態、地を残してシテが入るのをワキは常座に出て見送り、拍子は踏まず留え。雌子は「能の旅人」の当地の同人の学・嘉津幸・真之介。いつもながら事前解説、内容案内パンフレットは懇切丁寧で結構だが、曲中、省かれる箇所があると、すつきりはしても曲趣が損なわれる事もあるのでは。演者の熱意が伝わる好舞台ではあったが。(1時間30分・7月15日、第七回能の旅人)

太宰府に住む神主が在京中に娶つた女(シテ光住)、子の梅千代(子方・嘉繼)を連れて父である神主に逢うため逢々西下、彼地で宿の主・左近尉(ワキツレ原大)と問答あつて(写真)神主への文を言付け、返事を頂けるよう依頼する。子方の、両手を水平に広げる行まいが珍しく、連行の母との子の連吟が、父に逢える嬉しさに緊張もあるうか、はきくと元気なのが上々。左近尉は託された文を神主の妻(アト郁雄)に手渡せば、夫の不在をよいことに文を盗み読み、嫉妬に逆上、女には夫との対面不可、子には帰京を促す文を勝手に認め、その文を左近尉に渡し、二人を直ぐ宿から追い出せと傳い見舞、「エイイ、腹立や〜」と走り込む。アと郁雄熱演。返事の文を手にした女は内容をみてへこれは夢かや浅ましや、とシラリ、子は難く母を健氣にいたわるところ切ない。初同(安明・徳高・尚久ら)へ旅旅人証言すると聞きつるに、その傳知りながら信じ、死を思うにつけ一人子を残してゆく悲しさ、シラル母の愁嘆を哀切な地が沁々聞かせる。左近尉に促され宿を出なければならぬ女、都に戻るにも人目があるとも、母が心の変わるべきか」と子に言い含める母、へ行きも遣られぬ袖の別れ、と子が母の袖を掴

「藍染川」 太宰府に住む神主が在京中に娶つた女(シテ光住)、子の梅千代(子方・嘉繼)を連れて父である神主に逢うため逢々西下、彼地で宿の主・左近尉(ワキツレ原大)と問答あつて(写真)神主への文を言付け、返事を頂けるよう依頼する。子方の、両手を水平に広げる行まいが珍しく、連行の母との子の連吟が、父に逢える嬉しさに緊張もあるうか、はきくと元気なのが上々。左近尉は託された文を神主の妻(アト郁雄)に手渡せば、夫の不在をよいことに文を盗み読み、嫉妬に逆上、女には夫との対面不可、子には帰京を促す文を勝手に認め、その文を左近尉に渡し、二人を直ぐ宿から追い出せと傳い見舞、「エイイ、腹立や〜」と走り込む。アと郁雄熱演。返事の文を手にした女は内容をみてへこれは夢かや浅ましや、とシラリ、子は難く母を健氣にいたわるところ切ない。初同(安明・徳高・尚久ら)へ旅旅人証言すると聞きつるに、その傳知りながら信じ、死を思うにつけ一人子を残してゆく悲しさ、シラル母の愁嘆を哀切な地が沁々聞かせる。左近尉に促され宿を出なければならぬ女、都に戻るにも人目があるとも、母が心の変わるべきか」と子に言い含める母、へ行きも遣られぬ袖の別れ、と子が母の袖を掴



西村同門会研究会 「藍染川・追善留」 飯富雅介 (杉浦賢次氏撮影)

むと、へ引き留められて親心の、と母、掛合の母の心情を受けて地へ思ひ煩らふ母が身の亡き跡いかにと別れ得ぬ、今の悲痛な立場にシラル母、シテと子方の呼吸が見る。母が戻るまではへ待ち給へ、とシラリ、子は難く母を健氣にいたわるところ切ない。初同(安明・徳高・尚久ら)へ旅旅人証言すると聞きつるに、その傳知りながら信じ、死を思うにつけ一人子を残してゆく悲しさ、シラル母の愁嘆を哀切な地が沁々聞かせる。左近尉に促され宿を出なければならぬ女、都に戻るにも人目があるとも、母が心の変わるべきか」と子に言い含める母、へ行きも遣られぬ袖の別れ、と子が母の袖を掴

に咽ひシラリ、母に似る容姿にへこれこそ父よ、と子に寄り頭を撫でると、左近尉との問答に亡骸を見ようとして傍に下居、亡骸に子の将来を約し、纏に申うと語りかける、と、クセは生前の美貌を綿々と、昔に愛する今を悲しむ居タタ。へ婉転たる纏は消え失せて、とシラリ、へ紅顔空に消えて、と上分端のワキの長嘆は、へ飛揚の魂は何処にか、で背筋伸がすと彼方を見つめるところ、悔恨無い交せに一人の思いが、へ思ひや跡に残るらん、と双シラリから亡骸に踊り寄り、と、纏と抱き上るところ哀情の念只事ではない(写真)。神主は亡骸を左近尉に託す心で渡すと、左近尉は子と共に横たつて切戸へ。神主は、地のへなお追善のためならば、と正中下居に扇開き、へ砂を我等拾ひ、と扇面両手に戴いて立つと正先で膝をつき、経を印した袈裟の石を扇面を傾けて川にこぼすと扇息み、立つて常座へ、小書「追善留」で、へ死したる人も成仏し、と合掌、常の如くトメ拍子踏んだ。小書無し、後シテ天満天神が現われ死者を蘇生させるものより面白かった。(1時間29分)

本曲は金春・観世のほか、至生にも十六代九郎知宗宗家が明治十一年に整理する前は纏があつた由。なおワキツレ左近尉は「鳥追船」にも。九州は筑紫と薩摩に、何者だろう。

西村同門会研究会 「藍染川・追善留」 大 左よより金春嘉織、原 (杉浦賢次氏撮影)

そこへ他出から戻る纏に神主(ワキ兼介)、太刀持(ワキツレ原 睦)を伴い一ノ松、殺生禁断の藍染川の岸、人だかりに太刀持を何事か問わせに遣り、左近尉から仔細を聞く神主、ワキ方同士の強々明晰な問答が小気味よい。文を神妙に読む神主、子との対面に名乗らんとしてへ展

NHK放送予定(平成24年11月~12月)

NHK-FMラジオ能楽鑑賞(日曜日6時00分~6時55分)
11月25日 素謡 観世流「藤戸」 五木田三郎(再放送)
12月2日 素謡 「鶴亀」 坂井 音重
12月9日 素謡 観世流「俊寛」 櫻間 右陣
12月16日 素謡 宝生流「満仲」 木月 宇行
12月23日 素謡 金春流「殺生石」 櫻間 右陣
12月30日 狂言 大蔵流「武悪」 山本東次郎

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088) (能楽関係のみ)
[11月]
25日(日) 久田勲正会 (無料)
[12月]
2日(日) 名古屋能楽堂十二月定例公演 (有料)(番組①面)
5日(火) 平成24年度名古屋能楽堂小中学生能楽鑑賞会 (関係者)
6日(水) 同上
9日(日) 第十一回狂言三の会 台 (有料)(番組①面)
15日(土) 名古屋華舞舞台 (有料)(完売)
16日(日) 松月会 大蔵流小鼓の会 (無料)
と 雑子の会 (番組②面)

山本孝氏 逝

大鼓大倉流、重要無形文化財保持者・山本孝氏は、十月九日、肝細胞癌のため逝去された。享年七十六。氏は三老女をはじめ、櫻曲にも参加、関西の能楽公演には欠かさない人であった。日本芸術院賞、旭日双光章、観世寿夫記念法政大 学能楽賞、大阪文化祭賞など多数を受賞。

大鼓大倉流

平成二十四年十一月吉日
狂言方泉流 井上靖浩
後見人 四世井上菊次郎(祐一)

能楽の友

発行 能楽の友社
名古屋市中種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
1年 1800円
郵送の場合 1100円

狂言方 井上靖浩 改め 井上松次郎 襲名

狂言方泉流、井上靖浩氏は、このたび祖父・故井上松次郎を襲名、平成二十五年の新年から名乗ることになり、次のようにあいさつしている。
平素はご高誼を賜りまして、厚く御礼申し上げます。さて私こと亡祖父三世井上菊次郎(松次郎)の十三回忌明けを期に、父の許しを得、新年正月一日より、松次郎を名乗らせて頂きます。祖父は父二世菊次郎(銀次郎)昭和十五年の早世以来、戦中、戦後激動の時代を長く牽引し、平成九年の三世菊次郎襲名公演を継ぐその二週間後に病に倒れました事から、最晩年まで長らくこの松次郎の名で舞台を勤めて参りました。お付き合い下さいました皆様方には、こちらの方が馴染みの名であったかとも存じます。

大阪 大槻能楽堂は、大槻能楽堂改築三十年を記念する「平成二十五年新春公演」を一月三日、四日の二日間に行い公演する。
一月三日「翁」(観世清和、茂山七五三)
狂言「末広がり」(我山十三郎)
能二人鞍(権若玄祥 大槻文蔵)
一月四日「翁」(大槻文蔵、野村萬斎)
狂言「三本柱」(野村万作) 能「厚子洗小町」(観世清和)
全席指定
前売S席八四〇〇円、A席六八〇〇円、B席五七〇〇円(当日は千円増)
申し込み、お問い合わせ「大槻能楽堂(TEL06-67661-8055)

大槻能楽堂 新春能 1月3、4日開催

大槻能楽堂は、新春一月二十日(日)名古屋能楽堂で、新春公演を開催する。午後一時開演。
演能は「翁」(翁・中所宜夫、三番叟・佐藤麟・千歳・小島英明、面相・今枝郁夫)

平成25年新春能 名古屋観世九卓会 新春公演

1月20日 名古屋能楽堂

名古屋観世九卓会は、新春一月二十日(日)名古屋能楽堂で、新春公演を開催する。午後一時開演。
演能は「昆布売」(大名・大野弘之、昆布売、佐藤友彦)
能「望月」(シテ・観世景正、ツレ・駒瀬直也、子方・松浦薫、ワキ・高安藤久、間・井上松次郎(鶴若改め)ほか、仕舞「白楽天」「花燈」「遊行柳」
料 金 / 正面指定席五〇〇〇円、脇正面・中正面席四〇〇〇円。
申込・観世九卓会(電話03-32668-7311、FAX03-52261-2980)

名古屋能楽堂十二月定例公演

十二月二日(日) 十二時三十分開演
名古屋能楽堂

能 忠 度 玉井 博祐 杉江 元 河村 眞之助 大野 誠 (宝生流) 福元 正樹 後藤 孝一郎
問 藤 彼 傲
後見 竹内 遼子 津田 節武 稲川 寿一 衣斐 愛 地謡 石森 智幸 衣斐 正宣 内藤 飛舟 和久 太郎
狂言 鈍 太郎 井上 靖浩 今枝 郁雄 (和泉流) 鹿島 俊裕
後見 佐藤 麟
仕舞 竹生 高 松井 俊介 地謡 伊藤 英毅 長田 郷藏
仕舞 放 下僧 小 伊藤 雅子 地謡 飯谷 真知子 加藤 かねる 羽多野 良子 鏡村 昌美
舞子 松 風 鬼頭 尚久 河村 眞之介 大野 誠 (金春流) 後藤 孝一郎
地謡 前田 英昭 廣瀬 小島 雅弘 加藤 素世 芳樹

能 鉄 輪 八神 孝充 吉沢 清一 志安 勝久 梶 勉 加藤 浩輝 (観世流) 福元 正樹 梶 明弘 鹿取 素世
問 野村 万三郎
後見 前野 郁子 梅田 幸太 山本 則重 喜太 志宏 祖父 江修一 武田 邦弘 地謡 田田 生 梅田 幸太 祖父 江修一

附 祝 言 (午後四時三十分終了予定)
主催 名古屋市文化振興事業団 (名古屋能楽堂) 能楽協会名古屋支部

チケット料金 (全席指定)
前売(現金)四千円、自由席 一般三千円 学生二千円(自由席のみ当日五百円増)
前売券取扱所/名古屋能楽堂 (TEL052-231-0088)
名古屋文化振興事業団チケットガイド 077-231-0088
TEL052-224993
チケットぴあ TEL0570-029988 (ポイント424・1115)

狂言 三の会 第十一回公演

十二月九日(日) 午後二時開演
名古屋能楽堂

おはなし 松田 高義
復曲狂言 「峰」 養素 野村 万三郎
復曲狂言 「茄子」 新発 松田 高義 住持 伴野 俊彦 新発 野口 隆行
復曲番外狂言 「浦島」 浦 島 奥津 健太郎 孫 奥津 健一郎 舞子 野村 万三郎

チケット料金 (全席指定)
一般五〇〇〇円、会員二〇〇〇円
予約は狂言三の会事務局
TEL kyogei3@nweb.jp
FAX 0422-3922-55996 TEL090-6707-4714

名古屋華舞台

狂言で見る日本の伝統芸能

十二月十五日(土) 午後二時開演
名古屋能楽

狂言 猿 座頭 野村 万三郎ほか (和泉流)
狂言 仏 師 山本 則重ほか (大蔵流)
狂言 佐 渡 狐 茂山 逸平ほか (大蔵流)
狂言 千 鳥 野村 萬斎ほか (和泉流)

主催 中京テレビ事業 (TEL052-957-3333)
S席八〇〇〇円
A席五〇〇〇円
「チケットは完売」

当地の各流儀・流派・結社
社中の消息を辿る ④

竹尾 邦太郎

十 「中部金剛会」 ③

承前
「中京の金剛流を語る」承前
◇ 保能会の回顧
栗林 名古屋の能楽界に大きな貢献をしている保能会のことについて...

うていられたが、その後小野垣彰、片野東四郎、それに私など加わりました。大塚 布池町の能楽堂の舞台披露の時は白木さんが「一巻老」をまわ...

能「海士」上演

大槻能楽堂12月公演

大槻能楽堂の自主公演「能」の魅力を探るシリーズ。は、日本探訪「日本の歩んだ道・日本人の想い」をテーマに、十二月二十二日(土)能「海士」を上演する。午後二時始。お話し「律令と公家・藤原十年の栄華とは」井沢元彦氏...

正月特別公演

事前学習講座

名古屋能楽堂

名古屋能楽堂では、平成二十五年度正月特別公演「翁」と「葛城」

の上演にあたり、この名曲をより深く味わっていただくため、「事前学習講座」を開催、ストーリーの展開や、大切な場面、登場人物のキョクタイなどについてわかりやすく解説する。要項は次のとおり。

日程 平成24年12月15日(土) 午後2時~4時
会場 名古屋能楽堂会議室
講師 田嶋未知氏(愛知県徳大寺学非常勤講師)
受講料 一般二〇〇〇円、チケット購入者五〇〇円。
(講座当日までのご購入を对象とする。チケット代は一割引)
定員 六十名 ※応募者多数の場合は抽選。

蠟燭能

12月23日 東急ホテル

名古屋東急ホテルは、十二月十三日(日)同ホテル・ヴェルサイユの間で、2012のファイナルを飾る、能鑑賞イベント「蠟燭能」を開催する。番組は、親世流能「杜若」恋之舞(久田勲、福王和幸)能「石橋」大獅子(久田勲、久田勲吉郎ほか)...

名古屋能楽堂
12月企画展

名古屋能楽堂展示室の「企画展」は、11月、12月は、名古屋能楽堂12月定期公演の演目に合わせて、「忠度」「鉄輪」で使用される面・装束を中心に展示される。展示は12月28日(金)まで行われる。午前九時~午後五時(最終日は午後三時まで)...

松月会 能と囃子
大倉流小鼓の会

十二月十六日(日)午前九時十五分始
名古屋能楽堂

Table listing performers for various plays like 四海波, 春栄, 殺生, 石, 船弁慶, etc.

能 土蜘蛛

Table listing performers for plays like 鐘之段, 笠之段, 中之舞, etc.

油の乗った時代でしたね。今も同様ですが。片岡 物師も安かったが、会費が年六円、シテを舞って初番は十五円、二番目以下は二十円出せばよかった。五十円もあれば一番舞って、そのあとで慰労会をやりい、気持ちになれたんだからね。今から考えるとワンのような話だ(一同意)...

Table listing performers for plays like 小袖曾我, 七騎落, 天鼓, etc.

能楽協会の歴史年表(1951-2024)の抜粋

⑨面よりつづき) ・五・七・九・十一月の五回であ...

昭和16年度は三月月短縮 昭和17年度は予科・高校を加え...

此の学生能楽鑑賞会、既出の座談会では大好評で迎えられたよう...

11月 新作能「忠霊」檜書 店刊 11・15 兵役法施行令改正...

守屋善石・木造樞石・野崎太郎。主催・名古屋能楽会...

◆晩夏から秋の舞台◆ 「第六回西村同門会研究能」と「第...

古屋能楽堂。能「羽衣」豊嶋一・西村弘敬・金森準三・守...

と太郎冠者の額に塵を付ければに。駄々を捏ねる様な露団気の...

第五回定式能。昭和廿八年二月六日(日)午前十時始。松坂屋...

敢と加持を施す中、密かに背後に忍び寄り様子窺う後シテの無気...

「鷹之段」大塚二二「富士大鼓」山田仁三郎。能「黒塚」金剛藏...

松月会 大倉流小鼓 主権 松月会...

花月 笠田 昭雄 松下 和也 山田 義高 安福 光雄...

はは姿を見させる由を臣下(ワキ勝久)から伝えさせる。固より鳴る管も無い線鼓、鷹葬された老翁は怒りに投身、怨霊(後シテ)となって女御を責め苛み、恋の妄執を抱えたま、晴れやらぬ恋の淵に再び沈むという。

正先に線鼓付桂立木、何事もなく天冠・小面・白櫻着付・緋大口・唐織重折のツレがワキ座床几に。ワキは風折鳥唱子・厚板着付・白大口・縹袴衣・太刀持(アと高義)を伴う。「急ぎ参りて鼓を仕り候へ」と生命を伝えるワキに神妙なシテ、面阿古(ア耐)・襟浅黄・小格子着付・杓巻色水衣装の謡道ぶりが如何にも。地(乾)之助・保雄・輝和らへ時の鼓を打たうよ、で萩舞を扇に替えるど、地と掛合へ鼓はなにか鳴らざらん、と正中に下居。クセになり、「これ程に(知らば)」、と面の表情に苦渋の色が見え、へさのみに迷ふらん、とシラルと上ヶ端にシヲリ解き、へ打つや鼓の數繁くと居立ちへ音に立たば、と立つてへ線の鼓とは知らずして、作物前へ、「老の衣手」力添へて、扇で鼓を強く打って退ると、老耳ゆえか、へ聞けども聞けども、と耳を震らす心は面を仰向け、耳を澄ます心は面を俯けると、へ池の波へ窓の雨へ何れも音はすれども、と面便とに鼓の音のしない不審に退ると、絶望に力萎え、がつくり膝を着くとシラルとところ、地の好調と相俟つて惹きつける。地と掛合にロンギはへ鼓も鳴らず、と居立ちへ人も見えずへ

これは何と鳴神も、と尽ならぬ思いの丈は切腹掘腕の打合にみせ、安寝双シヲリの痛嘆。へかくては、とシヲリ解きすつと立つと常座へ。池水に身を投げる心に片膝着き、返シ句一杯に権懸に入る。

代つてアとが、ツレの誰い仕打ちに思い迷われず入水したシテの事を立シヤベリ、ワキにそれを伝えると後場。ワキは更にそれをツレに伝えワキ・ツレ掛合、鼓の音を幻聴に聞くツレは既にしてシテの聲が樂り錯乱気味に。其処へ出端の囁き(六郎兵衛・幸英・眞之介・洋輝)で出る後シテは面懸劇・白頭・厚板着付・紺地金波袴・文半切・金地袷袢・打杖を腰に鹿骨杖突き一ノ松へ。魁偉な風体は憤怒の塊、誓言に尽せぬへ邪淫の恨み、と激しく踏み蹴り拍子からへ晴れまじやく、と運び出すと舞台上へ。へ桂に掛けたる線の鼓、と常座で胸杖に鼓を覗め付け、へ鳴るものか、とツレに肉薄へ、打てや、と、鼓に一瞥、ツレに打杖振り上げるところ、凄まじい滾る憤怒。へ悲しや、と、ツレがシラルをへあらさて微りや、と打杖できつと指シ怨念纏々足拍子一ツ踏むところには奥氣が。へ身を責め骨を砕く、と踏む七ツ拍子も凄まじく、キリは入水の安座からへ程もなく死霊となつて、と居立ち胸杖にツレを見据える怖さ。

へあら恨めしや恨めしや恨めしや、の執拗な恨みを、じりく腰落しつ、膝をついてゆくとところに、重苦しい恋の淵に沈む心を見せる留めまで、力の入った緊張の



西村同門研究会「痺」
左より井上蕭大、井上靖浩



西村同門研究会「葵上・袴之出」
左より長田 駿、岡 充
(杉浦賢次氏撮影)

好舞台だった。(1時間11分)
【乱】
風 孝子・高 介、或る夜の靈夢通り、瀧陽江の市で酒を商えば貴賤と成るところ、常連の、大酒にも崩れない客を

戸を開け静かに萬屋を出ると、正先に据えられる羯鼓台を不審するワキ。シテは此の事に纏わる真話を「聞かせ申し候べし」と居語りに、富士の妻が討たれたとき夫への思い反響するかに納々とした感じで語る(写真)。「逆縁ながら吊ひて眼はり候へ」とワキへ縛る様にアシラフところなど、如何にも女流のシテの繊細、真実味が胸に沁む。語の詳しさに所縁の人情、とワキから問われシテ里女、上を飛び跳ねるか、スキップを踏むか、に見えようか。腰の安定感に姿の美しさが。



幸謡会能「梅枝」

近藤幸江
(杉浦賢次氏撮影)



幸謡会能「梅枝」

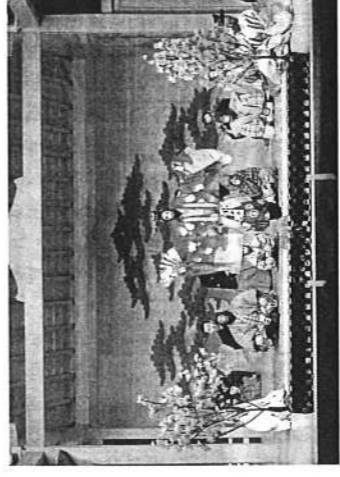
近藤幸江

地は輝和・光夫・順ら、囃子は学・葦津幸・総一郎・元伯、後見を保雄・正直。(37分・8月26日・第28回衣裳正負後援会能)

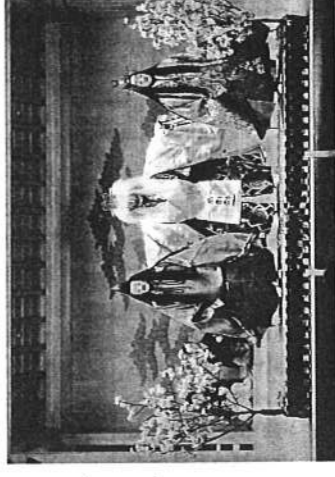
【梅枝】
内裏での管絃の役を争い衆人・達間に殺された衆人・富士の妻の哀傷を脚色した「富士太鼓」の後日譚。從僧(ワキツレ等)を伴う旅僧



名古屋能楽堂九月特別公演
「嵐山・白頭・猿聲」
左より前野郁子・今沢美和
(杉浦賢次氏撮影)



「嵐山・白頭・猿聲」
佐藤 融

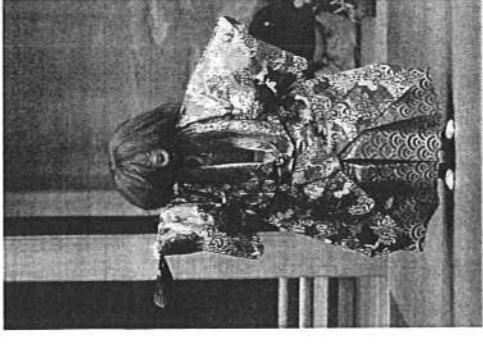


「嵐山・白頭・猿聲」
左より前野郁子・久田勘鶴・今沢美和

ん、でワキにアシラとから直ツてクセになるとへ長く悪戯に、と立ちへ面白や満の、と暁が梅に誘われ、口懐しい思いの現われ。しかし、女心の甲斐なき恋の迷いへ残る執心を、と太鼓を見詰め指込開きの、執心払拭するの思い。へ嬉し今の教へや、とワキへ合撃する心情の素直はクセ留メ、契り浅き片思いのへ執心を消し給へや、とはらりと袖返すところも執心を払う象徴。ロンギとなり、へ心も共に、と地前の方へ、へ波もて結べる淡路橋、と静かに沖を眺める風情(写真)には、長い至涯を縫て培われてきた安定感に備わる気品も。へ誰へや語べ、と正中、左袖返シ左へ跳める姿も美しく、へ梅が枝にこそ驚は果をくへ、と胸を懐かし縛鼓台へ。両手に鞭をとり、(風吹かば如何せん)花に宿る驚、と太鼓打つ心に鞭を当て、大小前に退ると達揮掛の樂(希世・昭弘・総一郎)に。初段を撥で、以下を扇に替えて舞う。踏み蹴り拍子も大人しやか、三段目に袖振りを袖返すにしたのは眞

鳥兜の高さ、小柄のシテでは型が極り難いだらう。舞上げるとちへ面白や満の、と暁が梅に誘われ、口懐しい思いの現われ。しかし、女心の甲斐なき恋の迷いへ残る執心を、と太鼓を見詰め指込開きの、執心払拭するの思い。へ嬉し今の教へや、とワキへ合撃する心情の素直はクセ留メ、契り浅き片思いのへ執心を消し給へや、とはらりと袖返すところも執心を払う象徴。ロンギとなり、へ心も共に、と地前の方へ、へ波もて結べる淡路橋、と静かに沖を眺める風情(写真)には、長い至涯を縫て培われてきた安定感に備わる気品も。へ誰へや語べ、と正中、左袖返シ左へ跳める姿も美しく、へ梅が枝にこそ驚は果をくへ、と胸を懐かし縛鼓台へ。両手に鞭をとり、(風吹かば如何せん)花に宿る驚、と太鼓打つ心に鞭を当て、大小前に退ると達揮掛の樂(希世・昭弘・総一郎)に。初段を撥で、以下を扇に替えて舞う。踏み蹴り拍子も大人しやか、三段目に袖振りを袖返すにしたのは眞

帝の親貴に供するに吉野から移植した嵐山の桜の見頃を檢分の勅使一行(ワキ勝久ワキツレ幸・正樹)、折から満開の花を愛でるところに出遇う花守老夫婦(シテ勸騰ツレ幸親)、ツレのみ衫帯を持ちシテは杖をつくのが珍しい。ワキが、咲く花を信仰する機をシテに尋ねれば、これは神木、折々は子守・勝神明も來臨、名こそ風の山だが風に勝ち、木を守る夫婦の神は我ら、と明かす。自然界の真実の姿を花に託して詠き、へ(風の)山風は吹くとも、と胸杖に沁み涙を眺めるところ、如何にも惹きむ心が。乗込拍子からへ夕陽に残る、と杖を捨てると地



名古屋能楽堂九月特別公演
「狸々」
竹市幸司
(杉浦賢次氏撮影)

「狸々」(シテ幸司) 高風(ワキ元)舞
金剛の名に恥じない端正な、すっきりした舞ぶりに型の良さ(写真)、囃子は亮世・孝一郎・総一郎・兼命、地はかおる・雅子・良子ら全女性陣。後見を三千春・幸洋・康治 小品を決して疎かにしない心意氣が嬉しい。(30分・9月2日・名古屋能楽堂九月特別公演舞第一部)

【前号の訂正】
3頁4段7行目
クラククラク

に出る魔王権現(後シテ勸騰)を子守・勝世は平伏して迎え、へ和光(利物の御姿)、とシテが袂衣をハネルと大飛出、白頭・鯉冠・厚板着付・紺地半切・白袴袴衣(衣紋付)の威風を現す。へ悪魔降伏の、で子守・勝手は立つてシテの面懸へ、共に台へ上がりへ子守勝手蔵主権現固体真名の姿を見せて(写真)、へおの、とシテだけ台を下り、へ花に戯れ、と子守・勝手も下りるとそのま、退いて行き、シテは阿袖きりりと巻上げ常座へ、面袖下すすと幕へ見込み爽快に留メ拍子踏む。大きな、力感溢れるシテだった。(1時間33分) 勘鶴は普間付「嵐山」が思い、昭和61年和泉会別会平成11年名古屋能楽堂正月公演と今回で三度目。

【嵐山・白頭・猿聲】

帝の親貴に供するに吉野から移植した嵐山の桜の見頃を檢分の勅使一行(ワキ勝久ワキツレ幸・正樹)、折から満開の花を愛でるところに出遇う花守老夫婦(シテ勸騰ツレ幸親)、ツレのみ衫帯を持ちシテは杖をつくのが珍しい。ワキが、咲く花を信仰する機をシテに尋ねれば、これは神木、折々は子守・勝神明も來臨、名こそ風の山だが風に勝ち、木を守る夫婦の神は我ら、と明かす。自然界の真実の姿を花に託して詠き、へ(風の)山風は吹くとも、と胸杖に沁み涙を眺めるところ、如何にも惹きむ心が。乗込拍子からへ夕陽に残る、と杖を捨てると地

のうちに権懸へ、ツレも立つと中入來序でシテに纏き奉入。代つて嵐山に住む鼻猿(アト及彦)太郎冠者(郁雄)が一ノ松まで這つて出、舞台に入ると、吉野から猿(シテ融)が來るとて支度を言いつけるうち、賑々しく舞の一行がやって來る。喧しい猿語の応対を、と立つと足拍子一ツ、地の返シ句に三ツ拍子踏みへ(語るは猶も)執心ぞ、とワキへアシラフのも吹つ切れない奇立ちに遠くない。陰翳に富む厚い地謡の名調と相俟つて、しなやかに整つた姿のよいシテ、立派な舞台だった。(1時間37分・9月1日・幸謡会能)

NHK放送予定

◆NHK-FM能楽鑑賞（日曜日6時～6時55分）
 12月23日 素謡 観世流「歌占」 木月 宇行
 12月30日 狂言 大藏流「武悪」 山本真次郎
 1月6日 素謡 観世流「鞍馬天狗」 親世 清和
 1月13日 素謡 観世流「朝長」 大江又三郎
 1月20日 素謡 喜多流「花筐」 香川 靖嗣
 1月27日 素謡 宝生流「三輪」(再)大坪善美雄

◆教育テレビ新能楽狂言
 1月1日(火)（午前9時～10時） 金春 安明
 1月11日(水)（午前10時～11時） 大藏流狂言「子の日」 茂山千五郎
 和泉流狂言「鶏撃」

◆NHK-FM
 1月2日(火)（午前10時～11時） 和泉流狂言「鶏撃」

アド 佐藤 友彦
 アド 野村又三郎
 アド 佐藤 融

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂

(TEL 052-231-0088) (能楽関係のみ)

[25年1月]
 2日(火) 名古屋能楽堂新春初め (番組①面)(要招待券)
 3日(水) 名古屋能楽堂正月特別公演(番組①面)(有料)
 5日(金) 名古屋学生能楽連盟第57回学生能・狂言の会 (無料)
 20日(日) 名古屋観世九講会新春公演 (有料)
 26日(土) 第15回万作を観る会 (有料)
 27日(日) 第57期第1回名古屋宝生会定式能 (有料)

能楽の友

発行能楽の友社

名古屋市中種区千種2丁目18-18
 (郵便番号 464-0858)
 電話 (052) 731-7983
 FAX (052) 733-2837
 振替口座 00800-6-36393
 購読料 1年 1100円
 郵送の場合 1年 1800円

観世寿夫記念 法政大学能楽賞

羽田 昶氏 栗谷能夫氏 受賞

◎羽田 昶氏

(はた ひさし)
 [贈呈理由] 能楽の演出技法研究を重ねてきた氏は、くわえて評論や解説、復曲等の幅広い活動を

◎栗谷能夫氏

(あわや よしお)
 [贈呈理由] 伝統的喜多流の芸系を踏まえ流儀の中核として希実した舞台を展開している氏は、本年の(松風) (碓) (八鳥)において特に優れた舞台成果を見せ、重厚と瀟洒を併せ持つ独自の芸術的印象づけた。後進の指導に力を尽くし、また、地頭、副地頭として多くの舞台の成功を支えていることも高く評価される。

豊田市能楽堂新春能

1月25日 能「屋島」狂言「鐘の音」

豊田市能楽堂は、平成二十五年一月十二日(土)「新春能」を上演する。開演午後二時。番組は次の通り。
 解説 松本 雅(能楽評論家)
 狂言(大藏流)「鐘の音」
 シテ太郎笠者、山本東次郎、アド主人、山本則秀、アド仲藏人、山本則俊
 能(観世流)「屋島」(弓流・那須)シテ・片山九郎右衛門、ツレ梅田嘉宏、ワキ宝生欣哉、ワキ

ツレ野口能弘、野口琢弘、アイ山本則重
 入場料(全席指定)正面席六千円、脇・中正面席四千円(学生半額)
 チケット販売「豊田市コンサートホール・能楽堂事務局(豊田参合館八階)電話0565・35・8200、チケットぴあ(TEL10570・02・9999) Pコード423・618)

関市文化協会

四十周年記念事業 能・狂言公演

2月3日 関市文化会館ホール
 関市文化協会では、同協会四十周年記念事業として、二月三日(日)関市文化会館大ホールで、「能・狂言公演」を開催する。開場、十二時三十分、開演午後一時、チケット料金(全自由席)：一般二〇〇〇円、学生(小・中・高校生)一〇〇〇円。前売り券販売所：関市文化協会文化課事務局電話0575・24・6455

プログラムは次のとおり
 ◆特別出演◆
 星風社(文化協会団体)
 素謡「高砂」仕舞「松風」「弱法師」「鶴岡」
 ◎演能についてのお話
 シテ方観世流能楽師・久田勘麿氏
 ◎狂言「佐渡狐」
 シテ井上菊次郎、佐渡ノ百姓、佐藤 融、越後の百姓、今枝郁雄
 ◎能「船弁慶」前後ノ替
 シテ久田勘麿、子方幸澤拓海、ワキ高安勝久、ワキツレ相元正樹、間狂言・井上菊次郎

小牧市で

初笑い狂言会

1月12日 東部市民センター
 小牧市、小牧市教育委員会主催の小牧市自主文化事業「初笑い狂言会」は、織田信長小牧城築城四五〇年記念として、一月十二日(土)東部市民センター講堂で開催される。

演能案内

名古屋能楽堂

新春謡初め

二十五年一月二日(火)
 午後一時～二時半(開場十二時半)

名古屋能楽堂

連 吟 四海波 (観世流) 梅田 邦久他
 舞 子 高 砂 (観世流) 久田 勘麿
 小 班 舞 福之神 (和泉流) 佐藤 友彦
 連 吟 養 老 (金春流) 鬼頭 尚久他

催花賞

一色町能楽保存会

法政大学(増田善男総長)は、一九八八年(昭和六十二年)四月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設立し、同基金に基づく事業の一つとして、能楽三夜の功労者及び能楽の普及・発展に貢献の大きい個人・団体を顕彰する「催花賞」が設けられた。
 各方面の識者の推薦による候補者について、法政大学能楽研究所と能楽賞選考委員とが慎重に選考した結果、受賞者に「一色町能楽保存会」(会長吉川貞夫氏)を決

定した。
 [贈呈理由]
 南北朝期以来の伊勢猿楽の歴史を受け継ぐ同会は、地域を挙げてその伝統の保存・継承に努めるとともに、伊勢の舞台上に精力的な演能活動を展開している。猿楽の成立を考える上できわめて重要な呪師の芸能を今に伝える点や、地域の人々の献身的な努力と熱意のもとに能楽の振興が図られている点も高く評価される。

能 翁

清沢 一政 三番 豊田 友彦
 千歳 武田 大志
 大鼓 河村眞之介
 小鼓 船戸 明宏
 後見 梅田 嘉宏
 梅田 邦久
 狂言後見 鹿島 俊裕
 今枝 郁雄
 地謡 黒田 博
 本田 久太郎
 幸親 祖父江修一
 松山 修弘

能 葛

八田三津子
 大和舞 高安 勝久 大鼓 河村眞之介
 間 橋元正 元 小鼓 後藤孝一郎
 井上松次郎 竹市 学
 後見 前野 郁子 吉沢 孝旭
 久田 勘麿 地謡 八神 孝旭
 松山 幸親 祖父江修一
 梅田 邦久 嘉宏

能 城

高安 勝久 大鼓 河村眞之介
 小鼓 後藤孝一郎
 竹市 学
 後見 前野 郁子 吉沢 孝旭
 久田 勘麿 地謡 八神 孝旭
 松山 幸親 祖父江修一
 梅田 邦久 嘉宏

主催 名古屋市文化振興事業団 (名古屋能楽堂)
 公益法人 能楽協会名古屋支部
 [入場料] 前売(指定)五〇〇〇円
 前売(自由席)四〇〇〇円
 (自由席のみ当日五〇〇円増)
 [取扱い] 名古屋能楽堂(TEL052・231・0088)
 名古屋市文化振興事業団チケットガイド
 (TEL052・2449・3387)
 名古屋学生能楽連盟(TEL052・959・3387)
 中京テレビ事業(TEL052・957・3387)
 栄アプレケ922(TEL052・957・3387)
 チケットぴあ(TEL10570・02・9999) Pコード424・621

名古屋能楽堂正月特別公演

平成二十五年一月三日(火)午後一時開演
 名古屋能楽堂

舞 子 田 村 (宝生流) 竹内 澄子
 大鼓 河村眞之介
 小鼓 船戸 昭弘 笛 竹市 学
 居 狂 言 竹生島参 (和泉流) 松田 高義、野村又三郎
 舞 子 草紙洗 (金剛流) 羽多野良子
 大鼓 河村眞之介
 小鼓 後藤孝一郎 笛 大野 誠
 舞 子 金 札 (喜多流) 長田 聡
 大鼓 河村眞之介
 小鼓 後藤孝一郎 笛 大野 誠
 大鼓 加藤 洋輝
 小鼓 後藤孝一郎 笛 大野 誠
 入場無料(要整理券)
 ※整理券は十二月十一日(火)午前十時より名古屋能楽堂及び名古屋文化振興事業団チケットガイド(ナナイアバーク八階、平日午前九時から午後五時まで)で配布します。(お一人様一枚まで)
 名古屋能楽堂
 TEL052・1131・0088
 名古屋市中区三の丸二丁目一丁目(名古屋城正門前)

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

十 「中部金剛会」

承前
「中京の金剛流を語る」承前
◇ 明るい中部地方の前送
片岡 山田さんの養鶏会は、われくもそこで育ったんだが、もう何年位になりますか。

山田 いや大した事もありません。被災直後は瀬戸市に疎開していたので、一時は同地に七、八十人も流友をつくりましたが、その後名古屋へ帰って来ると又だんくに減って、... 養鶏を水産させたのはなかくくむつかしい事です。こ、二、三年は岐阜の方が順調に発展しています。あれで岐阜は芸事のなかなか盛んなところで、熱心な人が多く、とまる率も多いので喜んでます。

ものですよ。岐阜でも是非流儀の能をやりたいもんですなあ。山田 そうしたいと思ってる。竹市 何しろ人手が少ないので、分がもう二、三人もおればウンと発展出来る見込みがあるんだが...
山田 そして片岡君にこの支部長という、やっかいな重責をお願いするんだね。名古屋では近く七、八人も免状をもらおうという事をきいているが、あれで師範になるのか、というような人がねえ。竹市 観世流じゃ入門して一、二年経つては流儀の先生に教えているね。大塚 自分でも満足に語えんに人に教えるのは弊害もあるだろうが、あの熱心さは買うべきだね。流儀発展のもとだ。片岡 終戦後間もなく大塚、竹市の両君が職分に取立てられ、山田先輩と三人になったのですが、お互に仲よく流儀の発展につくし

ていただきたいと思ひまして、昨年三月蔵宗家が能楽会例会においでの時、皆が集まっている相談し、宗家の御意見に従ってすべてを一丸とした金剛流中部支部というものを作ったわけです。山田 大塚 各社中の人達は、新旧を問わず金剛会に入ってもらう事をしていますので、能に対する興味や認識が急に深くなりました。そしてなるべく語って仕舞・能というものに関与性を持たせるため、この四月二十九日の第二回定式能は、二部に分け、第一部は十時からはじめて素謡、仕舞、舞バヤシのほかに片岡君の能「安宅」を入れることにしました。竹市 一寸驚いたのは、私の社中から「安宅」の回山の希望者がウンサと出たことです。それが仕

法政大学能楽賞 受賞者の略歴
◎ 羽田 飛氏
【主な経歴】
東京文化財研究所名誉研究員。
武蔵野大学客員教授および同大学能楽資料センター非常勤研究員。
1939(昭和14)年東京生まれ。62(昭和37)年国学院大学文学部文学科(日本文学専攻)卒業。76(昭和51)年に東京国立文化財研究所能楽部研究員となり、演劇研究室長、音楽舞踊研究室長を経て、2000(平成12)年4月武蔵野女子大学(2004年から武蔵野大学)文学部教授となり、2002(平成14)年から定年で退職する2010年まで同大学能楽資料センター長を兼務。80年以上は文化庁芸術学部門審査委員、国立能楽堂3役研修講師、国立劇場専門委員、文化審議会文化財部会専門委員等、国の文化芸術に関わる職を歴任した。共著書として「能の離子書」(1999年・音楽之友社)、「能楽大事

典」(2012年・筑摩書房)などがある。
◎ 栗谷 能夫氏
【主な経歴】
喜多流シテ方。1949(昭和24)年9月12日、喜多流シテ方栗谷新太郎の長男として東京に生まれる。54年(花屋)の子方にて初舞台。祖父益三郎、父新太郎の指導を経て、同年喜多流十五世宗家喜多美に入門。60年(経政)で初シテ方。観世寿夫に傳れて他流の能にも目を向けるようになり、88年には浅井文義(観世流)、櫻間金記(金春流)とともに流儀を超えた同人組織「三銘の会」を結成。同会では新作能(鷹姫・幻・皇子みだれ髪)の上演や岡本章主宰「練肉工房」との提携公演など、数々の意欲的な試みを行う。「栗谷能の会」において(安宅・隅田川・望月・卒都婆小町・石橋・木賊・鷗嶋小町)を披露。積極的に活動を続けている。「栗谷能の会」主宰。重要無形文化財総合指定保持者。日本能楽会会員。一般社団法人日本能楽会理事。公益財団法人十四世平太記念財団理事。

催花賞受賞
◎ 一色町能楽保存会
会長 吉川貞夫
【主な活動経歴】
三重県伊勢市一色町の能楽保存団体。一色町での能の歴史は、伊勢猿樂の和屋座の大夫が戦国期の争乱によつて一色町に移住したことに始まる。以来、同地では町民による神事能が行われ、その保存・継承を目的として、1968(昭和43)年に保存会が結成された。同会では毎年3月に一色神社の神事能として「一色能」を行うほか、1998(平成10)年、同じく伊勢の地で活動する通り能・馬瀬狂言の保存会とともに「伊勢

新春能面展
名古屋鶴舞図書館で
1月5日~2月3日
第二十一回「新春能面展」(保田紹壺師社中展)は、一月五日(土)から二月三日(日)まで名古屋市中鶴舞中央図書館 階展示コーナーにて催される。開催時間は火・金・土・日・祝午前九時~午後八時、土・日・祝午前九時半~午後五時。
一月十三日と一月二十二日は展示替え。休館日は一月十五日、一月十八日(第三金曜日)毎週曜日。
展示内容 能面作品二十一点、能絵(参考図示)十五点
出展者 能面研究会面紹社中

色青雲、金入意雲、加藤壺久、漆畑健治、田崎未知、高橋純子、保田弘見
「能絵鑑」(後期一月二十一日~三月三日)
責任者：愛知県海部郡大町町花菅東江端39番地、代表：保田紹壺。
電話052・441・1538

の伝統の能楽を継承する会」を結成、「伊勢の伝統の能楽祭り」を毎年開催している。能は喜多流、狂言は和泉流。高林白牛・二・野村又三郎他の指導を受ける。後継者の育成にも積極的に取り組み、小学生から高校生までの子供会員は2012(平成24)年現在約20名を教え、地域の幼稚園児も謡の習得に励むなど、地域ぐるみでの能の伝承が図られている。「一色能」として伊勢市無形民俗文化財に指定。呪師の芸能を伝える「一色の舞舞」は、「国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の選択を受け、08(平成20)年に調査報告書が、09(平成21)年に映像記録が作成された。現在の会員75名。

名古屋観世九阜会新春公演
一月二十日(日)午後一時開演
名古屋能楽堂
翁 中所 直夫 三番 佐藤 福夫 大鼓 河村 総一郎 腰鼓 船戸 昭弘 笛 藤田 六郎兵衛 千歳 小島 英明 頭取 後藤 孝一 笛 藤田 六郎兵衛 後見 奥川 恒治 地謡 中森 健之介 中森 貴太 観世 喜之 古川 充 観世 喜正
狂言 後見 井上 松次郎 鹿島 俊裕
仕舞 白楽天 五木田 三郎 中森 健之介 花屋 高橋 謙一 地謡 中森 貴太 遊行 柳 観世 喜之 古川 充
花若 松浦 直也 安田 本治ノ兼 藤瀬 直也 小坂 則芳 観世 喜正
能 望月 萬安 勝久 河村 真之介 加藤 洋輝 後藤 孝洋 竹市 学 問 井上 松次郎 (構成改め)
後見 中所 直夫 地謡 中森 健之介 奥川 恒治 観世 喜之 古川 充 五木田 三郎 中森 貴太
附 祝 言 (終演予定午後四時四十分頃)
主催 公益社団法人 観世九阜会 問合せ 申込み TEL03:3226873311 FAX03:5226129880
料 金 正面指定席 五〇〇〇円 植正面中正面 四〇〇〇円 自由席 〇570.022.9999 (Payto424.9588)
ヤライ@eos.ocn.jp

第15回万作を観る会
一月二十六日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂
解説 林 和利
小 舞 雪 山 中村 修一 高野 和意
海道下り 岡 聡史 月崎 晴夫
狂言 木六駄 本監督 野村 万作 主催 内藤 隆 高野 和意 後見 高野 和意 伯父 石田 幸雄

梅猶会大阪能楽公演
二十五年一月二十日(日)午後一時開演
大阪能楽会館
【入場料】S席 八千円 主催 なごや・万作の会 A席 七千円 B席 六千円 問い合わせ 03:5981:9778 発売・取扱 チケットぴあ(TEL05570022999) 柴プレチケ92(TEL0552953077)

第57期第1回 名古屋宝生会定式能
一月二十七日(日)午後一時始
名古屋能楽堂
能 鶴 亀 飯富 雅介 卒河村 総一郎 鳥頭 義誠 堀元 正樹 船戸 昭弘 大野 健 佐藤 友彦
後見 辰巳 清次郎 地謡 山本 あけみ 衣袋 愛 辰巳 大二郎 藤田 光光子 犬塚 博 恵
狂言 鬼 瓦 シテ 井上 松次郎 フ 佐藤 融 後見 大針 弘之
仕舞 笠之段 和久 莊太郎 地謡 内藤 隆 飛能 春日詣神 衣袋 愛 野井 保雄 辰巳 大二郎
能 西行桜 飯富 雅介 河村 真之介 加藤 洋輝 橋本 幸 後藤 孝一 郎 鹿取 希世 堀元 正樹
問 鹿島 俊裕
後見 和野 月 地謡 竹内 孝成 福川 龍一 和久 莊太郎 平田 正一 亀井 保雄 内藤 隆 飛能 辰巳 清次郎 藤田 承能 佐藤 耕司

平成25年度第1回 梅猶会大阪能楽公演
【入場料】正会員 一八〇〇〇円 衣 装 正 正 正 1 2 3 1 19 1 1 0 (年間適用四枚綴り) TEL,FAX 0528825600 鑑賞券 五〇〇〇円 学生券 二〇〇〇円
平成25年度第1回 梅猶会大阪能楽公演
二十五年一月二十日(日)午後一時開演
大阪能楽会館 (3面・梅猶会番組へつづく)

舞をはじめから何年も経ってない人達です。舞台の関係もあって、そう沢山は出てもらえないので……出られなかった人は、次の能のツレの先取特権を手約して辛抱してもらいました。

片岡 戦後宗家の御末名は名古屋能楽会例会の一回だけだったのが、中部支部が出来てから金剛定式能を春秋に催すので、宗家のお能も二度三度と拝見出来、三人の先生方の舞われる機会も多くなりました……

竹市 大きな会をやる度に流儀への宣伝にもなるわけで、新しい会員も熱心に協力してくれますので喜んでます。

大塚 会をやる毎に新しい流儀がふえるといった有様で、ことに竹市君は専門にやっているので、なか／＼成績をあげていく。お互いに仲よくやれるのが何よりも。

片岡 とに角現在の中京における金剛流は山田先輩をはじめ竹市、大塚の両職分も張切つてくれますし、大塚君の宅には舞台があつてそれを使わせてもらう便宜が多いので豊嶋師の指導と相まつてこのところ大変好調です。それに戦後に稽古を初めた若手の流儀に、熱心かつ有望な人達が多いので、将来に大きな希望が持てると思つています。

栗林 いろいろ有難うございまして。今日は本誌編輯同人で傳書店の前西君を同演して来ていますので、諺本についての御希望などこれからいろいろ伺うことにして、座談会はこれで一先ず終りにいたします。(昭和廿六年四月一日発行「金剛」復刊第四号より転載)

第八回定式能、昭和三三年四月廿七日(日)熱田神宮能楽殿。番組は舞雛子「部郎」豊嶋弥左衛門・寛三男・青木恒治、河村総一郎・野崎太郎・今井幾三郎(地頭)、能「桜川」大塚二・天野治美(子方)・西村弘敬・西村欽也・立石澄雄・金森準三・田鍋惣一郎・永田虎之助、今井幾三郎(地頭)・山田仁三郎(後見)、狂言「寝言曲」野村又三郎、井上松次

郎、仕舞四番「鞍馬天狗」伊藤鉄之進「放下僧」竹市秀雄「杜若キリ」山田仁三郎「角田川」今井幾三郎、能「山姥・白頭」金剛蔵・種田進雄・高安滋郎、西村欽也、井上礼之助、藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎、西尾孫太郎、鬼頭八郎、今井幾三郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)。

第九回定式能は故片岡信一氏追善、昭和三四四年四月十九日、午後二時半始、熱田神宮能楽殿。能「寛盛」大塚二・西村弘敬、西村欽也、佐藤秀雄、金森準三、田鍋惣一郎、永田虎之助、野崎太郎、種田次郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)、一調「花形見」田鍋惣一郎、伊藤鉄之進、仕舞五番「綱之段」渡辺寿「田村」広田陸一「富士大鼓」竹市秀雄「藤戸」種田次郎、「鶴之段」豊嶋弥左衛門、狂言「武悪」井上松次郎、井上礼之助、市橋良治、舞雛子「山姥」山田仁三郎、小島鉄次郎、青木恒治、寛三男・鬼頭喜太郎・豊嶋弥左衛門(地頭)、能「杜若」日藤之米、増滝拍子、髯渉「金剛蔵」高安滋郎、藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎、谷口正善、鬼頭八郎、種田次郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)。

第十回定式能は故竹市秀雄追善、昭和三五年五月一日(日)正午始め、熱田神宮能楽殿(前年に続き以後舞台は全て熱田)。舞雛子「西王母」山田仁三郎・寛三男・福井啓次郎、永田虎之助、野崎太郎、種田治郎(地頭)、能「安宅」大塚二・天野治美(子方)・豊嶋三千春、大羽隆司、難波昌弘、大塚文雄、坪井光男、村瀬良一、広田泰三(同山)高安滋郎、佐藤秀雄(関付)井上礼之助(強力)・金森準三・田鍋惣一郎、西尾孫太郎、種田治郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)、狂言「大般若」河村兵造、今井幾三郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)、独吟「玉之段」伊藤鉄之進、仕舞五番「春日龍神」片岡進子「敬盛」重本昌三「藤」広田泰三「春米」片野東四郎「阿古木」山田仁三郎、狂言「蟹山伏」佐藤卯三郎、佐藤秀雄、井上松次郎、今井幾三郎「松虫」伊藤鉄之進、鬼頭喜太郎、能「雲雀山」金剛蔵、金剛水信、後藤孝一郎、吉田定男、大塚二(地頭)、能「敵」寛三男、豊嶋弥左衛門、高安滋郎、大野弘之、小島鉄次郎、青木恒治、下村英一、鬼頭八郎、今井幾三郎(地頭)種田治郎(後見)。

竹市秀雄、明治34年(一九〇二)11月1日生。昭和22年、豊嶋弥左衛門取立により先代継宗家より職分を拝受。昭和24年5月22日「大塚二・竹市秀雄職分披露能」名古屋商工会議所特設舞台「乱・助能之式」を抜く。翌年、大塚二は「望月」を。昭和34年(一九五九)3月27日、狭小症により死去、享年58歳。「金剛」46号(昭和34年5月5日発行)に金剛蔵宗家、豊嶋弥左衛門、山田仁三郎、大塚二の追悼文がある。

第一回定式能、昭和三六年四月九日(日)午後二時始。舞雛子「安宅」伊藤鉄之進、寛三男、青木恒治、吉田定男、大塚二(地頭)、能「熊野」大塚二・豊嶋三千春、高安滋郎、西村欽也、金森準三、田鍋惣一郎、西尾孫太郎、今井幾三郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)、仕舞五番「藤」重本昌三「笠之段」渡辺寿「杜若」谷口正義「小鏡治」片野東四郎「弱法師」今井幾三郎、狂言「ぬけがら」井上松次郎、佐藤卯三郎、能「藤戸」豊嶋弥左衛門、西村弘敬、高安守彦、佐藤秀雄、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、永田虎之助、鬼頭八郎、今井幾三郎(地頭)大塚二(後見)。

第二回定式能、昭和三七年五月廿日(日)午後二時半始。舞雛子「美盛」豊嶋弥左衛門、小島鉄次郎、青木恒治、河村総一郎、今井幾三郎(地頭)、「巻絹」大塚二・豊嶋三千春、高安滋郎、河村兵造、金森準三、田鍋惣一郎、吉田定男、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)、独吟「玉之段」伊藤鉄之進、仕舞五番「春日龍神」片岡進子「敬盛」重本昌三「藤」広田泰三「春米」片野東四郎「阿古木」山田仁三郎、狂言「蟹山伏」佐藤卯三郎、佐藤秀雄、井上松次郎、今井幾三郎「雲雀山」金剛蔵、金剛水信、後藤孝一郎、吉田定男、大塚二(地頭)、能「敵」寛三男、豊嶋弥左衛門、高安滋郎、大野弘之、小島鉄次郎、青木恒治、下村英一、鬼頭八郎、今井幾三郎(地頭)種田治郎(後見)。

昭和三八年度は中部金剛会定式能は開催されておらず、一月三日の片岡進子後援会能に「声刈」、十月六日の清風社十五周年記念能に「小原御幸」で宗家の出動がある。

第三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第一二回定式能、昭和三九年十一月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

第二三回定式能、昭和三九年十月四日(日)午後二時始。能一輝丸「豊嶋弥左衛門、大塚二、高安滋郎、立石澄雄、高安守彦、佐藤卯三郎、金森準三、田鍋惣一郎、寛三男、種田次郎(地頭)豊嶋三千春(後見)、独吟「八嶋」伊藤鉄之進、仕舞二番「紅葉狩」片野東四郎「笠之段」片岡進子、舞雛子「乱、広蓋之式」金剛蔵、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村総一郎、野崎太郎、今井幾三郎(地頭)金剛水信(後見)、狂言「蜘蛛入」井上松次郎、井上礼之助、一調「花形見」青木恒治、山田仁三郎、仕舞四番「清経」松野警男「井筒」広田泰三「鐘之段」種田次郎「鶴」豊嶋三千春、能「黒塚」白頭「今井幾三郎、西村欽也、立石澄雄、佐藤秀雄、寛三男、後藤孝一郎、吉田定男、鬼頭喜太郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛蔵(後見)。

◆ 中秋の舞台から (その一) ◆

「第三回邦謡会能」「茂山狂言会 秋」「名古屋観世会定例能」

竹尾邦太郎

「養老・水波之伝」 美濃国本真郡に豊泉湧出の噂、帝に奏聞すれば早速、檢分を仰せ付かる勅使一行(ワキ雅介ノキツレ幸、正樹)遣行の陣むような連吟が遊山ではな



第34回邦謡会「養老・水波之伝」左よよ、梅田嘉宏

くとも物見の楽しみの気分。目指す地に出遇ふ権の父子(シテ尊宏ツレ大志)の、老いを養う豊泉に心も清められるを喜ぶシテ・ツレの連吟も亦、歯切れのよい息の合った爽やかさ(写真)。ワキに豊泉を養老と名付けた謂れ聞かれてシテとツレ、二人して掛合に答えるを更に初向(九郎右衛門・保向・玄ら)が受け、御代を言掲ぐ朗誦いかにも臨能のめでたさが、この水に馴衣のへ袖ひちて、と杖の上に両袖重ね下を眺めへ見るこそ嬉しかりけれ、と正中、ワキと向き合ひ下居。シテ・ワキ問答から地のへ言ひもあへねば、でシテは杖を取り静かに立ち、地の裡に構懸はへ天より光、と一ノ松で杖を捨て中入、残るツレは



「養老・水波之伝」梅田嘉宏



第34回邦謡会「養老・水波之伝」橋本忠樹

大小前に立ち、返し句に指込開キ右へ廻り構懸へ、中入来序(幸・昭弘・真之介・徳)で入ると小書でアとは出ず、直ぐ出端になり構柳観音(天女・後ツレ忠樹)が出て天女の舞を(写真)。二段目に山神(後シテ嘉宏)が半幕で奏を垣間見せ、ツレは舞上げると常は相運に同じ

シテのサシを誂い、へ泉はよも尽きし、と扇開きへあら有難の奇端やな、とワキへ指すと、へこれとでも響ひは同じ法の水、の地で後シテが現われる。舞台へ入りツレに向き合ひ、へただこれ水波の隔てにて、の一セいを連吟、山神と構柳観音、即ち神と佛は水と波の相運に同じ

く名は異なるも本体は同じを強調する。へ拍子を揃へて、で位すみ神舞は急の位に、晴明壮快に舞上げる。と、へ水滔々として波、悠々たり、と招キ肩からイロエになる。二ノ松へ流れて左袖披露、勺腰に奇つて籠を見上げる心に前方を見

「能楽室尽くし」

金沢能楽美術館では、12月1日から明年4月21日(日)まで、企画展「金沢能楽美術館コレクション」として「能楽室尽くし」のイベントを開催している。

1月2日(水)「新春能楽コンサート」「四海波(連吟)」「高砂(舞雛子)など加賀藩の正月始めになつた祝賀尽くしの演目を若手能楽師が演ずる。

1月3日(木)新春狂言「種」の酒

1月13日(日)新春スペシャル対談「能楽と美術」

1月13日(日)新春スペシャル対談「内田樹×椿井」

1月2日、3日新春特別無料開館 能面・能装束の展示。

以下、次号へ

能屋 今村 哲朗、井戸 良祐、藤本 幸多、中村 宣成、山本 哲也、清水 皓祐、野口 亮

狂言 鐘の音 大蔵 隆著、普竹 隆司主、仲載人 普竹 忠亮

仕舞 笠之段 梅若 善人、国枝 良雄

国采 女々々 岡田 晃一

能西行櫻 池内光之助、藤本 幸多、中村 宣成、広谷 和夫、荒木 芳昭、上田 訓義

附祝言 主催 大阪 梅猶会、問合せ 豊中市新千里南町3-1-18-1-2、梅若 善高 方、電話 06-6833-7854

(2面より梅猶会番組つづき)

能屋 今村 哲朗、井戸 良祐、藤本 幸多、中村 宣成、山本 哲也、清水 皓祐、野口 亮

狂言 鐘の音 大蔵 隆著、普竹 隆司主、仲載人 普竹 忠亮

仕舞 笠之段 梅若 善人、国枝 良雄

国采 女々々 岡田 晃一

能西行櫻 池内光之助、藤本 幸多、中村 宣成、広谷 和夫、荒木 芳昭、上田 訓義

附祝言 主催 大阪 梅猶会、問合せ 豊中市新千里南町3-1-18-1-2、梅若 善高 方、電話 06-6833-7854

「秋大名」 訴訟叫び聴みに何処ぞへ、と大名(シテ構造)・太郎(アト)清水に日参の途中、良い庭を見た。それなら御礼に清水詣での序でにそれを拝見に、と。しかし、和歌を好む庭主(小アト友彦)から即詠を求められると知れば、嗜みの無いシテはそれは叶わんと諦める。何とか誘い出したいアトは尻込みするシテに予め一首を覚え込まそうとするが、とんと覺える気のないシテは「その様な難かしい所は嫌ぢや」と拒否する。それならとアト、何とか一首を物に寄せて納得に教え、件の庭を訪ねれば、しんから風流を舞さないシテは庭の観音も半可通ぶり、アトを驚かせ、吟詠する段になつては狂言句もアトのプロンパー

(4面へつづく)



第34回邦謡会「班女・世之伝」梅田邦久

「班女・世之伝」 美濃國野上の宿の遊女・花子(シテ邦久)、東へ下る吉田少将(ワキ勝久)との一夜の契り忘れられず、奪る想いは互いに取り交した願、飽かず眺め入るを宿ノ長(アト融)に責められ、言い付けには従わず、耐える姿は如何にも愛の証は願ゆえの一機。アトに放棄されるところ、短い前場が緊張する。ワキが帰路に尋ねていたとは露知らず、神々を念じ、狂わんばかりの思いに都へ発つことになる後場はクセ。玄奈・権貴妃の故事に触れ、母を手にして立つとへさるにても我が夫の、とクセ地(幽言・保向・邦弘ら)のうちに一ノ松



第34回邦謡会「福の神」

靖浩 上 都雄、井上 今枝、左よより
「福の神」 三世千作真一の廿七回忌追善に三世が好んだ狂言、得意とした狂言をお楽しみいただきます」と曲が選ばれる。三世が亡くなる一年前、三世シテの「福の神」を見たが、その配役はアト参詣人があきら、千三郎だった。今回はシテ茂・アトやすし・薫。年籠りに福天へ参詣の二人、「福は内、福は内」と豆を撒くところに来臨する福の神、富貴となるには元手が掛かる、とその要諦を説き、口が綻いたからと神酒をせがみ、先づ酒神松屋大明神に捧げるを口実に、その後を飲む、など俗気たつぷりの福の神が可笑しく、飲めば機嫌よく富貴の道を説くを地謡に謡わせ(地頭あきら)、晴れ々と朗笑して留めた。茂、曾祖父への供養を果たす。

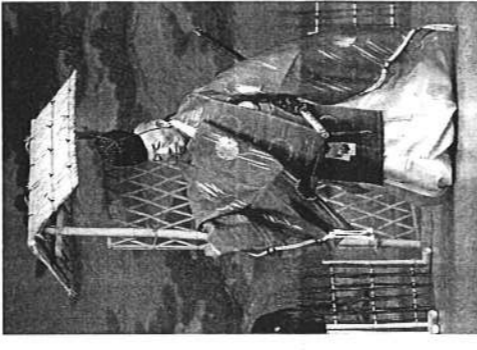
「月見座頭」 三世千作の得意の一番。昭和五九年(一九八四)秋、シテ三世千作・アト十二世千五郎(現・四世千作)で見つけた。三世千作の、脂の抜けた、さっぱりとした

「木六駄」 歳晚恒例、主父御(次アト正邦)方へ薪と炭を届けるよう言い付かる太郎冠者(シテ千五郎)、木六駄・炭六駄に十二頭の牛を独りで追い、その上に酒一樽を持たされるが、雪もよいの空を飛んで明日では、と訴えるだけで牛の都会で是非とも今日、と頼まれ、はあざさり必死で

「小督・恐之舞」 高倉院の観世・小督局(ツレ修一)が正室を陣り襲撃野に隠棲すれば勅使(ワキ雅介)は源仲国(シテ邦久)に局を尋ねるようにと旨言を伝える。手振り茶屋に現今何が大事かを質され、納得すれば一転認認気分、へ切るとてもよしや、と雪を払い酒樽の音を頼りに駒を連れ、漸く一程の往を抜くと駒つける間も惜しみ冷や酒を。茶屋にも「だうも、見せては置かれまい」と勧めればお



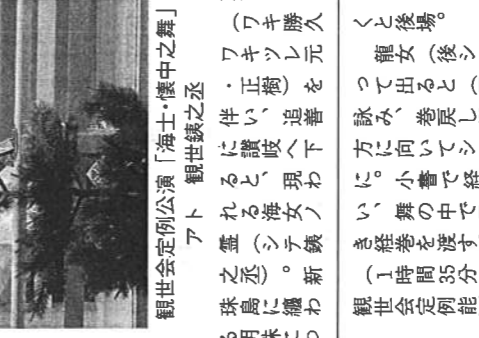
観世会定例公演「井籠」



観世会定例公演「小督・恐之舞」

「小督・恐之舞」 高倉院の観世・小督局(ツレ修一)が正室を陣り襲撃野に隠棲すれば勅使(ワキ雅介)は源仲国(シテ邦久)に局を尋ねるようにと旨言を伝える。手振り茶屋に現今何が大事かを質され、納得すれば一転認認気分、へ切るとてもよしや、と雪を払い酒樽の音を頼りに駒を連れ、漸く一程の往を抜くと駒つける間も惜しみ冷や酒を。茶屋にも「だうも、見せては置かれまい」と勧めればお

「井籠」 和のとれた舞台だった。(28分) 「海士・懐中之舞」 生母が志度浦の海女と知って房前大臣(子方・馬野訓聡)、従者(ワキ勝久ワキツレ元・正樹)を伴い、退着に讀岐へ下ると、現われる海女(シテ鏡之丞)。新珠島に纏わる明珠につ



観世会定例公演「海士・懐中之舞」

因に、積塔会は陰暦二月十六日、都府金殿小路の津來庵で、盲人の守護神雨夜皇子をまつる法会が行なわれ、勾当が四糸河原で石を積んで塔を組み、皇子の追福を祈る。遠近から多数の盲人が参集を聞き、席上盲人の官位昇進についての手事も行なわれたが、今は断絶と。(この頃、山本謙吉編『最新俳句歳時記・巻』に拠る。) とうする中、川瀬の音に足を濡らし川と知るも渡り瀬が分らず、磔を打つて深淺を察し、「ひとふり」と音のする方は選んで、機に品よく舞い(写真)役を果した満足もあろう、察やか。キリはへ急ぐ心も、と戸外へ出るや直ぐ橋懸へ出抜け、一ノ松で輦をいれ、小廻りして、三ノ松へ、局は立つて正中辺りで見送り、左袖返シ留めた。囃子は幸・嘉津幸・真之介。(1時間10分)

「福の神」 三世千作真一の廿七回忌追善に三世が好んだ狂言、得意とした狂言をお楽しみいただきます」と曲が選ばれる。三世が亡くなる一年前、三世シテの「福の神」を見たが、その配役はアト参詣人があきら、千三郎だった。今回はシテ茂・アトやすし・薫。年籠りに福天へ参詣の二人、「福は内、福は内」と豆を撒くところに来臨する福の神、富貴となるには元手が掛かる、とその要諦を説き、口が綻いたからと神酒をせがみ、先づ酒神松屋大明神に捧げるを口実に、その後を飲む、など俗気たつぷりの福の神が可笑しく、飲めば機嫌よく富貴の道を説くを地謡に謡わせ(地頭あきら)、晴れ々と朗笑して留めた。茂、曾祖父への供養を果たす。

「班女・世之伝」 美濃國野上の宿の遊女・花子(シテ邦久)、東へ下る吉田少将(ワキ勝久)との一夜の契り忘れられず、奪る想いは互いに取り交した願、飽かず眺め入るを宿ノ長(アト融)に責められ、言い付けには従わず、耐える姿は如何にも愛の証は願ゆえの一機。アトに放棄されるところ、短い前場が緊張する。ワキが帰路に尋ねていたとは露知らず、神々を念じ、狂わんばかりの思いに都へ発つことになる後場はクセ。玄奈・権貴妃の故事に触れ、母を手にして立つとへさるにても我が夫の、とクセ地(幽言・保向・邦弘ら)のうちに一ノ松

「小督・恐之舞」 高倉院の観世・小督局(ツレ修一)が正室を陣り襲撃野に隠棲すれば勅使(ワキ雅介)は源仲国(シテ邦久)に局を尋ねるようにと旨言を伝える。手振り茶屋に現今何が大事かを質され、納得すれば一転認認気分、へ切るとてもよしや、と雪を払い酒樽の音を頼りに駒を連れ、漸く一程の往を抜くと駒つける間も惜しみ冷や酒を。茶屋にも「だうも、見せては置かれまい」と勧めればお